
生き方なんて人それぞれ

頭隠して尻も隠す

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生き方なんて人それぞれ

【Nコード】

N4313U

【作者名】

頭隠して尻も隠す

【あらすじ】

変なオッサンのお願いでネギまの世界に行くことになった主人公。果たして彼はこの世界で何をなすのか・・・今作品が作者初投稿になります。文章力もなく、誤字等あると思いますが気にしないで言う方はごらんになってください。芸術家を主人公にしていますが、作者が美術に詳しいわけではないのであしからず

第1話 プロローグ（前書き）

初投稿作品です。温かく見守ってください

第1話 プロローグ

今日は、いい粘土採れるかな？

「昨日は、なかなかの収穫だったし！！ でも採りすぎちゃうと困るし、今日はもっと奥へ行ってみようかな・・・」

そして山の奥へ入っていった・・・森の中は、野生動物がいたり遭難することもある意外に危険なのだが、そんなことは気にしないと言わんばかりにどんどん奥に進んでいく。しばらく歩いていると開けた場所に出た。

「おお！！ なんかいいところに出た。ここならいい粘土が採れそうだ」

あたりを見回してみると陶器に使える土がたくさんあった。かなりいい土そうなので早速持つてきた大きな袋に土を入れていった。3時間ほど収穫して結構な量になったので、そろそろ帰ろうとしたとき、ふと森の中に小さな小屋みたいなものがあるのを見つけた。何かな？と思いついてみるとそれは、鏡を祀った祠であった。

興味が出たので覗いてみるとその鏡から不思議なものを感じた。

・・・その時！！

急に鏡が光出して、視界が白で覆われた。

とつさに目を閉じようとしたが間に合わずに直接光が目に入ってきた。しばらく目が開けられずにいたが、ようやく回復したので目を開けあたりを見回してみると何も無い白い空間にすることがわかつ

た。

しばらく思考が停止していたが、正気を取り戻して自分の身に起こったことを考えようとしたが・・

「まあ！いいや」と考えること放棄した。結構楽天的やつである。

とそこに

「いいわけあるかあああああああ！！！！！！」 叫び声が聞こえた

声が聞こえた方を見ると、羽根の生えたおっさんが浮かんでいた。

「誰がオツサンだ！！」

（おお！！何も言っていないのに伝わってる、これはまさかのテレパシー！！）と見当違いなことを考えていると

「違う。わしがおぬしの心を読んだのだ！！」 どや顔で言う

「これはあれですね。プライバシーの心外です。慰謝料を請求します。」 またしてもずれたことを言う

「あ、ごめんなさい。そうですね、人の心を読むのはいけないですよね・・・って違あああう！！」

「ここは、”何言つての！？この人おかしいんじゃない”的な発言

をるところじゃろうが！」「心を読んだことを普通にスルーされたことに対して、至極当然なことを言ってみた。

「あ、そうなんですか？？世の中にいろんな人がいますし心を読める人もいるんじゃないですか？？」

ほら、かのノス○ラダム○さんだって世界が滅ぶとか予言してますし」

「いやいやいや。違うからそれ。何で読心と予言の扱いが同じ！？あれ？？でもジャンルのには一緒か？？んんん？？いやでも・・・」
「一人でぶつぶつと考え出すオッサン。

はあ！！

「だから違うからそういうことじゃないから！……」
——でもまあ、それはとりあえず置いて「話を切り出す

「まず、なぜおぬしがここにるかじゃが・・・わしが呼び寄せた。」真剣な顔をする

対して

「へえゝそなんですか。なんかご用ですか？？門限はないけど早めに帰りたいんですが。」またしてもズレている。

「おぬし軽いのおゝ」じゃっかんあきれながら言う

「まあ、そう言う性格なんで。で、いったい何ようでしょうか？？」

「実はのお、おぬしに頼みたいことがあるんじゃない!」

「なんですか??」

「異世界に行ってもらいたい!!」

「はあ、異世界ですか、何をしに??それ以前になぜにオレなんですか??」

「おぬしには、他のものにはない力があるからじゃ!!あの祠には結界が張ってあてのお、力無いものには気づかれもしない。」

「へえ、そうなんですか。まさか隠された能力があるなんて!!これはもしかして・・・」

「期待してるとこ悪いんじゃないが、おぬしの力はこの世界では役に立たん。というより使えん」

「え!??」

「この世界にはマナがないので、おぬし力は使えんのじゃ」

「それじゃ、何でオレに??」

「言ったじゃろ“この世界では”とわしが行ってほしい世界にはマナが満ちておる。だからおぬしに行ってもらいたいんじゃない。」

「理由はわかりましたが何をすればいいんですか。それがわからないことには、判断のしようが・・・」

「ふむ、実はわしらの中で力あるものを異世界に飛ばしそこで何をなすかを見るといってここに關心があつての」

「わしらの中??」

「おお、そうじゃった。まだ、名乗つておらんかったの。わしの名は・・スサノオノミコト、いわゆる神じゃ!!」

「あの八岐大蛇の話に出てくる??」

「それじゃ!!話で出てくるやつと少しちがうがだいたいは同じじゃ。」

「何かをなすという??」

「まあ、言い方が悪いかも知れんが簡単に言つと神の娯楽じゃ。送つた者に少しの能力を与えてその世界ですること観察することじゃ」

「その世界は普通じゃないんですか??」

「おおっと、忘れておつた。そうじゃ。送る世界はいわゆるマンガの世界じゃ。——といっても限りなく似ているというだけで別ものじゃがの」

「わかりました。ちなみに危険なところですか??基本的に自分の興味のないことで危険にさらされるのは、嫌なんですが。」

「まあ、危険といえば、危険じゃし。そうでないと言え、そうでない。まあ、おぬしの場合、もとから能力もあるし、それにわしが

他に能力も授けよう。」

「危険もあるんですか。それでさっきから言っているオレの能力って何なんですか??」

「ふむ。おぬしの能力は少し特殊での、おぬし、作り物や絵に心得があるじゃろ」

「ええ、趣味というより仕事ですので。それが??」

「おぬしの能力は金属操作と術式（陣）作成じゃ」

「??」よくわからないという顔で聞く

「つまり、金属を自在に変化させることができる。後操ったりも。さらにどんな術式も作成できる魔法であつてもじゃ」

「魔法??つまり、術式を書けば何でもできるといふことですか?」

「まあ、上限はあるがの。人などを即死させるようなのは無理じゃ」

「そんなことしませんって。大体わかりましたが、どうやって使えますか?わからないんですけど・・・」

「それは、送った後、自動的におぬしの脳に送られるようにする。わしがつける能力もじゃ。心配せんでも、おぬしに見合ったものじゃ。」

「送る世界はどこですか??」

「ネギま！じゃ」

「あの、似非紳士少年のやつですか。確かに危険ですね」

「似非って・・・。まあ、それじゃ。ところでさっきから言ってくれそうな反応をしてるが、いいのかの??」

「え!?!——まあ、別にいいですよ。能力にも興味もあるし。」

「わしが言うのもなんじゃが、家族とかいいのかの??」

「もう家族はいません。小さい頃に、捨てられました。」

「すまんの。」

「いえ。親代わりの人はいましたし。というより今の仕事の師匠なんですけど。」
「気にしてはいないというような顔で言う」

「その師匠には言わなくていいのかの??」

「別に気にしないと思うですけど。オレと同じで関心が薄いんですけども、一応伝言だけ伝えてもらえますか?」

「（師匠に似たのか）わかったぞ。して、なんと」

「旅に出ます。探さないでください。」と

「ええ!?!それでいいのかの??・・・一応伝えるが・・・」

「それで伝わると思います。基本的に放任主義なので」

「あいわかった。それじゃ送るが、ちょっとした変更がある。」

「なんでしよう?。」

「あちらには戸籍がないので、こちらで用意したがそれでよいかの??ちなみに家とある程度の資金もある」

「大丈夫です。」

「それじゃ送るぞ。原作は無視してもかまわん」

「はいわかりました。では!!」

そう言うあたりが白で覆われた

第1話 プロローグ（後書き）

更新は週に1〜2回を予定しています。遅れることもありますのでご了承ください

設定

名前、やくもそら八雲空

年齢、17（原作開始時）

身長、175 cm

体重、65 kg

属性、金属

発動キー、なし

アーティファクト、今のところなし

容姿、ショート黒髪、茶色の瞳、中肉中背と見た目は至って常人。私服は基本は和服。（例、陶芸家が着るような服）

詳細

本作の主人公。変なオッサンのお願いでネギまの世界に行くことになった。5歳のときに両親に捨てられる。

その後、孤児院に預けられていたが、師匠（保護者代わり）につれられて美術家の道へ。師匠により鍛えられ作った作品はかなりの価値がつくものに（基本は陶器、絵）

性格は、師匠ゆずりで興味の無いことに関しては関心なし。ただ世渡りはうまい。何もしていないときは、のんびり空を眺めたり、寝ることが好き。

両親に捨てられるという過酷な経験をしたが、本人はあまり気にしていない。そう言う親もいると思っている。結構楽天的。達観していて現実は見えているのでわりとシビアな良く分からない性格。それでも興味があることや気に入ったことにはかなりの情熱を見せる、自分の命を賭けてでもやりたいと思っている。場を面白い方向に持って行くのは好き。

『立派な魔法使い』に関しては基本金ずる程度にしか思っていないが、魔法先生や魔法生徒とは偶に衝突することがある。

戦闘は主に金属を操り敵を捕縛したり、術式を用いて戦闘を行う。魔力があまりないので魔法は使えないが、術式があるので問題なし。近接戦闘は棒術を駆使する。戦闘になると、若干性格が変わる。冷静というより冷たい感じ。本人は無自覚

小さいころから山に入ったり師匠に鍛えられているので（師匠曰く「山でクマにあった時のため」）

武術に関してはかなり強い（棒術）

棒術を軽く見られると、キレる。（師匠に教わったから）

気もある程度使える（大戦後の詠春より若干少ない）

術式に関しては決まった陣を書くとは発動する（書くものは自由）。場所を選ばない。大気中の魔力を術式に取り込むためじぶんの魔力は必要としないので自身の魔力は少ない（一般の魔法使い並み）広域殲滅魔法に関してはかなり大きな陣を必要とするためよほどのことがない限りかけない。その点転移系や回復系を得意とする

金属操作：金属の形を変え武器にしたりする。ちなみに質量保存は若干無視する。普段は身につけているアクセサリなどを武器に変える。混ぜ合わせたりすることも可能。

魔眼：神から授けられた能力。魔力や気の流れが見えたり、術式の解析を行える。（右目のみ）ON、OFFの切り替えが可能。発動条件は、10秒ほど集中すること。戦闘前から発動してもかまわないが、燃費が悪く、ガス欠になる

設定（後書き）

主人公紹介です。なるべく最強系にはしないように欠点を作っておきたいと思っています

第2話 ここはどこ？？え！？京都ですか・・・（前書き）

ネギまの世界に到着

第2話 ここはどこ???え!?京都ですか・・・

視界が戻ったのを確認して辺りを見回したら窯つきの家が森の中にあるのが見えた。(ここはどこだろう??)と考えてると急に激しい頭痛が襲ってきた。

「クッ!」

しばらくして痛みが治まると、自分の知らない情報が入ってきた。

「おお!!これが能力の使い方かゝふむふむ・・・ってちよつとまで」流れてきた情報を確認して気になることがあった。

「なんで、子供の姿になっっているんだ。」と思考しているところに1枚の紙切れが空から落ちてきた。

「子供の姿なのは原作キャラとの歳を近くするためじゃ。あまり年が離れても嫌じゃろう。ちなみにこの世界でのおぬしの両親もいない。家はあるのでがんばれ!BY神」と書かれていた。

「おいおい。まあ昔の生活だと思えばいいか。師匠も結構放任していたからな」たくましい限りである。

とりあえず納得して家に入ることにした。家自体は平凡で窯つき以外は普通と変わりない。最低限のものは置いてあった。寝床や台所、風呂場なんかを確認して

「山の中でも電気は通っているんだな。それに、仕事するにはちよつどいい場所だな」とのん気に考えながら、仕事をするのに使う窯を見るために外に出ることにした。窯は昔ながらの窑窯あながまだった。

「審察か」。最近は電気窯でやっていたからな。師匠は基本電気は使わなかったからこっちのほうが得意だけど・・・オレはあまり得意じゃないんだよな。火加減の微妙な調整がむずいし・・・」
いろいろ考えている内に実際やってみないことには・・・と思い

「まあ、それでもやってみますかね！幸い材料はさつきとつ・・・
・あれ？」辺りを見回す。360度全方位をみて。目を擦ってみる

「どこかな」もう一度辺りを見る

「ない（泣）」数時間もかけて集めた土を置いてきてしまったらしい。
”ort”

「ああ、結構いい土だったのに。もったいないな・・・ま、でも、ここら辺にもいい土があるかもしれないし、辺りの状況を見ても起きたいし、ちょっと散策に行ってみようかな」

立ち直りは早いようだ

そう思ったは吉日、早速散策に出かけていった。かなり山の中なので、あたりに人の気配がない。なので山を少し降りて行いけば人のいるところに出られるんじゃないかと思ひ山を下りていく。すると水の音が聞こえたので、その方向に歩いて行くと、開けた場所にでた。川が流れていて、辺りには程よい感じの粘土になっている地面を見つけた。

「おお！！ここもなかなかじゃないか、これならいいものが作れそうだ」

いい感じの粘土を見て気分が良くなる。持ってきた袋に土をどんどん入れていって、ある程度たまったのでそろそろ帰ろうとしていたところ、川のほうから悲鳴が聞こえた。川のほうを見てみると何かが流れてくるの見る。よく見てみると、

「こども？」

小さな女の子が流され岩に必死につかまっているのが見えた。それをもう一人の女の子が助けようとしている。それを見て

「知らんぷりはできないか……。師匠にも“女性は大切にしなさい”と言われてるしな」

基本自分以外のことには興味が薄いのだが、困っている人がいたら、可能な範囲なら助けようとする。

「よし！！行きますか」と上に着てる服を脱ぎ川へ飛び込む。

川自体は深さはそれほどでもないが、流れが速い。大人ならそれほどでもないが、いかんせん今は、子供の体格になっている。意外にきつい。一瞬能力を使おうとも思ったが、まだ試してもいないので、何が起こるか分からないし、逆に事態を悪化させてしまう可能性がある。あるので、即座に却下した。

それでも何とか少女のもとにたどり着くと少女の後ろに回り込み顔を水から出させる。なぜ正面からではないのかというと、おぼれた人を救助する際、一番怖いのおぼれた人のパニックによる2次事故である。正面からでは、抱きつかれたりすると、身動きができなくなり、自分もおぼれてしまう可能性がある。体格差があればなんと

かなるが、何度も言うが、今は子供である。

少女の顔を上にしたまま、脇あたりを持ってそのまま岸まで泳いでいく。幸い、少女も恐怖からか、あまりあばれないで身を預けてくれている。なんとか岸までたどり着くと少女を引き上げ様態を確認する。

呼吸もしてるし、水もそれほど飲み込んだわけではないようなので、ホツと一息ついているところに、先ほど見たもう一人の少女が走り寄ってきた。

「このちゃん！！」泣きながらおぼれた少女を心配する。

かなりあわてていたので落ち着かせようとして

「とりあえず、心配はない。呼吸もしっかりしているし、水もそれほど飲んでいない。ちょっと気失っているだけだ。それよりだれか大人の人を呼んできてくれないか。このままでは風邪をひいてしまう。」

子供にはわからないかな、と思いつつも状況の説明する。

少女のほうも首をかしげていたが、心配がないということ聞いて安心する。そのあと風邪を引くかもという言葉を出し急いで人に呼びに行った。

しばらくすると、和服を着た壮年の男性と巫女さんの姿があった。若干（なんだこの人たち、コスプレか？）と思ったが、その中に先ほどの少女もいたので連れてきた人だとわかった。

とりあえずおぼれた少女の様態を説明し帰ろうと思ったので、声をかけてみた。

「あの～すいません。ちょっといいですか？」壮年の男性は巫女さんに指示を出していて忙しそうだが、こちらも話さないことには、どうしようもないので声をかけた。

「ん！？」とこちらに気づいた男性が

「ああ、これは申し訳ない。娘がおぼれたと聞いて急いだ来たので君の事を聞くのをわすれてしまったね」

子供に対して頭を下げているので、ちゃんとしているな～と思いつつ返した

「いえいえ。お気になさらず。娘さんが大事なのは当然のことです。一応様態は確認していると思うので知っていると思いますが、心配はないと思います。水もそれほど飲んでいなかったですし」

「そうか。君が娘を助けてくれたんだね。本当にありがとう。刹那君がおぼれたといっていたので、急いできたのだが、刹那君が助けたと思ったが君が助けてくれたようだね。娘を助けてくれてありがとう。」もう一度深く頭を下げてきたので、やはりできてるな～なんて思いながら

「そこまで大したことはしていませんよ。それに女性は大切にと師匠にもいわれているので」

「いや。それでも娘を助けてくれたことには変わりない。ありがとう。」と言われたので

「それじゃ、お礼だけ受け取っておきます。そちらも大丈夫そうで

すし、僕もこれで帰ろうと思います。」と言って帰ろうとして

「待ってください。娘の命の恩人をそのまま帰すわけにはいきません。君のほうもぬれているようですし、家にきて乾かしていただきます。必要なものがあれば言ってください。用意させますので」と引き留めにかかったので、どうしようかと思っただが、師匠からもらえるもんはもらっとけと言われているので

「そうですか、それじゃ、お言葉に甘えて服が乾くまで、御厄介になります。後、あそこの袋は使うので一緒に持ってもいいですか？」

「かまいません。袋はこちらで持つて行かせますので、私についてきてください。屋敷のほうへご案内します。」

「わかりました。よろしくおねがいます。」

「では」といつて男性は屋敷のあるほうへ向かった。近くにあったらしくすぐくおおきな屋敷が見えた

なんかどこかで見たことがあるな〜と考えているうちに門のところまで来たらしく声をかけられてきづいた

「そういえば、まだ名前を名乗ってはいませんでしたね。うつかりしていました。私の名前は近衛詠春です。君が助けてくれた子が、娘の木乃香です。」

それを聞いて、ようやく思い出した。（原作の登場人物か〜。あまりしっかりと読んでいなかったから、キャラにかんしてはうる覚えなんだよな〜。ん!?!ということはここは関西の総本山で京都か!）

自分がいたところをようやく理解したのだった。

第2話 ここはどこ???え!?!京都ですか・・・(後書き)

＊ 窖窯 あながま

アジアで中世期から使われていた窯で、工業生産用の窯としては最古の形態と言われている。5世紀ごろ朝鮮を経由して中国から日本にもたらされた。日本国内では、当初、須恵器を焼成する窯として使われ、15世紀末に窖窯を発展させた大窯が出現するまで陶器を焼く窯として用いられた。内部は800～1000に達する。通常1つの長い燃焼室からなり、一方の面に小さな色見穴を開け、一端が火室、もう一端が煙道になっている。焼成時間は1日から数週間まで様々である。伝統的な窖窯は空気の流れをよくするため、斜面に作られた。

実際の陶器は焼かれる温度によって分けられるそうです。

粘土を野焼きの状態で700～900の温度で焼いたものを土器

窯を使い、焼成温度は1200～1300のものを?器せうき

カオリナイト(カオリン)やモンモリロナイトを多く含んだ粘土を原料とし、窯で1100～1300の温度で焼いたものを陶器というそうです。 w k i 参照

窖窯の温度では上記のものには足りませんが、それはご都合主義と
いうことでよろしくおねがいします

第3話 一緒に暮らいませんか？ いえ、お断りします。(前書き)

更新

第3話 一緒に暮らませんか？ いえ、お断りします。

「大丈夫ですか？」自分の世界に入っていて気付かなかったのか、詠春さんが心配そうにこちらを見て

「体調がすぐれないのでしたら、部屋で休みますか？川に入ってからだいぶ経ちますし、からだがひえてしまったのでは？」と言ってきたので

「大丈夫です。調子は悪くありません。ただ、考え事に夢中になってしまっただけです。心配かけてすいません。あと、お風呂には入らせてもらってもいいですか。ぬれたままというのも気持ち悪いですし。」

「かまいません。早速手配しますのでどうぞゆっくり浸かってきてください。」

体調は悪くないという言葉に安心したのか、ホッとした表情で言う。案内は家の者にさせるので、ついていってくださいと言われたので、
「では、失礼して」と言って風呂場に向かった。洗濯物をかごに入れようとしたとき、替えの服がないことに気づき、近くにいた人に聞いてみると、「こちらで用意してあるので気にせずお入りください。それとタオルはこちらのものをおつかいください。」といわれたので、一言お礼を言って風呂場に入って行った。

「でかいな」と感心し、川に入って汚れた体をあらう。洗い終えたら、風呂に浸かる。旅館張りの広さのため一人で入るとさびしい感じになるのはいしうがない。

体を温め終えて風呂を出て用意されていた服を着て外に出ると、巫女さんが待っていた。

待たせてしまったと思い謝罪しようとしたら、こちらの意図にきづいたのか、微笑みながら

「お気になさらず。お風呂から出たら、詠春様のもとに案内するようにならねば。」というので、少し頭を下げて

「わかりました。では、お願いします。」

着いてきてくださいとの言葉に従って巫女さんの後をついていく。かなり広い屋敷であることを再確認しながら、歩いていると、広い広間のようなところに着いた。巫女さんが断りを入れ詠春さんが入るように言うので、入ってみると、詠春さん以外に、小さな少女がいた。食事を用意されているらしく、断りを入れ座り、話を聞くことにした。

「体は温まりましたか？」

「はい、ありがとうございます。それに服まで用意してもらって、
・・」

「いえいえ、こちらは、大事な娘の命を救ってもらったのです。これくらいのことでは、恩はかせませんよ。それよりもまず食事にしませんか？」

「あ、そうですね。実は、おなかすいてるんですよ。」とあどけた感じに言う

「では、食事をしながらお話ししよう。」どうぞと言って食事を始める。お屋敷というだけあって、かなりうまい。しかも本場京都の漬物は絶品である。

食事に舌鼓を打ちつつ食べていると、小さな女の子から話があった。

「あんなく、さっきは助けてくれてどうもありがとう。うち、木乃香言うねんよろしゅう。君の名前はなんて言うん??」独特のなまりを感じながら、そういえば・・・まだ言っけなかつたことを思い出す

「そう言えばまだ、言っけませんでしたね。すみません詠春さん。名前を教えてもらっけおいて教えずにいてしまつて。ぼくの名前はやくもそら八雲空といひます。木乃香ちゃん?でいいのかな、こちらこそよろしく」

「ちゃんはいらんえくなんやそく君のほうが年上みたいやし。あ!そく君でよんでもええか??」

「名前はは好きに呼んでくれ構わないよ。」と子供の会話をしているところに詠春さんから話があつた。真剣な顔をしている。

「空君。このたびは、娘、木乃香を助けていただいて本当にありがとうございました。」深々と頭を下げる

「いえ、お気になさらず。たまたまです。用があつて山を下りてきたところに偶然が重なつただけです。先ほども言ひましたが大したことではありませぬ。」年上の人にここまで頭を下げられたことがないのでちよつとあせりながらも、答える

「それでも、何もしないというのは些か・・・まずは、気持ちを受け取ってください。こちらにできることがありますたら可能な限りしますので」真剣な顔で言う。その顔から本当に子供が大事なんだな～と思いそういう親もいることに感心する。そんなことを考えているうちに、木乃香が話す。

「うちからも、ほんま、ありがとう。それと、そー君、さっき山からってゆうたけど、どこに住んでおるん??」親と違って元気に聞いている

「どこといわれてもね～、山頂付近としか言いようがないし。まあ、そこらへんだね」と適当に答える。意外にも此の事に反応したのは、詠春のほうだった。

「ええ!?!山頂のほうから来たのかい!?!君のような子どもが!?!それに用事と言っていたね、親御さんからの用事かい??!」と驚きながら聞く

「いえ、私用です。仕事に使うんで。粘土を探していたんですよ。」さすがに、地理の把握も兼ねているとはいえない。

「仕事!?!失礼だけど御両親の仕事はどんな仕事だい?」「さすがに、子供が仕事と言ったので疑問に思ったことを言う。木乃香の方も驚いているようだ。

「さあ～?何かはしているんじゃないですかね～。小さいころ、捨てられたのでわかりません（嘘はいつていない。ただ世界が違うだけ）」とさらに、すごいことを言う。

《捨てられた!?!??》二人の声が重なる

「ええ。5歳くらいのときに。まあ、そのことに関しては気にしていないんですけどね。世の中子供を殺す親だっているわけですし、捨てる親がいても不思議ではありません（ネギパパ、ママ）。それに、親代わりになる人はいましたし、ある意味では師匠に会えたことに感謝しています。」と気にしてませんという

木乃香も詠春もショックだったのか、言葉が出ない。そんな中話を続ける。

「まあ、師匠の方も放任主義なので一緒に暮らしてませんが、生きるために必要なことは教わりましたし、今の生活が嫌なわけではありません（嘘、結構切実な問題。主に食糧とか）。それに、仕事はほとんど趣味なのでむしろ充実してます（これも嘘。まだ作ってさえないない。）」と普通に話す子供を見て詠春がある決意をする。

「空君。もし良かったら、一緒に暮さないか？うちには、木乃香もいるし、今はいないが、刹那君という女の子もいる。さびしく感じることはないと思う」と真剣な顔をして言う

それに対して即座に返答をした。

「いえ、申し訳ありませんが、お断りします」

この言葉に意外にも反応したのは木乃香の方だった、悲しそうな顔をして

「なんでなん??」と今にも泣きそうである

「さっきも言ったけど、今の生活が嫌なわけじゃないし、仕事は好

きなんだ。だから今のままでいい」

木乃香はこの言葉を理解できなかった。刹那が来るまでは、屋敷で一人で遊んでいたので一人の寂しさはよくわかる。でも目の前の少年は一人でいいと言っている。それがどうしても理解できなかった。

そこに詠春が

「わかりました。空君の気持ちを無視してまで言おうとは思いません。それでも何か、困ったことがあったら、遠慮なく言ってください。」と言う

それに対して

「ええ。それじゃお言葉に甘えて2つほどいいですか？」

「なんででしょう？」

「かつこつけた手前言いづらいんですが、こちらで作ったものを買って欲しんですよ。師匠がいないと買い手がつかなくて困るんですよ。さすがに子供の商品は買ってもらえません。ああ、ただ売値はちゃんとしたものでいいですよ。こちらもプロなんで、きちんとした評価でお願いします」

「わかりました。こちらで買い取りましょう。で、もうひとつの方は？」

「これも言い辛いんですが、食料を分けてもらえませんか？帰る序に調達しようと思ったのですが・・・もう遅いですし。」なんか悲しくなってきた。こんなにちわ貧乏生活。さようなら普通の生活（泣）

「わかりました。そちらもこちらで用意します。それと先ほどの土袋もこちらで運びましょう」

「ありがとうございます。では、商品の方は出来上がり次第届けますんで。それじゃ失礼します。木乃香もまたね」と言って帰ろうとすると

「絶対また会えるんやね？そんなら今度来た時は、一緒に遊んでや、せつちゃんも紹介したいし」と木乃香が言う

「そうだね。今度来たら遊ぼうか。」では失礼してと言って帰って行った。後ろで木乃香が手を振って見送ってくれている。手を振り返したら喜んでくれた。

しばらく歩いて気づいた

「帰り道わからねえ」実にしまらない。

第3話 一緒に暮らしませんか？ いえ、お断りします。（後書き）

刹那の扱いに困ってます。どうしよう？

ちなみに詠春の誘いを断ったのはなんとなくです、深い意味はありません（たぶん）

次回は能力の確認と壺作りです。

第4話 能力の確認と陶器作成

何とかたどり着いた」

途中道を間違え遭難しかけた。食料などを運んでくれたお付きの人たちの目がやたらに冷たかった。こいつ迷ったんじゃない？的な目で見られたのだが、要は山頂を目指せばいいんじゃない？ということに気づき何とかたどり着いたのだった。お付きの人にお礼を言つて家の中に入り、もらつた食料を冷蔵庫に入れていく。結構な量だったが、全部入れることができた。

（今日はもう疲れたし、とりあえず、寝よう）と思い寝まきに着替えてさっさと寝てしまふのだった。

ZZZZ

翌朝

「うっうっうん」起床

顔を洗つて朝食の準備に取り掛かる。メニューは定番の白いご飯に焼き魚、味噌汁といったものである。

料理の腕は小さいころからやっていたので、下手ではないが特別うまいわけでもない。まあ、中の上上の下くらいである。好みが合う人が食べるとすごくおいしく感じる。

「よし！できあがり！！さて食うか。」むしゃむしゃゴックン

と朝食を食べえたので、食器を洗い昨日できなかった能力の確認を

することにした。

「昨日はやり方がわかっただけで、使わなかったもんなん。木乃香とも知り合いになったし、何かと厄介事に巻き込まれそうだからな。ちゃんと使えるようにしておこう」そう思い立ち練習するために開けた場所まで移動した。

「ここなら大丈夫だろ。うっし！とりあえず金属操作から行ってみよう。」

腕につけている鉄製のブレスレットの形を変えてみる。「おお！！すげえ！！」とテンションが上がる。でも、最初は慣れていないのか、ぐにやぐにやになったりドロドロになったりで扱えなかったのだが、要はしたい形をしっかりとイメージすればできるので、幼少のころからいろんなものを作ってきた彼が身につけるのには、さほど時間がかからなかった。

「オッサンがいったことはこういうことか。オレに物づくりの心得があつたって金属操作には関係ないと思ってたんだが、根幹は同じだな。でもまだ、扱える金属も全然だし、混ぜたりもできないこれは、結構練習が必要だな」いくら根幹が同じでも、キチンと扱えるには時間がかかるらしい。

「次は術式か」

とりあえず指に魔力を集めなにかそれっぽい陣を空中に書いてみる。書く場所を選ばないらしい。当然ながら術式が発動するなんてことはなく。何も起こらなかった。

「そりゃそうか。なんてったって術式なんて知らないもんなん」と

のん気なことをしているが、結構死活問題である。無から有を生み出すには多大な時間と才能が必要である。さすがに無からということはないが、どこかで術式を解析する必要がある。どうしようかと悩んでいるうちに一つの明暗を思いついた。そうここは京都。しかも関西呪術協会の総本山がある山である。術者が多くいるはずなので、それを解析すれば問題ない。しかし

「いきなり、術式みせて」（笑顔）と言っても見せてくれないだろうし、それに、裏を知らないと思っっている子供がいきなりそんなことを言ってきたら。かなり怪しまれるだろうな」と結局解決には至らない。

「まあ、最終手段は本山に忍び込むか、戦闘しているところを見学するかなんだけど。前者はばれる可能性大。さすがに無理。後者は、戦闘に巻き込まれる可能性があるし、見つかったら何をされるかわからない。うーん」あれこれ考えて結論にいたらなかったのとおりあえず保留に

「最後は魔眼かー」情報では右目に気or魔力を集中すると発動するしくみ

「とりあえず、やってみるか。」ふつと右目に気を込めてみる。10秒くらい集中し続けていると右目の視界が変わった。何か自分の体から煙のようなものが見える。色まで見えるので結構すぐれものである。ちなみに魔力を込めると魔力の流れが見える。

「これも術式知らないとあまり意味はないな。戦闘で使うにはリスクがでかい。さすがに10秒も何もしない敵はいないだろう。でも一度発動させれば問題ないし、欠点はオレの魔力が少ないことだな」

魔力に関しては神様から与えられた情報である。大体一般の魔法使いと同じくらいである。

「現状は金属操作と棒術を磨いていくしかないな」

棒術に関しては、昔師匠に鍛えられたのでかなり強い。気も扱えるので、戦闘なら、昔の詠春にはかなわないが、今の詠春なら勝てないまでも、負けはしない。

「うっし、今日はこれくらいにして、仕事するか」そう言って家に戻るのであった。

場所が変わって自宅

「最初はどうか。無難に花器か湯のみかな」と考えながら道具を確認する。するとあることに気づく

「これオレの使ってたやつじゃん」自分の使ってた道具があることに驚きつつも

「まあ、いいや。あつて困るものでもないし。むしろラッキー！！おおかたあのオッサンが気をきかせてくれたんだろ」実にその通りなのだが、彼の中では、オッサンは確定らしい

「それじゃつくるか」と言って製作を始める。

陶器を作るには手順がある。

？作陶

粘土で形づくりします。大きく分けると手びねりと電動ろくろ。「菊練り」(*1)ができるようにする

？乾燥(*2)

作陶の後は、乾燥棚で乾燥させます。小さいものなら1週間。大きいものだともっとかかります。厚手のものは、ゆっくり乾燥させるために、新聞紙をかけたりして調節します。

？素焼き

窯で約800度で焼きます。

？色付け

素焼きのものに釉薬ゆうやくをかけます。釉薬がけの前に絵の具のようなもので絵付けをする。実際は赤びなどを使う

？本焼き

最後が本焼きです。施釉せゆうしたものを窯に入れ、1230度→1250度で焼きます。

*1 粘土の練り方のひとつ。粘土から空気を抜くために行う。練っていくと菊の花のような模様ができるので、この名がついている。

*2 この段階でもひび割れは起こります。多少なら、修正可能。陶芸はひび割れとの闘い。素焼き前なら、水につけて粘土に返すことができます。

「とりあえず、手び練りで行くか」。師匠曰く「世界でただ一つの

作品を生み出すには手びねり』と豪語するくらいだからな。オレは轆轤ろくろは轆轤でまた良いあじがあると思うけどな」と言いながら作成していく、集中していないように見えて作業に無駄がない。プロである。

しばらくして

「これで完璧！！作るからには妥協しないのがプロ。よし、これを乾燥させて……」

ショートカット

「よし、ひび割れも起きてない。じゃ色付けかー。うーん。湯のみの方は質素な感じだけど名器といわれるようにしたいな。花器の方は釉薬をうまく塗って水を入れた時に、絵が浮かび上がるようにしよう。」

そう言っで色付けに取り掛かる。ちなみに絵のセンスは画伯と呼ばれるぐらいまい。絵の方でも生活できるほどである。

「これはやばいね！！完璧じゃね！？我ながらすげえ。特にこの花器の桜やばいでしょ。湯のみの方もいい味出てるし」どうやらうまくいったようである。

「これであとは焼成だけか。これが一番の問題だとな。でも、師匠にも教わってるし大丈夫だろ。」

窯に到着

「これで準備完了！うっし行くぞ！！」と火に入れようとしたとき、

師匠の言葉を思い出した

「鉄は熱いうちに打て！ グツ」サムズアップしている師匠を思い出したのだが、あまり関係ないな～と思い作業を続けることにした。

「ここだ！！」

入れた後は火加減に気をつけながら、のぞき窓から見る。

「というか、これで魔眼発動したらどうなるんだろう？？」と思い発動

「おお！見える火の流れも見える。火が生きてるって感じがするな。物には力が宿るって言うし、火にも宿るんだろ。これで、うまくやれる！！」

・・・しばらくして、焼成が終わり、できあがった器をみる

「よし！！」では、上場、ようやく完成した。

「これを、詠春さんのところに明日持って行って、それから・・・
」と考えようとしたが、めんどくさくなったので行ってから決める事にした。

「風呂、入って寝よう。」疲れていたのですぐに眠りに落ちるのだ
った。 ZZZZZZ

第4話 能力の確認と陶器作成（後書き）

造形方法には手びねり、型を用いて土の形を整える方法、轆轤ろくろの上に置き手足や機械で回しながら両手で皿や壺などの形を作っていく方法などがある。焼き方には、窯を用いない「野焼き」や、七輪を用いる「七輪陶芸」などという手法もある。土の種類やこね方、釉、そして焼く温度など、様々な要素が作品に貢献します。実際にはもっとたくさんの方がいます。

手びねり

手びねり。ネパールのカトマンズにて手びねりは最初期から存在した手法で、球、板（板作り）、紐（紐作り）などの形をした粘土を手でこねて形を作る。手で成形した器の部品は、胎土と水の水性懸濁液であるスリップを用いて結合されることが多い。手びねりは轆轤による成形より時間がかかるが、器の大きさや形をよりきめ細かく制御することができる。

轆轤（ろくろ、轆？（車＋戸）とも）は、陶芸や木工に用いられる器械。轆轤は回転可能な円形の台（回転軸は台に直交し円の中心を通る）、で、その上に粘土をのせる。台を回しながら粘土に手指を当てると、回転の中心から手指の位置までを半径にしたきれいな円を形作ることができる。それを重ねると回転体が成型できる。

轆轤による成形では、粘土の球が鏡盤と呼ばれる回転台の中央に置かれ、これを陶工が棒、足、もしくは速度を制御できる電動機を用いて回転させる。

急速に回転する轆轤の上で、柔らかい粘土の球が手で押され、潰され、上方もしくは外側へと引かれ、空洞のある形が作られていく。

粗い粘土の球を下方と内側に押し、完全な回転対称とする最初の工程は「心出し」「土殺し」と呼ばれ、以降の工程に入る前に習得すべき重要な技能である。それから、穴を開け、広げ、底を作り、壁面を挽き上げ、厚みを均等にし、切り揃えて形を整え、足を作るなどといった作業を行う。

轆轤により一定水準の器を作るためにはかなりの技能と熟練を要し、高い芸術的価値を持つ作品も作り出せる一方で、再現性には乏しい。回転による成形という性質上、円形の回転対称形しか作ることができないそうです [w k i 参照](#)

こちらの方が見たことあるかもしれません。何分私も陶芸と言った
らこのイメージでした

それと陶器は一日ではできません。今回はご都合主義です

次回作は、戦闘パートを入れたいと思います。

第5話 神鳴流は武器を選ばずですかへえ（前書き）

戦闘パートがあります

第5話 神鳴流は武器を選ばずですかへえ

翌朝

「よし、これで大丈夫だろう。」昨日作った作品を布で包み底が固定できる頑丈な箱へ慎重に入れた。

「それじゃー行きますか。連絡入れてないけど、大丈夫だろう。」

そう言って山を下りた。最初はまた迷うかなーとも思ったが、前のお付きの人が、気を利かせて、目印を残してくれたらしい。迷っていたことがもろばれである。

ただ、目印があると言っても、入り組んだ道なので慎重にあるかなければ、せっかく作った物が割れてしまうかもしれないので、あまり早く進むことができず、思ったより時間がかかってしまった。

それでも、何とか到着し門番の人に声をかけた。

「すいませーん。詠春さんに用が有って来たのですが、お目通りできますか？」と尋ねてみいた。

最初は、なんだこの子？？みたいな感じで見られていたのだが、詠春さんが伝えていたのだろう、すぐにわかって答えてくれた。

「八雲空君ですね。話は長から伺っております。今、案内の者を呼びますので、少々おまちください。」と子供に対しても、しっかりとした客の対応に、感心しているうち、案内の人が来た。前にお世話になった人である。

「また、よろしく願います。」という、あちらも、気づいたのか、笑顔で返してくれて、着いてくるようにいった。

詠春さんの部屋に行くまで、小話などをして行き、しばらく歩くと部屋に着いた。やはり、でかい屋敷である。巫女さんにお礼を言つて詠春さんに入室に許可を求めた。中からどうぞと許可が下りたので、部屋に入ることにした。

中には詠春さん以外に普通のオッサンがいて、おそらく、詠春さんが呼んだ鑑定士だろうと思ひ断りを入れ品を詠春さんに渡す。

「一昨日ぶりです。これが、僕の作った物です。どうぞ」

「では、拝見させてもらいます。……うん、これは、これは。なるほど……。専門家の方の意見ではどうでしょうか？」

と詠春さんが近くにいた鑑定士らしき人に聞く。そっちの人もじつくりて見て、品定めをしているようである。これは、かなり、ドキドキする。

前の世界では、師匠か仲介の人に頼んで売ってもらっていたため、直に感想を聞くことは、これが、はじめてだったりする。

「フム。素晴らしい出来ですな。特にこの花器。一見何の変哲もないようだが、特殊な釉薬つわくすりが塗つてある。おそらく、水を入れると隠された絵が浮かび上がってくる仕組みなんでしょう。それに、湯のみの方も、りっぱなものです。」

とべた褒めされ、喜んでいるのだが、隠していた細工を見破ったオッサンの評価を改める。普通のオッサンからすげえおっさんへ。そんなことを考えているうちに、詠春さんが切り出す

「そのようですね。空君、君には驚かされました。これほどの物とは・・・私は陶器には、明るくありませんが、これが素晴らしいということとは、わかります。これは、家にあるものよりも何か、違うものを感じます。いいでしょう。こちらで買い取らせていただきます。・・・そうですね、お値段はこれくらいでどうでしょうか？」

と書いた小切手を渡してくる。値段を見るとかなりの値段であり、内心驚いた。以前から、これくらいの額は見たことはあるのだが、仲介料や税金など、その他、もろもろなど引かれているので、全額で受け取るようなことはなかったからである。

ただ、ここで遠慮するようなことはしない。それをするということとは、自分の腕を非難する事になるからである。

師匠曰く、働いた分のお金をもらうのは労働者の当然の義務。そこに過不足は、あつてはいけない。

なので、普通に受け取ることにする。そのあと、用事も済んだので、木乃香に会おうと思い詠春さんに聞いてみる。

「あのー、木乃香はどうしてます？前に今度来たら遊ぼうと約束したので、会いに行こうと思うのですがー」

「木乃香ですか？たぶん、刹那君が稽古中なので一人で遊んでいると思います。そうしてやってください。木乃香も喜びます。」気になることがあった

「稽古？」

「ああ、そう言えば、言っていないませんでしたね。ここでは、京都神鳴流という剣術を教えているんですよ。」

「へえ、剣術ですか。詠春さん木乃香に会った後、見学させてもらってもいいですか？これでも武術のたしなみがあるので。」

「そのようですね。身のこなしを見ればわかります。そちらの方もかなりのようで……。本当はダメなんですが、空君のお願いですし、構いませんよ。」

「それほどもないんですけどね。師匠曰く 山でクマに会ったらどうする！？もし、自分の作品がマフィアにでも狙われたらどうする！？とか言ってきたえられました。まあ、それ自体は感謝しているんですけどね。」

「ははは！！空君のお師匠さんも相当なのでしょう、空君をそこまで鍛えるのですから。稽古は夜までやっているものでいつでもかまいませんよ。木乃香の部屋には案内させます。」

「ありがとうございます。では失礼します。」

と言って部屋を退出し巫女さんに案内を頼む。

……木乃香の部屋到着

「木乃香お嬢様！空君をお連れしました。」

「そ、君！？」と勢いよく襖をあけて出てきた。

「おお！？木乃香、約束通り遊びに来たぞ！何するか？？」勢いよく突っ込んできた木乃香を抑えながら聞いてみる。

「うーん、もう少しで、せっちゃん、のお稽古も終わると思うねん。そやから、せっちゃんのとこ、迎えに行つて、3人で遊ぼう！！」

「ああ、それは、ちょうど良い。オレも稽古は見ようと思ってたんだ。んじゃ一緒に行くか？」と言って手を差し出すと木乃香もうれしそうに手を握り、道場の方へ歩き出す。

道場到着

「へえ！結構立派なもんだな。どれどれ、おお！！やってるやつてる。木乃香、お前のお友達はどこにいるんだ？？」

「うーん」木乃香が見回す。「あ！おった。あそこ！！隅っこの方にいる女の子。あれが、せっちゃんや！」とうれしそうに説明したが、微妙に表情がぐらい。どうしたのかと聞いてみると

「最近、せっちゃん。稽古が忙しくて、一緒に遊んでくれへんねん。それに、何か前よりも、よそよそしくなったわ！」悲しそうに言う。

「……まあ、川での出来事のせいなんだろうが、当人の問題なので、特に何もしないことにする。下手に言つて期待を持たしてしまうがないからである。

「それも気のせいだろう、多分。稽古が終わればまた遊べるんじゃないか？？それと、木乃香、ちよつと待つてもらえるか。オレもちよつと興味があるから見てくるわ。すぐに済むからさ。」

木乃香は若干不満そう顔をしたがすぐに済むと言って、了承した。それを受けて、道場の中へ入る。いきなり入って来た子供に視線が注目したが、詠春さんから許可を得ているということを伝えると、稽古に戻って行った。

しばらく観察して、なんか、気を多く使う技がいっぱいあったが、取り立てて興味があるものはなく、戻ろうとしたとき、声をかけられた。

「君、あまり驚かないね。結構すごい技とかあるんだけど。」と変なオッサンが話しかけてきた。

「まあ、すごいとは思いますが、それだけです。取り立てて驚くようなことではありません。僕も武器を使いますが、似たようなこと、できますし。」

その言葉に若干眉をひそめながら言う。どうやら怒ったらしい。

「へえ、そこまで、言うなら僕と手合わせしてみるかい？君の好きな武器で戦おう。な、に、心配しなくても、神鳴流は武器を選ばない最強の流派だ問題ない」と自信ありげに言う

最強とかはどうでもいいが、一つ聞き捨てならないことがあった。

「へえ、武器を選ばずですか、なかなかふざけたことをいいますね」と顔は笑っているものの、目が笑ってない。

「ふざけてるかどうか、確かめてみると良い。これでも師範代でもある。問題はないさ。さ、いったいどの武器を使うんだい？刀かい？それとも槍かい？」などと言ってくる

「それでは、僕は、これを使います」

そう言つて壁に掛けられている棒をとる。それ見て、オッサンが

「棒術か」。まあ、子供にはぴつたりだね。わかつたよ。それじゃ
「僕もそれでお相手しよう。」と軽い感じで言ってくる。空のま
つた空気が変わった。二人は武器を持つて中央に立つ。周りの連中
も興味があるのか、練習をやめ、こちらを見ている。

「それでは、準備は良いかい??そちらは全力で懸かってくると良
い。大丈夫きちんと、こっちは手加減するさ。」またふざけたこと
を言っている。そろそろ我慢の限界だ!!

「ええ、それじゃ、行かせてもらつぜ!!」口調が変わる。それと
同時に下から相手の棒を払う

「グッツ」とオッサンの棒は払われ後ろに飛んで行った。そこに、
腹に追撃と入れて、オッサンを吹っ飛ばす。

「ガハア・・・」と腹を殴られた痛みで膝をつく。

「しっかりと手加減してやつたぜ!!オッサン、あんた弱すぎだ。」

その言葉にオッサンが切れて棒を取り直し、仕掛けてくる。

「神鳴流棒術奥義、乱れ突!!」線ではなく面攻撃。しかも気を練
り上げているため、射程が長い。

しかし

「甘えよ！！ウラアア！！」棒を回転させすべてをはじく。弾かれたことで、バランスを崩し、前のめりになる。そこに、

「オッサン棒術をなめすぎだ。行くぜ《閃撃》」棒をしならせ、その反動を利用して突く。さらに棒に螺旋状の回転を加え威力を倍増させる。

「グワアア！！！！！」と言ってまた吹っ飛んで言った。一応加減もしてあるのでまだ意識はあるらしい。門下生に肩を借りている。

「あんたらに、一つ言っておくぜ！！武器が扱えることと武器を選ばないことはイコールじゃない。そもそも、あんたら神鳴流は武器さえ扱えていない。武器とは己の手足。手足をコロコロ替える奴なんていない。そして、武器と一体になっではじめて、扱えるんだ！！名門と言われるとこじゃ、そんなことも、教わらねえのか！？あんたらみたいに、使われている奴らが、武器を選ばずなんて、二度と言っんじゃねえ！！他の流派に失礼だ！！！」と言い捨てる。

周りのやつが若干言い返そうとしていたが、師範代がいとも簡単にやられたのを見てひるんでしまっている。

「しっかりと・剣・術・を磨くんだな。気に頼りすぎて、剣術さえあやしい。」と言いたいことを言っ出ていく。

彼がここまで、怒ったのは、棒術を軽く見られたためである。普段は他の流派など気にしないが、棒術をバカにされるのは我慢ならならしく、ついついキレてしまう。まあ、それも、師匠に教わったものをバカにされたからであるが・・・

刹那視点

（突然入ってきて、いきなり、師範代クラスの人と戦うなんて――刹那はい合いのやり取りをみていません――、なんて無謀なんだろう。神鳴流は最強の流派だ。このちゃんを助けてくれた人だから、ケガをして欲しくないんだけど。）と考えているうちに、試合が始まった。すぐに終わるだろうと思い鍛錬を始めようとしたが、「コロン」と棒が地面に落ちたような音がしたあと、「ガハア」という声が聞こえ後ろを見してみる。

ちょうど、吹き飛ばされていた所で、驚いたように彼を見た。

「すごい！」あの人は、長や青山姉妹には遠く及ばないものの、それでも、師範代クラスの腕前はある。決して弱くはない。今の自分では到底歯が立たないレベルである。それを、いとも簡単に吹き飛ばした少年を見て尊敬と軽い嫉妬のようなものを感じる。

（まだや、あれくらい、強くならなきゃ、このちゃんを守れん。）
と考えてるうちに、師範代が奥義の一つを出す

「あれはあかん！！」と叫ぶも、間に合わず、師範代が突っ込む。ダメやと思い目をつぶる。しかし聞こえてきたのは、予想と違うもので、恐る恐る目を開けてみると、またしても、師範代が吹っ飛ばされたところだった。

そのあと、言った彼の言葉が胸に残る。自分も思っていた。神鳴流は最強だと。それが、今日、ただの少年に、ふざけているといわれてしまった。それが、刹那の心に残り、より一層鍛錬に励むのだった。

「うちが、このちゃんを守るんや。」

道場の外

「ごめん木乃香。ちょっと長く待たせちゃって。それと、お前の友達はまだ稽古続けるみたいだから、今日は二人で遊ぼう!!（言えない。オレのせいで、鍛錬が長引いたなんて・汗）」

「そおつか、そんなら、仕方あらへんな。それじゃ、そ〜君行くえ〜」といて走り出した。若干悲しそうな顔をしてたけど、どうしようもない。

その後、二人で遊んだ。追いかけてこやかくれんぼいいのだが、二人でやると、あまり面白くない。それでも木乃香が喜んでいたみたいなので、良しとする。

「木乃香、そんじゃ、もう帰るわ!!また今度な〜」

「ええ、もう帰ってしまうん?じゃあ、ないな、ほんなら、またあそんでや」

「おお!またな」そう言つて帰ろうとする。一応詠春さんにも挨拶をする。すると今日のことを言われた

「今日はありがとうございます。木乃香も喜んでおりました。それに、家の者にも良い薬になったでしょう。最近、弛んでいましたからね。そちらの方もありがとうございます。」

「いえいえ。木乃香の方は、こちら楽しかったですし、道場の方は、ちよつと、勢いで、やってしまっただけです、気にしないで下さい。また、何か出来たら、持ってきます。では!」そう言っ

て帰っていく。木乃香と詠春さんが見送りにきてくれてうれしかった。

第5話 神鳴流は武器を選ばずですかへえ（後書き）

戦闘描写はむずかしいです。

まだ、刹那をどうすればいいか悩んでいます。うーん

次回は2〜3日後くらいになります

では

第6話 術式開発

翌日

昨日やってしまったことを思い出して後悔していた。それもそうである。

木乃香という厄介事満載の子と知り合いになったため、これから来る厄介事を回避or退けるために、鍛錬を積もうと決意したのに、自分から面倒事を作ってしまった。本末転倒である

「やつちまった。でもしょうがないよね。いやでも・・・ぶつぶつ・・・それでも、収穫はあった！かくれんぼは正解だったな。子供ということで、油断したんだろう。警戒が緩んでいた。」部屋に積まれている本をみる。

「これで、術式の練習ができる。」

そう、木乃香と遊んでいる際に書庫に忍び込み、そこに、あった書をあらかた写し取った。最初は持って帰ろうとも思ったが、騒ぎになるのでやめた。幸いにも、速写の技術はあったので、写すには問題なかった。写したものをどうしようかとも思ったのだが、書庫の中にあつた。転移についての術式があつたので、それを使うことにした。自称神のおかげで、内容を把握するのに問題ない頭だったし（それなら、術式の情報も欲しかった。）物を送るだけなので、それほど複雑な、陣を必要とせず、すぐさま、作成。コピーしたも

のを、片っ端から自分の家に転送しておいた。

「意外とちよろかったな（悪どい！！）。最初は、どうしようかと思っていたんだけど・・・とりあえず、読んでみないことには、わからないからな・・・」

「・・・では、早速」

写してきた本を読み始めた。日本式しかないと思っていたけど、西洋の魔法に関するものがけっこうあった。おそらく、西洋魔法と戦う時用に残しておいたものであろう。さすがに、広域殲滅魔法の上級魔法はなかったが、回復系、転移系、防御系は結構あった。

あらかた、読み終え最後の一冊を読もうとしたとき、タイトルが気になった。

「占・事・略・決？？！！あの、安倍清明が残したやつか。確か、本物は子孫に残されたはず。何でこんな物があるんだ？？！！」

後の陰陽道の根幹となったものだが、難解なものもあり、すべてを理解できてはいないものではある。

「でも、これを理解し、マスターできれば、かなり、戦術の幅が広

がるな！！」

そう勇んで読み進めていったが、攻撃系のところは全く理解できず、先ほどと同じで、防御系、回復系が主であった。召喚術もあったのが幸いだ。

「よし、とりあえず、練習してみるか。」

練習場へ移動

「とりあえず、結界は張つとかないとな。バレたら、面倒だし」と結界を展開、それをほど難し物ではなかったので、すぐにできた。

「まずは、西洋魔法からだな！！これから来る相手のほとんどが、魔法使いだし。西洋魔法の方が簡単だしな。」

そう言つて、魔眼を発動する。魔眼は魔力の流れが見えるので、術式の解析をするのに結構役立つ。陣を書いている内、解析、また陣を書いては、解析と繰り返し言った。そうしている内に無駄に魔力が使われている使われているところを直し、他のものと混ぜ、また、直し、自分だけの陣を完成させていった。

「これでいいかな？魔法って無駄が多いんだな。10必要なところ

るに15くらい魔力使っているし、魔力が少ないと大変だな。逆に、魔力があれば、ゴリ押しで発動するんだから、理不尽だよな。」

とりあえず魔法の解析は終了し、新たにいくつか陣も作った。防御系、回復系、転移系を作成した。攻撃系は、作るには、作ったのだが、才能がないのか、他の陣よりも、バ力でかい陣を作成しなくてはいけないため、戦闘しながらの作成はきびしい。

なので、戦闘は近接を基本とし、魔法には防御系で対応するしかない。さらに、オレの陣には、欠点があった。魔力を気にしないで戦えるのは、いいのだが、障壁のような、常時展開のようなものではない。陣を書かないことには使えないからだ。不意を突かれたりしたら、即アウトだ。一応気で頑張るけど・・

昔から、山で、暮らしたため、野生動物などの気配に敏感だったため、余程のことがないかぎり、不意を突かれことはないのだが、世の中、例外というものはある。最強クラスに狙われたら、かなりきついだろう。

「次は、陰陽道に行ってみよう。式召喚は、占事略決を使えばいいとして、やっぱ、呪詛返しとかかな。呪われたら、一発で終わる・・・汗。な、なんとしても、マスターせねば!!」

結構必死だった。呪詛返しについては、実際かけてもらはないことには、返せないの、レジストする方法だけ覚えた。実際自分出かけてもよかったんだが、結局自分に戻ってきてしまうので、やめた。

それ以外にも、大事なことを覚えた。

そう、魔法の吸収である。占事略決によると、安倍清明は、相手（鬼）の魔力を取り込み、自分の力に還元していたという。さすがにオレでは、魔力を、直接体に取り込むのは、無理だが。陣の方に魔力を吸収させることはできる。

自分のまわりの範囲内で術者が放った魔力を吸収し陣に取り入れる。そして、その陣から魔力を気に還元し、体内に取り込む。つまり、この陣が発動している空間では、相手は魔力を使っても、こちらに力を与えるだけなので、体術のみで戦わなくてはならない。こちらも、魔力は使えないが、まあ問題はないだろう。

「これでかなり、強力になったな。あとは、陣の展開速度と戦闘しながら、描けるようにすること。全体的な陣のパワーアップができれば、最強クラスでもない限り、魔法使いには負けないだろう。ただ、実戦が必要だし、他の魔法書も見ないと。それに、金属操作だってまだまだだし。やることがいっぱいだ。」

基本は陶器を作るか絵を描くか、ボーッと空を見て寝たいというせいかくなのだが、木乃香に会ってしまった以上、なかなか難しい。これからどうしようかと考えて、家に帰るのだった。

主人公の陣 ほとんどが星座

防御系・結界系・転移系

1 ペンタゴン 五亡星 2 ヘキサゴン 六亡星 3 キャンサー かに座 4 バイスリース うお座 5 ジェミニ ふたご座 6 リー てんび
ん座

1 防御系の中でも最硬を誇るが一面にしか張れない

2 広域殲滅魔法を除くすべての攻撃魔法を跳ね返すことができる。ただし、展開している時間が少ないため、連続で打たれるともたない。

3 結界術のなかでも、とりわけ万能、かに座を描いてあるアクセサリーをつけとくだけで発動できる。相手の精神に干渉するようなものを、レジストする（例読唇術や記憶の干渉）

4 防御結界、うお座を描くことで発動。広域殲滅魔法のみ防ぐことができる。欠点は発動した後、インターバルがあるので、連続での発動が不可能。

5 転移系の陣 近距離専用。精々20〜30m。ただし、一回の陣で2回の転移が可能。瞬動よりも早くなかなか気づかれない。

6 長距離転移用。ただし、対となる、陣が必要となるため、それがないと転移できない。パクティオカードの機能から考案された。

回復系

1 おとめ座 ヴァルゴ 2 みずがめ座 アクエリアス

1 状態不良を治す。永久石化を治すことも可能。対象範囲は2～3人まで

2 傷の治療ができる。死んでなければ、ほぼ治癒が可能。対象は2人まで

攻撃系

しし座 リーオウ

広域殲滅並みの威力を誇る。陣を描くのにかなりの時間（1分）を要するため、単独では不意打ち以外ではまず打てない。ただ、魔力を取り込む時間が長いほど攻撃力も上がる。

フィールド系

北斗七星

有効範囲（半径50m）に入ってきたものから、魔力を吸収する。発動者も対象。魔力を使えば使うほどより早く吸収される。相手の魔力を自分の気や魔力に還元することもできる。もう一つの魔法無効化。欠点は、発動者の魔力が尽きた時点で陣が切れてしまい、気を失う。だから、相手を範囲内に入れてから発動しないと、すぐ切れる。一度フィールドに入れてしまえば脱出は困難。術者をたおすか、無理やり、陣を破壊するしかない。

召喚系

詳細は
・
・
・

第6話 術式開発（後書き）

若干独自設定が入っているのでご了承ください。

第7話 やってしまいました（前書き）

更新しました

第7話 やってしまいました

術式開発をしてから、半年が過ぎた。

あれから、週に一度は総本山を訪れている。前にいた、すげえオツサンがオレの作品を評価してくれたおかげで、京都周辺で、顧客ができるようになった。だけど、オレ自体は子供なので、詠春さんに預けそれを売ってもらっている。かなりの額で取り引きされているようで、オレの懐はかなりあったかい。一戸建ての家を建てても何とかなるくらいまでは稼げた。

修行の方も順調で、最近、扱える金属が増えてきた。チタンや金銀などだ。金は他のものと混ぜやすく合金にしやすい。今のところクロムを使ったものが一番硬い。ただ、硬い金属というのは、傷がつくと案外もろい。

なので、今頑張っているのは、柔らかくて硬い金属作りである。伝説とされている、オリハルコンなんかを作ってみたい。

術式の方も順調で、展開速度が少しずつ早くなってきた。転移もできるようになったので、これで、迷う心配もない。

さらに、詠春さんに、陶器を渡した後、道場で稽古するようになった。あの後後悔して、もう道場に近寄らないようにしていたのだが、なぜか、こちらの言葉が響いたとか言っただけから、稽古を申し出るようになった。基本的に棒術しか使えないので断るうとしたが、武器を扱えるようにしたいとの事なので、週一で教えたりしている。

そこに、刹那はいない。少し前に、修行という名目でほかのところに預けられていた。木乃香が物すごく悲しそうな顔をしたのを覚えている。

だから、稽古が終わったあとは、ずっと木乃香の相手をしている。

今日は、

「そゝ君は、絵が上手なんやってね。そんなら、うちの事も描いてほしいわゝ」と言われてしまったので、約束を果たすために屋敷を訪れている。

もう何度も訪れているとこなので、勝手知ったる我が家と言わんばかりに、木乃香の部屋を目指す。

木乃香の部屋に着いて、入る許可をもらい中に入る。

木乃香視点

「今日はそゝ君がきてくれんやゝ??せつちゃんがいなくなっしもうてさびしいんやけど、そゝ君といるとめっちゃうれしい。なんでやろう??」

自分の気持ちに気づかないけどそれを悪くないと思っている。なんだか温かい

声が聞こえる

「あー！そゝ君入ってええよ。．．．そんで今日はなにするん？」

そう言っただけの時間を過ごすのだった。

空視点

「よ！今日は前に約束してたことを果たそうと——思ってたー！絵描いて欲しいって言ってただろう。だから今日描こうと思ってな、画材道具持ってきた。」

そう言っただけの準備を始める。

「そゝ君覚えててくれたんやね。でも、ちょっと恥ずかしいわゝ」

テレながらもうれしそうに言う

「恥ずかしがっててもいいけど、そのまま描いちゃうぞ。どうせなら、笑っててくれた方がいい。」

そう言う木乃香はにっこりと笑ってくれた。

最初は鉛筆を使い骨格を書きその後肉付けしていく。影をつけるのを忘れない

――モデルとなっている木乃香は、じつとしているのがつらくなったのか、もぞもぞと動いている。こちらが、楽しんでいいよというと、肩に入っていた力を抜く。もう、下書きの方は終わった。

後は色付けするだけなのだが、木乃香は、黙って座っているだけなので、いったん中止にして、遊ぶことにした。

「木乃香とりあえず、絵の方はこれくらいにして、少し遊ぼうか？」

「もう、おわったん??」

「まだだけど・・・後は色付けするだけだし、今日中に仕上げなきゃいけないわけでもないからさ、木乃香と遊ぼうかなと」

「ホンマ〜〜それやったら・・・」

その後、木乃香と夜になるまで遊んだ。今日はもう帰ろうと思い、それを伝えると、泊っていけばいいと言ってきた。詠春さんからも許可をもらっているらしく、これで断るのもあれなので、御厄介になることにした。

一緒に食事をしたあと、風呂に入ろうとしたが、木乃香も入りそうになり、大変だった。つか詠春さんとめるよと思ったのはしょうがない。

なんとか、一緒に風呂に入ることには防いだが、今度は、一緒に寝ようと言い出した。

今までは刹那と寝たりしていたんだが、刹那がいなくなってしまう

たため、一人で寝るのは、寂しいと木乃香が言うので、しぶしぶ一緒に寝ることにした。

しばらくして、寝静まった頃物音がして起きた。

「今のうちに早くするぞ、急げ！」と外で何か言っているのは聞こえる。

何か嫌な予感がして、木乃香を起こそうとしたときいきなり何人かのやつが侵入してきた。

木乃香を後ろに庇い、ブレスレットを棒に変え、一番最初に入ってきたやつを吹っ飛ばす。かなりでかい音を立てて吹っ飛んだので、これでだれか気づくだろう。

「オッサン達、何しに来たの??言わなくても大体わかるけど、少女誘拐は犯罪だよ?なかなか変な趣味を持つてるねえ。変態さん??」

「違うわあ!!!そこのお嬢様を使い、関東のやつらに目に物見せてやるんじゃない!!最近長も軟弱で関東のやつらに友好をなど言っている。だから、わしらで、鬼神を復活させて、関東を攻め落とす」

「へーまあ、関東うんぬんは、別にいいんだけど。なんで、こんな子供に全部話してるの??」

「おぬしの事は知っておる。神鳴流師範代を軽く圧倒したと、だから・・・話して時間を稼がしてもらったわ!!!」

「!!!」あわてて後ろをみる。木乃香がない。

「油断したのお小童!!!お嬢様は頂いていく」そう言って転移札を使って、その場から消える。

「クソオ!!!!!!」

そこに詠春たちが来る

「空君、木乃香何かありましたか????.....木乃香!!!!」

「すみません、詠春さん。木乃香は連れてかれてしまいました。オレがいながら・・・」

「空君のせいではありません。それで、木乃香をさらったものはどこに？」

「鬼神を復活させると言っていました。関東を攻め落とすんだと」

「やはりですか。こちらも、もっと警戒しとくんでした。木乃香が狙われていることは、わかっていたのに!!!」

「魔力ですか??」

一瞬驚いた顔をしたがすぐさま戻す

「やはり、こちらの世界のことを知っていたんですね。そうではないかと思っていました」

「隠すつもりはなかったんですけどね。別段言う事でもないです。すいません」

詠春さんとの話を終え木乃香救出の手はずになった。

はじめは、詠春さんが、任せなさいと言っていたのだが、さらわれたのはこちらの責任でもあるので、木乃香の救出に参加することになった。

今、湖を目指して移動している。途中、潜んでいた敵がいたが、それほど強くもなかったので、難なく撃退。そして追走しようやく

木乃香をさらったものを視界にとらえた。

「木乃香を返してもらいますよ」

「ふっん、関東にくみする長などいらん！！わしが代わりになって、関西を治めてやるわ。手始めに、この嬢ちゃんを使い、関東を落とさる。これで、関西が関東を牛耳るんや」

「そんなことはさせません。貴方達はここでおしまいです。素直に木乃香を返せばおとがめも軽くなるでしょう」

「ぬるいわ！！そんなんだから、下のもんになめられるんや、やはり、あんたに、長は任せられん！！ここで引導をわた——」

してやると言おうしたとき何者かに遮られた

「オッサンさっきの言葉返すぜ、油断大敵」そう言って木乃香を搔っ攫う。

「小童！！！！」

「おっさん、ガタガタぬかすのはいいけど、隙見せすぎだ。オレが言っのもただけだ。」

しかし、オッサンにはやりと笑った。

「わしが、何も手を打たなかったと思っておるのか。甘いぞ！もうすでに、お嬢様はこちらのもんや。」

「何!？」

「さあ、お嬢様こちらへどうぞ」

そう言つと、木乃香はおもむろに立ち上がりあちらへ歩いて行くとする。

「木乃香!!」

呼びとめて木乃香の顔を見たが目の焦点があっていない。まるで操られているかのように

「暗示か、クソ!!」

「暗示なんて、軽いもんやない。符を用いた。呪いやそう簡単に解けへん!!」

木乃香の体を押さえながら考える。呪詛返しなどの類はまだ完ぺきではない。失敗したら余計事態を悪化させかねない。詠春さんに頼もうとしたが、あの人は剣士で呪術士ではない。無理だ

他の人もあのオッサンほどの力はない。どうする？と考えているところに、ふと妙案が思い付いた。

「詠春さん！！木乃香と仮契約をします。仮契約なら相手の呪いを解除できるかもしれない。木乃香の魔力があればなおさら！！」

詠春は苦い表情をしていた。それもそうである。彼はできるだけ、娘に裏の事とはかわらず、幸せに暮らしてほしいと思っていた。しかし、今の状況ではそれを良しとせず、詠春は決意する

「わかりました。空君、木乃香をお願いします。」

それを聞いて、陣を作成する。仮契約の陣は前にコピーした中にあるので、難なく描けた。

「悪いな、木乃香。恨み事は後で聞くから、今は我慢してくれ！！」
そう言って木乃香とキスをする、そこに、かなりの魔力が流れ出し

たが、それは、辺りを柔らかく包むそよ風のようにだった。

少しして木乃香が目を覚ます

「そ〜〜くん??」

そう言うと、木乃香は気を失った。小さいが確かに木乃香の声だった。目もさつきと違い、力が宿っていた。

「ふ〜、成功した〜」と肩の力を抜く

敵のオッサンは、詠春さんにとらえられたらしい。

「お疲れ様でした空君。娘を助けてくれたこと感謝します。」

「いえいえ、もともと、オレの責任ですし。木乃香が無事ならいいんじゃないですか」と軽く言う

「それで、詠春さんこの後どうするんですか？木乃香の事とか」

「木乃香にすべて話そうと思います。その後の事はまだなんとも・・・とりあえず、屋敷に帰りませんか。今日は少し疲れました。」

と苦笑しながら言う

「そうですね。よい子は寝る時間ですし、お姫様もぐっすりのようなので」

と笑いながら言う

そうして、屋敷に帰り明日は大変だな～と思いながら寝るのであった。

追記

木乃香が服をつかんで離さず寝てしまったため、一緒の布団で寝るしかなかったという

第7話 やってしまいました（後書き）

いきなりの原作ブレイク果たしてこの後・・・

乞うご期待

第8話 木乃香さん……恐ろしい子!!

翌朝

「う、ううん。ふ、朝か……」

「そ、くんzzzz」

「んん!?……何だ寝言か。昨日は大変だったもんね。怖い目にもあつたし、疲れてるんだろう」

とゆつくりと、木乃香の髪を撫でる。ビクツとなったがすぐにうれしそうな顔になった。

「はあ、昨日、仕方なかったとはいえ、木乃香と仮契約結んじゃったもんね、どうやって謝ろう?? まずいよね、キスだもんね……」「そ、君」!!!」

「えっと(汗)このかさん……おはよう。それといつ頃から起きていらしゃったのでしょうか?」

やけに丁寧になる。かなり、焦っているようだ。

「うん、そ、君が、髪を撫でくれたところから?? それで、そ、君仮契約とか、キスとかってなんなん??」

木乃香に質問されずさま反応する。膝をつけ、両の手ををつけ、地面に頭をこれでもかっと言つぐらい擦りつける。日本人の最上級

の謝罪法、すなわち、土下座である

「木乃香、ごめん。謝って許してもらえないけど、とにかくごめん。オレは昨日木乃香にキスをしました。オレにできることなら何でも言ってくれ、どんな罰で受ける。」

「ええ！！？？そ～君、うちにキスしたん？」顔を赤らめながら言う。

「緊急のこととは言え、女の子の大事なものを奪ってしまったことに変わりない！！すまん」土下座のまま謝る

「ほっかゝ、うち、そ～君と、チュ～してもうたんやなゝ、覚えてへんから、あれやけど、なんか恥ずかしいわ」

ちょっと笑顔なのが、逆に怖い

「そんなら——そ～君——まず、昨日会ったことについて教えてやゝ。嘘ついたらゆるさへんからなゝ」
につこりと笑う

「sir, yes, sir」なぜか軍隊式

そして話そうとしたところに

「その話なら、私がしましょう。 詠春さん！！《お父様！！》」
と詠春が入ってきた

「とりあえず、場所を移しましょう。話はそれからでもいいでしょう。」

そついわれ、木乃香と一緒に詠春さんの後について行く。

部屋に着いたが、オレは、部屋に入らなかった。詠春さんが二人で話したいと言ったからだ。なので、話が終わるまで、別室で待機することにした。ちょうどやっておきたいこともあったので……

木乃香視点

「それで、お父様、話ってなんなん？」

部屋に入ってから詠春はずっと黙っていたが、木乃香に聞かれて、話を切り出すのだった。

「木乃香——まず——私は、あなたに謝らなくてはなりません……あなたに、隠し事をしていました。」

「そゝ君が言おうとしたこと？」

「それもありますが、もう一つ大事なことです……世の中には、魔法という、不思議な力があるんです。」

「魔法！！؟؟」目をキラキラさせながら言う

「はい。ただ、その魔法というのは、なにも、おとぎ話に出てくる

ようなものばかりではありません。とても危険なものでもあります」

「昨日みたいなこと??」若干残念そうな顔をする

「そうです。特に、木乃香には、狙われる理由があります。」

「りゆう??」

「実は、木乃香には、隠していましたが、木乃香には、魔法を使う源でもある、魔力というものが、他の人よりもあるんです。桁違いに・・・」

「それで、私と妻とで話し合い、木乃香には危険な世界で暮らして欲しくはなく・・・だから、木乃香には隠して、平穩無事に過ごしてをらいたいと思っていました。そのせいで、昨日のような、事になってしまったのですが・・・」

その言葉黙ったまま、聞く木乃香。

「そこで木乃香・・・貴方はこれから、どうしたいですか?? 子供のあなたに聞くようなことでは、ないのですが、貴方の意見を聞きましょう。もちろん、昨日の事を忘れて、今まで通り生活することもできます。その場合は記憶を消させてもらいますが」

「きおくを??・・・お父様聞いておきたいことがあるんやけど、仮契約ってなんなん??」

「仮契約とは、簡単に言うと、パートナーのようなものです。契約の仕方はいくつかありますが、基本的には、魔法陣の中でキスする

のが普通です。まあ、同性ではあまりしませんが・・・」

「そっかゝそれで、そゝ君がキスしたんやね。でもなんで、仮契約をしたん??」

「それは、仕方なかったことなのです。昨日木乃香は、さらわれた時に、敵の強力な・・・んゝそうですね——暗示のようなものにかかってしまいました。相手の言うことを何でも聞いてしまうという暗示を」

「それで、空君が、仮契約なら、その暗示を解除できるかもしれないと言つて、私が了承しました。彼に非はありません。怨むなら、私を怨んでください。私は、二度も木乃香を救うことができなかった。親失格です」

「そんなことあらへんよ。お父様は、お父様や。それに、恨んでもおらへんよ。そゝ君なら別に・・・キヤ」

恥ずかしそうに言う。

「ありがとう、木乃香。それで、あなたはどうしたいですか?」

木乃香が真剣な顔をして言う

「うちは、忘れとくない。それに、忘れたからと言って、うちの危険が変わるわけやない。知らんくらいなら、知っていたほうがええ。」

「そうですか。そうすると、木乃香には、この家を出て行ってもうしかありません」

「な、なんでなん!!」

「ああ、言い方が悪かったですね。別に木乃香を追いつけなくてもいいです」

それを聞いて安心する

「一時的に魔帆良にいるお義父さんのところに行ってもらいたいのです。ここは、まだ、昨日のような人たちがいるかもしれないので、安全になるまでは、あちらにいてもいいです」

「おじいちゃんのところ??ううん・・・ええよ」

少し考えたが了承した。

「そうですか、ただ、あちらに行っても、木乃香は、魔法の事は知らないということにしてください。あちらでも、木乃香を利用するやからがいるかもしれないので。」

「わかったえ」

「それと、これから、半年ほど、魔法を学んでもらいたい。一応、対処する力はあった方がいいと思うので。魔法というより陰陽道です」

「うちも、魔法使えるん??」

「ええ、基本程度でしょうけど、それより先はあちらで、鍛錬してください。くれぐれもばれないように・・・それでは木乃香、空君を呼んできてくれえますか、彼とも話したいことがあるので。」

わかったと言つて部屋を出ていく木乃香

空視点

「そゝ君、お父様が、話があるから、来てつて!!」

木乃香が走りながらやつて来た

「わかったよ。今行く」

やっていた作業もちょうど終わったので、木乃香と一緒に詠春さんの部屋へ向かう。昨日の事があるので、正直木乃香と顔を合わせづらい。木乃香は気にしていないようだが、本人ではないのでわからない。

そうこうしながら部屋に着いた

「はいります」

「空君、改めて昨日はありがとうございました。君には娘を二回も救っていただき感謝しています。」

「いえ、昨日のはオレの責任でもあるので、お気になさらず。それで、話と言つのはそれだけではないのでしょうか？」

「ええ、空君あなたは、魔法を知っていますよね。昨日の状況判断は知っている人のそれでした。なので、申し訳ありませんが、木乃香に教えてやってもらいたいです。期間は半年ほど」

「うん。申し訳ありませんが、お断りします。」

「それはなぜ？」

「ここは、総本山、僕よりも、適役の人がいるんじゃないのでしょうか。」

「確かにそうですが、昨日の事もあります。こちらの信用できるものをお願いしたくて」

「はあ、詠春さん、失礼を承知で言いますが、長がそんなのでは、下はついてこない。昨日のオッサンの言つとおりだ」

「お恥ずかしい限りです。だからこそ、今信頼できるものを選んでおきたいのです。だから、木乃香をお願いできませんか？」

「え………やっぱり、お断「そゝ君!!」りします??? なんですしょう? 木乃香さん??」

「そゝ君は、さっき何でもするつて言つた。あれはうそやったん?」目を潤ませながら言う

「ウッ」

「別にええんよ。そしたら、うちは、約束も守れない男に唇を奪われた女になるやけやから・・・ヨヨヨ」

振りそで顔を覆う

グサツグサツと胸に突き刺さる

「（妻に似てきましたねえ〜）」「ここの中で詠春が思う

「わ、わかった。木乃香の先生オレが引き受けよう。ただし、どうなっても知らないからな〜」

「わかったえ〜、うちがんばる！！」ぐっと手を込めてアピールする。さっきはどうやら演技らしい

（子供に、はめられた〜）とがっくりとしている空を横目にこのかがはしゃぐのであった。

練習場

「よし木乃香。これから、お前をみっちり鍛えてやる。泣き言は聞

かないからな。それと、修行中は、先生or師匠と呼ぶように。こういうのは、形から入った方がなんかいい。というか、一度は呼ばれてみたい……」

「わかったえ、先生！——そんでなにからするん？？」

じくじくと木乃香の言葉に感動していると、木乃香から質問が来る

「まずは魔力を感じるところから始める。魔法にしろ、陰陽道にしろこれを感じられないことには、始まらない。まあいきなり魔力と言ってもわからないだろうから、こちらで、魔力を流してやる。それを意識しろ」

そう言うのと、木乃香の背中に触れ、魔力を流す

「なんか、これ変な感じ。気持ちええわ。」顔を赤く染める

「バカたれ！魔力を感じたら、それが自分の中にあるのを確かめろ。それでいつでも引き出せるようにしておけ。幸い、木乃香には魔力がたくさんあるんだ。無駄に出しても、困らんだろう。」

「わ、わかったえ、ううん、これかな？この温かい感じ」

「早……！」

木乃香がこんなにも早く、魔力を感じたことに、驚きを覚える

「（こいつ天才か！！）そ、そ、そうか。それじゃ、次に術の説明だ。オレは、陰陽道に詳しくないけど（嘘）、ここは、総本山。教本ならいくらでもある（実は前にコピーしたから）」

「いいか、陰陽道とは、いろいろある。例えば、占いなんかも、その一種だ。昔の陰陽師は、天板を使って、都に起きる、吉兆を占ったという。だが、ここで教えるのは、符を使ったものだ」

「符？」

「まあ、要するにお札に術式を書いて、そこに魔力を流して発動するやつだ。魔力と知識が物を言う。魔力だけでは、発動しても、失敗し、知識だけでは発動しない。木乃香にはこれから座学の勉強をしてもらおう。基本は座学、合間に、ちょっとした体術を仕込んでいくんで頑張れ」

「頑張る！！」

それから3カ月ほどで基本となる座学を終え、体術もこの年齢からすればかなりいいものになった。（魔力で強化している）

「それで、木乃香。大体の基礎知識は入れ簡単な術なら発動できるようになったわけだが、ここから、もう一段階上に行く。陰陽道の真骨頂でもある、式召喚だ。そして、ここに我が家の家宝（かなり嘘）あの安倍清明が残したとされる占事略決をお前に授ける。これを見て勉強するように。あとこれは、ほかの人に見せてはならない（大騒ぎになるという意味で）くれぐれも、人目に着かないとこで

「見るように!!」

「わかったえ」

「それじゃー今日はここまで」

それから3カ月ほどして、半年ほどたち約束した期間を終えた。その間に木乃香は、簡単な式なら呼べるようになった（なんてチート）そして今日木乃香は魔帆良に向けて旅立つ。

「そー君……」ちょっと悲しそうな顔で、というより泣いている

「また会える??」

「ああ、会えるさ。オレも魔帆良に興味があるし、仕事も区切りがついたら、そのうち行くさ」

「ホンマ??」ちょっと元気になる

「ホンマ、ホンマ。だから、笑ってお別れしよう。」

「わかった!!」満面の笑みを見せる

「それと木乃香にちょっとしたプレゼントだ。まずは、これ」

そう言って銀でできたペンダントを渡す

「それは、お守りだ。特殊な陣が刻んである。お前を守ってくれるはずだ。それに、ちゃんとアクセサリーに見えるようにしたから、普段からつけていても問題ないし、それ自体には魔力がないから、変に気づかれもしない。優れものだ」

「ありがとう！！めっちゃうれしい！！大切にする。」

「それと、こっちは、遅くなっちまたけど、約束したやつだ。」

「これって、あの時の絵？うわぁ〜上手」

「お前が持っていていけるように少し小さくしたからな〜ちょっと遅くなっちまった。わりい」

「うんうん、構わへんよ〜これちゃんとかざるからな〜。」

お互いに話していると、時間が迫ったのか、詠春が切り出す

「それでは、木乃香、時間です。良いですか。あっちでは、決して裏の事を知っているということは、ばれないでください。お義父さんは、一般人なら、大事な孫としてくれるでしょうが、裏を知っていると利用してくる可能性が高い。気をつけてください。」

「大丈夫！！そ〜君に教わったから。結界だつてうまいんやよ〜」と笑顔で答える

「一応、こちらでは、裏にかかわらず、平穩に送ってもらいたいと

いうことで、裏の事は教えていないと、伝えておくので。なにも知らないふりをしてください。それでも、おそらく、何かしらの形でかわらせようとするでしょうけど」

空が言う

「そんなところで大丈夫か？」

「ええ、ここよりは安全でしょう。私の方も一日も早く組織をまとめあげたいと思います。協力者はだいぶ得られました」

「ふうん、それなら大丈夫か。……それじゃ木乃香元気だな」

「そ、君もな……また、ぜったい会おうな!!」

「ああ、絶対な。——またな」

「うん、またね」

そう言っつて木乃香は魔帆良に向かっていった。

「空君は、これから、どうします？」と詠春さんが聞いてくる

「旅に出ようと思います。オレの知らない技術（芸術面）が世界にはたくさんあると思うので、それに、魔法世界へも行ってみようと思います。あちらの技術（魔法、芸術面）に興味もありますし。」

「旅ですか、私も若いころしました。そうですか、なら、私の友人が魔法世界にいるので、そちらに行った際には、良くしてもらえるように、取り計らっておきましょう。」

「ありがとうございます。．．．．．それではオレも行くつもりです。木乃香の準備に会わせて、オレも準備していたので」

「そうですか。さびしくなりますね。空君、いつでも、帰ってきていいですよ。ここはもう、あなたの家でもあるんですから。」

「ハハハ、詠春さん、実際オレの家はここにあるんですよ。最近帰っていませんでしたけど。」

「そうでしたね。．．．．．それでは、空君お氣をつけて。また会いましょう」

「ええ、詠春さんも、お体には氣をつけて、いい年なんですから。それでは、また」

そう言って旅に向かうのであった。詠春は空の姿が見えなくなるまで、見送るのだった。

第8話 木乃香さん……恐ろしい子!! (後書き)

木乃香のたくましさを書いてみました。

次回の更新はおくれるかもしれませんが

第9話 バゲキヤラ登場（前書き）

口調が難しいです

では どうぞ

第9話 バグキャラ登場

京都を出てから、3年の月日が流れた

その間に世界中いろんな所を廻り、その土地の技術を吸収していった。イタリアやフランスにも焼き物というものはあり、日本の陶器とは少し違うけれど、それでも得られるものはあった。

エジプトなども訪れた。

そこでは、古代から続く技法が有って、よそには出回らないようなものがあつた。そこを何とか拝み倒し、助手という形で雇われ、教えるのではなく、見て盗みなさいというものだった。

魔法面でも、得られるものがあつた。

中国を訪れた時、陰陽道に関する文献を見ることができた。もともと、陰陽道とは、中国から伝えられたものなので、かなりの文献が残っていた。

そのおかげで、陣の構築が良くなったし、懸念されていた、召喚術の方も完成しつつあつた。

さらに、棒術の修行も行うことができた。

中国の山奥深く旅していたところ、武術道場のようなものがあつた。そこでは、中国拳法を教えていて、そのなかに、棒術に関するものもあつた。

実際、戦ってみれば、負けるようなことはなかったが、その秘伝

の技なのか棒を使う柔術のようなものを得られたのはよかった。棒を使い相手の力をそらし、利用し、または、無力化する。どちらかと言うと相手を吹っ飛ばす技の方が多かったので、ここで、柔の技を得られたことで、より、棒術に磨きがかかった。

イスラム教地域を訪れた時は大変だった。

そこで、遺跡でソロモン王に関する文献を見つけ、ソロモン王が従えたという悪魔（魔神？）のことがかかれていたので、ちよつと拝借しようとして逃げようとしたところで見つかった。

なんでも、その文献は、イスラム教徒においては、かなり貴重なものらしく、国王（王様かどうか知らない）までできて、その文献を譲ってくれるようにお願いされた。最初は、シカトしてトンずらしようとも思ったが、そうは問屋がよろさない（ここ、日本じゃないのに・・・）。

国を挙げて搜索が開始されてしまい、このままでは、国際指名手配犯にもなりかねないので、泣く泣く譲った（一応コピーはしたけど、ちよつとしかできなかった。逃亡していたので）。そのかわり、莫大な金を要求したので、一気に億万長者だ。

そんなこんなをしながら、世界中を廻ったのでそろそろ魔法世界へ行こうと詠春さんから聞いていたゲートを使って魔法世界に行くのであった。

魔法世界到着

「ここは、どのへんだ？」

なんかでつかい城が見えた。とりあえず、情報を集めようと、町に向かつてみる事にした。

辺りを見ると、人間、亜人やハーフなど、さまざまな人種がいた。旧世界でのお金を換金し、ある程度の資金ができたため観光することにした。町で聞いた話によると、どうやらここは、ヘラス帝国らしい。

ヘラス帝国では軍事が盛んなのか、あまり工芸品と呼ばれるものが少なく、あまり長居する必要はないかなと思い、今度はアリアドネーにでも行こうかなと思っているところに広場の場の方が騒がしくなるのが聞こえた。

テオドラ視点

「ハア、ハア、ハア……まったく、あの筋肉ダルマめいつたいどこに行きおつた！！」

ひさしぶりに、ラカンが、テオドラのもとを訪れた。最初はテオドラの相手をしてくれてたのだが、いつの間にかいなくなっていた。テオドラはラカンを探しに外に出て（誰にも言わず）、ラカンの事を探し回っている（護衛の人たちも探し回っている……テオドラを）。そのせいで、広場が騒がしくなっていた。

「あんな、馬鹿デカイやつすぐに見つかると思ったんじやが・・・
一体どこにおるんじや？まさか！？もう帰ったのか？？そうである
なら、こちらにも考えが・・・ドン・・・痛！！」ん誰じゃ？？」

テオドラ視点終

空視点

「痛い！！（なんだ誰かぶつかって来たのか） ん誰じゃ」「テオ
ドラにぶつかられ、少し体制を崩す。さすがに、尻もちをつくよう
なことはなかったが、不意打ちだったため、さばききれなかった（
未熟）

「すまんのぉよそ見をしながら走っていたゆえ、ぶつかってしま
った。大丈夫かの」

「ええ、大丈夫です。こちらもよそ見をしていたので、気にしない
ください。」

そう言って立ち去ろうとしたがテオドラに止められた。ケガをして
いたからである。どうやら、テオドラの頭の角が腕に当たって血が
出ていた（道理で痛いはずである）。

「お主、ケガしとるじゃないか。わらわのせいじゃ。治療するから
着いてきてくれぬか？」

「いえいえ、お気になさらず（なんか厄介事になりそうなので早く
逃げなきゃ）。知らない人に着いて行ってはいけないといわれてい
るので。傷もそれほど深いわけではありません（早くどこか行け）。
なので、これで失礼します」

そう言つてさつさと立ち去ろうとする。原作を見ていたため、テオドラが皇族である事は知っている。皇族が出てくると、めんどくさいことに巻き込まれ可能性高いので早く立ち去りたかったが、神はオレを見捨てた。
オッサン

「テオドラ様！！ご無事ですか！？あれほど勝手に城の外にお出にならないように言いましたのに」

「うゝゝすまぬ。筋肉ダルマがいなくなつて探しに来たのじゃ。もしかしたら、もう帰ってしまったかもしれん！！」

「ハアゝ ラカン様なら場内にいましたよ。なにか、散歩しているようでした」

「なんじゃと！！！」まさかの勘違い

「ですから、城にお戻りくださ・・・というより、後ろの少年は、大丈夫なんですか。なんか悶絶してますけど」

「そうじゃ、衛生兵を呼べ。わらわがケガさせてしま・・・どうした！？先ほどより苦しんでいるではないか」

空の額には脂汗がにじみ出ていてかなり苦しそうな顔をしている

「おそらく、テオドラ様が傷口を握っているせいなのでは？・・・かなり強く握っているようです・・・」

同情したような顔で空を見る。それもそのはず。護衛の人が来た時

点で、空はさりげなく逃げようとしたのだが、テオドラがそれを阻止。しかも、阻止する際に、傷口をつかんで止めるという、暴挙を行うという始末。空の方も、男の子なので、悲鳴を上げるという恥ずかしい真似はできず、ひたすら耐えていた。

「すまぬ！！！大丈夫か？？衛生兵！！衛生兵！！至急此の者を城に運び治療するのじゃ！！死なせてはならんぞ」勝手に大事になっている。

そして、拒否権を発動する間もなく城につれてかれてしまった。

城到着

「いやゝホントにスマンかった。傷を負わせた上に、さらにその傷をえぐるような真似をしてしまって」申し訳なさそうに言う

「いえ、治療してもらいましたので、お気になさらず。では、これで失礼します。」

「いや、待ってくれ！！このまま、おぬしを帰すような事があっては、ヘラス皇族の恥。もう少し城で休養していつてくれ。」

「（人の迷惑を考えないのは恥じゃないのだろうか？）いえ、旅の途中ですので、これでお暇させてもらいます。」

「ま、待ってくれ。それならこちらで、町を案内しよう。だから、

もう少し「じゃじゃ馬姫」とどまってくれんか・・・なんじゃ
！！筋肉ダルマ。今はお主の相手をしている暇はない！！」

ラカンが部屋に入ってくる

「なんだよいきなり。お！なんだ、その坊主は？」

「わらわの客じゃ」

客扱いされてしまった~~~~

「いえ、用事も済んだのでこれで帰ります。どうぞ、気になさらず、
夫婦漫才を続けてください。」

「「だれが、夫婦じゃ（だ）」「」

「おや、かなり、親しいように見えたので。一国の王女にその対応
なら、旦那さんかと思ったのですが・・・お似合いですし」

テオドラとラカンの顔が赤くなる

「お邪魔なようですので、これで・・・」

「待つのじゃ。こらジャック！！お主のせいで変な勘違いをされて
しまったではないか！！どうしてくれるんじゃ」

「知るかよ。大体坊主、オレとこのじゃじゃ馬姫が夫婦はないだ
ろう。せめて親子にしてくれ」

「それは無理でしょう。半裸の男性が王様なんてそんな変な国があ

「つたら、気持ち悪いです。そういう部族もあると思いますが、そう言うところは、あまり発展してないようなところなので、ここは違いますし」

「それでは、何か？そんな奴の妻として見られているわらわは、いったいどんな変態なのじゃー！」

怒鳴りながらテオドラが言う

「さあ？世の中そういう趣味の夫婦がいたとしても不思議ではないのではないですか？（実際原作では、きわどい服を着ていたし本当にお似合いじゃねえ？）」

「不思議じゃー！わらわを、そんな変態にするなー！」

「つつか、さつきから人を変態呼ばわりはひどくねえ？」ラカンが言う。

「え！？、変態でしょう（じゃろ）？」「二人の声が重なる。それを受けてラカンが少し落ち込む

「それにしてもお主、なかなか面白いやつじゃ。皇女を前にしてその態度、気に入った！良かったら名前を覚えてくれぬか？？」

「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国です。長いのでイギリスとお呼びください。」

「そおか、わかった。イギリスでいいんじゃない・・・ってそんなわけあるかー！それは旧世界の国名であろ。昔ナギに聞いたことがあるわー！」

「おお！！博識ですね。さすがは、皇女様！！それでは、皇女様が博識のところ見習って私も帰って旅を続けたいと思います。それでは！！」そう言って帰ろうとする

「ふむふむ、そうじゃろ、そうじゃろ。では、しつかり励め……つて違うじゃろ！！何つかあゝ、そんなにこの城にいたくないのか！？」

「はい！！」

「直球！！！！なぜじゃ？！」

「実はこれには深い事情がありまして……めんどくさいからです」

「ぶつちやけたー！！！！」

「それで帰っていいですか？」

「んゝゝゝ」とテオドラが悩んでいると、さっきまで落ち込んでいたラカンが話しかけてきた

「坊主、おまえが、八雲空だろ。詠春から聞いてるぜ。聞いていたのとちょっと違うけど」

「人違いではないんですか？？それに聞いたのと違うなら違うでしょう」

「最初はオレも、そう思ったんだが、詠春のやつが、「かなりでき

る子が行くから、良くしてやって欲しい」と言ってきたんでな、それに、「今の私じゃその子に勝てない」と言っていたからな。半信半疑だったけど、お前を見てて、そう思った。」

「それこそまさかじゃないですか？？だって、お姫様に、ケガを負わされるやつですよ。強いはずありませんって」

「それは、単に殺気がなかったからだろ？実際俺様クラスなら、難なくかわせるが、おまえは、まだ実戦経験がたりないんだろ。場数を踏めば、殺気がなくても反応できる」

そう、実際、空には、実戦経験が足りなかった。前の世界でも鍛えはしたものの、実戦になることは、ほとんどなかったし、あつたとしても、自分の命にかかわらなければ、興味がないので逃げていた。

「ハア〜それで、なんかオレに用ですか？」ちょっと口調が変わる

「そつちが素か」

「ええ、もう隠す意味もないんで。」

「最初は、用なんかなかったんだが、坊主オレと勝負してみねえか？」

「さすがに、英雄相手では、勝負になりませんって。やめときます。」「即座に断る」

「ふ〜ん、まあそれならそれでいいんだけど。でも、確か、おまえ、芸術家なんだよね。詠春から聞いているぜ。それもかなりの腕だ

とか。どうだ、オレに勝てたら、このヘラスにある技術を見せてやる・・・テオドラが!!」

「わらわか!？まあ良いじゃろ」

「別に要りません。ここは、軍事が盛んなのか、それほど、珍しい工芸品はありませんでしたし」

「それなら、アリアドネーなら、どうだ。あそこの魔法学校の総長とは古くからの知り合いだ。あそこは、魔法以外の書物もたくさんある」

その言葉を聞いて考える。これから、アリアドネーに行こうと思っていたし、本が見られるというのは、非常に魅力的である。だが条件がきつい。生きたバグキャラであるやつに勝つなんて不可能に近い。そこで、

「それじゃ、ハンデをもらえますか。制限時間まで、オレが倒れなかったらオレの勝ちということだ。」

「いいぜ!制限時間だが、うゝゝゝん、20分くらいでいいだろ」

「わかりました。それでいいです。どこでやりますか?」

「この城の近くに戦闘で使っても大丈夫な土地がある。むかし、この龍樹とやりあった場所だ。問題はない。」

「それでは、そこに行きましょう。案内してください」

「よし、着いて来い。それと、テオドラ審判を頼む！時間を計ってくれ」

「わかったのじゃ。それにしても珍しいの。時間をはからせるとは。お主ならすぐに決めてしまっじゃろ」

と驚いた感じでテオが聞く

「いや、そう簡単にはいかないな。負けはしないだろうが、あいつ手札を知らない以上、勝てるともいえん」

「ほう、そこまでのやつか。それは楽しみじゃの」

そう言って、戦闘場を目指すのだった。

第10話 VSバグ・・・INアリアドネー（前書き）

なんか、主人公の性格が難しいです。コロコロ変わっているかもしれません。ごめんなさい

第10話 VSバグ・・・INアリアドネー

到着

「着いたぜ。ここだ!」

何もない荒野を指して言う。昔、龍樹と勝負した時に、地形を変えてしまったらしい。でも、軍での鍛錬場としても使えるためこのままらしい。

「それで準備はいいのか?こっちは準備できてるぜ!」

そう言われて、まずは魔眼を発動する。用意ドンのスタートがない実戦では、なかなか、発動しづらいが、あちらが待つてくるような模擬戦では十分に使える。ラカンが半端なくあるので、それを見ると嫌気がさす。

こちらもそれなりにあるが、ラカンほどではない。

しかも、遠距離では魔力を飛ばしてくるが、ラカンは気が主体だ。相性的にも悪い。

だが、今回に関しては、勝つことが目標ではないので、なんとかするはずだ。

ブレスレッドを棒状に変えて準備を整える

「こちらも準備完了です。」

「へーブレスレッドの形を変えるのか？珍しい能力だな。それは魔法か？」

「さあ？敵に情報与えるようなやつは、相当なバカか、相当強いかのどちらかなので。あんたは、後者なんだろうけど、オレは臆病者なんで、教えませんよ」

「ハッハハハ！確かに、俺様は強ええから関係ないが他のやつらはそうはいかねーもんな。」

「ええ、だから、精々手加減してください。」

「ハッハハハ！俺様はやるからには、全力を尽くす男だ。手加減なんてしねーよ」

「英雄といっても、心が狭いんですねー。少しくらい良いのに・・・弱い者いじめは嫌われますよ」

言ってる・・・そう言ってラカンが動き出す。

「ラカン全力右パンチ！！！！」

ものすごい勢いで巨大なエネルギーの塊が飛んでくる。それを瞬動で避ける。瞬動は相手に突っ込むには直線すぎて見切られやすいが、回避に使えばかなり使える。相手との距離をとることもできるし、結構重宝している。

「やっぱ避けたか。なかなか、速えーじゃねえか」

「逃げるのは得意なんで」

「へーなら逃げねえようにするだけだ！！ラカン連続パンチ！！！」

今度は先ほどよりも小さいが、それでも十分な大きさのものが連続して飛んでくる

「ふたご座！！！」素早く陣を描き発動、一瞬でラカンの後ろをとる。ラカンも後ろをとられたことに驚いたが、すぐさま反撃の態勢をとる。

「まだ、甘えー！！！」そう言って殴りかかろうとする。しかし、拳が顔に届く直前に空の姿が消える。

その瞬間後ろから、強烈な衝撃が来た。ラカンは殴られ、10mほど、吹っ飛ばされて行った。

「まずは、一発」態勢を立て直し空の姿を見ると、空のセリフが聞こえた。

「なるほど、瞬動ではなく短距離での転移か、それも連続で。追撃がこなかったことを考えると、どうやら2回が限度のようだな」

たった一度見せただけで見破られてしまった。さすがは、英雄！！

「一回でわかるなんて、なかなか、ふざけてますね」。英雄の名は伊達じゃないつと言ったところですか。」

「ああ、だが、わかったただけでまだ対応策ないけどな。一回目ならともかく、二回目は完全に消えるから、反応が遅れる」

「普通は、反応もできないはずなんですけどね……それじゃーこっちからいきますよ。」

シュン!! また、ふたご座^{ジミニ}を発動させる。今度は側面からの奇襲。ラカンもこれに反応し、先ほどのように反撃するがまたしても空が消える。

「もらった!!」と頭上から攻撃を繰り出す所に、ラカンは拳を合わせる。

「グッ!!」何とか棒で軌道をそらし、その反動で後方に着地。しかし、ラカンの追撃が来る。

「オッラア!!」全力で振られる拳を何とかそらす。柔の技を、身につけたからこそできることであり、魔眼によって、氣の流れを見ているので先を予測することができる。それでも、ギリギリであるが

「なんだか、気持ち悪いな。まるでこちらの攻撃を読まれているようだ。」

「それは、こっちもだよ。さっき、反応できないって言ったばかりじゃんか」そう、ラカンは二度目の空の攻撃に反応したのだ。

「あれは、意識して反応したわけじゃねえー。なんとなく、感じただけだ！！俺様クラスになると、それくらいできる」

「あんたにしかできねーよ！！！！なんだよ、なんとなくって！！全国の皆さんに謝れ！！」

「んだよー。まあ、要するに、長年の勘だ。」

そう言われると反論できない。実戦での経験が無意識に出ることが有ると師匠が言っていた。ただ、実際やれるものは、少ないとも言っていた。相手は歴戦の猛者である。しかもバグキャラ！！できても不思議ではない。

攻撃手段が少ないため基本は近接戦闘を行うのだが、相手の方が近接は強い。どうするかと考えて、一つの方法を考え出した。

「（仕方ないか）行くぜ！オッサン！！北斗七星！！！！」

辺りを見えない空間が囲む。

「なんだこれ？こんな狭いところで何を・・・クツ・・・何だこれ？魔力が吸われてやがる。」

「時間がないから早めにけりをつけさせてもらっぜ！！五月雨！！」
頭、両肩、胸、腹を一瞬で突く連続わざである。

「グツ！」ラカンも何とかかわすが、魔力が吸収されているせいで動きが悪く、すべてはかわし切れなかった。吹っ飛ばされて空間の端まで飛ばされた。

だが、それを利用して、ラカンはこの空間からでようとする。しかし、出られない。

「この空間からは、簡単には出られない。術者を倒すか。無理やり壊すしかない。だが、こっちは、あんたの魔力を自分の力に変換している。術者を倒すには、かなりきついぜ。」

「へっへーなら、ここをぶっ壊すまでだー情報を敵に話すやつは、バカじゃなかったのか？」

「・・・秘技ラカン空間破り！！！」

そう言うと、結界が音を出して崩れた。だが、空はそれを待っていた。結界を破った後にできる隙と魔力の過剰使用、なおかつ、魔力を吸われたことによる、肉体強化の弱体。いくら気で練りこまれた体であっても、一瞬緩む時がある。そこを、待っていた。

「言った筈だぜ、強者もいると、オレは、臆病者と言ったが、弱いとは言っていない。行くぜ！！！」

「奥義——雪月花——」

相手の懷に飛び込み相手を上空に力チ上げる。上げた瞬間に棒の一部を縄状に変化させ相手の身動きを封じる。その後、ふたご座ジミニを發動させ、頭上へ移動。そこに、頭上から先ほど同じ所に一撃。叩き落とす。最後に虚空瞬動を使って（落下速度も使い）閃撃（棒のしなりと回転を加えた強烈な突き・・・5話参照）をまた同じところに加える。

すべての攻撃に浸透系の気が使われているため内部にもダメージ。さらに、同一箇所的一点集中攻撃による威力の倍増。これが、この世界で空が完成させた。棒術奥義の一つである。

「グッフッフッフ！！！！」血を吐きながら倒れるラカン。その様子を見て一息つく

がしかし……

「かつは！！！」横からのいきなりの攻撃に、吹っ飛ばされる。飛ばされながらも、その方向を見ると、ラカンが立っていた。

「よそ見はいけぬぞ。ぼず！！だが、ほめてやる。オレ様の気合防御をもつてしてもこらえきれなかった。一瞬だが意識がトンじまったぜ」

「ゴホッ！！！」血を吐きながら答える

「さ、さすが、バグキヤラ。あれを喰らって立つとは……ちょっと自信をなくしちまうぜ。だけど、この勝負はオレの勝ちだ！！」

「はあ？何を言ってやがる勝負はこれから……そこまで！！勝者は空じゃ！！」なんてだよ！！」

「ハァー忘れたのか筋肉ダルマ？？この試合は時間制限があつたであらう。もう20分は過ぎとる」

「過ぎてるんなら、もう少し、早く止めてくださいよ。一発もらち

「やったじゃないですか」

「うゝゝ済まぬ。ジャックがやられるとは思わなかったのだな。一瞬、思考が停止してしまった。それにしても、お主強いのだ」

「たまたまですよ。初見だからこそです。次やったらこうはいきません。」

「謙遜などせんでも良い。お主は十分強い・・」「いや、ぼゝずの言うことは本当だ。そいつが強えーのは認めるが次やったら間違いなく俺が勝つ。まあゝまだ、そいつは、奥の手を持ってそうだし、実際の所わからねーけどな」ぞ？なんじゃ、ジャックそこまでやられたくせして！！」

「いや、オッサンの言う通りだよ。確かに奥の手はあるけど、それなしじゃ、絶対に勝てない！！」

「なぜじゃ？？お主が展開したあの妙な空間があれば、いけるじゃろ」

ラカンが答える

「いや、それはなねーな。最初は魔力が吸われることに、慣れてなかったから、焦っちまったが、冷静に考えてみれば、そこまで魔力は吸われてなかった。そいつの口車に乗って焦って壊しに行ったのが失敗だった。普通にそいつを倒しに行った方がいい。まあゝ並みのやつじゃ、魔力を封じられた状態で勝つのは無理なんだろうが、オレ様クラスになればなんとかなる。」

「正解です。確かに、気を主戦として戦えて、なおかつ、オレより

も、近接が強い相手には北斗七星は使えない」

「なるほど、そうじゃったかー。でも、本気のジャック相手にここまでやれるやつは、そうはおらんじゃろ。」

「まあ、世界に10人もいねえな。ハッハハハ」

「それよりも、オレが勝ったんだから、約束は守ってくださいよ。無駄に戦闘なんてしたくありませんから」

「わーってるよ。それよりもばーず、もう一回本気でやってみねーか??奥の手も使ってよ」

「嫌だ!!話聞いてたか?オッサン!!オレは無駄なこととはしない主義なの」

その後もラカンが再戦を求めてきたが、テオドラに言いくるめられて引き下がった。

そして、城で休息したあと、アリアドネーに向かうというと、なぜか、ラカンも付いてくるとか言っている。セラスの連絡先なんてしらねーから、直接頼むらしい。大丈夫か??まあ大丈夫なんだろう英雄だし

そう思ってアリアドネーを目指すのだった。

アリアドネー到着

道中ラカンはうるさかった。やれ、再戦しろ、やれ、お前の魔法を

教えるとうざかったので、てんびん座リーブラを使って、テオドラの元に戻した。だが、しばらくすると、いつの間にか戻ってくるので、数回やっているうちにあきらめた。

そんなこんなをしながら、アリアドネーにある、魔法学校に到着した。

「それで、オッサンの知り合いには、どうやって会うんだ??」

「そんなもん、堂々と正面からに決まっているだろ」

「ハァー、やっぱ、何も考えてないのね。」

「ハッハハハ!!!」

笑いながら中に入っていく。最初は、止められたりしたんだが、相手が英雄ラカンであるとわかると、普通に通してくれた。ラカンはサインなどを求められていたが、多額の金を要求しそれをかわしていた。・・・実際に払おうとするやつもいたんだが・・・

セラスの部屋到着

「セラスいるか?」と軽い感じでノックもせずに入っていく。

「あなたは・・・ノックくらいしなさい!親しき仲にも礼儀ありよ!・・・まあいいわ。それで、今日は何の用?お金なら貸さないわよ」

「オッサン最低だな!!!皇女に続いて総長まで落とすとは・・・ち

やんと節度を守らないと泣くやつが出るから、浮気は良くないぜ！
！それに金まで借りて、ホントに英雄か？」

「ちよつとまで、セラス。オレはお前に金を借りたこと一度もない。
それに久しぶりに会ったんじゃねえか。それと、空こいつは、そん
なんじゃねえーし、テオドラも違う」

「「冗談だ（よ）」」

ラカンがまた落ち込みだした

「それで、本当の所何しに来たの？」

「いやゝこいつとの約束でさゝ勝負に勝ったらここにある、蔵書を見
せてやるって言っちゃたんで、連れてきた。だから、見せてやつ
てくれねえゝか？？」

「見せれるわけないでしょ！！それに、あなたが、負けるなんてそ
の子何者！！؟؟」と驚愕した様子でたずねてくる。

「いやゝ何言ってるんですか、じゃんけんで勝っただけでしょう。
やだなゝこれだから、頭が筋肉でできてるオッサンは……」

「何言つてやが「え、用事が出来たから帰る？そうですかゝここま
での案内ご苦労様でした。では！！」る……」そう言って、陣
を作成しラカンを転移させる（セラスにはれないように）

「あれ、今消えたわよね？いつの間に転移なんて覚えたのかしら？」
気づかれていない！！

「バグキャラですから。何でもありです！！」

「そ、そうね」なぜか納得。ラカンのでたらめ具合は、周知の事実らしい

「あのーそれで、蔵書じゃなくてもいいんで、見せても大丈夫な本とかってありますか？できれば、芸術面での」

「あーそれならあるわ。一般公開している、図書館があるから、そこに行けば見れると思うわ」

「ありがとうございます。それで「こら。空何しやる！！全力で戻る羽目になっちまったじゃねえか！！」ちっ！！」

ラカンが戻って来た。かなり早い。

「それに何が、じゃんけんだ。普通に殴り合いだろう？」いらんことを言った

「ええ！！？？じゃあ、本当に貴方に勝ったの？？」さっきよりも、驚いている

「まあー判定だが確かに勝ったなーこいつ、結構強いんだぜ。知らない魔法とかもあるし」

またまた、余計なことを言った。

「知らない魔法？！どんな？」セラスが食いついた

「良くわからん」

ガク！！と机から崩れるセラス

「オッサン、あんましゃべるなよ。マナー違反だぜ」

「おお！そうだな、わるかった。」

そこにセラスが

「ねえー空君？？で良いのかしら、貴方の魔法を見せてくれない？」

「え、嫌ですけど。オレに何のともありませんし。それと、オレの名前は108つあるので、好きに呼んでください。おすすめは、ハリー○ッターですね。なんか、魔法使いっぽいでしょ」

「ひゃく、108つもあるの？そ、それじゃ、空君と呼ばせてもらうわ。それじゃーどうしたら、見せてくれるかしら？」

ボケたのに普通にスルー。名前の数よりも名前に反応して欲しかったー

「そちらの、魔法に関する、蔵書を見せてくれれば構わないですよ。芸術面の方は無料で見られるようだし、こちらでは、魔法でやってしまうから、手法に関することに興がないんですかねー」

「そ、それでいいわ。ただ、禁書クラスのは、見せられないわ」

「わかりました。オレも禁書まで、見ようとは思いません。それじやーこちらの魔法を二つほど見せましょう。どなたか、ケガしている人か、魔法か何かによる、呪いみたいなものを受けた人はいませんか？」

「怪我人はそれなりにいると思うわ。最近盗賊がでて被害でたの。近くの町にケガしている人が療養しているはずよ。それに、そのとき、毒のような魔法を受けた人がいて、魔力がうまく出せなくなっていました。騎士団候補の子だから、残念だわ。こちらでも、調べているんだけど、うまくいかなくて」

「それじゃーその人たちを治しますんで、連れて行ってください。」

「で、できるの？・・・わかったわ。いまから行くから付いてきて」
そう言ってセラスは部屋を出ていく。ラカンが空気になっていたが、一緒に着いて行くらしい

療養所到着

「この子たちがそうよ」

ざっと10人くらいいる。

「それじゃーみずがめ座アクエリアス！！」そう言って陣を作成し発動する

すると、負傷していた子の傷が治り始めた。片腕がなかった子は再生し完治した。それを、2、3回繰り返し怪我人の治療は終わった。

「すごいわ！！腕が切れても治す技術はあるけど、それはあくまで、

切れた腕が有ったときの話。再生魔法なんて聞いたことないわ」

「あくまで、生きていたらの話です。死んだ人よみがえらせるわけではありません。あとは、その子を治せば終わりですね」

「ええ」

「では、おとめ座^{ヴァルゴ}！」陣を発動。光が対象者を包み込み状態を治していく

「終わりました。これで魔力が使えるはずですよ。」

「え・・・ホントに使える!!!」

泣きながら喜んでいる

「こちらも、治るなんて、す、すごいわ。私たちは原因さえつかめなかったのに。一瞬で。ねえーそれはどんなもでも治せるの?」

「まあ、大抵は治せるんじゃないかな」

「それじゃー永久石化も治せるの? 治して欲しい人たちがいるんだけど・・・」

そう、ネギの村の住人である。一応極秘ではあるが、アリアドネーの研究機関にも解除薬の申請があった。しかし、一向に解除薬ができず四苦八苦している。そこに、どんなものでも、治せる子がきたら、お願いするしかない。だが

「お断りします。何でオレがそんなことしなきゃいけないんですか

「？この人たちの治療だつてこちらに、利があるからただけで、それがなかったら、しませんでしたよ。」

「なぜ！！？？困っている人を救いたいと思わないの??」

「ええ。所詮は他人。さすがに目の前で、助けを求められれば、できる限り助けますが、わざわざ、助けに行くほど、善人でも、お人よしでもない。あなたは、自分に力が有るからと言って世界中全ての人を助けますか？助けないでしょう。実際この世界にも奴隷という身分があるのがその証拠です。貴方達は自分の利にならないものは、助けない！！それが現実です。だから、この考えについて、貴方にとやかく言われる筋合いはない」

セラスも反論したかったが、言い返せなかった。

「とりあえず、報酬の蔵書をみせてください。」

「わ、わかったわ・・・」

そう言つて学校に戻るのだった。帰り途中ラカンに正しいがストリートすぎると言われてしまった。

軽くショックだ。ラカンに言われるとは・・・

そうこう考えながら、戻って行つた。

第11話 詠春のお願い、いざ麻帆良へ

学校に戻ってからは、セラスに見せてもらった蔵書を読み進めていた。ほとんどは、知っているか、使えない物のため、あまり意味がなかったが、転移に関する術式だけは参考になった。

それにより、新たな術式が完成した。というよりも、術式の合成だ。

ふたご座ジヘミとてんびん座リーブラの合成術ベガサスだ。

てんびん座による対の術式をふたご座によって相手に送るというものの。そうすることで、相手の魔法を直接相手に転移させることが可能になった。

しかし、広範囲に及ぶ魔法や気では一部しか送れないのが欠点。それ以外は自分にくらってしまうため、最強クラスとの戦闘では使いづらい。ラカン相手にも試したが、陣をはるかに超える大きさの気弾を出したために、お互いにくらってしまい、引き分けとなってしまった。

さらに、ラカンが昔ガトウに習ったとか言っつて、究極技法の感卦法をおしえてくれた。オレ自体も戦力が上がるので、快く受け入れ修得を目指した。

最初は心を無にするということがわからず、苦勞したが、要は、魔力と気の配分を均一にしお互いが弾かれないように混ぜ合わせればいいので、魔眼を使い配分を均等にしてから、合わせるのではなくかき混ぜるようなイメージでやったら、割と簡単にできた。

闇魔法に比べると究極と呼べるのか疑問に思う。

そして、感卦法をもう一段階上にあげる。セラスに言わせれば……それこそ究極技法でしょう……らしい。

やったことは難しことではない。ただコントロールがかなり、きついのだ。ようするに、感卦法の2倍掛けのようなもの。

通常の感卦法を平常で行えるようにする。そこまで出力を出さずに、それが、普通であるかのようにする。その上から、感卦法を行い倍加させるのだ。……ただ、エネルギーが膨大なため、3分しか持たない。ラカンとの勝負もエネルギー切れで敗北した。ウルトラ○ンになってしまった。

それと、なぜか、アリアドネーで教鞭を振るうことになった。セラスには、あなたの考えは、わかるつもりだけど、納得はできないと言われた。……それでも、それを言う資格がないのも事実なので、叶うなら、術式に関する授業をして欲しいとのこと。

最初は断ったが、破格の給料と貴重な魔法書と芸術に関する書を読めるということで、了承した。

基本的にオレの陣はオレにしか扱えないので、魔眼を利用して、生徒の術式の無駄になっているところを指摘し、改良ということ、繰り返して行った。魔力運用もかなり上達し、飛躍的に強くなった。なかでも、最初に助けた子が一番すごい。名前をコレットと言っているが、魔法学校では、落ちこぼれと呼ばれていたらしい。

それに、魔力もうまく扱えなくなったことで、魔法使いの道はあきらめるしかなかったが、それを俺が治したことで、やる気を取り戻したらしい。

毎回、術式に関するレポートを出してきて、指摘された部分の間違いを修正し、改良。そうすることで、それほど多くなかった魔力量でかなりの魔法を扱えるようになった。中級クラスの魔法は大抵は扱える。上級魔法ももう少しで完成しそうだ。

アリアドネー騎士団候補の子達がかなりの戦力を持ってしまった。もはや、候補とか言うレベルではなくなった。ここでも、微妙に原作を壊す。MMのやつらに、何か言われないうんどうか？

それと、いくつか術式に関する、論文をかつてに発表されていて、かなりの評価を受けてしまった。ただ、目立ちたくなかったため、名前の公表をしなかった。なぜか、学会では《すべての術式を知るもの》とか《マジックマスター》とか呼ばれるようになった。実際全部は知らない。サウザンドマスターばりの法螺になってしまった・
・

そうこうしているうちに3年が経った。

「おーい、空、詠春から、手紙がきているぜ」

ラカンが部屋に入ってきた。あの模擬戦から気に入られてしまい、なぜか俺と一緒にアリアドネーに残っている。オレがあげた、認識阻害の術式を刻んだピアスをしているので、英雄がいても騒ぎにはならない。一応セラスは知っているが、そのピアスをみて、「これが、あれば、犯罪者が堂々と街を歩けるようになるわ」と言われて

しまった。o r t

「詠春さんから？なんだろう？」

読み進めてみると、そろそろ、戻ってこないかということだった。木乃香も会いがってるとのこと。

「んじゃ、オッサン、オレ日本に帰るわ！魔法世界でやりたいこともあらかた終えたし。詠春さんも戻ってこいって言うてるから。」

「へーいつ帰るんだ？」

「とりあえず、セラスさんに言って、ここでの教師をやめて、ヘラスに向かってテオドラ様に挨拶したすぐに帰る」

「そうか、また、いつか、来るんだろ？？そしたらまた勝負しようぜ！ー！」

「気が向いたらな。じゃーなオッサン達者と暮らせ！ー！」

「おめえもな」

そう言っただけでラカンと別れセラスの元に行く。セラスは帰るという言葉葉を聞くと止めにかかったが、止められても、勝手に出ていくと言った、あきらめてくれた。結果は変わらないから……

「あなたが、いなくなると、あの子たちがさびしがるわ。」

「子供じゃないんだし、大丈夫でしょう」

「いやゝ十分子供よ。あなたも」

「まあゝ大丈夫でしょう。今生のわかれとかではないんですから。」

「そ・・そうね。でも、お別れぐらい言っただけなら？」

「今、演習に出ていて、ここにいないでしょう。セラスさんから、伝えといてください。」

「わ・・わかったわ。」

「それじゃゝお元気で！！また来ます」

「ええ、空君も」

セラスの部屋を出ていき、てんびん座リーブラを発動し城に向かう。

門番の人に話して、通してもらう。ちよくちよく、ラカンと訪れていたので簡単に通してくれた。

そして、テオドラの部屋に着き、ノックをしてはいる。

「テオドラ様、お久しぶりです。今日は挨拶にきました。」

「おお！空かゝ。挨拶じゃと？」

「はい、そろそろ、旧世界に戻ろうと思ひまして。詠春さんにも言われてますし」

「そおか、寂しくなるの。まあ、会えなくなるわけでもないし、笑って見送ろう。」

「ええ、こちらでも悲しくなります。テオドラ様とオッサンの夫婦漫才が見れなくなることに・・・あ！結婚式には呼んでくださいね。必ず駆けつけます。」

「コ、コラー、そ、空、おぬしはまた、そうやってわらわをからかいおつてもう許さんぞ！！」

「ハッハハー旦那さんに見つかる前に逃げるとします。では、末永くお幸せに・・・」シュンと陣を発動して消える。テオドラが顔を真っ赤に染めて怒っていたのが、最後に見たものだった。

ゲートを使い旧世界到着

「とりあえず、飛行機にのって、日本を目指すか」

飛行機——電車——バスと乗り継いで京都にある総本山並びに自分の実家に到着。久しぶり帰って来た。約6年ぶりなのに、ちつとも、変わってない。詠春さんの所によろがあるの、門番の人に、お願いする。最初は、誰？みたいな感じだったが、こちらが、伝えらると思いだしてくれたのか、すぐに詠春さんに取り次いでくれた。

場所は知っているので、勝手に向かう、向こうもそれを了承してくれる。そして、部屋に到着。

「詠春さん、お久しぶりです。息災でしたか？」

「ええ、空君も元気そうだなによりです。大きくなりましたね」

「まあ、結構な時間が経ちましたからね、大きくならない方が問題ですよ」

「それもそうですな。」

当たり障りのない会話をしている。旅の話などして、少し時間が経ってから、詠春から切り出された

「空君。帰ってきてそうそうあれなんですが、お願いがあります。」

「内容によりますね。詠春さんの頼みですし、ある程度はききますが。」

「お願いと言うより依頼です。麻帆良に言っ、木乃香を守って欲しいのです。ここ数年で、何とかまとめましたが、一部の強硬派が何か企んでいるようなのです。」

「そりゃー仕方ないんじゃない。組織はすべて掌握などできませんし、でも。それだけなら、オレでなくてもいいんでは、神鳴流の誰かに任せればいいでしょう。木乃香だって自衛ぐらいできるとおもいますよ。」

「ええ、そうなんです。……空君も知っているとありますが、ナギの息子が日本に来るんです。それも、麻帆良に学校の先生をしに。」

「ああ、聞きましたそれ。何でもイギリスにある魔法学校を首席で卒業したとか・・・確か10歳で。優秀ですよね」

「ええ、そうであるなら、問題はないんですが、調べたところによると、魔力制御が碌にできないらしく、さらに、周りの大人たちにあまやかされて、育つたらしく。魔法の秘匿が全くできないようです。なんでも、修業先もMMが指定したとか」

「温室育ちですか。いいんじゃないですか。危なくなったら、周りが助けてくれるでしょう。なんせ、英雄の息子ですから」

「まあ、ネギ君に関してはそうなんでしょうが。問題は彼のまわりです。私たちは、大戦のせいで、多かれ、少なかれ恨みを買っています。彼はナギの息子。木乃香もそうですが、それ以上にかれの近くにいと、危険な事に巻き込まれる可能性が高いのです。お義父さんのことです、木乃香を無理やりかわらせようとするでしょう」

「ああ、そう言えば知らないでしたっけ、木乃香が魔法を知っていることを」

「はい、だから、何かにつけてかわらせてくるでしょう。」

「それなら、木乃香を戻せばいいんじゃないですか??」

「私も、そう思いましたが、一部のやつらが、何をしてくるかわからない。あちらで護衛した方が、守りやすいでしょう」

「うーん、わかりました。でも、どうやって、あっちに潜り込むんですか？」

「それは、お義父さんに言えば、どうしてもなるでしょう。そちらで働きたい子がいると言えば、大丈夫なはずです。幸い、空君は、美術家です何とかなるでしょう」

「了解しました。それじゃー今から向かおうと思います。旅支度はしてあるので」

「お願いします。それと、刹那君がすでに護衛をしているので手伝ってあげてください。」

「刹那？・・・ああ、木乃香の友達のー！」

「はい。刹那君にも木乃香が魔法を知っていることはばらしておりません。そこは、よろしくお願いします。あの子は、真面目なんですが融通がきかなくて・・・」

「めんどー！！まあーわかりました。何とかやってみます。ではー！」

そう言っで部屋を出ていく。そのまま、門番の人にも挨拶をして駅に向かい、麻帆良行きの電車に乗る。

めんどくさいことが増えたという思いと久しぶりに木乃香に会えるという思いを抱きながら麻帆良を目指すのだった。

第12話 麻帆良到着！！仕事は・・・

麻帆良到着

「ここが麻帆良か」とりあえず、学園を目指さないと。でも、こんな広いところじゃ、迷うな。さてどうするか？んんん」

麻帆良に到着したのは良いのだが、いかんせん、だだっぴろい。学校もいくつかあるので、どれを目指していいかわからず、困っていたが、迷ったら、迷ったで仕方ないとあきらめ、案内板を見て進むことにした。

10分後

「迷った！！」

案の定迷ってしまい、今いるのはどこかわからない建物の前。そしてどうしようかと、うろつろ、していると、後ろから、声を掛けられた。

「あのーどうしましたか？ここ、一応女子寮なんですけど、男の人は、ようがない限り、立ち入り禁止なんです。何か用がありますん？？」

独特の関西なまりをした子が声をかけてきた。薄い水色をした髪を肩口ぐらいいまで、伸ばした女の子だ。どうやら、寮に帰って来たところにいる俺を見て不審に思い声をかけてきたようだ。さらに後ろから、

「亜子」早く準備して、バンドの練習いくよ。何やってん……その人誰？」

3人程女性が寄って来た。一人はボーイッシュな感じの黒髪の短い女の子。隣の子が、薄い紫色の長い髪をした女の子で、最後が、髪をいっぱい結んだ元気そうな女の子だった。

「あ、みんなごめん！！それが、わからんのよ。寮の前でうろろろしてたから、声かけてみたんや」

黒髪の子が睨みつけながら言う

「ここは、女子寮です。不審者なら人を呼びますよ！！」

「クギミ、いきなり不審者はよくないよ」元気そうな子が笑いながら言う

「クギミー言うな！！」

「ああ、ちょっと悪いんだけど、ここって女子寮なのか？？悪かったな、そんなとこに男がいたら怪しんでも、仕方ない。ただ、オレは、女子寮ではなく学園長に会いに来たんだよ」

「そ、やったんですか。でも、なんで、こんなところにいてはるん？」

「いや、情けない話だけど、この学園って広いだろ。迷っちゃってさ。最初は案内板を見て歩いてたんだけど、すぐに場所が分からなくなつて、気づいたらここにいたわけ」

「ハハ、そうですね。ここは、慣れんとすぐに迷ってまづからな」

「それで、学園長はどこにいるかわかる??」

「あゝわかります。学園長は麻帆良学園女子中等部の理事長室にいます。案内しましょうか??」

「女子中等部??何でそんなところに、理事長室が有るんだ??え」と、良いのか?なんか、バンドの練習するんだろ?」

「あ、構いまへん。そのバンドの練習をするために、うちら、そこに行くんです。みんな、女子中の生徒です。それに、こっちも、不審者扱いしてもうたしー」

申し訳なさそうに言い、ウツ!と黒髪の子が反応する。

「まあゝそれについては、気にしないでいいさ。実際、ここにいたら、不審者だろうし。それと、邪魔にならないなら、よろしく頼むわ」

「わかりました。それじゃー付いてきてください。」

バンド組と中等部を目指す。――しばらく歩いていると亜子が話しかけてきた。

「あのゝ麻帆良には、何しに来られたんですか??歳も近いようですし、転校生さんですか?」

「んっ?ああ、学生ではないよ。ただ、歳は17。京都の知人の紹

介で、仕事に来たんだ。その仕事内容を学園長に聞きに行くだけ。」

「へー、若いのに仕事なんて大変ですね。学生すればいいのに」
髪の長い子が話に入ってくる。どうやら興味がわいたみたいだ。

「いや、知識は、ある程度あるから困ることはないし、学校にもあまり興味はないな。」

「なんでですか？友達が、いっぱいできて楽しいやないですか？」

「ああ、昔からいろいろ仕事で世界を廻っていてね友達は少ないんだ。それに、仕事は趣味みたいなもんだから、楽しいもんさ。」

「ど、どんな仕事をしてはるんですか？その年で世界中廻るなんて！？有名人さんですか！！？？」

焦りながら聞くなにか、勘違いしたらしい。

「別に有名人ってわけではないよ。ただのしがない美術家さ。小さい頃から親に連れられて世界を廻っていたら、親と同じ仕事になっただけさ（嘘はいつていない。実際師匠に連れられて、世界を廻ったことはあるし、親代わりでもある）。」

なぐんだと後ろの二人が話している。期待していたらしく、テンションが下がっている

「それじゃーここでは、美術展でも開くんですか？」髪の長い子が聞いてくる

「それでもいいんだけど、一応学園長に許可を貰わないといけないんだよ。ここは、学園都市だからあの人が、一番偉い。だから、何の仕事をするかまだきめてない。美術系だとは思う」

そんなこんなを話しているうちに、少し仲良くなった。歳も近いし、話し方が軽いので話しやすいらしい

「そーいえば、自己紹介してませんでしたね。私は柿崎美砂です」

「椎名桜子です。こっちが、クギミ」

「クギミー言うな!!あ、釘宮円です」

「和泉亜子です。よろしゅ」

「ああ、よろしくーオレは、ドラエオンです。22世紀からきました。よろしくー」

「「「はい、嘘!!!!」」」4人の声が一致する

「そうか、やっぱり、あの独特の声を出不ないと信じてもらえないか、仕方ない、行くぞ」

「僕ドラエオン!」

「「「に、似てる!!!」」」驚くほど似ていた。空の特技である。なぜか昔、師匠に宴会芸を仕込まされ、声真似ができるようになった。意外と使える能力である。

「そ、そやなくて、本名です。本名。勝手に国民的アイドルの名前

を使ったらあきません。」

「やあゝミ〇キーだよ」

「違う！！！」クギミーが切れた……………違う方向に

「私はドナ〇ドの方が好き」

「さすがに、あれは無理」ちよつと落ち込むクギミー

「はい、はあゝい。私はねえ……………」桜子が乗ってくる

「ちよつと待つて桜子！！このままだと、名前がわからへん。」亜子が止めにかかる

「ハアゝ実はオレは、人には名前を言えない理由が……………」あゝ、無理なら別に……………」ないんだけどねゝ「ないんかい！！！」ハハハゝそういうわけでオレの名前は八雲空よろしく。えゝと、柿崎に、和泉に、椎名に、クギミー！！！」

「クギミー言うな！！」クギミーが怒る

「まあまあ、そう、怒りなさんな。若いうちから怒るとしわが増えるでゝ」

「誰のせいだあ！！！！！！」完全に沸点突破

「落ち着きなつて円！！八雲さんもあまりからかわないであげてく
ださい。」

「いや〜つい。スマ〜ン」全然謝っていない。

「あ、八雲さん。到着しました。」

「おお！！いつの間に。いや〜楽しい時間（主にオレが）が過ぎるのは早いね〜」

「私は、楽しくない・・・」円が疲れている

「学園長室は階段を上がってすぐの所にありますんで」亜子がスル
ーして進める

「ありがとうございます。また、縁が有ったら、会おう。じゃ、練習がんばれよ！！」4人にお礼をいって学園長室に向かう

「・・・はい！またどこかで」・・・若干クギミーは不満そうだが、返事はしてくれた。

学園長室到着

コンコン

「失礼します。」

部屋に入ると頭の長いじいさんと、ダンディーなオッサンがいた。

「近衛詠春さんからの紹介できました。八雲空です。」

「おお、婿殿から話は聞いておる。なんでも、店を出したいんだと。」

「はい、京都では、顧客がきたんですが、まだ、それ以外では、認知度が低いもので、詠春さんに相談したところ、ここを紹介してもらいました。関東で最もでかい、学園都市で成功すれば、弾みがつきます。（適当なことを言う）」

「若いのに、将来の事まで、考えてえらいの。あい、わかった。お主の店の許可を出そう。必要なものが有れば言ってくれ、こちらで用意する。婿殿からよろしくとのことだ。わしも、協力しよう。」

「ありがとうございます。それじゃー窯つきで作業部屋が有って生活できる家ってありますか。お金に糸目はつけないので。」

「ちょっと待っておくれ……。あつたぞい。去年まで大学の美術部が使っていた場所が有る。窯つきに4LDKの物件が有る。駅にも近く便利な場所じゃ。それに学生が数人で住めるようにしたために、一人で住むにはちょっと高いが、手ごろな家賃となつておる。これで、どうかの???」

「んー実物を見てから決めてもいいですか。窯が使えないと仕事にもならないので。」

「了承した。よかったら、ここに連絡をくれ。鍵はこれじゃ。」そ

う言つて、鍵と連絡先を渡す。

「わかりました。」

「それと、空君。君は歳はいくつなのかの？？」

「歳ですか？17です」

「17か、学校はどうしておるんじゃ？」

「仕事しているんですよ。行ってるわけないじゃないですか」

「それもそうじゃの。どうじゃ、学校に行つてみたいと思わんか？」

「いえ、全く。必要な知識は昔習ったので、大卒ぐらいの学力はあると思いますし」

「それはすごいのお。じゃ、学生としてでなく、教師としてはどうじゃ？？若者に教えることで、今時の若者が求めているものが理解できるぞい。」

「一応オレも、まだ若いつもりですけどね。というか、どうしてそんなにオレを学校に行かせたがるんですか？？」

「若い者は、学校にいつて友達などをたくさん作ってもらいたいというのもあるが、今度新しく、新任の先生が来るんじゃ、その子の補佐をお願いできんかの？？」

「その子？？いや、大学出てたら、そもそも、俺より年上じゃない

ですか。補佐なんてオレじゃない方がいいんじゃないか……」

「うむ、実はその子は、十歳のまだ子供なんじゃ。教育実習生としてここに来る。海外で飛び級で大学を卒業した、天才児じゃ」

「十歳ですか。すごいですね。でも、なんで、その天才児がわざわざ、日本に来るんですか？しかも。教師をしに」

「いや、わしの知り合いの学校の校長から、その子に普通の学園生活を体験してもらいたいと、お願いされたんじゃ。ただ、さすがに、学生はきついで、中等部の教師として、来てもらうことにしたんじゃない。ある意味修行じゃ。」

「それで、その子の補佐を頼みたいと……まあ嫌ですけどね。めんどくさそうなので。ただ、非常勤としてなら先生をやりましよう。たしかに、今の子たちの、趣向を知っとくことは、悪いことじゃない。」

「う……んダメかのお。年の近い子がないので。」

「だから、嫌ですって！！そもそも、そこまでサポートが必要なら教師なんて、やらせるもんじゃない。その子にとっては、人生経験での試験としていいかもしれないけど、教えられる生徒が迷惑だ。俺だって非常勤で妥協してるのに。一応これでも、特別講師の免状は持っているんです。そのオレでさえ、非常勤なのに、10歳の子に、教師なんて正気の沙汰とは思えませんけど……まあ、そち

らが決めたことなので、オレには関係ないんですけど」

「あい、わかった。とりあえずは、非常勤の方はよろしく頼むぞ。それと、もうひとつお願いが有るんじゃないが？」

「お断りします」

「まだ言ってさえもないのに!!」

「めんどくさそうなので。まあ聞いただけ聞きますけど」

「副担任をやってもらえんかのお」

「非常勤の意味をしていますか？できるわけないでしょう!!」

ここで、今まで空気だった、オッサンが話しかけてくる。

「それは、僕からも、お願いしたいんだ。僕は、出張が多くてね。うちの子たちには迷惑をかけてしまっているんだ。」

「他の人をお願いすれば・・・」

「今、手の空いている教師がおらんでのお」教育業界は人不足なんじゃ」

「うっくん・・・やっぱり、お断」家賃はただでいいぞい」わかりました。やりましょう!!」

「それじゃーよろしく頼む。それと、3学期から新任の先生に担当してもらおうクラスじゃから。」

「ゲッ！！まあゝ引き受けたんで少しは手伝いますけど、その子供先生とは、あまりかわらないんで！！特にめんどくさいことが有ったらすぐにやめますんで、そこんとこお願いします。」

「ふむ、仕方ないのゝだが、本当に困ったことになったら助けてやってくれ、頼む」

「程度によりけりです。では、オレはこれで、家の方も見とかなきゃいけないんで」

「あい、わかった。それじゃー明日7時ごろにきてもらえるかのゝ。書類も渡しておきたい。」

「わかりました。」

そう言つて頭を下げ、出ていく。なんとか、ネギの面倒を見なくても済みそうだ。

そう思いながら、家に帰るのであった。

「場所どこゝゝ！！！？？？」

第13話 学園長との賭け

学園長との話を終えて、家に帰宅する途中空は、迷っていた。

学園長から渡された、地図を見る限り、森を出れば、すぐの所にあるはずなのだが、いかんせん、辺りは森。すでに夜、どうしようかと考えていると、ログハウスのようなものが見えた。どこかで見たことあるような感じだったが、気のせいだと思い、道を尋ねるため、そこを訪れることにした。

コンコン

「すいませ〜ん。ちょっとお尋ねしたんですが〜」

ドアをノックして、要件を言う。中から出てきたのは、メイド服を着た、女性だった。ここで、ここが、いったい誰の家かが、わかった………闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

気づいた時にはもう遅い。ならば、さっさと用件を済ませて、ここから、脱出することにした。

「いかなさいましたか？」

「ちょっと道を尋ねたいと、思いまして。情けないことに、迷ってしまいました。」

「いったいどこに行きたいのですか？」

「ええ」と、この森を出ると、去年まで大学部で使われていた、アトリエが有る筈なんです。そこに行きたいんですけど。」

「失礼ですが、こここの森を出たところは何もありませんよ。あるのは、学園だけです。」

「え！？学園長から教えられたんですけど・・・」

「そういわれても、山に続く道しかありませんよ。」

「でも、この地図には、ここを抜ければ・・・」おい、貴様！！」
でれるはず・・・え」と、何でしょうか、きれいな、お嬢さん」

「しらじらしい、真似はよせ。ここへ、何しに来た？？」

「え」だから、道を尋ねに来たんだよ。どうやら、意味はなかった
ようだけど。」

「この私を前にして、まだしらばつくれるとは・・・死にたいらしいな！！」

「マスター」一般人をむやみに襲うのは、まずいと思われます。先ほどから、見ていますが魔力反応がありませんし・・・」それは、
そうである、今、魔力がないように、見せる術式を刻んだペンダントをしている。一般人に見えるように。気も極限まで抑えているため、ほとんどない状態に感じるはず。

「茶々丸、覚えておけ。人には少なからず、魔力がある、全く感じられないことなんてない。気も同様だ。つまり、魔力を感じないのは、それを操るにたけているやつか、私のように封印されているようなやつだけだ。」

それを聞いた茶々丸の反応は早かった。一瞬で後ろに回り込み、手をとって捕縛しようとする。だが、そらは、その辺の雑魚とは違う。茶々丸が後ろに回り込んだ瞬間に彼女の足を払い床に倒す。ついでに、ブレスレッドの一部を使い拘束した

「茶々丸！！！」エヴァが叫ぶ。

「危ないな。いきなり人に襲いかかってはならない。そんな、マナーも知らないのか？」

「黙れ！！貴様が先に仕掛けたんだろうが！！」

「いやいや、なにもしてないから、道聞いただけでしょ！！」

「怪しいやつが来たらそういう対応をするに決まっているだろうが！！」

「じゃ〜とりあえず、敵意はないから、というより、もう、用はないから、帰ってもいい??」

「ダメに決まっているだろ！！」

「えゝめんどくさいやつだなゝ。じゃあこつしよう。君は何も見なかった。そしておれも何もしてない。完璧だろ」

「どこがだー！ー！」

「じゃゝどうしたいんだよ？？」「すぐめんどい。」

「貴様が私に倒されればいいのだ。」

「あゝわかった、わかった。あーやられた（ちょー棒読み）これでいいだろ」

「フフフ。どうやら、本気で死にたいらしいな。ここまで、私をバカにしたやつは、貴様で二人目だ！ー！」

「わーやったー。ほめられたー（棒読み）」

「このー！！・・・！？」魔法薬を媒介に魔法を発動させようとしたとき、首に圧迫感を感じる。

「やめとけ。封印されていないならともかく、今のあんたで、オレとやるには役不足だ！ー！」

「グッ！！」「マスター！！」「エヴァが動こうとした時に力を入れる、それにより、一瞬だが、エヴァの意識がとぶ。主を心配して呼びかける茶々丸。」

「わかったか？やろうと思えばいつでもやれる。だが、オレにその気はない。というより、学園長に渡された地図を見てきたら、ここに着いたんだ。文句があるなら、あの爺に言え」

「何だと！？クソ、あの爺め。」

「おそらく、オレの実力でもはかろうとしたんだろ。こんな時期に、関西それも、京都から来るなんて怪しすぎるからな。それに教師もやらされることになったし、大方、監視をしやすくするためだろ」

そう、学園長はそれらしい、理屈を並べていたが普通はそれだけで、学校に行かせるなんてありえない。最初からこちらの監視目的、あわよくば、戦力としても使おうとしていたのだろう。

「わかったか、だから、オレは、お前に用はない！！帰るぞ！！」

「待て！！貴様の言うことはホントであろう。爺には後で報復するとして、迷惑をかけた。飯ぐらい食っていけ！！」勘違いから襲ったことにたして、詫びたいらしい。

「それより、アトリエがどこにあるかわかるか？早く家に帰りたい」

「ああ、それなら、学院のそばだ。たしか、そこら辺にあったはずだ。」

「すぐ近くだったじゃねえか！！あのクソ爺！！」

「あの爺だったならこれくらいの事するだろさ。追求してもとぼけるだけだしな」

「ちつ……とりあえず、邪魔したな。それと、そっちの人は悪かったな。」

「いえ、構いません」

それを聞いて出ていく。来た道戻り、桜の木がある道を通る。たしか、ここから真つすぐいけば、アトリエに行けるはず（茶々丸談）。しばらく歩いていると、ある気配に気づく。だが、それを無視し、アトリエを目指す。なんとか、アトリエは見つかった。ストーカー（仮）は付かず離れずの距離を保ち付いてくる。どうせ、監視だろうから、気にせず、家に入る。入ってすぐに家全体をチェックすると、でるわ、でるわの監視魔法。プライバシーの侵害どころじゃない。

すぐさま、学園長に電話する

「はい、こちら、学園長室」

「あ、オレです。とりあえずめんどくさいので、担当直入に言いますが、この監視魔法壊しますよ。覗きは、犯罪って知らないんですか？それも、男を覗くなんて、気持ち悪いのもう、近づかないでください。」

「いや、そんな趣味ないから、覗くなら、女子のほうがいいわい！」

「問題発言ですね。警察に報告しておきます。期間は短いでしょうが、牢屋にでも入ってきてください。」

「待ってくれ！！監視魔法を設置したのは悪かった。こっちもちよつと警戒してな。媚殿を疑うわけではなかったんじやが、申し訳ない。魔法に関してはそちらの好きにしてくれ。・・・ただ、やはり、おぬしは、裏の事を知っておるのじゃな。エヴァともやりあったようじゃし」

「ええ、まあそこそこは。でも、最初から疑っていたんでしょう。でなきゃ、教師にするなんてありえない。」

「まあのお。・・・それで、おぬしの目的は、なんじゃ！？」口調に真剣さがこもる。

「別に隠す必要はないんで、木乃香の護衛です。」

「木乃香を知っておるのか？」

「ええ、小さい頃良く遊んだんですよ。その関係で詠春さんにお願いされましてね。」

「そおか、疑ってすまなかったの」

「いえ、こちらも、伝えていなかったなので、気にしてません。」

「……でじゃ、それなら、この学園の警備員もやってもらえないかの？ そうすれば、木乃香を守ることに繋がるし、どうじゃろうか？」

「嫌ですよ。めんどくさい。それに、木乃香一人だけなら余裕で守れますんで。」

「ほ、すごい自信じゃの。どうじゃ、わしと賭けをしてみんか？ そちらが勝ったら、言ううことを二つ程聞こう。無論、限度はあるがの。こちらが、勝ったら、警備員をしてもらう。どうじゃ？ 心配せんでも、報酬は出すぞ」

少し考えて、

「わかりました。こちらが勝った時は、ここの図書館島にある本の閲覧を許可してもらいたい。ああ、別に禁書の類はどうでもいいです。もう一つは、こちらへのそちら側の裏関係の干渉。ちなみに、こちらとは、木乃香を含みます。めんどくさいことは嫌いなので」

「うゝむ。大丈夫じゃろ。それじゃ、今から、世界樹の広場まで、来てもらえるかの？ そこで、こちらの人間一人と戦ってもらいたい。」

「わかりました。」

空は準備をして広場を目指す。しばらく歩くと広場に着いた。そこ

には、学生服を着た者や、シスターの格好をしたものなど、いろいろいた。

「ホオッホホ。空君よく来てくれたの。ここにいるのが麻帆良の魔法先生や生徒たちじゃ。これから、何かと会うことになるじやろ。よろしくしてやってくれ」

「賭けをもう忘れたんですか、その長い頭は何のためにあるんですかね？ 頭は帽子をのせるためだけじゃないんですよ。ボケたんなら、さつさと、老人ホームで介護でも受けてください。」

「貴様！！学園長に向かって失礼であろう！！」黒い顔の男が言うてくる

「そうですわ！！貴方のような礼儀知らず、この私が叩きのめしてあげますわ」

お嬢様口調のやつが続いていつてくる、なんか、うざい

「じゃーおれの相手はそこの人でいいんですか？」

「待んじや。高音君！！それと空君、相手はあっちじゃ」そういつて、昼間に合ったダンディーなオッサンを指す。

「ま、待って下さい。学園長いくらなんでも、高畑先生を出す必要はありませんわ。わたしで十分です」

「あの、エヴァンジェリンをあしらった実力者でもかの？」

「まさか！？そんなはず、ありませんわ！！この男からは、いつさい魔力を感じません。そんなわけあるはずが……」

「事実じゃ」

「あのー誰でもいいんで、早くしてくれませんか？家の片づけ終わってないんですよ」

高音がこの言葉に反応したが、学園長が黙殺した。その後、オッサンが前に出てくる。

「それじゃーよろしく頼むよ。僕は、高畑・T・タカミチ」そう言つて、ポケットに手をつ込む。

「ええ、こちらこそ。それが、構えですか？変わってますね」

お互いが距離をとって構える。空はブレスレッドをあらかじめ棒状にしてある。余計な情報は見せないようにするためだ。そして、魔眼も発動している。

学園長の合図によつて試合が始まる

「それでは、始め！！」

合図と同時に拳圧が飛んでくる。それを空は難なくかわす。それを見てタカミチは驚きを表す。周りの人たちも同様だ。

「いやゝ驚いたよ。まさか、初見でかわされるとは思わなかったよ」
若干焦りつつも、余裕そうな感じで話す

「偶然ですよ。逃げるのが得意なもんで」

その言葉を聞いて周りが騒ぎ始める。「やっぱりたいしたことない」とか「逃げるのが得意なんて情けない」とか好き勝手言っている

何人かは、黙って戦況を見つめている。おそらく、空の実力を理解したらしい。

その後も、タカミチが攻撃を繰り返すが、すべて避ける。棒すら使っていない。そこにしびれを切らし先ほどの女がわめく

「避けてばかりいないで、戦いなさいな！！そんなただの鉄棒を使ってもなにもできないでしょうが、逃げているばかりなんて、みっともないですわ！！所詮は棒術なんてただの飾りですね」

その言葉を聞いて空の空気が変わる。

「おい、そのバカ女！！なめたことをぬかしてんじゃねえぞ！！おめえごときが棒術を語るんじゃないー！！！！」

「ヒィー！！」殺気に向けられ高音がひるむ。後ろにいた女の子は、気を失いかけている。

「よそ見は良くないな」そういつて、タカミチは横から居合拳を繰り返す。

「余裕だからな、遅すぎる」バックステップでかわす。

「オッサンそろそろ、全力でやれ、もうその技は見飽きた。いくら、拳圧が見れなくても、直線状に飛ぶだけじゃ避けるのは簡単だ。それにオッサンがパンチを繰り出すのモロ見えだし。」

タカミチが驚愕する。それもそのはずである。元来居合拳とは相手に見えないほどの早さで、拳を繰り出し、相手に拳圧を飛ばす技である。それが、見えると言われてしまった。驚くのも無理はない。だが、タカミチも、頭を切り替える。

「ハハ、すごいね。それじゃ、こっちも本気で行くよ。左腕に「魔力」右腕に「気」——合成」

タカミチをデカイエネルギーが包む。そう、究極技法の一つ感卦法である。それを見て、周りがまた騒ぎだした。「これなら・・・」
「さすがは、高畑先生！！究極技法を扱えるなんて」

「それが、オッサンの全力か・・・」

「それじゃ行くよ。」

《豪殺居合拳》

巨大なエネルギー波のようなものを飛ばしてくる。空は一步も動かない。エネルギー波は空の横を通り抜ける。

「なめてるのか？オッサン」

「ハッハハ、サービスだよ。次は外さない」

「さつきから、思っていたが、オッサン何か勘違いしていないか？
オッサン自分の方が強いと思っっているだろ？攻撃をかわされはする
ものの、攻撃されないから、オレが、避けるので精いっぱいだと思
っているんだろ？」

「んゝ違うのかな？」軽い感じで言ってくる

「ハァー、オッサン良くそんなんで、英雄の一味にいたな。少なく
てもラカンは、そんな真似はしない。」

「ラカンさんを知っているのかい？」驚いた表情で聞く

「ああ、魔法世界に行った時に会った。ちょっと仲良くなったんで
な、こんなのを教わった。」

「左腕に「魔力」右腕に「気」合成」空をエネルギーが包む。だが、
タカミチよりはるかに小さい。それを見て驚いたタカミチだが自分
より小さいことに安心する。

「驚いたなゝその年で感卦法を扱えるなんて。でも、それじゃー僕
には勝てない。」

そう言いきるタカミチ。空はあきれた表情をしてため息までつく。
そして……消えた

「ウグツ！！」タカミチが背後からブツ飛ばされる。

「一つ言っておく。感卦法はエネルギーが大きければ威力が強いわ
けではない。むしろ、無駄に垂れ流している分威力が落ちる。それ

と、仮にあんたの感卦法の威力がすぐてもそれほど大したことはない。感卦法とは、要は出力を上げる、ブースト見たいなものだ。扱うやつが貧弱ならたいした脅威にならない。1を二倍にしたところでたかが知れてるだろ。昔はどうだったか知らないが、あんた、感卦法を覚えてから、基礎鍛錬をしてないだろ。おそらく、昔の方が居合拳も早かったはずだ。」

「そんなはずはない！！僕は、強くなった。ラカンさん程とは言わないけど、当時の師匠は越えたはずだ！！」

「冗談は寝てから言え。ラカンもあんたの師匠から感卦法を習ったらしいが、全く及ばなかったらしい。肉体の差がなければ、勝てたかも怪しいと言ってたぜ。あんたの感卦法は、ラカンにも遠く及ばない！！」

「そんなわけ、豪殺居合拳！！」

タカミチが撃った技を余裕でかわす

「馬鹿だろあんた。その技はモーションがでかい、普通の居合拳と併用して使うんだろうが。あくまで、それは、居合拳を見切られていない時の話だ。見切られている相手に使えば、全く意味がない。むしろ無駄にエネルギーを使うだけマイナスだな。」

タカミチがそれを聞かずにまた、技を繰り出そうとする。それを、空が防ぐ。

「隙だらけだ。閃撃」威力の乗った一撃がタカミチを襲う。モロにくらい、口からは血が出ている。

「おお、まだ、立つのか。意外にタフだね。」

「グフツ！！」血を吐くタカミチ

「まだ、だ。」のそりと立つ。フラフラだ

「へえ」。根性はすげえーな」

「その根性があれば、もっとマシだったろうに・・・慢心は身の破壊だぜ。力が有って困ることはないんだ。鍛錬を怠ったやつに勝利などない。」

「全くその通りだ。いつの間にか、驕ってしまっただけ。これじゃー師匠に合わせる顔がない」

「これから、頑張ればいいさ。そんな、あんたに技を見せてやろう。本当は隠すつもりだったんだが、見せたところで問題はない。オレも、まだ完ぺきには扱えないんだが・・・死んだらわりいー」

「そんなに、危ないのかい？」

「ああ、要は感卦法のもう一段階上。アリアドネー総長をしてそれこそ究極技法と言わしめた技だ」

「感卦法の上！？あのセラスさんが認めた！？？！いつたい・・・」

「行くぜ」

「極卦法ごくかほう（ラカン命名）」

さっきまで空を包んでいたエネルギーが膨れ上がった。タカミチのように、垂れ流しているのではなく、圧倒的なエネルギーをまとっている

「す、すごい！！」タカミチが歓喜する

「やっていることは、難しことじゃない。ただ感卦法状態からの感卦法だ。ただ、コントロールがかなり難しく、オレもまだ少ししか使えない。気を抜いたらパーンだ。自滅する。」

「技はさっきと同じだが威力が違うからな。加減はするが、期待するなよ。全力で防御しろ。でないと・・・死ぬぜ」その言葉を聞いたタカミチはありったけのエネルギーを防御に注ぐ。

「行くぜ。閃撃！！」

その言葉を聞いた瞬間タカミチの意識は途絶えた。一瞬で気絶したらしい。

「そこまで！！」今まで見入っていた学園長が終了の合図を告げる。

「賭けはオレの勝ちですね。約束は守ってくださいよ。」

「あい、わかった。こちらからは、干渉しないようにしよう。それ

と、本に関してはこれを、持っていれば、禁書以外の本は見られるはずじゃ。司書長にもそう伝えておく。」

そう言つて、カードキーのようなものを渡す。その話の途中に割り込んでくる奴がいる。

「学園長これで、この学園もより安泰ですな。あのタカミチ君をも倒してしまつたのです。彼のような強力な戦力がいれば西のやつらなど恐れずに足らず」黒い顔のオッサンがふざけたことをぬかす。

「ああ、何言つてんの？オッサン。オレがそんなめんどくさい事するわけないじゃん。それに、その学園長との約束で裏の事に関しては、不干渉だから。そつちでかつてにやってくれ」

「な、なんと。君はあの英雄ラカンに支持をしたんだろ？？なら、我々と同じ《立派な魔法使い》を指すものではないのか？我々と同じ正義の魔法使いなんだろ！！」

「オレは、そんなもんになる気はない。あんたらが、いつ正義になったのかは知らないが、オレは、そんなもんになつたつもりはない。」

「何でですの！？それだけの力がありながら、正義のために使わないなんて！！」バカ女が叫ぶ

「うるせーな。自分の力をどう使おうとそいつの自由だろう。別に悪いことしているわけじゃねえんだ」

「魔法は正義のために使うものなのです。それをあなたは・・・」

「じゃー一体おめえらは、その魔法で何をしたんだ？世界には困っている人なんて腐るほどいる。おまえらは、この学園を守って満足なんだろうが、実際あんたらがいなかったら、ここが襲われる可能性もないんじゃないか？世界樹はもとと、日本のものだし。図書館島はあんたらが勝手に作ったもんじゃねえか。むしろ、お前たちがこの危険にしているんじゃないか？」

「そんなわけないだろ。我々がいたから、麻帆良は平和なんだ！！」

「だから、あんたらがいなかったら、襲われることもないだろ！！この変な認識阻害もおまえたちの都合で張ったんだろ？完全に私利私欲のために使ってるじゃねーか。おまえらに、おれをとにかく言う資格はない。」

「それも、この一般人を守るためだ！！仕方ないことなんだ。魔法は秘匿されなきゃいけない」

「だから、あんたたちがいなくなれば済むことだろ。あんたら、正義というよりただの犯罪者集団じゃんか。人の精神に干渉するのは犯罪だぜ。惚れ薬とかそうだろ。滑稽だな！！」

「貴様！！」そう言って攻撃を仕掛けてこようとするガングロ、それに便乗してくるバカ女。むかついたので、こいつらの魔力を封印することにする。

スコーピオン
「さそり座」

これが、空の新たな陣。アリアドネーでの研究の際に作った封印術。原作でネギが使っていた自分の魔力を封印する魔法をアレンジした。実力差にもよるが相手の魔力を一時的に封印する。ラカンクラスなら10秒と持たないが、ここにいる程度のやつらなら、半永久的に封印することができる。解除キーをこちらが言わない限り封印されたままだ

「「え？魔力が感じられない！！」」攻撃しようとした、二人の声が重なる。

「あんたらの魔力はこちらで封じた。あんたらは、これでただの人まあせいぜいがんばれ。それと、学園長こちらに手出しするようなやつがいたら、毎回封じるか、それなりの対処をするんでよろしく」

軽い感じで言う

「貴様！！戻せ！！このー」「やめんか！！」「！！？」ガングロが黙る

「ガンドルフィーニ君、高音君今のは君たちの方が悪いぞ。自分の言い分が通らないからと言って攻撃するのでは犯罪者と言われても仕方ない。ただ、空君も言いすぎじゃ。正しい部分もあるが、世界樹は悪用されると何が起きるかわからん。わしらも悪用しているか

もしれんと思うじやろうが、古くからの盟約でそれはしてない。誓うぞ。だから、二人を許してやって欲しいこの通りじゃ」

頭を下げる。学園のトップに頭を下げられては、さすがの空でも断れない……わけはなく

「え！？嫌ですよ。理由はどうあれ、意見が違えば襲うような、犯罪者達を許すなんてできるわけないじゃないですか？」

「そこを何とか」再び頭を下げる学園長

「いやいや、だから無理ですって。危険人物ですよ。危ないじゃないですか？主にオレが」

「彼らは普段はそんなことはないんじや。さっきは気が立ってしまっただけなんじゃ！！」

「キレたら何してもいいわけじゃないでしょ。今時の人は怖いですからね。正義の魔法使いともなると何をしてもいいんですね。」

「そんなことないんじやがの」

「それに、ここに闇の福音だっていないじゃないですか。彼女も封印されているでしょう」

「当たり前だ。あいつは真祖の吸血鬼なんだ！！英雄ナギによってこの地に封じられている。危険な奴なんだから当然だ」ガングロが叫ぶ

「それじゃー、貴方達が封じられても問題ないですね。だって、危険人物なもの」

「わたくし達は正義の魔法使いですわ。悪の魔法使いと同じにしないで下さる」バカ女が反論する

「大した違いはないでしょう。銃器を持たずに人を殺せる時点で十分危険だ。正義だ、悪だなんてのは当人が言っているだけで、被害を受けるものからすれば、対して違いはない。あんた達は、警官の発砲ミスで関係ない人が死んでもいいというのか？正義だからしかない。逆にマフィアが慈善事業をしたら、犯罪なのか？」

「そんなわけありません。慈善事業をしたら、ほめられることですし、罪を犯したなら裁かれるべきです！！」

「だったら文句を言うな。あんたらは攻撃を仕掛けようとしたんだ。こちらとの規約まで破って。責任は負わなくてはならない。」

「うッ」

「まあ、解除の条件が一つだけある。」

「何じゃ！？」

「オレがやることに一切口をはさまないこと。さすがに、犯罪は犯さないし、問題も起こさないから心配するな。（あくまで、表では）

「

「わかったぞい。」

「また契約をやぶったら、今度こそ知らないからな。術式^{リリース}解除」

「これで解除した」

「うむ、スマンかった。」

「それじゃーオレはこれで帰るんで」

そう言って帰る空。それを高音達が見みつけるのだった。

第13話 学園長との賭け (後書き)

新たな陣ができました。また、出てくると思いますのでご了承ください

第14話 歓迎パーティーとその後

翌朝

昨日のせいで片付けが遅くなってしまったので、あまり寝れなかった。とりあえず、片付け終わったので、朝食をとって学園に向かう準備をする。

一応昨日7時に来いと言われているので、背広に着替えて学園に向かう。まだ登校時間ではないので、朝練の生徒を見かける程度である。

学園に着いて学園長室に向かう。ノックして部屋に入ると、学園長とタカミチがいた。

「おはようございます。契約の書類をもらいに来ました。」

「ホッホ〜できとるよ。これが契約書じゃ」

「拝見させていただきます。」そう言っつて契約書に目を通す。昨日あれだけ言ったので、さすがに、変なことはしてこないかな〜と思いつつ、しつかりとみる。2、3度みて不備がない事を確認し契約書にサインする

「不備はないようです。それでオレはいつから勤務すればいいんですか?？」

「今日からお願いできるかの？授業自体は今日はないんじやが、副担任として、ホームルームをしてもらえんか？自己紹介も兼ねて」
ちよつと嫌だったが、どの道、やらなきゃいけないので了承した。

「わかりました。では、失礼します。高畑先生クラスまでの案内をお願いします。」

「空君、ごめんね。これから、僕は、出張なんだよ。だから、案内は彼女にお願いしてくれ」

そう言つてタカミチが後ろを指す。そこには、女性が立っていた。

「源しずなです。よろしくね。八雲先生。」

「はい、こちらこそよろしく申し上げます。源先生。」そう言つてクラスに向かうのだった。

2 - A 視点

「ビックニュース！！なんと、新任の先生がこのクラスの副担任になるんだって！！」パイナップルヘアのパパラッチがクラスに入つて来た。

「ホントー！？朝倉。デマじゃないんでしょね。まさか！？高畑先生がいなくなっちゃう！？」鈴をつけた元気そうなツインテールが叫ぶ。

「お静かになさい。アスナさん。これだから、おじコンは・・・」

金髪お嬢様がなだめに入るが

「う、うるさいわねえ、このシヨタコン！あんななんか、そこら辺で、ガキンちよと遊んでればいいわ！！私にとっては一大事なのよ！！ああ、高畑先生！！」

「な、な、なんですって！！アスナさん、今日という今日はもう許しませんわ。今日こそ貴方に引導を渡してあげますわ！！」

ビシッと指をさして言う。そうすると、二人は取っ組み合いを始めた。周りは煽って賭けごとまで始まる始末。新任の先生の事など忘れている。しかし、小さな双子と見習いシスターだけは、歓迎のトランプを仕掛け始めた。定番の黒板消しから危険なものまで。ここまでやるのがある意味すごい。

精神大人組は傍観に徹している。いつもと同じような教室の風景だった。

空視点

しずな先生と会話しながら、教室まで向かう今日は一時間目がホームルームらしく自己紹介に充てるらしい。他に連絡することがないかを確認していたら、クラスに到着した。なんか、めちゃくちゃ騒がしい。

「源先生帰っていいですか？？なんか、すごくめんどくさそうなんですけど・・・・」

「ダメですよ。このクラスの子は、みんな元気な子たちですから、それに、みんないい子ですよ。ただ、元気が有りすぎるだけなんです」笑顔でそんなことを言う

「良い子たちなんですか？あれで？」ドアの上の方を指す。黒板消しがセットされていた。

「ハハハー、ちょーと、いたずらが好きな子が多いんです。子供ですから。」

「ハァーわかりました。子供ですもんね（オレと大して変わらないが）。」そう言っただけで空が決意する。そっちがその気ならこっちにも考えが有る。黒板消しを見ながら決心した。

「オッし、いくぞ」意を決して教室に入る。・・・・・・後ろのドアから

「よーし、みんな、席につけー出席を始めるぞー！！」

後ろから入ったことでトラップは意味をなさない。みんなが、後ろに視線を注ぐ中、明らかに3人ほど、悔しがっている。空はそれを気にせず教卓に向かう。罨があることをしりながら、さっきまで、悔しがっていた、3人の顔が、にやついている。

そして、空はトラップに技と引つかかった。最初に襲ってくるのは、おもちゃの弓矢軽く避ける。そして、頭上から来る水入りのタライ、これも、うまくキャッチして床に置く。どうやら濡れたくはなかつ

たらしい。そして最後に襲ってくるのが、鉛筆の群れ。ここで、空はわざと当たったように見せる。倒れるふりをする空。素早く胸からあるものを取り出す。

その状況を見て騒ぐクラスの連中

「やったー。トラップ大成功！先生気をつけないと危ないよー」
そう言って近づいてくる3人だが、空の様子がおかしい事に気づく

「先生どうしたの！？大丈夫」触覚の生えたメガネっ娘が聞いてくる。だが、空は、返事をしない

「美空ちゃん、ちょっとやばいんじゃない！？最後のえんぴつ結構速かったし。」焦った感じでアスナが言う

「アスナは心配性だな。大丈夫だって鉛筆だよ。心配ない……
・よー!?」

軽い感じで言う美空だが、空の姿を見て顔を青くする。なぜなら、空の頭から赤い液体が流れ出ていたからである。

「ど、ど、ど、どうしよう！!?おねちゃん。血が出てるよ。」

「わ、わ、私に聞かれてもわからないよーきゅ、救急車呼ばなきゃ！ー!!」

泣きそうになりながら、あわてだす二人!!

さっきまで、お気楽ムードだったクラスの連中も、事の大きさに気

づきあわただしくなった。そこで、ようやく、しずな先生が入ってきて場をしずめる。

「しずな先生！！新任の先生が大変なことに！！どうしよう！？」
もう半分ないている美空。自分たちのしでかしたことに気づきかなり焦っている。

だが、しずな先生はかるく返す

「あらゝ大変ゝ。どうしましょう八雲先生」微笑みながら被害を受けた張本人に聞く。

「「「「え！！！！？」「「「「クラスの声が一致した。

「あれゝもうネタばれですか！！？まゝこんなところでしょう。よつと！！」軽い感じで起き上がる。

「「「「ええええええええええ！！！！！！？？？？？「「「「
「またしてもクラスがシンクロする

「ど、ど、どういうことですか！？先生は無事なんですか！？でも、さつき、頭から血が・・・」委員長が混乱しながらも聞く

「ああゝこれ唯の絵の具。リアルに見えてすごかっただろう」
「どうだと言わんばかりの顔で答える。それに対するクラスの反応は

「「「「「紛らわしい！！！！」「「「「「本日三度目のシンクロ。

しばらくして、クラスが落ち着き空が自己紹介を始める

「今日から非常勤としてこの先生をやることになった。八雲空だ。よろしく」

クラスからの反応がない・・・グッスン（泣）

そんな中先ほどと同じようにあやかが代表して聞く

「そ、それで、先生はなぜ先程のような事を!?」

「そんなの決まっているだろ。おもしろいからだ!!主にオレが!!」自信満々に答える

「「「おもしろくない!!」」」3人が叫ぶ

「私たちなんて、心臓が止まるくらいびっくりしたんだよ!!!」

「それで、懲りただろ」打って変わって真剣な顔をする空

「「「うん」」」

「実際真面目な話、物には限度はがあると教えたかったんだ。黒板消しぐらいなら笑って許せるが、それ以外は危険なものばかり、当たりどころによっては大事になるぞ!反省しろ!!」

「「「う、ごめんなさい!!」」」3人はしつかりと頭をさげる。どうやら、ちゃんと理解したらしい。周りの子達も空の指導に感心している。

「まあ、オレが楽しむつてのが8割くらい占めてるけどな」

「……台無しだよ……!」……「……」またしても、シンクロ。
みんな仲がいい事は良いことだ。うん。

それからしずな先生が説明しいつもの調子を取り戻す、2 - A

そして、自己紹介の後の質問タイムに突入した。そこで、麻帆良のパパラッチが

「はあ、い。ここからは、麻帆良学園報道部の私にまかせて……! 先生質問いいですか!？」

「答えられる範囲なら」

「名前は!？」

「さっき言っただろ……! 八雲空だ」

「年齢は!？」

「17だ」

「おお……! それじゃー担当教科と趣味は!？」

「教科は美術。趣味というより、仕事だな。陶芸とか絵が好きだ。あと、オレの年に疑問を持っているやつがいるだろうが、特別講師の免状はもっているし、非常勤だから問題ない。」

「それじゃー最後の質問、このクラスで好みの女性はいますか!？」

「うーん、強いて挙げるなら、木乃香と柿崎、椎名、和泉にクギミー!！」

「クギミー言うな!！」

「おお!その返しを待っていた。」

「それで、どうして、その5人を!？」

「木乃香は幼馴染。4人はここに来た時に世話になった。」

「な〜んだ。」触覚の生えたメガネっ娘は何かを期待したようだが、特に面白い感じがないので、つまらなそうだ。

「木乃香とは、どんな関係!？まさか、許婚とか!？」

「違う、違う。そんなんじゃない。木乃香の内で仕事の取引をしていてな。そこで、仲良くなったんだ。まあ妹みたいなもんだ。」

妹と言われ、若干木乃香が落ち込んだようだ。

そうこうしている内にチャイムがなり、ホームルームが終わった。

「授業終了だな。それじゃー続きはまた今度。2時間目の準備しておけよ〜じゃ〜な。」

そう言ってクラスを出て職員室に向かう空。クラスの子も言われた

通り次の時間の授業の準備をするのだった。

1時間目の授業が終わって、とりあえず、授業で使うだろう、美術室を見学をし、授業の準備などをして一日を過ごした。今はすべてが、終わり、職員室にいる。

「八雲先生どうでしたか？2-Aは？」壮年の男性が話しかけてくる。

「あ、新田先生。ええ、元気なクラスですね。疲れました。」

「ハハハ、そうですね、あそこは、とりわけ元気です。元気すぎるのが問題でもありますか・・・」

「わかっていますよ。源先生も言っていました。それと、良い子達だとも。」

「そうですね、悪い子達ではないんです。ちょっとお遊びが過ぎるのが瑕なんです。」

そこに、しずな先生が入ってくる。

「でも、八雲先生は、今日、しっかりと、限度というの教えなさったじゃないですか。あの子たちも反省していたようですし。すごいと思いますよ」

「ほー、あの2-Aをきちんと指導とは立派ですな。お若いのにしっかりなさっておられる。」

「いえいえ、たまたまです。どちらかと言うと過激にやり過ぎってしまったものです。まだまだ、未熟者ですよ。だから、新田先生や源先生を見習って頑張りたいと思います。」

「そんな、謙遜しなくても大丈夫ですよ。その後、生徒たちとうち解けてたじゃないですか。」

「そんなに、ほめないでくださいよ。調子に乗ってしまうじゃないですか。」

「ま、生徒とうち解けるのは良いことです。ただし、あまり仲良くしすぎても駄目ですからね。教師として、我々は、導いていかなくてはなりませんから。」

「はい、わかりました。何かわからない事がありましたら、新田先生や源先生に聞くことにします。迷惑をかけると思いますが、なにとぞ、お願いします。」

そんな風に、職員室でいろんな先生と話していると、木乃香が呼びに来た。なんでも、用事があるらしい。先生方に断りをいれて、木乃香に着いて行くことにした。

「そゝ君、久しぶりやね。」

「ああゝ6年ぶりくらいか？大きくなっただなゝ見違えたぞ。」

「ややわゝそんな、おじさんみたいなこと言っていると、ふけるでゝ」

うれしそうにしながらも、冗談ぽく言う。

木乃香と、最近の話をしながら教室に着いた。

「んじゃ、そー君入ってや〜」そう言われたので素直に入る。朝にあれだけ言っただけなので、さすがに、罨を仕掛けるような事は、しないだろう。そう思いながら、入ると、

「……ようこそ、八雲先生ーッ

！……」

どうやら、歓迎してくれるらしい。内心かなり嬉しいものの顔に出さないようにする。恥ずかしいので

「おおー！サンキュー。まさか、歓迎パーティーを開いてくれるとは思わなかったよ。」

「いえ、八雲先生。麻帆良の生徒として、先生を歓迎するのは、当然ですわー！」

「え〜と、確か、雪広だったよなー。委員長の。言ってることはすごく、うれしいんだけど、あれを見るとな〜」

あやか、後方を指す。空そっちのけで、騒ぎ出している2-A。そんな、クラスを見て、あやかが注意しようとするが、意味がない

「ハハーこちらは、基本的にお祭り騒ぎが好きなんですー。何かしら口実をつけて騒ぐんですよー」

「おお、誰かと思ったら和泉じゃないかーなかなか、意外と、早い再会になったな。」

「そうですね。八雲さんが先生になってるなんて、思わへんかったもん。なんで、教師なん??」

「学園長のせい」

「あゝあ、納得です。」どうやら、学園長は正しく理解されているようだった。

「そゝら先生!! 楽しんでる!??」元気よく、椎名が聞いてくる後ろに、くぎみーと柿崎もいる。

「楽しむ前に、お前達が騒ぎだしちゃったからなゝ今からだよ。椎名」

「桜子で良いよ。みんなそう呼ぶし」

「あ、私も亜子でええです。」

「私も、美砂でいいよ」

「私も円で良いです。」

「わかったよ。桜子に、亜子に美砂にくぎみー」

「くぎみー言うな!!」

「ワッハハハ。冗談だ。よろしく、円。」

「それにしても、空先生仕事は？——先生以外にもやるの？？」
美砂が聞いてくる。

「ああ、この近くにアトリエが有るんだ。そこで、小物とか、絵なんかを出そうと思ってる。先生の方も非常勤だし、副担任といつても、高畑先生がいない時だけだしな。」

「へへ、やっぱり、うまいの？」

「まゝ仕事にできるくらいは」

「木乃香と幼馴染なんだよね。もしかして、木乃香の部屋に飾つてある絵って先生が書いたの??」

「絵？」

「そう。小さい頃の木乃香が描いてあるやつ。すごくうまいんだよ！！木乃香に聞いたら、幼馴染にもらったって言ってたし。」

「ああ、あれか。木乃香のやつ、まだ持ってたんだな。」

「そりゃゝもつとるえゝ。そー君に貰った大事な絵やからな。」木乃香がいつの間にか背後にいた。気配を感じさせないとは、やりおる！！

「びつくりするから、急にでてくるな。」

「すまん、すまん」笑ってごまかす木乃香。

「やっぱり、先生が描いたんだね。うまいね」美砂が感心したように言う。他の3人も同じようだ。

「あれは、あの頃の中では一番の出来だからな。大切にしてもらっているようだし、何よりだよ。」

「先生、うち、先生の作品とか見てみたいんですけど、ええですか！？」亜子が聞いてくる

「まだ、作ってないから、そのうちな。一応銀細工も得意だから、アクセサリーの類も置くからな。若者にもバッチリだ。」

「そー君おじさんみたいやで」木乃香がにこやかに言うてくる。亜子達もアクセサリーと聞いて話し始めている。女の子だ

「絶対行きますー!!」

「せんせーいサービスしてね」

「どんな感じのがあるの」

「うーん、興味あるかも」上から亜子、桜子、美砂、円の順

「生徒だからな。それに、中学生相手にそんな高価なものつくらねえーよ。まあーできてからのお楽しみだ。ある程度なれたら、オーダーメイドで作るからよろしく!!」

そんなことを話しながら、パーティーは過ぎて行った。結構時間が立ったので開きと言うことになり、解散する

「遅いから、みんな気をつけて帰れよ。」

「先生ー私達みんな、女子寮ですよ、すぐそこなんだから、何かあ

るわけないじゃないですか」軽い感じで答える2 - A

「まあ一応な。それじゃー授業でな。」

「さよなら!!」

クラスの連中と別れて、自宅に帰ろうとする。桜通りを抜けて帰ろうとすると、ある気配に気づき足を止める。どうやら、二人いるらしい。

「ストーカーされるほど、イケメンではないと思うんだけど、出てこいよ。いるんだろ、桜咲に龍宮。」

そう言うときの後ろから、二人が現れる。

「いつから、気づいていたんだい？」

「今さっき。で、要件は何？」

「私はないよ。用が有るのはこっち。」そう言って刹那を指す。刹那も前に出てくる。……殺気を出しながら

「貴様!!ここに、何しに来た!? 狙いはお嬢様か!？」そう言う
と刀を抜く。

「ハアゝ何言ってるの。というより、それ完全な銃刀法違反だから。」

おまえ、日本の法律に真っ向からケンカ売ってるな。その年で、ストーリーと、辻斬りなんて、なかなか、壮絶な人生を送っている。つらいことが有ったら、オレじゃなく警察に行け。まだ、若いんだし、やり直しの機会は……あつたらいいな。」

「ふざけたことをツ！！正直に吐かねば、この場で叩き切る。」

「わぁおーまさかの殺人予告か、龍宮もそっち系な人なの！？殺人鬼がこんなところにいるなんて、ここは、怖いところだね。どうしよう、ここは、警察に通報した方がいいのか、それとも、正義の魔法使い（笑）に言った方がいいのか。それも、序に答えてくれ！！」軽い感じで言う

「私は違うよ。仕事がないやなにもしない。それに、貴方に勝てるとは思わない。あと、解答としてはノーコメントで」冷静にたつみくが言う

それに対して

「相手が誰だろうと、お嬢様の危険になるなら、排除するまで。斬岩剣！！」見当違いなことを言って突っ込んでくる刹那。

「だから、殺人鬼の相手をする気はないって！！つつか龍宮見てないで止めろ！！」

「それは依頼かい？」

「ああー面どくせいやつらだな！！それと、おまえも、さつきから、剣を振り回すな！！あぶねーだろうが！！」

軽くたつみ〜と話しながら刹那の攻撃を避ける。

「たつみ〜ヘルプ」

「聞こえないな〜」

「なんか、奢るから」

「餡蜜で手を打とう。」

「わかった。それでいいから、早くしろ!」

「わかった、わかった。刹那! その人は敵じゃないぞ!」

いったん攻撃と止め退く

「何を言う龍宮! 関西から来ているのだぞ!」

「落ちて着け刹那! その人は味方だ。学園長が言うには木乃香の護衛らしい」

「つつか、詠春さんから、お前に連絡言ってないのか!」

「貴様! 長の名前を! やはり、西の者か!」

「たつみ〜こいつめんどくさい」

「たつみ〜はやめてくれないか先生。それと、刹那、なんなら、その長に確認をとればいいだろう。」

そう言われて、携帯をとりだす刹那。まだ、武器を持ったままだ。警戒は解いてないらしい。

「それは、ホントですか！？長！！・・・は、はい、わかりました。」なんか不満そうだが確認はとれたらしい。つつか詠春ちゃんと連絡しとけよ！！！！

「長との確認がとれた。だが、私は貴様を信用していない。それに、お嬢様の護衛なら、私一人で十分だ！！貴様は何もなくていい！！むしろ、妙な事をすれば即切る」

「たつみこいつ、どうしてこんなにもめんどくさいやつなの！？それに昨日の試合見てないの！？」

「だから・・・まあいい。刹那は真面目なんだが融通がきかなくてね。それに木乃香が絡むと余計に。後、昨日は木乃香の護衛に廻っていたから、試合は見てないんだよ。だから、許してやってくれ」

「ハア。わかった。・・・それと、桜咲！あんま、うぬぼれるなよ。お前程度のやつなら、木乃香を攫うなんて、容易だろう。ここが、麻帆良じゃなかったら、すでに攫われているな。」真剣な顔で言う

「なんだと！！！！」

「護衛対象から離れる護衛ってどんなやつだ。馬鹿なのか！？それとも自分に自信があるのか！？実力があるなら、それでもいいが、おまえは・・・・・・」

そう言つと瞬動で消え刹那も後ろをとり首に手を当てる

「グッ」刹那は手を当てられてようやく気付いた。

「さすがに、速いね。私もちゃんと見ていなかったら、気付けなかったよ」たつみくが感心して言う。

「まあ、こんなもんだ。だから、あんまり、驕るなよ。お前は、木乃香のそばで護衛でもしてろ!!」

「知つたようなことを!!お前に何がわかる!!私だって、できるなら……」

「あゝ別にどうでもいいよ。お前の身の上の話なんて。要は守れない護衛は必要ないということだ。ひどいようなら、詠春さんに報告するんでよろしく、じゃ!!」

「ま、待て!!」刹那の制止を聞かずに立ち去る空だった。

第14話 歓迎パーティーとその後（後書き）

刹那とは、微妙な関係で行くつもりです。今後によっては変わるかもしれません。

次回の更新は遅れるかもしれませんが。ご了承ください

第15話 休日の過ごし方

歓迎パーティーをされてから、半月ほど経った。

本業の方も順調に、進んでいる。学園都市という事なので、陶器の類は少なめにし、銀細工を重点的に売ることにした。ただ、注文が有った時だけ、マグカップやお皿などを作る事になっている。

学校の方は、週に2日の授業なのでそれほど忙しくはないが、突発的な、タカミチの出張のせいで、頻繁に2・Aに行く羽目になった。ムカついたので、タカミチの煙草を薬煙草にしたのは懐かしい。あれで、タカミチも健康になるだろう。

それと、裏でも販売している。原作を見た時から、これなら楽して儲けられると確信したもの。そう、転移符である。

たつみも言っていたが長距離用の転移符は80万〜100万と高額である。それに、オレ特性で売っているので、効力の通常のものよりずっといい。最近は頻繁に売れるのでオレの懐事情はかなり、暖かい。正義の魔法使い（笑）には、劣化したものを、高く売っている（それでも、通常のものよりは良いのだが）。完全な金ヅルである。教師の給料ってそんなに高いのだろうか？

そんな感じで半月を過ごし、久しぶりの休暇を満喫しようとしている……のだが、

「なんで、お前達がいるのかな？！？ああ、桜子勝手に部屋を漁らない！！美砂！お前もだ！！くぎみーみんなのお母さんなんだから、ちゃんと、面倒みなきやだめでしょ！！もうーお母さんはそんな子に育てた覚えはありませんよ！！！」

「誰が、お母さんか！！それと、くぎみー言うなし。それに、あなたを、母親に持った覚えもなければ、育てられた覚えもないわ！！！」

「まゝ大変！これが、反抗期かしら！？やっぱり、お父さんがいないからこんなことに・・・ここから、きつと、荒れていくんだわ・・・どうしましょう！！？」

「まだ、続けるの！！？」

「いや、もういいや。あんま面白くないし。ああ、亜子。何で今日、ここにいろのか説明！！！」

いきなり、話をふられて、亜子があせるが、なんとか、落ち着き説明を始めた。

「前に先生が言うてましたやろ。“音楽も割と、得意だ”ってそれで、うちの、バンド練習を見てもらいたくて、ここに来たんです。」

「顧問はどうした！？　ああ、そっちはわかった。それで、木乃香はなぜ！？」

「久しぶりにそー君と遊ば思ってた、来てしもった。」あはーと笑っている木乃香。昔から変わらんない

「えーっと、皆さま方は、オレが、久しぶりの休日ということを、わかっていらしゃるんでしょうか？？今日は日がな一日のほほんとして過ごしたいというこの気持ちを、理解してはくれないのでしょうか？？」

「えーいいじゃん、暇でしょう。かわいい、生徒を手伝うと思って・・・ね？」美砂が言ってくる

「・・・ね？じゃねーし。久しぶりの休日なんだぞ！！休んでないんだぞ！！だから、休ませろ！！！」

「だから、休憩ついでに、私たちの練習を見てくれば、いいんだって！！」桜子がぬかす。全く話を聞いてくれない。

「なー亜子。オレの言葉は通じないのだろうか？まさか、会話のキヤッチボールさえしてくれないなんて！！？変化球ばかりで全く取れないんですけど。そこんどこ、どうなんでしょう！？」

「ハアハハ」笑ってごまかす亜子。だが、その表情が物語っている。私も、練習を見て欲しいと

「オレの見方はくぎみーお前しかいない。オレに安らかな休日をして最後の希望にすぎる。」

「もう！！だから・・・いいわ。あきらめた。その代わり、私たちの練習みてよ、せんせ」

まさか、くぎみーと呼ぶのと、休日が同価値だと！？んん

「というより、何で木乃香には言わないの！？」「美砂が疑問に思った事を聞いてくる。」

「いやゝ木乃香は癒し系だし、一緒にいても疲れんじゃん。昔からそうだったし。」

「もゝ照れるわゝ」手を振りおばさんのような対応をする木乃香。おばさんくさいぞ

「むむ。それじゃーまるで、私達といると疲れるみたいじゃない！こんな可愛い子を侍らせて、いったい何が不満なのさー？」

「基本桜子と美砂、お前に不満が有るといふより疲れるおもに、精神的な意味で。その疲れを、くぎみーで解消するオレの身になってみる……楽しいじゃないか！……！」

「私がたのしくなーい！！！」くぎみー絶叫！！

「見ろ、このくぎみー叫び。ムンクの叫びにも劣らない。よし、良いものも見れたし、特別に練習を見てやろう！！感謝しろよ……くぎみーに」

「「ありがとっ、くぎみー」「桜子と美砂が、お礼を言う。」

「納得いかない。というよりくぎみーは固定なの……！」

「木乃香もそれでいいか！？こいつらの練習見ようぜ！音楽鑑賞を兼ねて。つまんなかったら、文句言ってやれ！！」

「うちも、それでええよ。それに、そんなことせーへんって。」

「O、Kだな。それじゃー亜子いつも、どこでやっているんだ？」

「ええーと、軽音部の部室か、近くの広場とかです」

「それじゃー部室に行こう。ここからなら、そっちの方が近い。」

アトリエの戸締りをして、部室を目指すぐみーと愉快的仲間達。和気あいあいな感じで歩いていると、部室に着いた。

まずは、一体どれくらいの演奏ができるのか、わからないので、聞かせてもらうことにした。つーかこの部室広すぎじゃねえー、クラブハウスのステージ並じゃん。さすが、麻帆良

木乃香はオレの隣に座り、楽しみに待っている。まじかで、バンドを聞いたことがないらしい。そんな感じで、そわそわしている木乃香を見るとなんか、和む。

「それじゃーいつくよ」美砂がボーカルらしい。

ベースの亜子。ギターの円。ドラムの桜子

????????????????????

曲自体は有名曲のカバーと作曲があり、作曲の方は中途半端な感じだった。カバー曲の方もアレンジを加えているせいか、なんとも言い難い出来だった。

ただ、メンバーの個々の能力は悪くない。でも、それが、まとまっていけないのだ。

「あゝ結論から言うと100点満点で40点くらい!?お前さん達の実力を考えての数値だけど。」

「40!?そんなに低い!?結構やれたと思ったんだけど・・・」
美砂がちよつと、落ち込む。

「まゝ一般的評価でもそんなもんだと思うぜ!?木乃香、お前聞いててどうだった!?」

「うゝん、素人やから詳しい事はわからんけど、なんやーバラバラな感じがするわー」なかなかピンポイント

「オレも、そう思う。個々のレベルは高いと思うぜ!でも、うまいかどうかと聞かれたら・・・」

「40点ってことですか」円が答える。

「ああ」

「それじゃーどこを直したらええんですか！？やっぱり、うちがア
カンのやろつか！？」亜子がネガティブになる。自信が持てないら
しい。

「いや」この中では比較的亜子が一番まともだ。ただ、ベースの良
さが出し切れていない。確かに主線を奏でるのはギターだが、亜子
のベースは、曲を支えるというより、曲に消されている。技術自体
は高いんだから、もう少し主張してもいいんじゃないか？ただ、他
の3人みたいに主張しすぎても困るが・・・」

亜子は最初は落ち込んでいたが、話し始めてから、きちんと、こち
らの話を聞いている。どうやら、向上心はあるらしい。

「次に美砂と円。お前らは先走りすぎだ！！美砂は歌うことに意識
が行き過ぎてギターまで気が回らず先行するし、円はそんな、美砂
に煽られて焦って曲の間を短く切りすぎ。お前ら二人の元の弾き方
が違うから、全く合っていない。それなら、円にギターを任せて、
美砂は歌に専念した方がいい」

二人はそれを聞いて反省する。自覚はあったらしい。二人で話し合
いをして今後のことを決めているようだ。

「最後に桜子。お前が一番ひどい。女子の中ではパワフルだしドラ
ム捌きもいい。元気が有ってそれ単独なら良いかもしれないが。曲
に合わせる。全部同じ感じでやってるぞ！！カバーの方はいいが、
自作曲の方はかなりダメになっている。どちらの曲もドラムが、大
事なんだ。お前がひっぱて行かなきゃいけないのに好き勝手叩いち
やだめだろ。」

いつも元気な桜子もそれを聞いて少し暗くなっている。

「まーいっぱい批評はしたが、良いところは、ところどころにある。何より楽しそうにやっているのが一番だ。それをみれば、こっちも楽しくなってくる。後は4人で合わせることだな。性格が違うんだ、まずは、意思統一から始めた方がいいぞ。普通は、そこから行くと思うんだが、なぜか、飛ばしているみたいだからな。どういう風にしたいのかを話し合った方がいい」

「『『『あ、ありがとうございます』『』『』」

「先生つてもつと適当な感じだと思っていましたが、意外としっかりしているんですね。」「円が感心した風に言ってくる。」

「何おーくぎみーのくせに生意気な。基本オレは芸術関係には妥協しない。生み出す側が妥協すれば、その程度しかできない。お前らだってチアやる時に全力で応援したり、踊ったりするだろう。見せる側が妥協したら、見せられる側もおもしろくない」

「確かにそうだね」チアやってるときはどんなことにも全力で応援するもんね」桜子が元気を取り戻した。

「そうだね、それじゃーまずは話し合おう。主にカラオケでー！空先生もちろん奢ってくれるよねー」
美砂がいつもの調子で言ってくる。

「ふざけんなよ！！おかしいでしょ！？この流れでカラオケは！！
亜子何とか言ってやって！！」

「え、うち！？うゝん空先生の歌も聞いてみたいし、うちもええ
と思います。」

「あ、亜子が裏切った！？ええい、癒し系代表木乃香ここをなんと
か……」

「カラオケかゝ楽しそうやね。そー君、一緒に歌おうな。」

「なんと！？木乃香までもが……。かくなる上はくぎみー期待
は薄いが……」

「期待されていないから無理です。そういうわけで諦めて行きまし
よう。もち、先生の奢りで！！」

「ぬかったー！！」

そんな感じでカラオケに直行した。いろいろ、あきらめて、大熱唱
した。5人とも、なんか、すごい驚いてた。まー声真似を使っただか
ら驚くだろうけど。一人コーラスとか、普通にやっただ。大丈夫？
？だろ。その後、当然ながら奢らされた。財布自体は余裕なのだが、
なんか、無性に腹が立つので、今度符を売る時は、倍くらいで売り
つけてやる！！……タカミチに

それで、ちょうど夕食の時間と言うことになり、今、アトリエ（自宅）にみんなで向かっている。木乃香がオレの料理を久しぶりに食べたいというので了承したらなんか、他も付いてくることになった。

ただ、材料がない事に気づき、途中、スーパーによる事にしたが、めんどくさい事になった。

「やめてください！！」木乃香と話ながら歩いていて気付かぬうちに、後ろの連中と、離れてしまったらしい。

そこを、狙ってなのか、ナンパ君達が亜子達に言い寄っている。

「話さないよ。さつきから嫌だつて言ってるでしょ。これから、夕食を食べに行くっていつてるじゃない！！」円が怒鳴る。なかなか、遅しい。今日から姉御と呼ぶ事にしよう。

「だから俺達と一緒に食べれば良いじゃん、楽しいぜ」へらへらした感じでナンパAが言う

「そうだぜ、もちろん奢るからさー。その後遊びにでも行こうぜ。ヒッヒヒ」気持ち悪い笑い方をするナンパB。円達が逃げられないように回り込むC、D、E。

「そー君、助けにいかんでええの??」

「いや、もう少しすればあいつらも、あきらめるだろ。」

「それはない思っんやけど・・・」

とりあえずめんどいので傍観するがそれを許してくれなかった。

「お生憎さま、私たちはあの人と予定が有るの！！だから、どっか行つて！！」と美砂が巻き込む

「あゝん！？」そう言われてオレの方を見るAとE。ハア

「なんだガキじゃね？か。おいガキ。オレらはこれから、彼女達と用があるから、とつと帰んな！！でないと、痛い目みるぜ！！」なんか、指を鳴らしながら近づいてくる。チンピラか？・・・チンピラだな

「痛い目見るのは嫌なんで帰りたいんですが・・・」その言葉に笑みを浮かべるナンパスと顔が青くなっている4人。見捨てられると思つたらしい。

「一応その子達の先生なので、そういうわけにも、行かないんですよ。なので、お引き取り願えますか？」やさしい感じで言う。

「はあゝお前が先公を！？ギャーハハハ。冗談よせよ！！ふざけてねえで！！とつとと失せろ！！」

そう言つて殴りかかつてくる。亜子なんかは、怖くて目をつぶっている

「ハアゝ冗談なら良いんでけどな！！とりあえず、うぜゝからしやべんな！！（相手に聞こえるくらいの小さな声で言う）」「ドフツとナンパAが倒れる。周りの死角に入った時に一撃を入れる

「ミつちゃん!!」だれ??

「あゝなんか、急に腹が痛くなったらしいですよ。食中毒ですか、気をつけた方がいいですよ。早く病院にいかないと……」

「ミつちゃんはしょうがねー、とりあえず、あいつボコつてから、病院に運ぶぞ。」

「「おう!!」」

「これはーピンチだー(棒読み)早く逃げないと……(棒読み)」

「逃がすか!!」一気に襲いかかるBとE本当に勝てると思っているらしい。

「オラ!!クタバレ!!」

「ああーあぶない(棒読み)うわ!グフ!!」なんとか、避け、避けた時に偶然パンチが当たったように見せる。倒れ伏すB

「へっへ、運のいい奴め!!だがこれでどうだ!!いくぞ!おめらその掛け声とともに残り全員で来る。」

「あれーこんなの避けられないよーとりあえず、これで、えい!」(すべて棒読み)「近くに有った店の旗の棒を投げる。それが、3人に当たりドミノ倒しのように倒れる。」

「これは、チャンスだ!やー」一発で全員を気絶させる。

なぜ、空がこんなめんどくさい事をしたかと言うと、学園長との約

束のせいである。表では問題は起こさないと言っているのに、問題を起こしたら絶対にめんどくさい事を押しつけられる。

だから、弱いふりを装いなんとか、勝っちゃいました的な事を周りにアピールして相手に絡まれて仕方なかったんです！的な言い訳を作ったのだ。ここで、圧倒してしまうと、血の気の多い麻帆良なら、厄介事になる。主にバトルジャンキーに毎日追われる。

弱い感じを出しとけば、あいつらもお礼まいりみたいのには来ないだろう。プライドが邪魔して・・・だといいな

そんな感じで、周りにアピールしていると、絡まれていた。4人組が、戻って来た。

「先生、助けてくれてありがとう！！なんか、頼りない感じだったけど」桜子が言う。作戦通りだまされている。

「いやゝ生徒を助けるなんてあたりまえじゃないかゝハツハハ」評価UPを狙う。

「でも、最初は、助けに行こうとせんかったえー」まさかの木乃香の暴露。しかも、笑顔

「し、しょうがないんとちゃう！？相手5人もいたし、それに、先生ケンカ強そうじゃあらへんもん！！」亜子が庇ってくれる。さすが、亜子！！でも最後のはいらない。

「そうそう、おれ、インドア派だから、荒事は得意じゃないんだよ。でも、大事な生徒のために頑張ったわけさ。」これで大丈夫！！・・・

・・・だが

「でも、そー君、めっちゃ強いじゃんかー小学生のころで、道場の師範圧倒してたし」

「バ、馬鹿木乃香！！それは言っちゃダメだろ！！」

「ど、ということですか！？助けられるのに傍観してたんですか！？」円が怒鳴りながら言う。

「そんなわけないじゃん、生徒にやさしいを売りにしているオレが、そんな事するはずないじゃん・・・」

「そー君、嘘はあかんえー、めんどくさそうな顔してたでー」おお、木乃香、おれは、あなたに恨まれるような事をしたのでしょうか、それとも、それは、天然さんなのでしょうか？

「ハアー何でバラしちゃうかなー木乃香オレの事が嫌いか！？」

「好きやえー」

なんて軽いトークをしていると円が事情を聞いてきた。他の3人も同様だ

「まあー簡単に言う問題を起こしたくなかったからだ。だから、できるだけ、傍観して、本当にまずくなったら、助けようと思った」

「なんで、最初から、助けられなかったんですか？生徒を助けるためなら、大丈夫でしょ！？」美砂が聞いてくる

「詳しくは言えないが、問題を起こすとひじょくにめんどくさいことになる。だから、お前たちには悪いが、できる事なら穏便に済ませたかった。すまねーな、怖がらしちまって。」

「ええですけど、先生にも事情があるみたいだし」亜子が許してくれて、他の3人もわかってくれた。

あの後買い物をすませ、アトリエに帰って料理を振る舞った。亜子と木乃香、くぎみーには好評だったが、他のやつには微妙と言われた（泣）

他のやつとは、木乃香の同室のアスナ、亜子と同室のまき絵に桜子と美砂。アスナは、料理ができないので木乃香が呼び、まき絵は亜子がひとりで食事をさせるのはかわいそうということで、呼びだした。

その後、みんなから、どんな感じのアクセサリーが欲しいかと世論調査を少し話した後、寮まで送った。結局休日を堪能した、そらだった。

第16話　やはり、貴方はネギなんですネ……

最近季節が変わってもう三学期

ついにやつが来る。

数々の厄介事を背負ってやってくる疫病神。とりあえず、方針としては関わらない、関わらせないで行こう。

そんな決意を胸に木乃香達と駅に向かうのだった。

「な、木乃香帰っていいか!？」

「ダメや。おじいちゃんに言われてるやろ、新任の先生を迎えに行ってくれって。」

「でもさーオレ非常勤なんだけど、そこんとこ、どうよ、神楽坂!」

「え!そんなこと言われても……そしたら、私達生徒だし。」

「だよなー。それじゃーほっというて学校行くか!」

「だから、ダメやよ。怒られても知らんで」ニコニコ笑いながら言う木乃香。一応事情は話してある。問題ごとの塊が来ると

だから、関わらないようにしないとすぐ、めんどくさいことが起こるとも言つてある。原作時の木乃香なら、爺の陰謀のせいで関わることになったが、今の木乃香は厄介事を自ら背負うような事をしてないので、大丈夫だろう。

「それに、アスナは高畑先生に頼まれたんやから、しつかりせんと
な!!」

「そうだった！！ここで、いいところを、みせて……」

そんな感じで話していると、やたらデカイ杖を持っていたいかにもな感じの少年が俺達と並走していた。ああ、やっぱり、あなたですか。

「あ——あなた、失恋の相が出てますよ」

「え」……三人の声が重なる。

いち早く反応したアスナ

「な・し・し・し・つ・つて」

「なんだとこんガキヤ」

「うわああ!？」

[illegible]

「!!」

「い、いえ、僕占いとかする方なんですけど、かなり、ドギツイ失恋の相が……」

「この……!!」アスナがアイアンクローで持ち上げる。いいぞ、もつとやれ!!そのまま潰しちゃえ!!

「まあまあ相手は子供やろー? 気にしたらアカンえー。ほつといて行こうや。なんか、変な杖持っているし、きっと子供だから占い師みたいのに懂れてんねん」

「まあーそういうことだ。神楽坂。子供の言うことにいちいち反応していたらキリないぞ。だから、気にすんな!!」

「私はガキが嫌いなもの!!」アスナの怒りはおさまらないらしい。

「ほら、行くぞ。」アスナを引きとめる

「じゃーね僕!! もう迷ったらアカンよー。初等部は前の駅やから急いだほうがいいえ」

「もう、二度と来るんじゃないわよ!!」そう言って立ち去ろうとする

「いや、いいんだよ、アスナ君。———久しぶりだね、ネギ君!」

「あ、久しぶり、タカミチーッ!!」

「（高畑先生）!?!?!?!。し、知り合い……!?!」

「麻帆良学園にようこそ。いいところでしょう?ネギ先生」

「え・・せ、先生?」アスナが言葉を失う

ぺこつと頭を下げながら

「この度、この学校で英語教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです」

「ええ——っ!?!?!」アスナ絶叫

「大丈夫だよ、アスナ君。彼は頭がいいから安心したまえ」

「え、でも……」

「それに、今日から、僕に代わって君達A組の担任になってくれるんだよ」

「そ、そんなあ……無理です!!その子いきなり私に失礼な言葉を「いや、でも本当なんですよ。」本当言うなー!!」アスナがネギをシエイクする。

「わたしはガキが大嫌いななのよ。それにあんたみたいな失礼な……」

「（なんだよ、この人親切で教えたあげたのに・・・っん）」

アスナの髪がネギの鼻をかすめる。

「ハ、ハ、はくちんっ！！！」バアッ！！くしゃみと同時にアスナの服が脱げる。木乃香は近くにいたがすぐに障壁を展開して被害を防ぐ。

オレはとりあえず、タカミチと後ろを向く。・・・哀れアスナ
（黙禱）

学園長室

「学園長先生！！一体どーゆーことですか！？」アスナが聞く

「まあまあ、アスナちゃんや」

学園長はアスナの問答をスルーし勝手に話を始める。

「なるほど、修行のために日本で学校の先生を・・・そりゃまた、大変な課題をもちろつたのー」

修行とか普通に言ってるし、絶対隠す気ないだろう。木乃香の方も苦い顔をしている。

「は、はい、よろしく願いします。」

「まずは、教育実習からじゃ。期間は3月までじゃ!!」そもそも、おかしいだろ!!なんで教育実習もしてないやつに担任とかやらせるわけー!!」

「ところでネギ君には、彼女がおるのか?どーじゃな?うちの木乃香なんぞ「死ね爺(ハンマーが爺の頭に突き刺さる)」「ふあー!!」木乃香がハンマーで殴ろうとしたところをオレが代わりにやった。

「全く何をふざけたことを、ぬかしているんですか?一体いつから木乃香は貴方のものになったんですか?」

「スマンのー」懲りた様子を見せていない。次にやったら、呪ってやろう。

「ち、ちょっと待ってくださいてば!!大体何で、子供が担任なんですか!?おかしいじゃないですか!?」まともな事を言うアスナだが、爺は無視する

「ネギ君。この修行はおそらく、大変じゃぞ。ダメなら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないが、その覚悟はあるか?」

「へー初耳ですね、教育実習に失敗したら、教師になる資格が二度と与えられなくなるなんて。実習なんて失敗ばかりでしょうに・・・」と割り込んでみるが無視される

「は、はいっ、やります。やらせてください!!」

「……うむ、わかった！では、今日から早速やつてもらおうかの指導教員を紹介するぞ。しずな君！「はい」」

「彼女が源しずな先生じゃ。わからない事が有ったら、彼女に聞きなさい。後、後ろにいるのが八雲空先生じゃ。2-Aの副担任をしてもらつておる。頼りにするとええ」

「オレも新米だから、源先生に聞いた方がいいよ。オレよりもいろんな事を知ってる（関わってくんな！！めんどくさいから）」

「それと、もう一つ。このか、アスナちゃんしばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの」

「「え」「」

「まだ住むとこがないんじゃない。よろしく頼めんかの」この爺おれがここで契約の事を言えない事をいい事にふざけたことをぬかしやがった。だが、木乃香も馬鹿じゃない！！

「ややわー。おじいちゃん。そんなの無理に決まってるやないか。犬、猫を飼うのと違うンやで。まだ中学生に子供の世話なんてできるわけないやん。生活だつて大変やねんで、それに、子供と言えど先生やし、男の子なんやから。」ナイス木乃香！！

「そこをなんとか、頼めんか」食い下がらない爺

「だから、無理やつて！！」そこにタカミチが入ってくる

「アスナ君僕からも頼めなかい？ネギ君は知り合いの人の子だから、心配なんだよ。」卑怯な手を使うタカミチ

「任せてください！！私が立派に育てて見せます！！」条件反射のように答えるアスナ

「ふおおおお、それじゃ、よろしく頼むのこのかに、アスナちゃん」木乃香が反論する前に決定しようとする。だが、そんなことは、させない！！

「とうとう、ボケてしまったようですね。学園長。」

「ふおお！？」

「まさか、教師と生徒を同じ部屋に住ますなんてありえない。それも、木乃香が断っているにもかかわらず。」

「じゃが、アスナちゃんは了承してくれたぞ」

「ハァ」。小さい頃から見てきてわかってないんですか！？神楽坂の家事能力のなさを」

「うっ」アスナが反応する。

「最近知ったんですけどねーオレも。でも、オレが知っている事を長年見てきた貴方達が知らないわけない。神楽坂が了承したところで、ほとんどの家事は木乃香がやっている。だから、決定権も木乃香にある。木乃香が了承してない以上それを認めるわけにはいかない」

「クッ」爺が悔しそうな顔をする。だが、ひらめいたと言わんばかりに

「これも、花嫁修行の一環じゃと思えば……」

「馬鹿なんですか！？それなら、わざわざ、木乃香達にやらせなくてもいいでしょう。独身の先生だっていることでしょうし」

「しかし、住む所がないんじゃ。子供を野宿させるわけにもいきまい」どうじゃ！！と言わんばかりの顔

「それも、そうですね。ただ、それは、貴方の怠慢が原因です。オレが、ここで働くときには、新任の先生の話は聞いていました。あれから、準備する期間はいくらでも、あつたはずですよ。貴方の責任を孫に押し付けられないでください。あなたが、面倒を見れば良いですよっ？」

「わしも、忙しから無理なんじゃ。とりあえず、今日だけでも泊めてもらえんかの？」

「ハアゝ木乃香どうする？」

「一日だけならええよ。」

「だそうです。」

「それじゃーよろしく頼むぞ。しずな先生、八雲先生、ネギ君をクラスに、案内してあげてくれ。」とりあえずなんとか、なつたと安

心している爺この後うやむやにする気だろう。だが・・・

「オレは学園長と話が有るので先に行ってもらえますか？源先生、ネギ先生」

「わかりました。」そう言って出て行く二人。それに付いて行く、木乃香とアスナ。

4人が出て行ったあと、残った3人。こちらから話を切り出す。

「爺、契約内容は覚えているのか、木乃香を含めたこちら側への干渉不可。もう忘れたのか！？」

「そんなことないぞい。ただ、ネギ君はまだ子供じゃからの。大目にみてくれ。」

「馬鹿だろ。あいつが誰の子かわかって言ってるのか。あいつと一緒にいたら、木乃香に魔法がバレるだろうが！！」

「ふおおおお、大丈夫じゃよ。ネギ君は魔法学校を首席で卒業した天才じゃ。そうそうにバレたりせんよ」

「あいつ、朝っぱらから、くしゃみで武装解除していたぞ。魔力もコントロールできてないし、常時障壁を展開してるし。あいつ、魔法を隠す気ないだろ！！そんなやつ、大丈夫なわけないだろ！！」

「たまたまじゃ。障壁も解除しただけじゃろ」気にするなと言わんばかり

「そうか、そう言う事か。なら、そっちがその気ならこっちにも考

えが有る」

「な、何をする気じゃー!!」

「オレが、詠春さんに言われたのは、木乃香の護衛と魔法バレを防ぐこと。なら、その。障害になりそうなものは排除するしかないだろう。幸いあの餓鬼は裏の人間。問題ない」

「ネギ君をどうするつもりじゃー!!」真剣な顔をして言ってくる爺

「それなりの対処をするまでさ。魔力の永久封印とか」

「あの子は英雄の子じゃぞ。そんな事をすれば本国が黙っていない。」

「だから、どうした!? そっちが先に契約違反をしたんだろぅが! !てめえの見立てではごまかせると思っただんだろぅが、手段を選ばなくなったら、こっちの方が有利なんだぜ。そこを吐きちがえるな言つとくが全力を出せば麻帆良程度ならどうとでもなる(結構ハツタリ。体力がもたない)。おまえら、全員の魔力を封印するか?」

「関東と関西の中に亀裂を生むつもりか! ?」

「さっきから言っただろぅ。そっちが先にしてるんだって!!何被害者ズラしてんだよ。こっちの要件は一つ、契約は守れ!!今日中にあの餓鬼の住居を見つけられなかったら…わかってるよな。俺だって人間だ。偶にどうでも良くなることだってあるんだぜ!!」殺気を全開で出しながら言う

「わ、わかった。タカミチ君お願いできるか?」

「ええ。僕がいないときは、他の先生に任せましょう」

「初めからそうしてくれれば良いんですよ。もう、冗談やらせないでくださいよ。あやうく、将来有望な子の未来が断たれるところだったじゃないですか」口調がもどる

「あと、ペナルティーです。そちらが約束を破ったんですから、文句は言わないでください。あの子供先生が問題を起こしたら魔力封じますんでよろしく!!」

「なんじゃと!!」

「優秀なんですよ。大丈夫じゃないですか？」

「こっちで言っただけだから、そこをなんとか、してくれんかの？」

「ハア……おめえらは信用できねえんだよ!!別に永久的にやるわけじゃねーよ。反省が見えたらといてやる。まあ、そちらの言うとおりなら、そんなことは起きないでしょう。よろしくおねがいしますよ。では!」

そう言っただけで部屋をでる、爺がなにか言っているようだが、無視する。とりあえず、クラスに行くか

クラス到着

なんか、クラスが騒がしいので後ろのドアから入る。窓際に置いてあるイスに腰掛けザジに話を聞く。一応このクラスの中ではあやかと同じようにしゃべれる数少ない存在。

「ザジ」これはどういうわけ」ま」予想はつくんだけど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「へー春日と双子は黒板消しだけのトラップにただけなのかー。前に脅したのが聞いたみたいだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いや」確かにやりすぎたけど、良い薬になっただろ」

「・・・・・・・・」

「それよりもザジはいいのか、子供先生 で 遊ばなくて。」

「・・・・・・・・」

「そーか。サーカスやってる方が楽しそうだもんな。また、見に行くから見せてくれ。」

「・・・・・・・・」

そんな感じでザジとの話を終えた。で、クラスを静めにかかる・・・しずな先生が。

あれから、授業を再開しようとしたが、黒板に書けないということになり、あやかが助ける。その後、アスナの消しゴム攻撃により、あやかと、アスナが取っ組み合い。止めに入ろうとするが、すでに遅し、ネギが暴発して、見事にアスナが脱いだ。哀れアスナ

その後授業が終わり、オレは、職員室に戻った。だが、ネギはいない。勝手にどこかに、消えたらしい。確かに今日の授業は終わったからいいけど、明日の予定とかカリキュラムとかどうする気だろうか！？怒られるのはあいつなのでほっておいた。

が、その事が新田先生にバレ、ネギを搜索して来い！とのこと。断ろうとしたら、副担任と言う事で、仕事を回すらしい。絶対嫌だ。

見つけ出して一発殴ってやろうと思い、ネギを搜索。その途中で本を抱えてフラフラ歩いている、のどかを見つけた。とりあえず、あぶないので、声をかける。

「宮崎、そんなに持って歩いたら危ないぞ！！」

「へー？」声をかけられた事に動揺して倒れそうになったが、何とか支えて倒れはしなかった。

「悪かったな、急に声をかけて、お前が男性が苦手だって知っていたんだけど。危なそうだな」

「い、いえ。あ、ありがとうございます。」お礼を言うのどか。なぜか、オレは、そこまで、苦手ではないらしい。前にその事を聞いたら、お兄さんみたいだからと言われた。

「宮崎、綾瀬とか早乙女は、あいつらなら、お前一人にこんな事さ

せないだろう。どうしたんだ？」

「それがー、ね、ネギ先生の歓迎会の準備で委員会に来れないらしく、だから……」

「それなら、だれかに、頼むとか、二回に分けるとかしろよ。危ないだろ。」

「す、すみません。」落ち込むのどか。

「ああ、落ち込むな。別に怒っているわけじゃないんだ。他人に頼ることも覚えようなんてこと」

「は、はい」

「んま、おれが、手伝いましょう。おれが、こっち持つから、お前が、そっち」そう言っただのどかに渡す。最初はのどかも断ろうとしたんだが、黙殺した。

「下、階段あるから気をつけろ！」

「は、はい。」今度は視界が見えているようで危なげなく階段を下りる。そこに、とぼとぼと、歩いてくるネギを発見。そこで気付く。

「（あゝフラグイベントか）」のどかとネギのフラグを見事にへし折る。まゝ別にいいかな

とりあえず、ネギを見つけたので、先ほどの怒りを本にのせ投げつける。

「ブッフ！！」見事ネギの顔面にストライク！！

のどかがあわてたようだが、それも流す。そこに、ネギが

「な、何するんですか！？痛いじゃないですか！？」と怒鳴ってくる

「何するんですかじゃねえ！。お前が、仕事サボったのが悪いんだろ！！歳の事はオレも人の事言えないから、言う気はねえが、社会人なら仕事をしろ！！授業終わったら、はい、終了！じゃないんだぞ。他にも提出しなきゃいけないプリントや、授業計画とか、立てなきゃいけないんだ！！子供だからって甘えるな。仕事しないならとっと帰れ！お前がさぼると、オレに仕事が回ってくるだろ！！」

のどかも子供に何するんだ的な目でみていたが、話を聞いて空の言う事に感心した。が、最後のセリフで台無しだった。

「えええ！？そうなんですか！？てつきり、授業が終わったら、終わりなのかと・・・」

「そんな事を知らないなら、教師なんてするな！他の人に迷惑だ。やるからには、どんな仕事が学んで来い！！それが最低限の義務だ。わかったら、さっさと、新田先生の所に、行つて来い！！」

「わ、わかりました。」走っていく。ネギが何か言いたそうにしてしたが、睨んだらにげた。

「せ、先生って意外とまともなんですな」のどかが、さらりと、ひどい事を言う

「おまえの、オレに対する認識はよくわかった。」

「え、え、あのー。」焦りつつも、どんどん先に行くのどか。ため息をついてその後を追う。

あれから、しばらくたって、ネギの歓迎会が予定通り開かれるようになった。あれから、ネギは新田先生にかなり、怒られたらしく、元気がない。それだけじゃない、気がするんだが・・・そんな、ネギを元気づけようとクラスが盛り上がっている。一部を除いて。

オレも御呼ばれしている。とりあえず、オレの時とは違うやる気があったところを、あやかに聞くと目をそらされた。ちくしょー！！

のどかを助けたことで、ネギの魔法バレがなかった。・・・なんてことはなく、すっかりとばれていた。木乃香曰く「アスナと一緒にネギ君を迎えに行こうとしたんよ、それで、アスナがネギ君に用事が有るらしくて、一人で言っけしもうたんよ。あれは、最初の黒板消しの疑いを確かめに行ったんやと思う。それで、心配になっけ、こっそり、後をつけたら、何が有ったか知らんけど、ネギ君が杖を構えて、記憶を消そうとしてたんや。・・・実際消えたのはパンツやけど・・・」

らしい。やはり、彼は、厄介事を起こさないと気が済まないらしい。実際今もアスナとタカミチの間を往復しているし。不自然にデコに手を当て質問してるし。

まああれは、タカミチが許可してるようだし、オレに実害が有るわけじゃないからスルーすることにした。

そんな感じで、遠目にネギを観察していると、のどかが来た。どうやら、さっきのお礼らしい。

「さ、さっきは、手伝ってくれてあ、ありがとうございました。」

「気にするな。大したことじゃない。」

「それでも、これ、お礼です」図書券が渡される。返すのもあれなので、貰っておく事にする。

「あゝ、わかった。ありがとう。」

「で、では」そう言って綾瀬と早乙女の元に戻っていく。こちらを、早乙女がにやにやしてみているがスルー。

そこに、バンド組が来る。

「にやはー、先生は本屋ちゃんと何を話していたのかにゃー？」ムフフ、と笑いながら来る桜子。

「実は……相談されたんだ」ちょっと重い感じでいう

桜子も自分の思ったのと違う雰囲気戸惑う。

「な、なんて!？」

「くぎみー最近太ったんじゃないかって」

「う、嘘!？あの本屋ちゃんが!!?」

「ああ・・・嘘だけだね」ガクつと桜子がこける

「ただ、昼間、本を運ぶのを手伝ったお礼を言われたただけ。くぎみーの件なんて一切ない。」

「嘘をつく意味あったのかにゃー?」

「ないよ。面白く、しようと思ったけど特に考え付かなかったから、困った時のくぎみーを出してみた。」

「円怒るよ」

「バレなきゃ問題ない」親指を立てて桜子に言う

「そうだね、バレなきゃ問題ないですね・・・バレなきゃね・・・それで、バレタ時はどうするんですか!？せんせ」

なんとなく、聞いた事のあるハスキーな声。

「ま、円さん。一体どこらへんから、聞いていたのでしょうか。」

「困った時のくぎみーの部分」

「そ、そうなんですよ。困った事が有ったら円に頼ると良いよって桜子に教えていたんだよ。でも、こんな事、本人に言うのも恥ずかしいからバレなきゃっていたんだよ。ああ、恥ずかしい。なー桜子」

桜子はしゃべれないように口をふさいでいる。ただ、何かを伝えたいのか、首を横に振っている。

「本当はくぎみーの部分から前からなんだけど、ごめんね、言うのが遅れて・・・」

ダラダラ・・・汗が垂れてくる

「えーと、それは、最初から聞いていらしゃった、ということですか？」

「そういうことです」

桜子を見ると言うおうとしんだよ的な顔をするが遅い、遅いよ桜子！！

「ごめんなさい！！」潔く謝ることにした。

「それで、どこら辺が、太ったのかな、かな！？」「くぎみーが怖い

「冗談ですよ、円さんが太るなんてあるわけないじゃないですか。

チアでも動いてるんですし」

「そ、そう。わかってくれれば良いんですよ。さいきんちよーと太っているなんて思っていないんですけど、先生が勘違いしているようなので」実は真実だったらしいー見た目では全然わからないのだが・・

そう言ってくぎみーが去る。何とかしのげたー

「先生、女の子に体型の冗談は禁句ですよ。言ったらアカン」亜子が話しかけてくる

「ああ、今、理解した。もう、絶対言わん!!」

「それで、どうした？何か用事が有るんだろ？」

「えーと・・・今度の日曜暇ですか？」

「まー仕事もないし、暇だな。」

「映画観に行きませんか？」

「なぜに？オレ？くぎみー達と行けば良いだろ」

「友達からチケット貰ったんだすけど、なぜか、カップル専用のやつなんです。男女一緒じゃないと、使えないやつなんですよ。そ、その映画、前から、ずっと見てみたかったんです。」

「それでオレか。まあ、確かに、女子中に男子の知り合いなんてあんま、いないだろうし。・・・別にいいよ。何かするわけでもないし。」

「ありがとうございます。それじゃーこれチケットです。時間は、また連絡します。アドレス教えてもらってもいいですか？？」

「はいよ。」携帯を取り出しメアドとついでに番号も交換する。

「それじゃー明日の授業で。」

「ああ、また明日。」

この後、ネギの歓迎会もお開きになり、解散と言う流れになった。
アスナとあやかが騒いでいたが気にせずに帰る事にした。

第17話 地獄を見せてやる

ネギの歓迎会が終わった次の日、今日は会議が有るため早めに学校に来ている。ネギにもちゃんと連絡したはずなのだが、まだ来ていない。学園長との約束で昨日、ネギは木乃香達の部屋に泊まった。ただ、学園にきて初日で魔法バレを起こし、あまつさえ、公衆で堂々と魔力の暴発を繰り返す、ネギを見て、木乃香がうちに泊まりに来た。

教師と生徒の関係だが、結構まわりは知っている。2学期中にも何度か、泊りに来る事もあったし、幼馴染ということ、さらに、ここが、麻帆良という事もあって、何も言われない。

木乃香はアスナが心配なので、朝には帰るらしい。ただ、アスナが魔法にかかわっていく場合は、特に何もする気はないようだ。

で、今は職員会議が始まるうとしているのだが、

「八雲先生、ネギ先生はまだ来られないんですか？」

「ああ、新田先生。……。そのようですね。昨日ちゃんと、連絡しておいたんですが……」

「私も昨日言いましたよ。途中黙りこんで聞いてなさそうでしたが……八雲先生それでは、代わりに、お願いできますか？」

「ハア、わかりました。技術教員と通常の教員は会議が別なんですけどね。どちらにもでますよ。」

「すまんね、ネギ先生が来たら、しつかりと、言っておきますんで」

「いや、新田先生が悪いわけではないんで、気にしないでください。あと、文句を言うなら学園長にもついでにお願いします。これ以上自分の仕事を増やされるのは嫌なので。」

「わかりました。おそらく、はぐらかされるでしょうが、言っておきます。それじゃー八雲先生、今日もよろしくお願いします。」

「はい、新田先生。」

職員会議に出る。技術教師の方は、各教科で、必要なものを業者にまとめて発注するので、近日中に発注用紙を、提出する事と来期に必要なものの計画書を提出するという事の2点だけで終わった。

通常の方は3学期に入ったので授業内容の確認と、期末テストに関する事だった。テスト範囲を各学年で決めなるべく早くに出して、勉強を促すようにしてほしいらしい。特に2 - A

そんな感じで会議が終わり、各先生が朝のホームルームの準備を始めようとした時、無駄に長い杖を持った少年が入って来た。魔法先生の方は気にしていないのだが、一般教員からの視線が痛い。まさか、着任二日目で会議をサボると思わなかったんだろう。

そこに、オレの説教が始まる。しかし、ネギにも言い分があるらしく、言い訳をしようとする。

「今日は、アスナさんのバイトを手伝っていたんです。それで、遅れちゃって……」

なかなか、ふざけた事をぬかす

あきれて、言葉がでない。。ネギは叱られないことで、自分は良い事をしたんだからいいんだ。みたいな顔をする。だが

「それじゃー、ネギ先生は、生徒が何かしら用事があったら、仕事をサボるんですね？」

「え？」

「だってそうでしょう。神楽坂が望んだのかどうかは知らないが、貴方は自分の仕事があるのに。一生徒の方を、優先した。そのせいで、他の人に迷惑がかかるというのに」

オレがそういうと??みたいな感じでみてる。

「例えば、あなたが、会議に出ない事で2・Aに連絡事項が伝わらなかったら、どうするんですか?聞いてませんでしたじゃあの子達がかわいそうですよ。神楽坂が苦学生なのはオレも知っています。だけど、それを理由に仕事をサボる理由にはならない。ましてや、貴方は、子供。とても仕事を手伝えるとは思わない。この場で嘘をつく事は社会人としては最低です。それ以前に遅刻の原因を生徒のせいにするなんて……教師ですか？」

「ぼ、僕はウソなんて付いていません。ちゃんと、アスナを手伝いました。」

「では、どうやって！？確か神楽坂は新聞配達のバイトのはずです。あいつは、中学生だから、バイクはのれない。という事は。走るなり、自転車なりでやることになるでしょう。あなたは、子供です。どうやってついに行くんですか！？よしんば、付いていけたとして、道もわからないのにどうやって、手伝えるんですか？神楽坂が指示しながらなら、かなり効率が悪い。邪魔になっただけだ。そこで、ネギ先生貴方は、どうやって手伝ったんですか？」

「それは、もちろん、杖で・・・あ！」杖で飛んでやりました。とは言えないことに途中で気付くネギ。やっぱり、秘匿する気ないだろ

「杖がどうしましたか？それが、何か、関係が有るんですか」

「ええっと。なんでもありません。」

「もう、言い訳はよろしいですか？今後はこういう事ないようにしてください。子供だからと言って何でも許されるわけではないんですよ。それと、神楽坂には謝りなさい。貴方の言う事が本当なら邪魔しただけでしょうし、嘘なら彼女をダシに使うとう言う卑怯な行為をしたことにたいして、どちらにしても、彼女は被害しか受けていない。」

「は、はい。」落ち込むネギ。それでも、迷惑をかけた事に関する謝罪は一切ない。悪いと思っっているのだろうか

「いいですか、貴方が仕事サボるとそのツケがオレに来ます。自分の仕事は自分でしてください。そしたら、準備をしてホームルームに行ってください。」

ネギは名簿を持ってトボトボとクラスに向かう

「最後のはよろしくないですなー」新田先生が苦笑しながら言う

「いやゝ副担任だからと言ってなんでもかんでも、押しつけられたら嫌ですからね。それで、学園長の方はどうでしたか？」

「やっぱり、はぐらかされた。子供なんだから、大目に見てくれたとき。」

「だったら、子供にやらせるなと言ってやりたいですねゝ」

「言ってやったんだが、聞く耳を持たなかった。今後何を言っても駄目だろう」

「ご愁傷様です。学年主任として頑張ってください」

「ハアゝ」

新田先生の苦勞に黙祷をささげ授業に向かうのだった。

.....

今日は午前中しか授業がないので、午後は暇をしている。もともと、非常勤なので仕事はあまりないのである。ただ、サボるやつのでせいで増えるだけなのである。

それで、放課後になり、帰宅しようとする、木乃香が逃げてきた。なんでも、ネギが惚れ薬を使ったらしい。木乃香はオレがあげたペンドントがあつたのでレジストされ、めんどくさい感じがして逃げてきたというわけだ。

「あのガキ、法律って言葉を知っていると思うか？」

「たぶん、惚れ薬が非合法ってこと、知らないんとちゃう？」

「あゝお茶がおいしい。」

「そー君、爺臭いでゝ」と現実逃避を始めてみるが、事態は好転しない。ネギが歩けば女がよる。みたいな諺ができそう。ハーメルンの笛吹きのごとく引き連れている。

「とりあえず、うざいから、シメてくるわ。つつか、なんかムカつくから術式弄って男からモテるように変えてくるわ。その後、格闘研究会にでも放り込んでくる。」

「いってらっしゃい」笑顔で見送る木乃香

「おう！」あの坊主に地獄を見せてやる！！

意気込んでネギを探す。見つけるのは簡単だった。人だかりができてるし。

まずは、惚れ薬の効果を反転させ同性からモテるようにする。ここで、とりあえず、騒ぎが収まる。ホッとしているネギ。だが、それだけでは終わらせない。惚れ薬がいかにも危険なものかわからせてやる。

みんなが、何してたんだろう？とボケてる間に、ネギに接近。ネギも薬の効果が切れたと思って無防備。まゝいつも、無防備ではあるが……

素早く手刀を打ち込み、気絶させ、ネギを担ぎ離脱。そのまま、格闘研究会の集まっている広場を目指す。結構練習しているやつらがいる。めずらしく、相撲部と柔道部まで、外で練習している。これは、願ってもないチャンス。ネギには地獄だが。

ネギに当て身をかまして起こし、その場から、立ち去る。ネギも自分なぜこんなところにいるのか、疑問に思っている。そんなネギを見つけた、男連中！！目つきが変わる。ネギも危険を察知したのかその場から逃げようとする。

その動作を見た男連中は一斉に襲い始めた。まさに狩人。相撲部の

汗がはじけている。ネギもその様子を見て全力で逃げる。ネギを運ぶ際に杖は置いてきたので、手元にはない。だから、大した魔力強化もできず、付かず、離れずの一心一体の攻防を繰り返している。捕まったら終わり。そのプレシャーの中、あと30分は逃げないと効力が切れない。

頑張れ少年！！そう思ってその場を後にした。

木乃香の所まで戻る。

「どうやった？」

「バッチリだ！！あと30分は地獄を見るだろう。」

「まゝ自業自得ということやね。乙女の純情はやすくないんやで」
からから、笑いながら言う木乃香

「そう言う事だな。今日は面白いもんが見れた。今度何かしたら、また、面白い事をさせてやろう」笑いながら言う

「すぐに起こるような気がするやねんけど・・・」

「それなら、それで、面白いじゃないか」

その後、二人で今度の罰は何をしたらいいか、話し合った。わりと盛り上がったしまった。

「それで、何の用ですか？」

爺に呼び出された。

「ネギ君のことじゃ。」

「それで、オレに何か用事でもあるんですか？言いましたよね？こちらには不干涉だって。」

「そのことではない。惚れ薬の件じゃ」

「あゝとうとう立派の犯罪者ですか？どうします？本国にでも突き出しますか？」

「しらばっくれおって！お主、ネギ君の術式を反転させたじゃろ！おかげで、ネギ君が軽度の男性恐怖症になってしまったわ！！どうしてくれるんじゃない！！」

うぜえー

「おれは、言った筈だぜ。問題起こしたら、こちらで対処するって。惚れ薬は違法だ。それをあんなところで使うなんて・・・魔法を学ぶ前に常識を学ばせろ！！」

「それでも、あそこまでする事はなかったはずじゃ！！」

「寝言は寝て言え。惚れ薬の対象には木乃香だって入ってるんだ。」

それなら、排除するしかないだろ。」

「効果は1時間もすれば消えるんじゃないぞ」

「じゃーおまえは、何か？おまえは、そこら辺にいる人を好きになつて追いかけても、問題ないと。好きでもない男を追いかける上に、最悪キスなんてしようものなら、どうする気だ？子供だから気にするなか？ネギの事は心配できても、年頃の女の子は心配しないと。もし、記憶に残ってたら、一生の傷になる。」

「魔法で記憶を消せばそむことじゃー！」

「それなら、ネギもそうすればいい。トラウマができる度に記憶処理。いつまで、もつかね」

「お主が止めれば済むじゃろー！」

「その言葉をそのまま返す。ネギが問題を起こさなきゃいい。オレのせいにするな！！あいつに自分のしたことをわからせてやるだけだ。」

「グぬ」言い返せない爺

「じゃーな、それとこれ以上くだらないことで、呼びだしたら契約違反であのガキの魔力は封印する。」

爺がまた文句を言ってくるが無視して帰る。

- - - - -
翌日 今日には授業はがないのだが副担任としての仕事があり学園に
きている。

ネギを見たがどうやら記憶処理されたらしい。ただ、男性教員が近
づいた時にびくつきとしていた。本人もなぜ、そうなるのか、わか
らないようだ。記憶は体に残るってやつですね。

ホームルームも終え、授業に入るネギ。暇だったので、覗いてみた
が、酷いものだった。まず発音。イギリス訛りがひどい。何人かの
生徒は感心しているようだ、あれは、聞き取りづらい。さらに、
教科書の訳もひどい。そもそも、日本人と英国人では文のとらえ方
が違う。

会話主体で覚える英国人（日本人も日本語に関してはそっち）。た
だ、中学生ではほとんど、話せる奴などいないのでどうしても文法
主体になる。だから、訳の仕方もちこないものになるのだが、ネ
ギはそこを考えておらず、なぜこんなのも、できないのだろう？ み
たいな顔をしている。さらに、酷いのがアスナへの対応。

どうしても、英語ができないという子はある。単に嫌いであったり、
必要性を感じなかったりと、理由はいろいろだが・・・

ただ、自分で指名して、ダメなんですわで済ませるとはなかなか
良い性格をしている。その後、アスナとあやかが取っ組み合いを始
めたので、一応止める。

「ほら、二人とも席につけ。授業中だ。」二人は素直に席に着く。

「それと、ネギ先生、教師が生徒を馬鹿にするのはいかなものかと。」

「え？でも、皆さんも言ってますし・・・」

「ハアゝ馬鹿ですか？あなた。貴方とクラスの子達とでは積みかせて来た年月が違う。あなただって、親しくもない人にダメ教師ですねゝに言われたら我慢できますか？反抗するでしょう、事実だとしても」

「僕はダメ教師じゃありません！！皆さんの事を考えてやっています。」

「仕事をサボったり生徒を馬鹿にする人が何を言っているんですか？だから、ダメ教師なんですよ」

「で、でも・・・」

「わかりましたか？貴方がやった事はこういう事です。人前で恥をかかせて笑っているなんて、なかなか良い趣味をお持ちで」

「ウツ」泣きかけている

「八雲先生言いすぎですわ！！ネギ先生は子供ながらにちゃんとやっています！！」

「別に、すべてを否定しているわけじゃない。ただ、子供だろうが大人だろうが仕事に着いたなら同等に扱われなきゃいけない。でな

いと、まじめにやっている先生に悪い。お前は、その先生達に向かつてネギ先生は頑張っています！と言えるか？と言えるなら新田先生に言って来い」

「それは・・・」

「いいか、社会人には多かれ少なかれ、責任がある。それを全うできないなら仕事なんてするもんじゃない。そのところをしっかりとお願いしますよ、ネギ先生」

「うう、はい」「ここまで言われた事がなかったのか、酷い落ち込みようである。」

「まゝこんな空気にしてわるかったな。それじゃー続きを始めてくれ。ネギ先生は神楽坂に謝ってから」

「う、ごめんなさい、アスナさん。」

「別にいいわよ。とりあえず、授業を始めましょう」

そう言っつて再開する。ただ、ネギの落ち込みがひどく、まともな授業にならなかつたらしいBY木乃香

そんな感じで休み時間

職員室でまったりと過ごしていると、

「うわあゝん——！！ネギ先生——！！八雲先生——！！」
亜子とまき絵が叫んでいる

「こ、校内で暴力事件が——！！」

「え、ええ——！そんなひどい事を誰が——！！」事情も聴かずに走り去るネギ。

「ハアゝ佐々木そんなに騒ぐ事でもないだろう。亜子も」

「だって痛かったんだもん——！！」

「まゝけがの治療をしよう。」二人と保健室に行き手当てを受け現場に向かう。事態が収まっているかと思っただが、なぜか、悪化している。そこで、何をやっているネギ——！！

「ハゝ何やってるんですかネギ先生？」

「あゝ八雲先生助けてください」といつているがとりあえず、放置

「それで、ウルスラの女子がなぜにこんなところで問題を起こしているんだ？」

「ち、ちょっとこの場を借りただけですわ」

「後輩から奪い取ってまで？さすがは先輩やることがひどい」

「ウツ」自覚はあるのか、顔をしかめる。

「それで、後輩をいじめて満足したか？満足したなら生徒指導室に行くか？説教タイムだ」

それを聞いて

「す、すいませんでした。貴方達も悪かったわね。それじゃー」

そう言っで逃げる。

「ネギ先生もしっかりしてくださいよ。それと、神楽坂に雪広、そのボールをぶつけようとしただろ」

「だって、向こうが・・・」

「たとえそうでも、手を出したら負けだ。ああいう手合いには、自尊心を傷つけるのが一番だ」

「それは、教師のセリフとしてはどうかと思いますわ・・・」

「まゝようするに、相手が悪い、自分は被害者のな状況を常に作ることだ。正当防衛ってやつだ」

「ダメでしょうーそれ」アスナがあきれたようだが、丸く収まったので良しとする。

- - - - -

教室

「ねえねえやっぱ、空先生すごくない？」

「ん〜言ってる事はダメなような気がするけど、あっという間に場をおさめたしねー」

「それに比べると、ちょっとネギ君は情けなかったよねー」

「でも、10歳なんだから、しょうがないんじゃない？」

「なんですの皆さん。あれほどネギ先生がかわいいとおしゃっていったのに」

ネギについて討論がなされる。いろいろ意見が有るようだ

所変わって職員室、昼休みを満喫している

「八雲先生、ネギ先生次の体育の授業監督の代わりをお願いできますか？」

「ええ、いいですよ」「大丈夫です」

そして、屋上へ移動。

そこには、先ほどのウルスラの連中と2・Aが鉢合わせしていた。

「今回は私達が先なんだからお引き取り願いまししょうか？」

「・・・くつ、あんた達わざとでしょ！！わざわざ中等部に来るなんて！！」アスナが叫ぶ

「へー今度は言いがかり？さすがは、お子ちゃまねー」

「それは、お前たちだ。」あきれながら言う

「な、でも、今度は私たちが先に来たんだから文句はないですよね？」勝ち誇った感じで言う

「馬鹿か？どこの子供のルールだ！授業と自主のレクレーション、どっちが大事だと思っている？そんなこともわからないほど子供なのか？それに、仮にレクレーションであっても、制服のままやるなんてありえない。」

「グッ」

「その様子だと、レクレーションというのも嘘だな。ハアーおまえら、説教だけでは済まないぞ。授業妨害に、ボイコット。停学くらいは、覚悟しとけよ。今から、そっちの担任呼ぶから。」

「そ、そんなー！！」

「当然だ。お前らはもう高校生だ。自分のしでかした事に責任は取らなくてはいけない。それが、社会のルールだ。義務教育じゃないんだ、もう少し分別を考えろ。」

「う、うう」泣きだす、ウルスラ生徒

「ちょ、ちょっと待ってください！」ネギが割って入る

「なんですか？」

「ここは、僕に任せてくれませんか？彼女たちだって悪気が有ったわけじゃないと思うんです」

「は？」

「だから、お互いにスポーツで勝負とっいのはどうでしょう？あちらが勝てばおとがめなしということ」

「・・・・・・」

沈黙を肯定と採ったネギ。勝手に話を進める。バレーの授業なのに
なぜかドッジボール。それも、参加者制。そして、なぜか、自分も
やるという始末。ハア

「ネギ先生責任は自分で取ってくださいよ」

「わかりました。」

そう言う事で、端っこに移動し木乃香とチアガールプラス亜子たち
としゃべる。亜子は参加しなかったらしい。

「それで、これ授業なのか」オレ

「違うと思うやけど」木乃香

「まゝ楽しそうだし良いんじゃない」美砂

「そうそう」桜子

「そう言えば、亜子は何で参加しなかったの？運動得意じゃない？」

円

「う、うちは、投げる競技は得意じゃないねん。」亜子。なるほど、さすがはサッカー部^{マネージャー}

最初は相手に騙された事に気づかず、どんどん数を減らしていく2-A。途中相手はドツチ部だとアピールしてくる。そのまま、圧倒し始めるが、アスナがやられてから、皆が奮起、ルールだなんだと言って、盛り返す。いつの間にか、逆転しそのまま終了。

だが、あきらめが悪いのか、ロスタイムとか言って攻撃を仕掛けてくる。仕方ないので割って入る

「で、言い逃れはあるか？」ちょっと怒気を込めながら言う。いきなり横から入ってきて軽々キャッチされたことに驚くドツチ部。

「え、え〜と・・・」

「まさか、正式にスポーツしているやつがこんな汚い真似をするなんてな。勝つためなら何でもする。結構なことだが、あくまで、ルールの中でのものだ。何をやってもいいなら、試合前にケガでもさせれば良い。まさか・・・してないだろうな？」

「す、するわけありません。私たちが関東で優勝できたのは実力です！・・・」

「なら、なぜこんなせこい真似をする。ルールが守れないならはなから、部活なんてするな！ドツチなんてやめてしまえ！お前らにそ

の資格はない！」

「う、うつつ」また泣きだす

「とりあえず、お前らは、生徒指導室に行け！！みつちり説教されて来い！！逃げてても無駄だからな。もう連絡はしてある」

そう言われて、顔を青くしながら帰るウルスラ生徒

「それと、ネギ先生。新田先生に始末書の提出をお願いしますよ。」

「ええ！？」

「当然でしょう。授業の監視を頼まれたのに、勝手に授業内容の変更。なおかつ、授業をサボった生徒に注意もなく、さらに自分が参加して、遊ぶ始末。仕事なめているですか？」

「うつつ」あやか辺りが騒ぎ出すが、黙殺。授業も終わったので解散。ネギはトボトボ歩きながら戻るのであった。

帰り際に「勝負するアル」とか「にんにん」とか聞こえたのは幻聴だろう・・・ハア」

第18話 ストレス発散

今日は日曜日、歓迎会の時に約束した日だ。昨日メールに駅前に12時に集合という連絡が来た。だから、今駅前にある時計の前で亜子を待っている。現在12時、30分前。少し早いかなと思ったが、遅く行って待たせるのもあれなので、早めに行く事にした。

15分経過

亜子がやってくる。

「先生！待たせてしまったやろうか？」

「いやそんなことはないけど、とりあえず。先生はやめないか、恥ずかしい。」

「そ、そうですね。では、空さんと呼びます」

「それで、どんな映画を見るんだ？」

「それいけ！アンパンマンです！」

「ブッ!!」

「まじですか？」

「うそです。本当は〇〇〇です」

「なんだービビった。亜子の感覚を疑うところだった。」

「うちかて、そんな子供ではないですよ。」

「まあーとりあえず、行きますか？そろそろ上映時間だろ？」

「そうですね。行きましようか？良いとこでみたいし。」

映画館に到着。ポップコーンを片手に映画を見る。なかなか、素晴らしい出来だと思う。隣で見ている亜子なんて号泣してるし。なにか、思うところでも、あったのだろうか？

2時間ほどみて映画が終わった。二人で感想を話し合っている

「亜子、めっちゃ号泣してたけど、なにか、あったのか？そこまで泣くような話ではなかっただろう。」

「え、えーと、なんか、主人公に共感しちゃって。」

「へーどの辺が？」

「自分にはどんなに頑張っても主役にはなれない事がわかっていて、それでも、諦められないから、頑張るといふ葛藤をしているところ。うちも、そういう考えありますから。」

「へー意外だな。」

「な、何がですか？」

「いやゝおまえさー結構自分に自信ないだろ。それで、脇役に徹してる感が強いからさ。だから、オレは主役になる事を諦めているのかと思ってたよ。」

「べ、別に主役になりたいわけではないです。ただ、そういうのを諦めたくない気持ちがあるんです。」

「やっぱ、変わったなゝ。前よりも、なんか強い芯みたいなのができてる。なんか、良い事でもあったのか？」

「・・・な、な、何もありませんがなゝ」

「それどこの言葉だ？まあゝ変わった事自体は良い事だよ。そのうち、ステージで歌う事もあるかもなゝ」

「そ、それは無理ですゝ！！」

なんて会話をしながら町を歩く。たまに服屋なんかにも寄ったが気に入った物がなく、見てるだけだった。それで、時間も夕食という時間になり、どこかで食べようという事になったのだが、亜子がまた、オレの料理が食べたいと言うので、自宅で食べることにした。

自宅到着

帰宅した後、食事の準備をする。亜子も手伝ってくれて、二人で料理することになった。なんか、それが、恋人か、夫婦みたいと言ったら、亜子が顔を赤くした。フッフ初心なやつめ。実際今日は、あ

たから見たら、完璧にデートだろ。それを言っても顔を赤くし何を妄想したのか、急に煙を出し始めた。マンガだけだと思ったが実際煙が出るのはすごい。どんな蒸発をしたんだろうか。

しばらくしてから、亜子も落ち着き食事をする。合作料理なので、いつもよりはうまい。その後片付けをして、少し話をした。

「ああ、そう言えば、忘れるとこだった。亜子これあげる。」そう言って、銀のペンダントを見せる。

「な、何ですか？」

「いや、前誕生日の話をしただろ。円の誕生日が3月3日だったじゃん。それで、誕生日プレゼント作ってあげる事になった時。亜子も欲しそうにしてたから、作ってみた。亜子の誕生日は11月だから、ちよつと遅いけど、誕生日プレゼントだ。結構自信作！」笑って渡す

「た、大切にします。ありがとうございます!!」うれしそうに言う亜子。作ったかいがあるもんだ。桜子と美砂は当分先だしその時間で良いだろ。木乃香は円のすぐ後だから・・・どうしようかな？

「うし、それじゃ、遅くなったし、送って行こう。」

「はい、おねがします。」

戸締りをして、女子寮を目指す。桜通りを歩いているのだが・・・
・・・何かがおかしい

・・・まずい!!

「（やばいな、人払いの結界が張ってある。しかも、近くで戦闘中だ。亜子もいるし、速く離れよう）亜子、なんか、風が強くなってきたから急ごう、春先に近いとは言えまだ寒い。風邪をひいたら、大変だ。」

「あ、は、はい。」急に急ぎだした空に戸惑う亜子。

とにかく、結界内を脱出しないとまずいので、亜子を連れて走る。
・・・だが、なかなか、思うようにはいかないらしい。

「へへへ、なんだ、此处に一般人がいるじゃねーか？親びん、こういう場合は、どうすればいいんでしょう？」

「そいつらには、悪いが、見られたからには、生かしておけねえ。まあ、楽に逝かしてやれや。」

「へい、了解です。親びん。」そう言っただけで寄ってくる鬼達。ハア、バレちゃったよ。

「な、な、なんなん？コスプレ？それにしても、リアルすぎるやろ！」「ビビりながらも、突っ込む亜子。

「悪いな嬢ちゃん。見られたからには、始末しなきゃいかん。怨むなら、依頼主を怨んでくれ」

「ヒッ」ようやく事態を把握した亜子。鬼達の武器を見てどうなる

かわかつたらしい。後ずさる時に尻もちをついてしまった。動けないでいる。そこに詰め寄る鬼達。だが……

「ハアゝバレちゃったよ、どうしよう？まあこれは、オレのせいではないし、良いか？それと、馬鹿ども、うちの生徒に近づくなよ。怖がっているじゃないか。これだから、最近の鬼は、常識がないんだよ。これが、ゆとりの弊害か？」

「何言つてねんワレ！！この状況で良くそんな口が聞けるな！！」

「すぐ、そうやってキレて、ややわゝ」とのん気な事を言う空

「そ、そらさん。な、何やってるんですか！？は、早く逃げましょ。その人？達絶対アカン人ですって。」動けないまま言ってくる亜子。

「まゝそうだな。教育ができてないという意味ではアカンやつらだ。仕方ないここは、オレが教育してやろう。教師だからな」

「舐めとんのかワレ！！いくぞ、てめえら！」突っ込んでくる鬼達

「死ねー！！！！」棍棒を持って空に襲いかかる。棍棒が振り下ろされすごい音が鳴る。亜子は絶叫。……しかし

「全く公共物は大切にしろよ。教育的指導！！！」鉄棒を持った空が鬼の真横に現れ、棒を一閃。

「グワアア！！」一瞬で消える鬼。

「あいつただもんやない。みんなで襲いかかれ！」

「おう！！」親びんが指示しそれ以外の鬼が来るが

「集団でいじめなんて、なんてやつらだ。昨今のゆとりがここまでなんて・・・」まだ、教師役をしている。

「うおおおお」鬼達全員が一斉に振りかぶる

「リンチは退学もんだぞ！まったく、苦勞して入れてくれた親に顔向けできないだろ！！反省して来い」

その言葉と同時に一匹の鬼が飛ぶ、否、ぶっ飛ぶ。懐に入った空が下から突き上げた。それだけで、鬼は飛び、帰って逝った。

「隙だらけだ！！」残りの鬼が空の頭上めがけて棍棒を振り下ろす。

「お前たちがな」瞬動で鬼達の後ろに回り込み一撃で沈めて行く。鬼達は叫ぶ暇もなく還って逝った。

「やるのゝ兄ちゃん。がオレは今までのやつらと出来がちがうぞ。余裕を持って言う親びん。」

「へゝ格が違うな。名前はなんて言うんだ？」

「オレらは、名前なんてものはない。ただ、人間からは茨木童子いばのこと呼ばれていた。」

「おいおい、酒吞童子しゅんどうの配下で、副頭領じゃなかったけ？何でそん

な奴がいるんだよ!!」

「へえ、大将だけじゃなく、オレの事も知っているなんて嬉しいやないか。」

「日本三大妖怪の一人の腹心だからな、京都では有名な話だ。だけど、片腕を切り落とされて、そのまま、いなくなっただんじやなかったけ？普通に両腕あるし。」

「あれは、確かに、無様だった。ただ、ちゃんと取り返したぞ。それじゃ、話はこんなもんで、そろそろやろうか？」

「ああ、だが、ちょっと待ってくれ。ここでやったら、亜子に被害が出る。」

「どっちみち、両方死ぬんやから、意味ないと思うで。まあ、それぐらい聞いたるさかい。」

「おお、さすが、教育がいきとどいてる。先生はうれしぞ」ふざけながらも、警戒して亜子のもとに向かう。

「せ、せんせ・・・」恐怖で震えている亜子。

「大丈夫だ、すぐ終わらせてくる。しばらく、あそこにいる奴と一緒に待っててくれ」そう言って亜子の頭に手を置き落ち着かせる。その後、亜子の後ろの木にいる奴に声をかける

「そこにいるんだろ。どうせ見てるだけなら、こいつを、守ってくれ」その言葉に反応して、木から小さな人が出てくる。

「ふん、良く気づいたな。爺が急を要すると言っから来てみたらかなな、面白い事になっているじゃないか。」

「つつか、最初からいたんだから手伝えよ、エヴァンジェリン」

「ふん、貴様にその必要はなかっただろう。ずいぶんと余裕そうだったじゃないか。」

「まあ、そうなんだけど……。でも、こっからはそういうわけにもいかないからさ、亜子を頼む。それに、今のお前じゃあいつはきついだろ。」

「ん、まあ、確かに、忌々しい事に。とりあえず、こいつは任せておけ。一応学園の警備だからな、めんどくさいが一般人は守つてやる。」

「すまないな。それじゃ亜子行ってくる。」

「あ……」何かを言おうとしたらしいが、何も言えなかった亜子。

「そう心配するな。あいつは強いぞ。全盛期の私でなければ、勝つことはできん。」

「……」亜子はエヴァの言葉が聞こえないくらい、じっと空を見つめていた。

「待たせて悪かったな。」

「お別れはすんだのか？」

「別に分かれを告げる必要はないだろ。勝つのはオレだしな」

「なかなか、面白い事を言ってくれる。．．．いくぞ」その言葉と同時に鬼が消えた。魔眼を発動していなかったら、気付けなかったほどに。空は、亜子をエヴァに任せる際に、魔眼を発動していた。後ろに現れた鬼の攻撃をいなす。その後力ウンターを入れようとするが、避けられる。

「へー思ってたより攻撃が軽いんだな」

「まあ、大将ほどの攻撃力は持っていないわな。せやけど、オレは、大将より速いで。おそらく、鬼中最速や」

「でも、かわせない速さじゃないぜ。それくらいなら．．．」と言おうとした時、鬼が消えた。魔眼を使っても魔力の流れが見えないほどに。こんなこと、ラカン以来だ。

だが、対処法はある。ラカンのせいで身に付いた。

「終わりや！！」棍棒を振り下ろしてくる茨木童子。その攻撃が届く寸前に棒を入れる

「何！？」止められた事に驚く童子。

理屈は簡単である。ラカンがなんとなくで転移術を避けているのを

見て気付いた。あいつは、無意識に気を自分のまわりに放出しそこに入って来たものに反撃をしていただけなのだ。まあ、それは、かなりすごい事なのだが……

だから、空は、それを自分で使えるようにした。そう、見るのではなく、感じるのである。まだ、ラカンほど早く反応できないが、それでも十分である。

「今度は、こつちから行かせてもらう！」驚いて、攻撃を止める童子。その隙を見て陣を展開する。

「北斗七星！！」 辺りを結界が覆う。

「何やこれ！？……う、魔力が吸われていく。」

「この空間内では魔力は吸われるだけ、それに、オレはそれを還元して自分の力にできる。さあ、どうする？」

「吸われると言ったってそんなに急激にやない。おまえさんを倒してしまえば済む話や！！行くで」そう言って高速移動で接近する童子。だが

「ふたご座ふたご座！！」一瞬で転移する。

「どこや？」鬼が探すが、自分の後方にいる事を見つける。

「そんな逃げてても、しょうがないで。この陣、術者の魔力も吸っ

とる。これじゃーそっちの方がバテてまうで!!」また接近、それを空がまた転移してかわす。それを、ひたすら繰り返す

「ハア、ハア、そっちももう限界やる。この勝負オレの勝ちや。この陣は失敗やったな。時間稼ぎにしかならなかった。何が、したかったんや。」

「それでいいんだよ。お前が、無駄に動いて魔力消費するのを待っていた。今、何分たったと思う?」

「そんなにたつとらんやる。せいぜい、5分くらいとちゃうん?」

「正解だ。だがその5分が命取りだぜ。」

「な、何を・・・」

「最初に陣を破壊しに行けばよかったんだ。魔力は食うだろうが、その方がよかった。オレに攻撃が当たらないと思った時に。油断したな。オレがただかわしていただけだと思うのか?」

「・・・は!!」

「遅いぜ、気づくのが!!」

「しし座^{リーオー}発動」そう言う巨大な陣が出現する。

「まさか、この陣を描くために、ずっと、避けていたのか。でも、これなら、何ですぐ使わなかった。1、2分で描けたやる。」

「この陣は魔力を貯めればためるほど威力が強くなる。普通は説明なんてしないが、お礼だ。この魔力は、お前から吸い取った物も加わっている。無駄に動いてくれたから、かなり溜ったぜ。威力は自分で確かめな！！行くぜ」

陣から強烈なエネルギーが発射される。茨木童子も逃げようとしたが結界内で逃げられない。

「グワアアあああ」そう言って一瞬で消える童子

エネルギー波の衝撃で結界も壊れる。元の空間に戻った。その瞬間、空が崩れる。衝撃の余波を吸収しきれなかった事と魔力切れである。

最後に見たのは涙目の亜子が走ってくる場所だった……………

……………

意識覚醒

「知らない天「あ、空さん！！」……………クッ」名言を言わせて貰えなかった。

「気づいたんですね。もう、うち、心配で……………」泣きながら言う亜子。心配をかけてしまった。

「ごめんな、亜子。心配かけて。オレは大丈夫だ。それよりここはどこだ？」

「あ、ここは「私の別荘だ」です」エヴァが入って来た。

「そうか、助かったよエヴァンジェリン。礼を言う。」

「ふん、あのまま、ほっといても良かったんだが、私の代わりに戦わせてしまったようだし、前の借りもあるから、連れてきてやったまでだ。礼ならその小娘に言ってやれ。ずっと看病してたぞ。」

「ありがとうな亜子。……それで、亜子こんな状況で言うのもあれなんだが、」

「エヴァちゃんに聞きました。世界には魔法という物があって、麻帆良には多くの魔法使いがいるって。」

「そうなんだ。それで、魔法を知ったからには記憶を消さなきゃいけない。厄介事に巻き込まれるからな。ただ、記憶を消さない方法もある。亜子はどうしたい？」

「うちは、危険な事は嫌いだから、関わりたくない。」

「そうか、それじゃー」

「で、でも、記憶を消したからと言って危険が減るわけでもない。ここにいたら、危険な事に巻き込まれる可能性が高い。だから、うちに逃げるだけの力をください。それも、周りの人と一緒に逃げられるだけの力を……」真剣な顔をして言う

「・・・わかった。オレが教えてやる。どんなことから、逃げる力をつけてやる。」

「お、お願いします。」

亜子との話も終わり、エヴァが話しに入ってくる。

「話が済んだようだから聞くが、貴様、マジックマスターだろ？」

「ブウウツッ!!」ベットの横に置いてあつた水を飲んでいたら、エヴァにそんな事を聞かれた。

「な、なんで、その恥ずかしい名を・・・」

「わたしも魔法使いだからな。マスター呼ばれるくらいなやつだ、興味くらいある、調べるさ。ただ、詳細は調べられなかったが、今日の戦いをみて、確信した。おまえが出した陣は私をもつてしても解析ができなかった。そんなことができるやつなんて、そうはいまい。お前が出した論文にも理解できないところがあつた。そう考えると、お前がマジックマスターである確率が高い。それで、聞いてみたら案の定だ」

「・・・どうでもいいから、そのはずい名前を呼ぶのをやめてくれ。」かなり、落ち込んでいる

「わ、わかった。」エヴァも焦る

「それで、オレに何か用か？」

「お前に聞きたい事がある。お前はどんな呪いも解除できるというのは本当か？なら、私のこの呪いも解けるか！！？」結構真剣な顔をして聞いてくる

「解けると思うけど、ただでは、やらないよ。」

「対価は払おう。なにが望みだ」

「1つ、亜子と木乃香に魔法を教えてやってくれ。」

「その娘はわかるが、近衛木乃香もか？あいつは、魔法を知らないんじゃないのか？」

「いや、とづくに知っている。小さい頃誘拐された時に知った。」

「まあ、あいつの魔力じゃ仕方あるまい。それで、なぜ、隠している？・・・いや待て、…爺のせいかな？」

「そうだ。麻帆良だろうと木乃香の力を利用しようとする者は多い。だから、知らないふりをしている。」

「でも、それなら、余計に私が教えるのは変じゃないか？あいつは、陰陽師になるんだろう？」

「ああ、基礎は教えた。だけど、陰陽師と言っても、術式を覚え、発動するだけだ。魔力運用がうまくいけば、もっと幅広い事が出来る。だから、魔法を教えてやって欲しい。オレには攻撃系や上位魔

法は使えない。」

「わかった。了承しよう。それで、後はなんだ？」

「お前の持っている蔵書を見せて欲しい。魔法、一般問わず。60年も生きているんだ。珍しい物ぐらい持つてるだろ？」

「持っているには、持っているが貴様に役に立つかわからんぞ。ほぼ、私の趣味で集めたよな物ばかりだ。」

「構わない。」

「わかった。それで、まだあるのか？」

「ああ、最後の願いだが、それは、その時になったら言う。まあ、今は保留という事で。心配しなくてもお前に損が有るわけじゃないから。」

「わかった。……それじゃー解除を頼めるか？ここでやれば、問題はない。爺の監視もここまでは見れない。」

「わかった。とりあえず、見てみない事にはなんともいえんから、あと、亜子、お前は少し離れてくれ。何が起きるかわからないから。」

「は、はい。」

「茶々丸。和泉を連れて、離れておけ。」

「了解しました。マスター。お氣をつけて。それでは、和泉さん向こうに行きましょう。」

そう言つて亜子を連れて離れる茶々丸。

「ほんじゃゝ行きますか。魔眼発動・・・・・・・・よし準備O'K」

魔眼を発動しエヴァを見る

「お前魔眼なんて持っていたのか？ハーフか？」

「いや、真人間。まあそんなのどうでもいいじゃん。それから、少し集中するから、黙つてて」

「う、うむ」

言われたとおりにするエヴァ。じつくりと魔力の流れをしてみるが、かなりすごい事になっている。登校地獄の呪いが雁字搦めの鎖で巻きつけられ、ほどけないようになっていいる。それに、学園結界に漏れた魔力が持つて行かれほとんど、魔力が空の状態だ。よく無事だったな。吸血鬼だからか

「うゝん。かなりひどい事になっているね。なかなかあくどい。エヴァンジェリン、お前が魔力を使えないのは、何も呪いのせいだけじゃない。学園結界に持つていかれている。そもそも、登校地獄はヒッキーを学校に行かせるだけで、魔力をなくすわけじゃない。」

「な、何。どういうことだ！？ナギに封印された時確かに魔力を感

じなかった。」

「そこは、さすが英雄としか言いようがない。どうやってたらこんな適当な術式になるのか、むしろ、何でこんな術式で、発動できるの
か不思議なぐらいこんがらがってる。研究者にケンカを売っている
ね。・・・そのせいで、最初は魔力を感じられなかったんだろう。
ただ、こんな適当な術式でいつまでも魔力を抑え込めるわけない。
5、6年したら、お前が自力で解除できるくらいまで弱まるはずだ。」

「では、なぜ、私の魔力は戻らない!!」

「それは、学園結界のせい。この結界はお前の漏れ出した魔力を吸収すると同時に呪いの強化をしている。」

「な、なんだと?」

「本来ならすでに解けているはずの呪いを解けないように補強の魔法が掛けられている。お前、相当爺に気にいられたようだな。こう
までして、お前を外に出したくないなんて。恋人か?」

「殺すぞ貴様!!あの爺め、解呪の方法を探してやるとか言いながら、逆に縛っていたのか!!必ず報復してやる!!」なんか目に火
まで灯し決意しているエヴァ。なんか、キモイ。

「それで、この呪いは解呪できるのか?」一転して真剣な表情をして聞いてくる。

「それなんだが、ここまでだと……」

「やはり無理か」落ち込むエヴァ

「……できるよ。つつか解呪なんてする必要ないじゃん。」

「……で、できるのか！？解呪の必要がないとはどういうことだ！！」

「オレこう見えても陰陽術使えるんだよね。そして、おまえが受けるのは呪い。さあ問題です。どういうことになるでしょうか？」

「……そ、そうか。呪詛返しか！！なぜ、今まで気づかなかった。呪いは解呪するより返した方がはるかに簡単だ。」

「お前さんが、生粋の魔法使いだからね。気づかないのも無理ないよ。でも、爺は知っていたはずだ。大方、英雄に被害が行くのを嫌ったのだろつ。」

「あのじ・じ・い。いつか殺してやる！！」また変な熱が再熱

「それで呪いを誰に返す？普通は掛けた相手にしか返せないが、これなら対象者を変えられる。まずは、英雄。そして、血縁である息子。そして、補強魔法をかけた爺。この3人ならだれでもOKだ。」

「当然爺だ。あいつが一番ム力つく」

「へー意外だな。てつきり英雄かと思つてたけど。」

「あいつは、すでに死んでいる。仕方ない」ちよつと悲しそうな顔をする。・・・勘違いなのに

「あゝ感傷に浸つてるとこ悪いんだが、英雄は生きてるぞ！」

「な、なんだと!？」驚愕の事実には驚きを隠せない

「だって、ラカンのアーティファクト使えてたもん。それに、ラカンも生きてるって言つてたし」

「ハハ、ハアハハハハハ!!!」エヴァが狂つた

「これは、末期か。まさか、薬中だとは……。おれは親御さんになんて言えば・・・」

「違うわ!!!なんでそうなる」

「急に笑い出したら危ない人の証明だ。これだから、ゆとりは・・・」

「そもそも、私はゆとり世代ではない。ま、まあ良い。良くはないが・・・とりあえず、爺に返してくれ。ナギには私自ら行く。」

「また、返り打ちにならなきゃ良いけどな。とりあえず、準備する

から待つてくれ。……これで準備完了」術式を床に描く。

「ここに、此处の上に血を垂らしてくれ。その時、返す相手を強く念じてくれ。呪いは思いが強い方がよく効く。オレは、こっちで術式の調整に入るから」

「調整が必要なのか？」

「返すだけなら、いらないんだが。爺に呪いを返した後簡単に解除されては困る。呪詛返ししたら、英雄に行くからそれはないだろう。だから、おれは、学園結界とセットで送りつけ、さらに魔力吸収の術式まで取り付ける。もうあの爺はともに戦えなくなる。今までのオレのストレスを思い知れ！！さらに、解除したら英雄の息子の方に行くようにセットする。英雄と血縁だから、難しくはない。あいつもオレのストレスの原因だから問題ない。」

「それじゃー始めてくれ」エヴァが指から血を垂らし、目を閉じる。おそらく、相当念じているのだろう。肩がふるえている。オレも調整を開始する。膨大な魔力を感じるがこれくらいなら、極卦法を使う時の方がきつい。しばらく、魔力を操作すると呪いの精霊がエヴァから離れてどこかへ飛んでいく。爺めクタバレ！！

「これで完了だな。どうだ、調子は？」

「ハハハ、これだ、これが本来の私、最強の魔法使いの力だ。感謝するぞ。ハアハハハハハハ」

「またか。薬は大概にしとけ。ホームヘルパーの茶々丸が大変だ。」

「だから、違う!!!」

エヴァの絶叫がこだますのだった。

第19話 完成

「それで、亜子達の事明日から頼みたい」

ひとしきり、エヴァを弄ってから疲れたので本題に入る。

「ふん、約束だからな、了解した。ただ、お前はいいのか？私の呪いのせいで此処のやつらと揉めるだろう。どうする気だ？お前は恩人だ。手を貸すくらいはするぞ。」

「いやすでに、此処のやつらとは揉めてる。で、その時に、オレに攻撃を仕掛けてきたやつを魔力を封印してやった。で、解除を条件にオレの行動に文句は言わないと約束してあるから、問題ない。」

「ふん、まあ、何かあったら協力しよう。此処のやつらは馬鹿ばかりだからな。」

「その時はよろしく頼む。エヴァンジェリン」

「エヴァでいい。」

「わかった。キティ」

「そう、それで……ちょっと待て！なぜ貴様がその名を知っている？」

「ラカンから聞いた」

「あの筋肉ダルマめ……そして、その名を呼ぶな！！」

「わかったよ。初号機。これでいいんだろ？」

「どんな、エヴァつながりだ！！まるっきり違っただろうが！！」

「え、式号機の方が良かった？まさか、零号機とか？」

「どれも違うわ！いい加減そこから離れろ。」

「わかったよ。エヴァ。オレの事は碇シ〇ジと呼んでくれ。」

「だから、そこから離れろっ」

「もう、エヴァのおこりん坊さん。そんなに怒るから、薬が必要になるんでしょ。さあオレに気にせず薬の補給を。注射器？それとも直接？」

「一番最初に戻るんじゃない！！！！それと、私は薬中ではない！！」

「冗談だよ。冗談。オレの事は好きに呼んでくれ。」

「ハア、ハア、ハア、疲れる。それじゃー空と呼ばせて貰おう。そして、空よ、今回の事は改めて感謝する」真剣な顔をして言うエヴァ。

「気にするな。対価はきつちりと貰うから。ギブアンドテイクだ」

- - - - -

エヴァの解放も終わったので亜子たちのもとに行く。で、事の経緯を亜子に話す。茶々丸が無表情ながらも喜んでいようだ。

その後、別荘で一日を過ごし別荘を出る。まだ、夜の8時。とりあえず、亜子を寮に帰さないと問題になるので寮まで送る

「それじゃー空さん。また、明日」

「ああ、また明日。」

- - - - -

亜子と別れてからしばらくすると、爺からの呼び出しが来た。めんどくさいので無視したのだが、自宅まで魔法先生が押し寄せこれ以上無視してもウザいだけなので、爺に会うことにした

学園長室

「失礼します。それで、何か用ですか？生憎、明日は早いんでもう寝ようとしてたところなんです。人様の睡眠を妨害する用事ってなんですか？そんな雁首そろえて」学園長室には複数の魔法先生がいた。エヴァまでいる。ソファーにふんぞり返っている。羨ましい。こちらは立っているのに・・・

そんな事を考えていると、ガングロが騒ぎ出した。

「貴様！大変な事をしでかしてくれたな！！」

「勘違いじゃないですか？今日はむしろ感謝される事しかしてないですよ。おたくの警備が甘いせいで一般人が戦闘に巻き込まれちゃったじゃないですか。まずは、礼くらい言ったらどうなんですか。言わなくても。報酬は請求しますけど・・・」

「そんな事を言っているんじゃない！！貴様自分が何をしたかわからないのか？」

「全く。というより、そんな事で済ませないでくださいよ。結構強かったんですから。貴方達程度じゃどうにもならないくらいには・・・」

「魔帆良にいる魔法使いを集めればどうにでもなる。だから、それはいい。問題はこの、闇の福音を解放した事だ！！それに学園長にまで呪いをかける始末。一体どう責任を取るつもりだ！！」

「・・・・・・・・」

「だまっでないで何とかおっしゃいなさい。貴方のしたことは大変なことなんです。犯罪者を解放するなんて！」　　いつぞやのバカ女が叫ぶ。

「・・・・・・・・」

「貴様、黙秘しても変わらんぞ。貴様の罪は言い逃れができるものではない！」

あきれてものが言えない間になんか言ってきている。

「ハア」

「なんですの、そのため息は。全く反省してませんのね。」

「それじゃー聞くけど、オレが今日戦った相手は本国の評価でいうとAAAクラスの力量があった。タカミチがいない今、あんたらはどうやって勝つ気なんだ？よしんば勝てたとして、その間他の地区はどうする？わかってているのか現実が。実際今日が魔帆良の最後になってもおかしくはなかったんだぜ。爺が出れば、済む事だろうが、おそらく、相性が悪い。最悪死ぬぞ。そんな事で済まされることじゃない。そこんことを踏まえてさっきの発言をしたんだろガングロにバカ女」

「クツ」

「それに、エヴァを解放した事が一体、何の罪になる？そもそも、お前たちにオレ行動に文句を言う資格はない」

「英雄がこの地に幽閉したんだぞ。それを解放しただけで立派な罪だ」いきり立つガングロ

「勝手に捏造するな！馬鹿ものが。幽閉なんぞされとらんわ。あいつは3年したら解除すると言ったんだ。死んでしまったから、でき

んが。それに、する気があったのかは知らんが、その爺も解呪に
関しては了承していたし、何度か解呪しようとした。空が罪なら
爺も同罪だ」

実際生きてる事を知っているが、ここはそう言っただけがいいと判
断したエヴァ。

「だ、黙れ。悪の魔法使いが何を言っても嘘に決まっている。」

「ねえ、さつきから、強気な事言ってるけど、あんた、今自分の立
場わかってるの？」

「何？」

「馬鹿でしょ。此処には本国評価でS Aを持つエヴァとタカミチを
圧倒できるオレがいるんだぜ。おまえの発言でここが血の海になる
ことがわかって言っているんだよな。ずいぶんとなめられたもんだ。
この程度の戦力で勝てると思われているなんて。どう思うエヴァ？」

「確かに不愉快だな。試してみるか？」そう言って殺気を出すエヴ
ア。さすが、最強の魔法使い。尋常じゃない殺気だ。部屋の中にい
た何人かはそれだけで、気絶している。

「待っててくれい！」

「なんだ爺？」

「エヴァのことはナギからの事もある。だから良い。だが、ワシへの
呪いはどうということじゃ？」

「なんだ、そんなことか。簡単だ。今までのエヴァに対する対価と虚偽に対する罰だ。」

「どういうことじゃ？」

「ハア。爺、お前オレが何もしらなと思ってるのか？お前、エヴァの呪い定期的に補強していただろう。解呪するとか何とか言ってる。そして、お前は世界樹を私利私欲には使っていないと言いながら、完全に使っているじゃねえか！エヴァの魔力を使って結界維持してるし。だから、オレがお前に返してやったんだよ。10年分こき使われたエヴァの呪いを。ちなみ、解除してもいいがその場合あのガキに呪いが行くようになってるから」

「なんじゃと!？」

「お前達が大事にしている、英雄の息子を助けたければ爺を見捨てることだな。今まで散々好き勝手やって来たんだ自業自得だろ。それに、ほんとなら、魔力は封印されなかったはずだぜ。ただの登校地獄にそんな効果ないからな。お前が勝手に世界樹を使って魔力を封印の術式を付け加えたんだ。これぞ、まさに因果応報。」

「クッ」悔しがる爺

「じゃーな爺、早く後任を探せよ。」そう言って出て行く空。エヴァも一言いってその場を立ち去る。魔法先生は空達が出て行ったあと、言い合いを始めたようだが、うるさいので気にしない事にした。

- - - - -

翌日

爺の後任はまだ決まらないらしい。というより、決めようとしていない。爺はあれでも、魔法世界に強いパイプを持っていてまだ、それを使えると判断されたらしい。さらに、解呪まではできなかったが、限定的に魔力を回復させることに成功したらしい。一度使えば数週間は使えないが、魔力をためる方法を思いついたようだ（エヴァが残した監視魔法＋オレ特性の隠ぺいによる情報）

今日は、何事も問題なく授業が終わり（オレが）、ネギは新田先生との補習。なんでも、成績の悪いやつらを残して勉強させようとしたが、自分の仕事が終わってないにもかかわらず、実行しようとしたため、あえなく、御用となった。

授業後、木乃香と亜子を伴ってアトリエへ。そこから、転移して、エヴァの家に行く。なぜ、そんなめど臭い事をしているのかというと、刹那のせいである。

刹那はオレが、木乃香と行動するといつも、ストーカーしたので、エヴァの家に行ったら、何を言われるかわからない。だから、アトリエに符で身代わりを残してから転移しなければならないのだ。

全く、修行でもしていればいいのに・・・

そんな感じでエヴァのログハウスに到着。ちなみに亜子の事は木乃香には話してある。木乃香もじいちゃんのせいで、申し訳ないと謝っていた。

コンコン

「お待ちしていました。マスターはすでに別荘の中です。どうぞ
そう言つて茶々丸が、案内してくれる

魔法陣の前に立つて、中に入る事にする。

- - - - -

「お待たせしました、マスター」

「遅いぞ馬鹿もの。一体何時間待ったと思っているんだ！」

「いや、お前が先に入っただのが悪いんじゃない？待ってればよかった
じゃん。」

「マスターは異様にテンションをあげてしまったため、待っていて
れずに先に入ってしまったのです。遠足前の子供のようなものです。
暖かい目で見えてあげてください」

「コラ！！ポケロボット！お前いつからそんな風になった！ええ
い、巻いてやる、巻いてやるぞ！」

「ああーいけませんマスター。そんなに巻いては・・・」なんか主従で漫才を始めたのでこっちも勝手に始める事にした。

「とりあえず、亜子から行くか。木乃香ちょっと待っててくれ。まず、亜子に魔力の使い方を教えないと。」

「ほんなら、うちが亜子に教えたる。魔力を流せばええんやろ」

「そうだが、魔力調整は難しんだぞ、大丈夫か？」

「大丈夫や。それでも、魔力操作は得意や」

「しつかり練習していたようだな。師匠として、うれしいぞ」

感慨に耽っている空をよそに亜子と木乃香が話す。

「なあなあ、亜子これで大丈夫や」

「え、何が？」わからないといった表情で聞く亜子

「魔力を流す時背中に手を当てるねん。亜子背中の傷、気にしてたやろ」

「あ！・・・ありがとう木乃香。」

「ええねん、うちも、なんどか、魔法で治してみようかなと思ったけどできへんかったから。これくらいのことしか・・・あ！」木乃香が気づく

「そうや、もう亜子魔法のこと知ったんやから、魔法で治しても問題ないやんか」

「え、ええええええ。この傷、治るん？」

「うちは、まだ、回復魔法とかしつかり教わってないから、簡単な傷しか治せへんけど、そゝ君かエヴァちゃんならできるとちゃう？」

「ホンマに？」亜子がうれいそうな顔をする。

善は急げととりあえず、二人に聞いてみる

「私はできんぞ。私は不老不死だ。回復魔法など必要がない。」それを聞いて落ち込む亜子。だが、空が、

「オレはできるぞ。死んでいなきゃ、ちぎれた腕だつて治せる」

「ホンマでつか？」亜子復活

「ああ、ただ、問題が二つある。」

「なんですか？」

「まず、オレが、ケガを直接見なければならぬ。それは嫌だろ」

「……大丈夫です。空さんなら、気にしないでくれそうやし」

「まあ、たしかに、気にはしないが。それじゃ、もう一ついきなり完治させるとまずいんじゃないか？周りの連中が気づくだろ。とく

に、円なんか」

「あ」

「それで、一応定期的にゆっくり治して行こうと思う。だから、ちよつと時間がかかるが、我慢してくれ。それと、誰かに聞かれたら、良い医者を見つけたとでも言っとけ」

「は、はい。ありがとうございます！」亜子は、泣きながらお礼を言う。木乃香がそれを優しく抱いている。

- - - - -

「それで、私はどちらを教えればいいんだ？」

「木乃香をお願いしようと思う。基礎は昔仕込んだから、魔力の扱いには問題ないはずだ。体術はぼちぼちつてところだろう。」と木乃香のことを説明していたのだが、木乃香が申し訳なさそうに

「あんな、そゝ君。言いにくいんやけど、うち、魔力操作は得意やけど、それ以外は昔よりもひどいと思うねん」

「何んだ・と・？」

「あんな、此処にきてから、外に出るときはほとんど監視魔法が有ったせいで、下手に魔力使えんのよ。結界とかはあったらそれはそれで、まずいやる。だから、監視がない部屋のなかで、魔力操作くらいしかやれることないねん。それに、中学からはせつちゃんがずっと監視していたから、体力トレーニングなんかもできなくなっ

もった。」

「ハア、仕方ないか。そこは、エヴァに頼むか。」

「言っておくが私はやさしくないぞ」

「まあ死なない程度に頑張ってくれ木乃香。それと、エヴァ。木乃香は天才だから気をつけろよ。お前、おそらく自信なくすぞ」

「ほ、そこまで言うか。これは楽しみだ。木乃香、今日から私がきっちりお前を鍛えてやる。任せておけ」

「もう、そ、君勝手にハードルあげんといて！！」困ったように笑う木乃香。だが、空にほめられたのがうれしいらしい。

「では、いくぞ。このか。ついて来い」

「ほな、亜子に、そ、君またな」笑顔でさる木乃香。あのまま、笑顔でいらればいいが……

「それじゃ、亜子こつちもやるぞ。治療は修行の最後にやろう」

「は、はい。よろしくお願いします。で、まずは、何からするんやろうか？」

「さっき、木乃香も言っていたが魔力を体内に流してそれを感じてもらおう。感じれたら、それを、自分の中から引き出す練習だ。魔法

使いは杖とか必要なんだが、まだいらないだろ。そのうち、用意してやるから、いまは、魔力を感じて出せるようにしよう」

「わかりました。」

その後、亜子に魔力を流してみたが、すぐに魔力を感じることができた。が、その後の引き出すところが思うようにいかず、さっきから苦勞している。

木乃香の方はなぜか、轟音がとまらない、なぜだろう、いやな予感がする。

しばらくしてから、今日はこれくらいにして終えることにした。そのとき、亜子の治療も行う。背中を見せてちよつと暗い顔をしたが、オレが、気にも留めないのを見て、ホツとしたようだ。その後は顔を赤くしていた。年頃の女の子なら、たとえ治療でも異性に背中をみせるのは恥ずかしいのだろう。気にしない事にした。

「よし、これで大丈夫だろ。このペースなら現実の世界で、2週間もすればきれいさっぱり傷は消えるだろうさ。」

「ありがとうございます。また、よろしく願います。」

そんな感じで治療を終えると、エヴァがボロボロになった木乃香を引き連れて戻って来た。嫌な予感は的中したらしい。

「ハッハハハハ。すばらいぞ空。おまえの言うようにまさに木乃香は天才だな！！私も久しぶりにはしゃいでしまった。このぶんなら、そう遠くない間にタカミチくらいなら倒せるようになるだろう。」

爺が戦えない今、私達を除けば学園最強になるかもな。ハハハハハ」
馬鹿みたいにテンションが高いエヴァ。それより、木乃香をなんとかせねば

「とりあえず、木乃香をここに」そう言うと近くにいた茶々丸が木乃香を運ぶ

「一みずがめ座 アクエリ阿斯」陣を発動し木乃香の傷を治す。
すると、木乃香が気づいたようだ

「あれ、そゝ君？うち、どないしたんやろうか？」

「エヴァがはしゃぎすぎてそのせいで気絶したみたいだ。安心しろ傷は治しておいた」

「そゝ君ありがとう。エヴァちゃんも急に張り切るからビックリしたわゝ」結構な傷を負わされてビックリで済ませる木乃香にビックリである。

その後、食事にをする事になったが木乃香が動けずオレが運ぶ事になった。

「それじゃゝ行くか。木乃香、おんぶと抱っこどっちがいい？オレ的にお姫様だつこの方が楽なんだけど」

「じゃゝそっちで。よろしくな、そゝ君」

木乃香の背中と膝裏を持って抱きかかえる。それで、運ぼうとした

時、亜子が顔を真っ赤にして立っていた。なにやらいいたい事があるらしい

「なんで、二人はそんな恥ずかしこと普通にできるん？」

「いや、そこまで、恥ずかしくはないぞ。昔もよくやったし。なあ、木乃香？」

「そやね。普通やん。そんな大した事ないおもっんやけど・・・亜子もやつてもらったらええで。結構楽やねん」

「オレを足代わりに使うとは、木乃香も偉くなったな。そんなタクシーは急に事故を起こして、手を離してしまうかも知れんが、仕方ない」

「もうゝ冗談や。だから、おとさんといてな。」木乃香に笑顔で言われるとできない。そして、亜子は何を想像しているのか、顔を真っ赤にして、自分の世界に入っている。全く初々しい。

そんな光景に飽きたエヴァは先に言ってしまい茶々丸も食事の準備に行ってしまった。この状態で亜子まで抱えろと言うのか？

- - - - -

その後、なんとか、食事場に到着し茶々丸の料理を堪能した。かなり、おいしい。で、オレは、エヴァの蔵書を見せてもらうことにし

た。木乃香達は、茶々丸に料理を教わっているようだ。エヴァはゲーム。

「…………エヴァの蔵書はなかなかのものだった。これで、もう少し詰めれば、オレの切り札が完成する。あと、芸術関係の方も結構すごい。さすがに、ドールマスターというだけあって、造形に関する本がたくさんあった。これをもとにすれば、アクセサリーももっと、売れるだろう。そう思い製作することにした。ついでに、木乃香と亜子の魔力媒体も作っておこう。」

「おい木乃香、亜子。魔力媒体を作ろうと思うんだけど、どんな形がいい??」

「うちは、なんでもええよ。」

「うちも、なんでもええです。」

「そんなこと言われたら、ネギ少年みたいな杖にするぞ」

「それは嫌!!」「二人が言う

「あんな、いかにもみたいな格好いいやわ。普通に指輪でお願いや。」

「私も嫌です。むしろ、なんで、あんなの持っているかわからへん。私も、指輪でお願いします。」

ちなみに、亜子が何でネギの事を悪く言ってるのかというと、木乃

香とオレがどんなにダメなやつで危険なやつか、言いまくったからである。惚れ薬の事も言っている。食事中はその話で盛り上がった。エヴァはあまり授業に出てないためよく知らないらしい。

「とりあえず、指輪型で作ってくるわなんか問題が有ったらその都度言ってくれ。」

- - - - - 作成中 - - - - -

「できた。結構うまくいったな。とりあえず、持っていくか。」

移動

「木乃香、亜子できたぞ。着けてみてくれ。」

「わゝなんか、きれいやわ．．．．ん？そゝ君この内側に付いている文字はなんなん？」

「あ、うちのとちゃう。木乃香の方は文字が刻まれているけど。うちの、陣や」

「あ、それ。それが、今回の目玉。木乃香の方は昔見たソロモン王の書から、考案した式召喚をしやすくするものだ。理論上ならソロモン72柱さえ呼べる。あくまで、木乃香の魔力が有ったものだが．．．」

「ブウウウ！！」ワインを飲んで話を聞いていたエヴァが吹き出す。

白い壁が殺人現場のようになってしまった。

「もう、エヴァちゃん汚いえ。茶々丸さんが大変やる」

「木乃香、それどころではない。その男はソロモン王と言ったのだぞ！というより、そんなもんをどうやってみた。世界中でもまだ、見つかってないはずだ。」

「いや、そんなはずない。数年前にオレが遺跡で見つけた。本当はそのままパクろうとしたんだけど、国際指名手配犯になりかねないから、なくなく、譲渡した。その時の一部をコピーしたので今回使ってみた。いやゝ木乃香ぐらいの魔力がなきゃ使えないものだから使いどころがないと思ってたんだが、なかなかどうして、意外と役に立つもんだな」

「……」 啞然とするエヴァ。もう言葉にならないらしい。

「それで、亜子の方が転移の術式を埋め込んである。それを使えばいつでもできる。ただ、一度使うと魔力を充電しなくちゃいけないので、そこは気をつけるように」

「ち、ちよつと待てい！！何か、じゃーそれは、使い捨ての転移符ではなく、何度でも使用可能なのか？」

「まあね。ちなみにこの技術はエヴァの蔵書に有った影を使う転移魔法とゲートから考案されている。影から影に移れるならゲートで転移場所を開きそこに移ればいいというわけだ。ただ、これも、魔力を非常に使うため指輪事態に魔力をためれるように改造した。こ

れも、理論上では木乃香クラスの魔力でも十分に貯められる。それに、貯めておけば自由に使える優れもの。やったね亜子。これで、君も立派な魔法使いだ。」

「やったね！じゃない。なんだその反則的なものは。伝説クラスのアーティファクト並じゃないか。」

「できちゃたんだもん。しょうがないじゃん。それに、造形に関しては、エヴァの蔵書でみた物を参考にしている。やったねエヴァ」

「………」またしても啞然としたエヴァ。できちゃたで済ませる空にもう何も言えない。

「これからは、それを使って練習してくれ。なにか、問題があったら、その都度調整するから。今日はとりあえず帰ろう」

そう言って別荘を出る空達。エヴァはその場に取り残されたままだった。

第20話 クビでよくねえ？

あれから、亜子（部活後）と木乃香は放課後を修行に充てている。木乃香は昔の感覚を取り戻しメキメキと上達している。今なら、ネギ程度ならどうにでもなるだろうレベルだ。

亜子の方は性格のためか攻撃も魔法の矢くらいしか使えないのだが、転移と防御に関しては魔法先生並になってしまった。なんでも、指輪を使うと調子がいーらしい。作った甲斐があったものだ。

そんな感じで日々を過ごしていたのだが、3学期も終盤に入り、期末テストの期間に入った。

他のクラスはそれなりに勉強を開始しているらしいが2・Aに関しては未だにやる気を見せない。普段からやっているやつらは良いのだが、いーかんせん、バカレンジャーを筆頭にクラスの大半は遊んでいる。一応副担任なので言っておく

「お前らそろそろ、期末テストの期間だ。このクラスは万年ビリらしいがもう少し勉強をしたらどうだ？」

「うちの学校は高校までエスカレーター式だから、大丈夫、大丈夫。明石がのん気にそんな事を言っている。」

「ほほう、つまり、それは高校にいったら、ダメだと言っているんだな。そうか、このクラスのほとんどのやつが高校を卒業できずに留年を繰り返すのか。残念だ。せめて、今小学生のやつらと同じ学年にならないことを祈っているぞ。」

「ええ？先生そこは、注意するところじゃないの？」双子の姉の方が聞いてくる

「いやー本人にやる気がないのに注意してもしょうがないだろ。言うだけ無駄。それに、オレは、美術の先生だしそっちの成績はお前達はかなりいいから気にしてない。とにかく、最低限の事さえすれば文句は言わない。」

「教師として、その発言はいかなものかと」綾瀬が言ってくる

「それじゃー生徒として、先ほどの発言はどうなんだ？やる気がないんだろ。それじゃーこつちだって出ないさ。こつちがやる気を出してお前らが聞かないんじゃないやオレがバカみたいだろ。」

「そ、それは確かにそうですが・・・」

ところでなぜ、オレが、こんな話をしているのかというとネギが校長室に呼ばれホームルームに間に合わないからだ。おそらく、課題を言い渡されている頃だろう。昨日監視魔法で確認した。

そんな感じでホームルームをしていると、ネギが入って来た。なぜか、やる気に満ち溢れている。

「えーと皆さん聞いてください！今日のホームルームは大勉強大会

にしたいと思います。次の期末テストはもうすぐそこです。それに、このテストで最下位になると大変なことになるので頑張りますよ。」

自分のために頑張らせる。まあ別に嫌いじゃない。俺だって最下位なら、給料カットとか言われればやらせる。無理やりにでも。

「はい、それじゃー提案。」

「なんでしよう桜子さん？」

「英単語野球拳がいいと思います。」

「は？」

あまりの事に思考がとんでしまった。でも、ネギが断るだろう。・・・なぜか思考するネギ、そして

「じゃあ、それでいきましょう」

バカだった。あまりの無知さに目頭が熱くなる。手で顔を覆った。

「あれー先生はなんで、顔をくしているのかにゃん？」桜子がニヤニヤしながら聞いてくる。

「ハアー・・・桜子、病院に行こう。大丈夫まだ間に合う」

「な、なんで!？」

「お前はそんなアホな事を言う子じゃなかったはずだ。最近つらい事があつたんだな。すまん、気づかなくて。一体何が有つたんだ？くぎみーにいじめられでもしたか？」

「な、何でそんな事になっているの？それに、いじめられてもいないよー！」

「それじゃー気の迷いか。まあ若いうちにはあるだろうが、戻って来い。オレの知ってる桜子に」

「正常だよー」泣きそうになりながら言う

「何！？もう遅かったか。すまん、クギミーに美砂に亜子。手遅れだったらしい。」

「大丈夫ですせんせ。うちが必ず戻して見せます！！」

亜子が乗ってくれた。そこに、くぎみーが桜子の肩に手を置く。桜子もやっと味方が来たのかと思つたが

「桜子。辛い事が有つたらいわなきやダメじゃない。私達友達でしょ」その言葉で桜子号泣。さすがに見かねた美砂が割って入る

「もう、あんまり桜子をいじめないの。ほら、桜子冗談だからね。よしよし」桜子をあやす美砂。お母さんのようだ。

「ごめん、ごめん。桜子があまりにバカなこと言つもんだから、ついで。」

「桜子ごめんな。でも、桜子も悪いんやで、あんな馬鹿な事を言
つて」オレと亜子にバカと連呼され余計に泣く桜子。くぎみも慰
めに入った。そんな事をしているとネギが話しに入って来た。

「八雲先生、あんまりじゃないですか。折角、桜子さんが提案して
くれたのに、生徒の意見を無視するんですか？」アホな事言うネギ。

「それじゃーネギ先生は今の提案を実行する気なんですね？」

「当然じゃないですか！」

ネギの肩に手を置く。

「責任は自分で取ってください。私は止めましたからね。あと、辞
表はかいとした方がいいですよ。では」

そう言つて教室を出る。ネギは、なんだろう？みたいな顔をしてい
たが、自分の意見が否定されなかったことでよかったんだと結論を
出し、野球拳を実行した。

学園長室

コンコン

「誰じゃ？入ってきててもかまわんど。」

「失礼します。報告が有って来ました。」

「お主かめずらしいの」

「いえ。それでは、報告します。ネギ先生が犯罪を犯しました。私が止めたにもかかわらず。」

「ふお？」

「授業中に野球拳を実行させるという完全なセクハラです。今までにも服を脱がすとうが有りましたが、魔法ということもあり、表では言えませんでした。これは言い逃れできません。本人も責任は自分で取ると言ってますし。どうしますか？個人的には警察に行きしかるべき対処をとるべきだと思います。彼は子供なので、刑務所ということには、ならないでしょうが、それなりの対処を強く要求します。」

「待ってくれ！それは、ホントの事かの？」

「はい、うちのクラスのやつに聞けばわかる事でしょう」

「わかった。しばし、待ってくれ。」どうやら確認をとるらしい。数分後、たつみと刹那、春日が呼ばれた。

「で、先ほどの事なんじゃが事実かの？」

「ええ。そうだね。まさか、やるとは思わなかったけどね」 たつみ

「事実です」 刹那

「バカレンジャーなんてほとんど脱がされていたし。あれは、やばいんじゃないの」 春日

「……」 まさかの事に絶句する学園長。なんとか、言葉を紡ごうとする

「じゃが、ネギ君は野球拳を知らなかったのではないかね？」

「たしかに、しらなそうでしたね」 春日が答える

「そうじゃ、ネギ君はイギリスから来たから知らなかったんじゃ。だから今回は大目に見てはくれんかの？」

「それを、オレに言ってもしょうがないんですが・・実際被害にあったのは、生徒ですし。それに、知らないと言っても、オレが責任は取ってくださいと言った時間けばよかったですよ。それを怠ったネギ先生が悪い。まゝオレも、ちゃんと言わなかったですし、警察まで、呼ぶのはあれなんで、罰を与えてくれればそれでいいです。」

「……それじゃー一週間の魔力封印と無償奉仕でどうじゃろ？」

「だから、オレでなく、生徒に聞いてください。被害を受けたのは生徒なんですから」

「私はそれで構わないよ。あのくしゃみが止まってくればいいさ」
たつみ

「私も」刹那

「私もそれでいいよ。私もあんま関係なかったし」春日

「あい、わかった。それじゃーネギ君に伝えるので呼んできてくれ。そして、解散してくれて構わんぞい」

その後ネギは、魔力を封印されたらしい。これで、平和な日々が送れるかと思ったが世間の荒波はどうやらオレに対してきつく当たらないと済まないようだ。

なんと、バカレンジャー+α（ネギを含む）が図書館島に侵入したらしい。BY木乃香 and 亜子

一体何を考えているのだろう。夜間の未成年の不法侵入。立派な犯罪行為だ。

なんか、めんどくさくなって寝ることにした。

- - - - -

翌日 出勤

とりあえず、新田先生に報告

「2-Aの数人とネギ先生が昨日の夜、図書館島に不法侵入したらしいです。今朝、生徒に聞きました（嘘、責任を追及されたくないから。）どうしましょうか？」

そう、聞くと、新田先生は疲れた顔をして言う

「学園長から連絡が有った。なんでも、3日ほど勉強合宿をするそうだ。」

「ふざけてるんですかね？その間のネギ先生の授業はどうなるんでしょう？」

「なんでも、他の先生が代わりをするらしい。勿論君も入っている。外国で生活していたのだから、英語くらい話せるだろうだってさ。」

「教員免許ってなんなんでしょうね」

「最近私も疑問に思ってきた……」

「……とりあえず、学園長に文句言ってきます。」

「私も行ったが無駄だった。」

「それでも行きます。不当労働はしたくないので。」

学園長室に殴り込みをかける。

ドーン！

「何事じゃ！！」学園長室のドアが破壊される

「お話が有って来ました。死ぬ覚悟はできましたか。いまから、遺言を書く時間ぐらいあげますよ。」

「な、何の話じゃ？」汗をかきながら爺が聞く

「うちの担任出勤してないんですよ。数人の生徒も欠席してるんです。生徒情報によると、なんでも、図書館島にいるとのことなんです。知ってましたか？」

「そのことなら、知っておるぞい。3日ほど、合宿させることになった。あの子達はとりわけ成績がわるいからの？」

「ネギ教員の授業は？」

「ネギ君はその子達の面倒を見ている。だから、代わりに授業してもらえんかの？」

「……英語の教員免許なんて持っていませんが。」

「自習という形で生徒の質問に答えてくれれば問題ない。」

「という事は、ネギ先生に関してですが、解雇ということでしょうか？自習で3日も授業を潰し、なおかつ代わりの人が正式な英語教員でもないのに問題ないという事はようは誰でもいいということですね。そんな仕事をしていたにも関わらず、職務を全うでき

ていない。つまり、仕事をしないネギ先生は役たらずでクビということではないですか？」

「な、なんでそうなるんじゃない？」

「バ力ですか？ 仮にも担任ですよ。それが、特定の生徒だけを見るなんてありません。そもそも、なぜ、2 - Aの子達だけ特別視されているのでしょうか？ 他の生徒に対して不公平です。」

「だ、だから、あの子達はとりわけ、成績が悪い子たちなんじゃない？」

「でも、それは、普段から勉強をしないあいつらの責任でしょう。仮に噂で流れているように小学生への降格があったとしても、自業自得でしょ。今まで努力してきた生徒をバ力にする行為です。貴方の行動は」

「・・・・・・・・・・」

「あいつらを連れ戻してきます。あと拒否して、あいつらが合宿を行った場合は他の先生方と協力して、そいらには、絶対にテストを受けさせません。」

「・・・・・・・・・・わかった。ネギ君達を呼び戻してくれ。・・・これが、エレベーターの鍵じゃ。」

「では、失礼します。この後、他の先生方が文句を言いに来るので

頑張ってください。一般教師人全員。何時間になるでしょうね？」

そういうと、部屋を出て行き2・Aに向かう

「先生！ネギ先生とその他は大丈夫なんでしょうか？」あやかがかなりの剣幕で聞いてくる。

「それを今から確かめに行ってくる。今いないバカどもは誰だ？」

「バカレンジャーにハルナにネギ先生」のどかや木乃香は行かなかったらしい。図書館探検部だから、引っぱり出されると思ったが、断ったようだ。

とりあえず、1時間目を自習にして新田先生に監督をお願いして図書館島へ向かう。

- - - - -

到着

貰った鍵を使い地下まで降りる。しばらく歩いて、バカどものん気に遊んでいるのを見つけた。さすがに我慢の限界だ。

「おまえら、此处で何している？」かなり低い声で言うまき絵なんかは怖がっている。

「せ、先生」ネギが何かを言おうとしたが

「おれは、何をやっているのかと聞いているんだ。」

「………」黙るバカども

「まずは、無能お前は教師のくせに何をやっているんだ？」

「僕は、無「黙れ。聞かれた事だけ答えろ」……。皆さんと一緒に本を探しに来ました。」

「何の本だ？」

「頭が良くなるという魔法の本です。嘘でしょうが何かしらの参考書の類ではないかと思ひ探しに来たです。」綾瀬が答える

「それで、なぜ、この無能が此処にいる。」

「わ、私が連絡してついてきてもらったんです。」アスナが申し訳なさそうに言う。

「それで、無能。お前の仕事はなんだ？」

「教師です」

「じゃーなぜ、ここに、こいつらがいる？なぜ、生徒が犯罪を犯すのを止めなかった？」

「「「は、犯罪！？」」「」

「当たり前だろ。夜間に建物への無断侵入、並びに窃盗。立派な犯罪だ。」

「ウ、嘘!?」アスナ達が顔を青くする。だが、綾瀬が

「私たちは自分たちの力で此処までたどり着いたのです。魔法の本らしきものも見つけました。自分の力でなしえたのだから使っても問題ないでしょう」

「ハア、お前はそこまで腐ってしまったのか。お前は人として最低の禁じ手を使っているんだぞ」

「え?」

「おまえは、自分の力で手に入れた物なら勉強したものと同じだと言っているようだが、それじゃーテスト前日に職員室に忍び込み解答を盗んでテストを受けることも良いのか?」

「そんなのいけません」

「お前たちがやっている事はそれと一緒に。自分で勉強せず何か違う物に頼る。立派なカンニング行為だ。古菲、長瀬、お前らは何でも願いが叶うということができたとして、それで、強くなって満足か?」

「違うアル」「そうでござるな」

「それじゃーそれで強くなったやつを認められるか?」

「無理アル」「うむ」

「じゃーなぜ、お前らは勉強に関してズルをする事をなんとも思はない？ 恥ずかしくないのか？ 頑張っているやつに胸が張れるか？ 私はこれだけの点数をとったのだと。」

「・・・・・・・・」 黙る二人

「佐々木だってそうだ。ズルをしてまで体操の代表選手にないたいか？ 自分よりうまやつをケガとかさせて出たとして満足か？」

「うっん」

「神楽坂おまえもだ。お前は何でバイトしている？」

「少しでも学費を返すため」

「盗めばいいじゃないか？ その方が楽だろ」

「そんなことはしません！」

「だが、現実問題、今のこの状況はどうだ？」

「・・・・・・・・」

「早乙女は・・・・・・・・特にない。というよりなぜいる？ そこまで馬鹿じゃないだろ？」

「ハハハ、なんか成り行きで」乾いた笑い自分がした事に反省している。

「いいか、おまえら。世の中自分の好きな事だけやれたらそれは、さぞ楽しいだろう。だが、現実的にはやりたくなくてもやらなきゃいけない事がある。それを嫌だと言ってズルするのは人として最低だ。勉強なんて本当に好きでやっているやつなんてほとんどいない。将来必要だからという理由がほとんどだろう。」

「そして、世の中にはいらないうつもいる。スポーツ選手なんかそうだ。別にスポーツ選手をバカにしているわけじゃないぞ。オレの本業だつてあまり必要ない。でも、科目ごとに見てけばいらぬ教科だつてスポーツ選手以外の人だつてある。それでも、割り切つてやらなきゃいけない、つまり、勉強とは忍耐だ。嫌な事でも我慢してやるという将来必ず使うものだ。だけど、おまえらは、それを放棄した。」

「・・・・・・・・」黙る5人

「その事をよく考えて新田先生の説教を受けて来い。帰るぞ」

「「「は、はい」「」」

うつむいて顔を上げずに返事する5人。どうやらわかってくれたようだ。

「それと、ネギ少年。オレからあなたに言う事はもうないです。此処までの数カ月見て諦めました。オレは、あなたなんかを教師とは認めない。とつと故郷へ帰ってください。」

「……………」無言で泣きだすネギ

「空先生いい過ぎ。」まき絵が庇う。

「じゃー聞くが、ネギ先生がお前らに何をしてくれた？与えられた事もこなせないんじゃない意味ないだろ？代わりの人を呼んだ方がいい。お前らも子供だからという点を除いて考えてみる。何一つ職務を全うしてない。ふざけるなよ。仕事は遊びじゃないんだ。新田先生のように人生をかけて教師をしている人だっている。それをバ力にすることはオレが許さん！！」

「……………」全員が黙ってしまった。

オレは無言で歩きその後になんか続いたのだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

その後、迷惑をかけたやつらは皆に謝った。バカレンジャー達は説教が聞いたのかまじめに勉強している。クラスのやつらもそれを見てやる気を出し始めた。バカレンジャーのやる気が尋常ではなかつ

たので、それを見て焦ったらしい。さすがにバカレンジャーより下にはなりたくないようだ。

そんな感じで3日間を過ごした。その間にアスナや古菲は勉強を教えてほしいと頼んできた。他のメンツはネギに聞いているらしい。まあ、こいつらにやる気が有るので頑張って教えることにした。木乃香やバンドメンバーも呼んで勉強会を開催した。ちなみに、一番成長したのは、アスナだった。アスナは物を深く考えるのが苦手で苦勞していたようだ。数学はテスト範囲の問題をパターンとして覚え他の教科も暗記という形で乗り切った。ただ、国語の現文はどうにもならなかった。古菲の方は日本語があいまいなのでオレが中国語で説明したら意外とすぐにできるようになった。ただ、やはり、英語、国語は足をひっぱてしまうがしょうがない。

他のやつらもわからないところは聞くとする形で、勉強を進める。問題ないようだ。

で、テスト本番。みんなやる気に満ちている。

テストは順調に終わり、結果待ちである。なぜか、魔帆良では、テスト結果を予想して食券を賭ける事が許されているのだが、魔帆良だからだろう。ちなみに、オレは桜子に予想を聞いて2・Aに賭けている。魔帆良のラッキー仮面に聞いたのだから大丈夫だろう。神様、仏様、桜子大明神様。

「今年は何と大番狂わせです。2年生の学年平均73・4点。そしてなんと第1位は平均82点で」

「2-Aです!!」

「……やった……!!」……クラス皆が喜んでいる。オレもウハウハ。なんと倍率20000倍に有ったてしまった。これで、ここでの食事に困る事はないだろう。

「桜子お前のおかげで儲けたから何でも好きなものを奢ってやる。」

「本当?それじゃー食べ物よりブレスレッドが欲しいにゃん。先生がつけてるみたいなやつ。」

「そんなんでいいのか?これくらいなら、いつでも作ってやるよ。だから、なんか好きなもの頼め。」

「えーと、円達も良い?みんなで食べたほうがおいしいし。あと、木乃香も!!」

「おお、じゃんじゃん呼べ。今のオレは食券長者だからな」

「なにそれ、だっさ……い。みんな、空先生が奢ってくるって」JO苑で焼肉食べ放題!!」

「……イッエ——イ!!!!空先生ゴチになります。」」

「みんな頑張ったからご褒美だじゃんじゃん食ってぶくぶく太れ!!」

「「「「それは嫌！！！！」」」」

そう言ってみんなで焼肉食べ放題を目指す！！今日の胃はもたれる
だろう。

第21話 ネギ逃げる(前書き)

今回はちょっと短いです

第21話　ネギ逃げる

あれからテストも終わり春休みに入る。その前にネギについて言うておくとやはり正式な先生になってしまった。新田先生と一緒に抗議に言ったが魔法先生並びに学園長により黙殺されあえなく、ネギを教師にする羽目に……。あいつ、何もしてないのに……。

だから、ネギは一般教師人からすこぶる評価が悪い。最初は子供にしては頑張っているな的な評価だったが、たび重なるネギの出す被害のせいでその評価も最低ラインまで落ち込んだ。

そんな感じで3学期も終わり春休みに入った。

- - - - -

「そゝ君、明日、暇？」木乃香が家に遊びに来た。

「ああ、さつき、仕事が終わったからな、明日はOFFだ。何か用か？」

「あんな、明日デートしよ」

「なんで？」

「もう、そゝ君もう少し反応してくれへんとすねるで」ちよつと怒ったように笑う木乃香、冗談なのか判断がつき辛い。

「急にそんなこと言われてもな……。何かあったか？」

「あんな、明日、おじいちゃんが勝手にお見合いさせるとかいつてんねん。だから、口実つけて逃げようと思ったんやけど・・・」

「・・・・・・・・・・」

「それで、明日はデートしてくれるん？」

「デートかどうかは微妙だが別にいいぞ。ただ、その前に、爺の息の根を止めてくる。あいつ、魔力奪われてもかわらねえな。いつそ、本当に始末・・・・・・・・」

「うちは、それでもいいやけど、それをすると、お父様に迷惑がかかるで」さらっと爺殺しを容認する木乃香。

「む、それは確かにまずいな。クソ、詠春さんが許可を出せばすぐにでもやってやるのに・・・まあ、とりあえずは、爺の所に行ってくる。」

「いつてらっしゃい」笑顔で見送る木乃香

・・・・・・・・・・・・・・・・

ドン

学園長室のドアを蹴破る。折角直したドアもまた壊れてしまった。

「おい爺。どこで、死にたい？選ばせてやるぞ」

「な、何じゃ？一体？」

「おまえ、木乃香に見合いをさせるらしいな。本人の意思とは関係なく。」

「わしも、もう。この年じゃ早くひ孫を見たいと思ってもしようがないじゃろ。」

「バカか？木乃香はまだ14だぞ。今結婚させても無駄だろ。どうせ、結婚相手も魔法関係者なんだろ」

「ふお？そ、そんなことないぞい。一般人じゃ。」

「じゃーその相手の情報を見せてみる。オレが、調べてやる。もし、それで、魔法関係者だったら・・・」

「す、すまん。確かに魔法関係者じゃ。だが、これも。木乃香のためにも思って・・・」

「黙れ爺。なにが木乃香のためだ。自分の後釜を選んだだけだろうが。そもそも、木乃香は詠春さんの子供だ。あの人の許可なくそんなことできるわけないだろ。どうせ、関西との友好のためとか言っ
て木乃香を道具にするつもりだろ。・・・死ぬか？」

「そんなこと、思っておらんわい。孫を心配しない爺がどこにおる？」

「オレの目の前。というより、もうめんどいから、お前が勝手に何もできないように罰を与えて帰るわ」

「罰じゃと？」

「当たり前だ。契約放棄、これで何度目だ？とりあえず。お前に言っても無駄なようだから、人を代える事にする」

「だ、誰にじゃ？」

「英雄の息子」

「な、ならんぞ。そんなことをしたら・・・」

「おまえら、勘違いしているようだ、木乃香も英雄の娘だ。それをここまで自分勝手に扱う事が許されてるなら、関西側もそっちの英雄候補を勝手に扱ってもいいわけだ。文句は聞かない。おまえの自業自得だ。ま、英雄の息子だし、試練だと思えばいいだろ。だから、これから、契約を破るたびに、すべて、あいつに被害が行くようにする。精々問題を起こさない事だ。ちなみに、今回の罰は呪いで悪夢を見せてやる。本人が見たくない夢を。それも1週間。早く夜が眠れるように頑張って解呪するんだな」

「ま、待ってく「じゃ」な「れ」」

爺の声を聞かずにその場を後にする。これなら、爺も問題を起こさないだろう。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次の日、木乃香と原宿へ買い物をする事となった。ただ、それを聞きつけた、美砂達バンドメンバーも一緒についてくる事になった。木乃香も快く了承してくれたので、全員で回る事となった。最初は服なんかを見て回ったりしていた。途中占いグッズに木乃香が目を奪われそうになったがパチモンだと言って押しとどめた。

バンドメンバーは自分の楽器を見て回ったりしていた。円なんかは新しい弦が必要らしい。そんな感じで午前中を過ごし今昼食中

今、女性陣が集まって何か話し合いをしている。

「ねえ、木乃香。あんたは空先生の事どう思ってるの？」

「そゝ君？うゝん、好きやえゝ」普通に答える木乃香

「それは、男として？」

「んゝ、昔はずっと一緒にいたからわからなかったけど、何年も会えなくて、ほんで、やっと会えた時、すごく嬉しかった。また会って約束守ってくれたし。今は、そうやな、男としてそゝ君が好きや。」

「ハアゝだつてよ。亜子に桜子。」

「なな、なんで、そこで、私達に振るん？」

「そゝにゃん。」亜子と桜子が焦りだす。

「だって、あんた達、空先生好きでしょ。亜子はポゝと見つめてる事が多いし、桜子なんて空先生とお揃いのブレスレット貰つてすゝく嬉しがつてたじゃない。わかるわよ」円が参戦してくる

「「んな！？」」二人で顔を赤くする。

「あれ？円も空先生、好きじゃなかったの？」

「まゝ好きか嫌いかで聞かれれば好きね。ただ、男としてよりもお兄ちゃんって感じかな。なんか、身近にいても嫌にならないし」

「あゝそれわかる。なんか、家族というみたいだね。」美砂と円で納得する。二人で、盛り上がっている中、話を振られた亜子と桜子はずつと顔が赤いままだつた。そこに木乃香が話しかけてくる

「ほんで、二人はそゝ君の事どゝ思つてるん？」

顔を赤くしながらも二人が答える

「好きや」「好きかにや」

「そつか。なら、二人はうちのライバルやね。でも、そゝ君は厳しいでゝ」嬉しそうに言う木乃香。それに疑問を持った亜子が答える。

「木乃香はええの、それで？うちのの方が後から空さんの事好きになったんやし」

「好きになるのに順番なんか関係ないやん。最終的にだれが、一番そゝ君に好かれていたかが大事なんとちゃうん？」

「それじゃゝ空先生が厳しいって言うのはどういう意味なのかにやん？」

「そゝ君は昔から興味ない人には、無関心やけど、一度興味、もしくは、親しくなった人には優しいねん。でも、そこからは、なんか越えられない壁が有る。親しくなり過ぎないような越えられない壁が・・・」

「それ。わかるかも。」美砂が話に混ざってくる。円も頷いているようだ。

「なんか、空先生って境界線を引いてるよね。誰であつても越えられない線。なんでだろう？」

そんな感じで話してたのだが、のけものにされていた空が

「女子たちだけで話すのはやめてくれ。なんか、オレいじめられてるみたいだろ。終いには、いじけるぞ。」

「ハハ、ごめん。なんかこっちで盛り上がちゃって。もう済んだから、カラオケに行こう！」美砂が話を終わらす。

「また、カラオケか？好きだね」

「だって私達軽音部だもん」「いや、チア部だから」「そんな感じでカラオケボックスを目指すのだった。」

- - - - -

春休みも終わり3年生の時期が始まる。

「「「3-A組 ネギ先生 and 空先生！」「」「相変わらずテンションが高い

「皆さんこれから1年間よろしくお願いします。」ネギが簡単なあいさつをする。そこで、ふと、エヴァの方を見ている。何かを感じ取ったらしい。

そこに、源先生が入ってくる

「ネギ先生。今日は身体測定の日です。準備をしてください」

「は、はい。それではみなさん、今すぐ脱いで準備してください」

その言葉を聞いた瞬間ため息をついて後ろのドアから出て行った。途中エヴァと視線を合わせたが、あいつ本当にナギの息子か？的な目で見てきた。

教室のドアを閉めた途端中が騒がしくなった。そこで、しばらく、待っていると、裕奈が走ってくる。

「大変！まき絵が、まき絵が・・・」

その言葉を聞いて、クラスの連中が飛び出してくる・・・下着のまま。お前ら恥らいくらい持てよ。そして、クソガキは何でまだそこにいるんだよ！変態じゃねえか。イギリス紳士はどこに行った。

クラスの連中が飛び出してきた瞬間目をそらし退散する。

その後、保健室に向かい佐々木の様子を見る。外傷は特にないようだ。エヴァもただ、血を吸っただけらしい。

なぜ、封印解除されたエヴァがこんな事をしているかというところから、封印解除されたエヴァがこんな事をしてほしいそう。最初は意味もないので事はろうとしたらしいが、ナギの友人、アルビレオ・イマの居場所を教えるというのを対価に条件をのんだようだ。

一応オレも場所は知っているのだが、逆に何で知っているのかと問い詰められても面倒なので知らないふりをした。

爺の依頼では殺さない程度に魔法の厳しさを教えてやって欲しいとのことだった。エヴァはもともと、女子供は殺さないの関係ないだろう。それと、オレの方にも依頼が来て、今回は修行の一環なの

で、手を出さないで欲しいとのこと。これは、すぐに了承した。めんどくさそうだからだ。ただし、こちらに被害が出そうものなら、対処するとは言っておいた。

- - - - -

あれから、授業が終わったネギは見回りをしている。そして、夜更け、春日が襲われそうになったところに、さっそうと登場した。なぜ被害者が春日なのかは魔法関係者だからだ。一般人を巻き込むなとエヴァに言っておいた。

「僕の生徒に何するんですか！」

「・・・・・・」

「貴方が、まき絵さんを襲った犯人ですね。どうしてこんな事をしたのか、教えてもらいますよ。」

エヴァがかぶっていた帽子をとり顔を見せる

「それで、理由を知ってどうする？ネギ先生」

「あ、あなたは、エヴァンジェリンさん！」

「先生、理由など知ったところで意味なんてない。敵の事を知りたいなら倒してしまうのが一番はやいんだよ。氷遁^{レフレクシオー}」

「うわぁ！」何とか回避するネギ。

「どうした、やつの息子にしてはずいぶんと情けないじゃないか」

「（やつの息子？もしかして・・・）と、父さんを知っているんですか！？知っているなら教えてくださいー！」

「さつきも言っただろ。敵に何かを聞きたいなら倒してから聞けばいいと。」

「そ、それじゃー僕が勝ったら父さんのこと教えてもらいますからね。」そう言う呪文の詠唱を始める。春日が近くにいるのにお構いなしだ。父親の事になると、周りが見えないらしい。

「ふん、バカめ」エヴァは春日の後ろに立つ。ネギはそれでも詠唱をやめようとはしない。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル・・・」

「風精召喚」

「精霊召喚か」

「コントゥベルナリア・グラディアーリマゲ・カピアント

「剣を執る戦友・・・捕まえて」風精霊がエヴァに襲いかかる。その下にいる春日にも。エヴァは春日にも障壁を張りながら魔法を防ぐ

「（やった！これなら・・・え！？）」煙が晴れる。無傷のエヴァと血ぬれの春日がいた。

「さすがは立派な魔法使いを目指しただけある。まさか、敵を倒すために自分の生徒を巻き添いにするとは・・・ハハハ、恐れ入ったよ。」

「か、春日さん・・・」ぐったりとしている春日を見て言葉を失う。

「それで、ネギ先生。自分の手で生徒を殺した感想は？」笑いながら言うエヴァ。

「あ、あああああああああ！！」絶叫するネギ。叫びながら、その場を去って行ってしまった。

「まさか、生徒の安否も確かめずに逃げるとは・・・おい、もう起きていいぞ。」そう言われると春日が起きる。その体には傷一つない

「へ、へい。あつしはこれで。」そう言うと春日は全力で逃げる。

さつきネギが見たのは、エヴァンジェリンの幻術である。春日が死んでいるように見せただけで、魔法はちゃんとガードした。

「これで、あの坊やも少しは考えるようになるだろう。」

なぜ、エヴァがこんな事をしたのかというと空のせいである。日

るから、めんどくさい目にあわされているので、ネギが安易に魔法を使えないようにしてくれとお願いされた。ついでにストレス解消も（これが一番の理由）。だから、エヴァは魔法の危険性をネギに教えたのである。

「明日どうなっているか。楽しみだ。」そう言って自分の家に帰るのだった。

第21話 ネギ逃げる（後書き）

次回の更新は遅れるかもしれませんが

第22話 うっかりミスってよくあるよね

エヴァとネギが戦闘を行った次の日、ネギは普通に登校してきた。どうやら、魔法先生達が記憶を改ざんしたらしい。春日自体も実際は傷ついてはいないので、ネギもエヴァに負けたとしか、覚えてないようだ。

エヴァの戦闘が無意味に終わった。どうなったか、エヴァも楽しみにしていただけに、ずくっと不機嫌だった。

学校にきて早々授業をサボタージユ。屋上に行ってしまった。ネギは通常どおり授業を始めようとしたが、昨日の敗戦が堪えなのか、授業に身が入っていない。しかも、途中にパートナーがどうのと言い出した。秘匿する気はもうないんだとは木乃香の談

そのまま、授業が終わり、ネギは暗いまま教室を出て行ったらしい。あやかが何か励まそうとしてクラスに呼び掛けているようだ。バンドメンバー＋木乃香はなぜかオレの所へ来る。興味がないようだ。木乃香達と少し話していると、エヴァがやって来た。円達にはわからないように、認識阻害の結界を張って。

「この学園に侵入者だ。さっき結界を突破してきた。魔力は感じられなかったから、大したことないだろうが、一応見てくる。」

「ああ、それたぶん、ネギ君のペットや。さっき部屋にイギリスの魔法学校から手紙が、うちの部屋に届いてた。おじいちゃん、許可取る前からネギ君をうちの所に住ませる気やったんやろつな。それ

に、あつちもあつちや。わざわざ、差出人が魔法学校になつとる。イギリスは秘匿という言葉がないんやろうか？・・・それで、手紙見たら、下着泥で、服役中のオコジヨがネギの助言者になって、罪を逃れようとしているらしいから、気をつけて。と書いてあったわ。ペットは飼い主に似るんやね。どっちも変態やん。」

木乃香が説明してくれる。

「ほほう。ならば、女の敵を成敗せねばならんな。とりあえず、見つけ出して、ひねりつぶしてくる。」

「いつてら」手を振るオレ。

「ではな・・・っておい、お前も手伝ってくれるんじゃないのか？」

「そいつが、ネギの知り合いなら、オレが行ったら、オレが裏の関係者だってばれちゃうだろ。あの坊主にそんな事が知られたら、余計に面倒だ。だから、断る。」

「そ、そうだったな。では、私は行くぞ。」結界を解除しオコジヨ狩りに出向くエヴァ。

結局、オコジヨは見つけられなかったらしい。翌日、ネギの肩にいるのを見て、エヴァが一人憤慨していた。

- - - - -

「それで、ネギ先生何を考えているんですか？学校にペットを連れてくるなんて。早く戻してきなさい。」早朝からの新田先生の説教

「カ、カモくんはおとなしいから大丈夫です。」

「……。そういう問題ではないのです。仕事中にペットを連れてくる教師がどこにいますか？さつさと部屋に戻しなさい。」ネギが、シユンと落ち込むのを見て、魔法先生の一人が話に入る

「まあまあ、いいじゃないですか、新田先生。ネギ君も知らない土地にきて寂しいんですよ。見た感じうるさくなるような感じでもないし、大目に見てやっては？」

見かねた俺が割って入る。

「……あなた、本当に教師ですか？教師が校則を違反する事を許可したら生徒に示がつかないでしょう。故郷がさびしいなら、帰れば良いじゃないですか。基本的にここでは、止める人の方が少ないですよ。被害を被らなくて逆にいいじゃないんですか？」

「八雲先生！ネギ先生だって頑張っているじゃないですか。」魔法先生が反論する

「教師なんです。頑張るのは当然じゃないですか？それとも、あなたは頑張っていないと？職務怠慢ですね。辞表を書く事をおすすめしますよ。それと、あまり、ネギ先生を甘やかさないでください。そのせいで、オレにとばっちりが来ます。」

「な、貴様！！」魔法先生が激昂する。そこに、新田先生が止めに入った。

「八雲先生も言い過ぎです。気をつけてください。」

「すみません」

「ただ、八雲先生の言っている事が、此処にいる先生のなかで思われているのは事実です。どうも、あなたのような一部の先生はネギ先生に期待しすぎている。学園長さえも。期待するのは構いませんが、それで甘やかしてはネギ先生の将来のためになりません。教師としての節度くらいは守らせてください。」

「……………」無言で立ち去る魔法先生。

「ネギ先生も自分のすることがなんでもまかり通るなんて思はないでください。自分のクラスにペットを連れてきてる人はいないでしょう。なら、ちゃんとルールは守りなさい。」

「は、はい。」そう言われて、しぶしぶ、カモを部屋に置きに戻るネギ。あれ？この流れだとおれがホームルームに行くの？

「新田先生……………」

「まあ、今回は仕方ないでしょう。頑張ってください副担任。」

「は、はい。」そう言われて、3・Aに向かう。どう考えても非常勤の仕事量じゃない気がする……………」

- - - - -
ネギはオコジヨを部屋に置いてきた。だが、それが、問題だった。
ゲージに入れるなりしとけばいいものをそのまま放置。オコジヨは
部屋を出て、女子寮に侵入。下着を盗みまくった。女子寮の生徒が
放課後相次いで被害を訴え捜索が始まった。

下着泥が麻帆良にいるとは、由々しき事態。一部の生徒は怒り狂い
（アスナ）犯人を撲殺しかねない。ココでオレがある提案をする。

「麻帆良は警備もしっかりしている。そう簡単に女子寮に忍び込め
ないと思う。ならば、内部犯の可能性が非常に高い。とりあえず、
男性教師人の部屋を探してみたらどうだ。」

「む。たしかに。それじゃー一番近いのは・・・空先生の家じゃん」
美砂が答える。

「それじゃーオレの家から。その後職員寮に行こう。」バンドメン
バー（亜子を除く）とアスナで家に向かった。

その後オレの家は調べられたが何も出てこなかったので白。次に男
性教師が住んでいる職員寮に足を運んだんだが。

「それじゃーここからだね。えーと、ネギ先生と高畑先生の部屋か。」
「

「あゝ高畑先生！！」アスナが興奮しだす

「神楽坂いくら、好きだからって、高畑先生の私物を盗むなよ。犯

罪だからな」

「あーわ、わ、わかってますよ。そんな事するわけじゃないですか。ハハハ」かなり怪しい態度にみんなの視線がアスナに刺さる

「な、なによ。私は高畑先生の無実を証明するために……」

そう言つてドアを開けたアスナ。だが、開けたと思つたらドアを閉める。そして、いったん深呼吸してからもう一度あける……また閉めた。目をこすっている。

「もうどうしたの？アスナ。高畑先生が裸で部屋にでもいたの？もうこれだ……から」美砂と後ろにいた円がドアを開けると……あつた。裸のタカミチではなく、大量の下着が……

「え、これって、まさか、高畑先生が犯人！？」

「そ、そんなわけあるはずないじゃない！何かの間違いよ。」タカミチを庇おうとするアスナ

「アスナ、さすがにこれは……ん！？」大量の下着の中で何かが動いているのを確認した円

「いやーやつぱ生の下着は最高だぜ！！」エロオコジョがのん気な事をぬかす

「え？今、あのオコジョしゃべらなかつた？」美砂が気づくがアスナがこまかす。

「気のせいじゃない？オコジヨがしゃべるわけないじゃん。それより、犯人はあいつよ。やっぱり高畑先生じゃなかったわ。」

オコジヨもこちらがいる事に気づく。ドアを開けた美砂と円の前にアスナが立ったため、オコジヨからの位置では円達とオレが見えない。なので、失態を犯した

「あ、姐さん。これは違うんだ。オレっちには、故郷に残してきた妹がいて・・・」

「バ、バカ」アスナが防ごうとしたが美砂が聞いてしまう

「や、やっぱり。しゃべってる。」

「みんな、これはね・・・ああああ！！」オレらに弁明しようとしたアスナの視線が力モの咥えているものに移る

「ちょっとそれ、私の下着じゃない。こっちは木乃香の」

「何？」聞き捨てならない言葉が聞こえた

「おい、神楽坂。木乃香の下着もあるとは本当か？」

「う、うん。というより、女子寮の生徒皆のがあるんじゃないのかな？」若干空の怒気に押されながらも答えるアスナ

「そうか・・・おい、そのエロオコジヨ。ココで八つ裂きにされるのと焼却炉で燃やされるのとどっちが良い？オレは寛大だから、選ばせてやる」

「だ、旦那。それだけは勘弁を。オレっちには国に残してきた妹が・
・」

「それが、どうした。今のお前に出来る事はオレの質問に、はいか、YESで答えればいい。もう一度聞くぞ。今からひき肉にするが問題ないな？」

「さっきと内容変わってるし！！・・・こうなったら、逃げるしか・
・オコジヨフラッシュー！」目の前が光って目がくらむ。オコジヨはその間にドアから出ようとする。他のやつらは見えないようだ。だが・・・

「自ら向かってくるとは殊勝なことだ。それに免じて、焼却炉で勘弁してやろう。何より獣の血は臭いからな。」

横を通り抜けようとしたカモを捕まえ即座に変えた鎖で縛りあげる。

「な、なんで！？ クツ、これ、はずせねえ！！」オコジヨが鎖をはずそうとするがはずせない

「オレ特性の合金でできている。30トンまでなら耐えられる仕組みになっている。それじゃー行くか」鎖をつかみ部屋を出ようとする。

「ちょっと待って！！空先生さっきからオコジヨがしゃべっているんだけど、それって貴重じゃないの？珍しいじゃん」復活した美砂が聞いてくる。どうやら、カモがしゃべれる事が気に入ったらしい。

ここで、空はミスを犯してしまう。冷静でなかったようだ

「そんなに珍しくないぞ。魔法関係者ならだれでも知っている事だしな」

「え!？」

「魔法？」

「にゃ」上から、アスナ、円、桜子。桜子だけまだ回復していない。

「あ!」ミスに気づいた空。

「なんだ、旦那も関係者だったんじゃないですか。それなら話は早え。ここは、パーッと記憶を消してしまえば良いですよ。」

「黙れ。ひき肉」空が睨む

「え!？ 八雲先生も魔法を知っているの？」アスナが聞いてくる

「」「魔法って?」「美砂達が聞いてくる。

「あゝあ。やつちまった・・・とりあえず、此処からでないか?ちゃんと話はする。」

「わかった。」真剣な顔で言うと美砂達はわかってくれたようだ。

「それで、そのオコジョはそうするのにゃ?」桜子が聞いてくる。

「とりあえず、眠らしてから連れて行く。下手に動かれると面倒だ

からな。とりあえず移動するぞ。神楽坂は木乃香に連絡してくれ。オレの家に集合と。円も亜子に伝えてくれ」

そう言われて連絡を取りアトリエに向かうのだった。

・・・その後部屋に大量の下着が残されたため、タカミチの犯罪疑惑が流れたのは別の話・・・

- - - - -
- - - - -
- - - - -

アトリエ到着。木乃香達も来たようだ。ちなみにカモは嚴重に封印され寝かされている。

「それで、さっきの話なんだが・・・」

空は、世界には魔法があると言う事を話し、麻帆良は魔法使いがたくさんいると言う事も話した。2-Aがネギのために作られたクラスであることや、ネギが魔法界でどういう立場なのかまで・・・

「そ、それってつまり。私達は英雄の従者候補ってこと？ネギ君に関わった子はなし崩し的に関係者扱いされる。それで、自分の学校から英雄の従者ができれば、魔法世界での地位も高まる・・・ふざけないで！！私たちの人生はそんなことのために有るんじゃない！！」円が激昂する。美砂も怒っているようだ。

「ええ？でも、ネギはそんなこと言ってなかったわよ。魔法は人を幸せにするものって言ってたし」アスナが聞いてくる

「確かに、そういう側面はある。魔法を使えば、死ななくても良い命を救うこともできるだろう。逆に死ななくても良い命を奪うことだってある。魔法は人を幸せにすることもできるが、逆もまたしかりだ。実際、ネギが来てからお前は幸せになった事があるか？公衆の面前で脱がされたり、さんざんだろ。」

「た、確かに・・・あいつが来てから碌な目に有っていない・・・」

「要は扱う物次第だ。此処の魔法使いは正義という免罪符を使って平気で犯罪を犯すからな。しかも、自分が正義であることを疑わない。」

「此処の事はわかったけど、亜子や木乃香は？二人とも知ってるんじゃないよ？」桜子が聞く

「木乃香は御家柄というわけだ。ただ、事情があつて周囲に魔法を知っているということを隠している。亜子は事件に巻き込まれてな、その時だ。」

「それで、私達の事はどうするんですか？」美砂が聞いてくる

「お前達の意味に任せる。今回はオレのミスだし。今回の事を忘れないなら記憶をけして、元の生活に戻してやる。」

「元の生活に戻ったとしても、ネギ君と親しくなったら、巻き込まれる可能性がある・・・」円が考えたようにつぶやく。

「私はできることなら、知らないまま巻き込まれたくない。だから、今日の事は覚えておきたい」桜子が珍しく真剣に答える。

「私も」「美砂と円も同意する

「危険な世界だぞ」

「私は戦ったりはしない。どんなことから、逃げて、それで、平和な生活を手にする。」桜子が語る

「お前が言つとなんか実現しそうだな。美砂と円も同じか？」

頷く二人

「ならオレが、どんな事からも逃げられるようにしてやる。亜子にもやっているんだ。問題ない」

「・・・よろしお願いします」「」

「それで、神楽坂はどうしたい？魔法の事は以前からネギに聞いて知っているんだろ？今更忘れたいわけじゃあるまい。」

「それは、まあ・・・」

「というより、はっきり言って、お前が一番の従者候補だ。木乃香と同室でネギが来た日に面倒を見させようとしていた。タカミチや学園長はお前を従者にする気満々だぞ。タカミチはお前の保護者だし。普通なら危険な事に巻き込ませようとはしない。」

「で、でも。私なんて・・・」

「おまえ、昔の記憶がないんだろ？木乃香に聞いた事がある。おそらく、そこに関係している。」

「え！？」

「タカミチが誰かが封印したんだろ。消した方が良いと。でも、そのタカミチが関わらせようとしている。英雄の息子が来たら突然に何かない方がおかしい。それで、おまえはどうしたい？」

「・・・・・・」アスナが悩んでいる。タカミチに対する思いだろう。

「とりあえず、答えはいったん保留ということで。少し考えてみると良い。麻帆良がお前にとってなんなのか。タカミチ達は何をさせたいのか。」

「は、はい。」

「それと、木乃香の事についてはこちらで、ちょっと細工をさせてもらう。お前を疑うわけではないが、ポロッとネギ達に漏れたら面倒だ。木乃香についての情報は封印させてもらう。」

「わかりました。木乃香のためだもんね。」

「ごめんな、アスナ」木乃香が申し訳なさそうに謝る。

「ううん。空先生。私が考えた結果、どうしても、記憶を取り戻したいと思ったら封印を解いてくれますか？」

「いいのか？おそらく辛い事があつたはずだぞ。知らない方が良かったくらいに・・・」

「それでも・・・思い出したい。そうじゃなきゃ、今の自分に自信を持てないから。でも、まだ、その覚悟はない。だから、覚悟が決まったらお願いします。」

「わかった。」

その後、アスナの封印処理をしアスナと木乃香かは帰って行った。
美砂達はこれから、エヴァの家に行く。

- - - - -

「とりあえず、別荘貸して？」

「な、なんだいきなり！」

「いや、円達に魔法の事ばらしちゃってさ、今から修行でもしようかと。もう、エヴァのうっかりさん」

「私は関係ないだろ！！お前のミスじゃないか。」

「まあ、そうなんだけど。とりあえず、こう言うミスはエヴァのせいにして置くのが一番だと・・・」

「ふざけるな！それじゃ、まるで、いつもミスしているようではないか！！」

「冗談だよ。冗談。エヴァを見たらからかえとオレの本能が叫ぶんだ。だから、許してくれ」

「どんな本能だ！そんなめんどくさい本能があるなら、死んで出直してこい！！」

「……わかった。茶々丸首つり用のひもはどこに有る」

「ここに」さつと、茶々丸が現れて紐を渡す。

「長く生きたものだな。だけど、これでお終いか……さよなら。
来世では良い子に生まれますように……」

「お、おい。本気にするな。冗談「エヴァ」だ。って私か！？此処
はお前が死ぬんじゃないのか？私が出直してくるとこなのか？」

「オレ、まだ、そんなに長く生きてないし。やりたいことだってあ
るし。エヴァは結構生きてるだろ。」

「だから、何で私が死ななければならんだ！！」

「え？死にたいの？変わっているね。自殺志願者？人の趣味はそれ
ぞれだし……。葬式には行くよ。線香（花火）もあげに行くさ。」

「ん？なんか変な言葉が混じってなかったか？……って違う。私に
そんな趣味はない！」

「わかってるよ。そんじゃ、エヴァも弄ったし行きますか。」そ
う言って後ろでやり取りお見えていた4人を連れて行く。

「さっさと行け！疲れる」エヴァも息が上がっている。

その言葉を聞いて別荘に入って行くのだった。

第22話　　すっかりミスってよくあるよね（後書き）

次回の更新も遅くなると思います。

第23話 VS エヴァ

別荘に入ってから、魔力について教えた。亜子に教えたように魔力を流して魔力を感じさせる事から始まった。美砂は魔力があるは感じ取れたがいまいちつかめないでいる。円は自分の魔力を引き出すところで苦勞しているようだ。

ただ、一番すごいのは桜子。すぐに、魔力を感じ取り、引き出す事まで成功している。火^{アールデスカット}よ灯れくらいは一発で成功した。

その後、亜子が少し魔法を見せ、桜子達が感嘆していた。

亜子が

「空さんからもらった指輪のおかげや」

なんて言うもんだから、美砂と円が騒ぎ出す。もうプロポーズされたの？とか結婚はいつ？とかいろいろ聞いている。亜子も自分の言った事を理解し顔を赤くしている。

桜子は少し悲しそうな顔ををしている。

「ああ、勘違いしているようだと言っておくが、婚約指輪でも何でもないぞ。魔力媒体のことだ。オレのオリジナルで魔法の発動を助けるものだ。今、お前の持っている杖をかなりすぐくしたものだと思ってくれば良い。魔力を流すだけで転移が可能になる優れものだ。」

そう説明すると美砂達も欲しいと言っつので魔力が引き出せるようになったら渡すと言っておいた。最初から楽をするのは良くないので

それから一日かけて、美砂と円は魔力を引きだせるようになった。

桜子は亜子と一緒に簡単な魔法を練習している。

オレはその間に魔力媒体を精製。円と美砂はペンダント型、桜子は以前あげたブレスレットを改良したものだ。

それぞれ、転移魔法を発動できるように陣が刻んである。ただ、日ごろから、魔力を補給しないといけない。ついでに、亜子や木乃香にも渡してあるが、魔力を隠蔽するお守りを渡しておいた。持つてさえいれば発動する。さらに、精神干渉されてもかかったように誤認させてくれる。

そんな感じで一日を終えた。別荘を出る時あまり使い過ぎると老けると言ったら美砂達は顔が固まっていた。

- - - - -

エヴァに別れを告げて帰る事にした。途中で亜子達とは別れ、アトリエに戻った。そして、今まで、寝かしておいたエロオコジヨの記憶を消しある術式をかけた。それは、爺の下着にしか興味を持たないという物でこれで、木乃香達が悩まされる事はないだろう。エロオコジヨは男性職員寮に段ボールに詰めておくっておいた。

翌日

授業も終わり、帰宅しようとしていたが、あやかが何かに呼び出されたように裏庭に向かうところを見た。その顔はどこか嬉しそうだった。気になったので、こっそり後をつけてみると、エロオコジヨを肩にのせたネギがやって来た。何やら少し会話をしている。

「あ、あのーそれでネギ先生・・・私、立派にパートナーを務めて見せますわ!!」

「へ?・・・カモ君!!」

「すまねえ兄貴。吸血鬼に勝つにはパートナーは必要不可欠。だから、こつちで、手を打たせてもらったぜ。・・・大丈夫、あの姐さんは兄貴に好意を持っているだから・・・バクティオー契約!!」

「わ」「きゃ!」どうやら仮契約するようだ。とりあえず、オレの知った事ではないので、気にせず帰る事にする。さらば雪広。きつと、危険な事にわんさか会うだろう。でも、くじけず頑張れよ。

空が去った後、仮契約がなされたようだ。

翌日

下駄箱の前でイチヤつくネギとあやかを見た。話しかけると面倒そ

うなので無視して職員室に向かおうとしたが、エヴァが茶々丸を引き連れた現れる。ネギと少しやり取りをして、ネギが箒でどこかへ飛んで行ってしまった。え！？魔法の秘匿は？・・・それよりも、今日の授業はどうする気だ？

「ネギ先生！！」ネギの後を追うあやか。委員長まで学校サボる気か？

とりあえず、この後、強制的に仕事をさせられてしまう原因を作った幼女に・・・裁きを

ガシ！エヴァの頭をロックする。勿論、少しの間だけエヴァの魔力を封じている。

「い、痛あ！だ、だれだ、何をする！！」後ろから捕まれたのでオレの事は見えていない。

「エヴァ、オレは今非常に怒っている。なぜだかわかるか？」

「その声は空か？な、何をする！？いいからこの手を離せ！！」

「それは聞けない相談だ。オレが怒っている理由を答えたら考えてやる。ちなみに、選択形式だ。1、エヴァが、ネギをいじめたから。2、そのせいで、ネギが、どこかに行ってしまったから。3、それを追った雪広が心配だから。さあ、どれだ？」

「さ、3だ！一応お前も教師だから生徒は心配だろう。すまなかった。まさか、雪広あやかがいる前で杖を使うとはおもわなかったんだ。あいつら、まさか、仮契約でもしたのか・・・」ぶつぶつと考えるエヴァだが・・・

「はずれ。そのせいでこれから、ネギの仕事を押しつけられるオレがかわいそうだからだ。理由はわかったな。ということで、これから、お前には、罰を与える」

「な?! 貴様、それは、選択肢になかっただろ!ズルだ」

「何? 私は反省したいのであるべくきつめの罰をだと、そうか、なかなか良い心構えだ。良しその心意気に免じて、一週間、ニンニクのおいを嗅ぎ続ける呪いと口の中にネギの味がする呪いを掛けてやろう。まあ、おまえなら、もう少し早く解除できるかもしれないが……」

「そ、それは、私に死ねと言っているのか!? どんな拷問だ。鬼! 鬼畜!」

「そうか、そうか。解除は困難な方がいいと。さすがだエヴァ。先生は向上心のあるやつは好きだぞ。というわけで……フッ」エヴァに呪いをかけるしかも、解除の術式がコロコロ変わるようなものを。

「うつつ、ほ、ホントにニンニクとネギが……やめろ、早く解け。うわあああん」苦しみもだえるエヴァ。そんなエヴァを横目に職員室に向かう。茶々丸に強力な睡眠薬を渡しその場を去った。

これで少しストレスが減った。

ネギの代わりに授業をして一日が終わった。最初はネギとあやかがいない事にみんなが心配したが（エヴァは自宅でぐっすり。いつもサボっているので心配されない）愛の逃避行だと言ってその場を静めた。何人かは固まってしまったが、他のやつらは逆に盛り上がったしまった。

「冗談だ。ただの登校拒否だ。いじめにでもあったんだろう。まあ、雪広がついて行っただ、おそらくは大丈夫……ではないな。貞操の危機か？ いやでも……」そんな感じで言ってみるとまき絵なんかはかなり落ち込んでいる。

「せんせー教師が登校拒否というのはどうなんでしょうか？ スクーブですか？ まさか、職員室で壮絶ないじめが……」朝倉が変な事を言い出した

「いや、オレもそう思うんだが、学園長は大丈夫じゃとか言って承認している。給料泥棒だよな？ ちなみに、職員室ではそんな事は起っていない。たしかに、仕事をサボるネギ先生のことを快く思っていない人が多いのは事実だが、子供相手にそんなしょうもない事するひとはいない。」

「な〜んだ。折角スクープだと思ったのに」

「ハア、それなら、教師が仕事をサボっている事でもネタにしてくれ。それで、充分だろ」

「あ、それも面白いかも。でも、それをすると、ネギ君かわいそうだし……」

「ああ、とりあえずは、出席をとるぞ……」そんな感じで一日を終えた。そこで、エヴァの様子でも見ようと思ってエヴァの家に向かう。木乃香達も一緒だ。

「おい、エヴァ大丈夫か？」

「クッ、お、おまえが、それを、言うのか？うう」何だかエヴァを見ているとかわいそうになってきたので呪いを解除することにした。オレが解除したとたんにエヴァが笑い出した

「フフフフ、よくもこの私にこんなへんてこな呪いをかけてくれたな。こんな屈辱を受けたのはナギ以来だ。フフフフ」エヴァが壊れた

「な、そ、君。エヴァちゃん様子がおかしいで。なにしたん？」木

乃香が不安そうな顔で聞いてくる

「いやーちよつとテンションがあがちゃって大人げない事を・・・」

「空！決闘だ！この怒りをお前にぶつけてやる！！」

「おお、キレたか。だが、エヴァよ最強の魔法使いを自負するお前が自分より弱いやつに決闘を申し込むなど正気か？誇りある悪はどこに消えた？」

「む、た、確かに・・・いや、なら、この怒りはどうやって発散すれば・・・」

「ネギ坊主にでもぶつければ？木乃香との修行でもいいし」

そう言つとエヴァが張り切りだした。

「ちよ、ちよつとそゝ君何言ってるんや。そんなことしたら、うち死んでまうやんかー」

「木乃香回復魔法の準備はバッチリだ。逝つて来い。お前の犠牲は無駄にはしない」サムズアップして答えるオレ、すると木乃香が

「そゝ君おいたが過ぎるでゝ。そっちがその気なら・・・」木

乃香の笑顔が怖い

「な、何をする気だ」

「エヴァちゃんって本当にそ〜君より強いん？なんか、封じられつつたようやし。本当に最強の魔法使いなんか見てみたいわ。うちのお師匠様なわけやし、強いとこみせて〜」笑顔でそんな事をのたまう木乃香

「フッフ、木乃香よ。そうか、そんなにみたいか、最強がどういうものかを！ならば、見せてやろう！そして私を見直すがいいさ。」

「だって、そ〜君頑張ってるや。回復魔法はバッチリや。遠慮なく逝ってきてええで」

「こ、木乃香さん。じ、慈悲を・・・」

「無・理・うちを嵌めようとした罰や」木乃香の満面の笑顔

「あ、亜子。お前もエヴァになんか言ってるやってくれ。このままだとオレの命が・・・」

「せんせ。往生際が悪いで覚悟決めや。」亜子にまで・・・

「お前達からも・・・」円達を見る

「無理」

「自業自得」

「にはは、空先生頑張つて」上から円、美砂、桜子

「おお、神はオレを見放した。」

「空、そろそろ行くぞ。別荘なら問題ないからな。私もお前の本気には興味があつたんだ。良い機会だ。見せてみる」

「………」無言のまま引きずられていく。そして、別荘に入るのだつた。

「ケケケ、ゴ主人オレモ混ぜロヤ」茶々ゼロがそんな事をぬかす。嫌がらせか？エヴァと同時に相手をさせるなんて・・・

「茶々ゼロ。今回お前の出番はない。茶々丸もだ。離れてみておけ。」

「チエ。シャアネエナ。空、死ヌナヨ」そう言つて茶々丸の頭の上に移動する

「お前達も良く見ておくと良い。特に木乃香。お前は血筋上最強とやりあう可能性があるんだ。よく見ておけ」

「わかったえ」そう言つて木乃香達も離れた場所に移動する。

「ハアゝやるしかないか。手加減してくれよエヴァ。」

「私が、そんな事すると思うか？おまえこそ、あまりに弱いと死んでしまつかも知れんぞ？せいぜいキバレよ。」

「まったく、ラカンと同じような事言いやがつて。弱い者いじめは良くないって先生に教えられなかったのか？そうだったら、今教えてやる。だから、手加減を」

「私が教わつたのはどんな時でも全力を尽くせという言葉だ。いやゝ実にいい言葉だとは思わんか？」

「じゃあ、せめて、ルールを決めさせてくれ。不老不死相手だと、オレが死ぬまで終わらなそうだし」

「確かに。空筋肉ダルマと勝負した事があると言っていたな。その時もルールを決めたんだろ？そのルールで行こう。お前はラカンに勝てたのだろ。なら、私がお前に勝てばラカンより優れているという証明にもなる。どんなルールでやった？」

「制限時間を30分とって、最後までオレが立っていたらオレの勝ち、倒れたら負け。でも、あの時はオッサンはオレの魔法をほとんど初見だったからなんとかあったけど。エヴァは少しは知っているだろ？」

「フン、大した違いはないさ。お前の転移とあの空間はわかっていても対処はしづらい。あの広域殲滅は使えないだろうが、他にもあるんだろ？ 戦闘で見たのはこれくらいだからな」

「あの空間は使わない。あれは、初見じゃないと意味があまりないからな。エヴァのような強者には。それと、しし座も^{リーオウ}」

「いいのか？ そんな情報を与えてしまつて？」

「問題ないさ。ラカンにもあまり効かなかったし。それと、オレも自分があ頃よりどれくらい成長したか確かめるチャンスだ。久々に全力で行くぞ。」

二人が距離をとる。

「私から行くぞ。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 闇の精霊100柱・魔法の射矢・連弾・闇の100矢」100本の矢が飛んでくる。

「いきなり、100本かよ。ふたご座^{ジヘミ}」素早く陣をかきエヴァの後ろをとる

「甘いわ。氷爆」無詠唱で追撃。だが、空も二度目の転移

「閃撃」エヴァの側等部から喰らわせる

「フツ」エヴァは障壁を張って防御するが展開が不十分で吹っ飛ばされる。が、

「だから、甘いと言っている！」オレの影から転移してきたエヴァによってブツ飛ばされてしまった。

「まだまだ行くぞ。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。 闇の吹雪」オレに向かつて放たれる。

「^{ペガサス}ペガサス座」エヴァの魔法を送り返す。

「何！？グツ」自分の魔法が後ろから帰って来た事に驚きそのままくらう。多少は弾いたようだがダメージを受けたようだ。煙の中から出てきたエヴァ

「驚いたぞ！まさか魔法を転移させるとは思わなかった。だが、欠点もあるようだ。最初の魔法の矢にそれを使わなかったのは範囲が広がったからだろう？お前が、展開した陣よりも広範囲な魔法はお前もダメージを受けるようだ。わずかだが服が凍っているぞ。」

「さすがにばれるか。まあ、一発芸みたいなものだ。オレ的には自分の魔法を喰らってその程度の傷しかないお前の方が問題なんだけ

ど・・・」

「傷はあっても私は真祖だ。すぐに治る」

「ああ、なるほど。つまり、傷の回復が間に合わないくらいの攻撃じゃないと意味がないと。厄介な。そろそろマジで行くか」

「左腕に「魔力」右腕に「気」——合成」

「ほう。感卦法か私の闇魔法と同じ究極技術の。だが少し弱弱しいな。」

「いや、もう一段階上がある」

「何!？」エヴァが驚く。

「制限時間つきだが、ラカンともやりあえた。技だ。いくぜ」

「ごくか極卦法」圧倒的なエネルギーが空の身を包む。

「ま、まさか、感卦法状態からの感卦法とは恐れ入った。」

「お前の闇魔法と似たようなものだ。要はブーストだからな」

「私の魔法を知っていたか。ラカンにでも聞いたか？ならば見せてやろう」

エヴァが構える

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。 闇の吹雪 術式固定。掌握」エヴァの体の色が黒く変わる

「それが、闇の福音の禁呪か」

「ああ、適性がないものが使つと身を滅ぼす。ラカンも使えはしま
い」

「そうだろうな。あいつは闇からは程遠いバカだからな。んじゃ、時間がないから行くぜ」

「来い！」その言葉と同時に大気が震える。空が一瞬で接近し

「オラ！」エヴァをカチ上げようとする

「フン」エヴァもそんな空の攻撃を弾きカウンターをくらわそうとする。

「五月雨！！」エヴァのカウンターを喰らう前に同時五か所攻撃を

実行

「グッ」エヴァも全身を魔力で覆っているがダメージをこらえきれなかった。

「終いだ。攻の巻きが一つ 雷迅」 ただの突き。ただし、極卦法によって上げられた肉体によって行われる破壊力、スピードともに一級品の突き

「クワアああ」エヴァが海の方に吹っ飛んで行った。

「やったか？」水しぶきが晴れて目を凝らす。そこにはダメージを負いながらも浮かんでいるエヴァがいた

「やっぱ無理か」

「ハハハ、空今のは効いたぞ。これは、お返しだ。術式解放。闇の吹雪」

先程、極卦法が解けてしまい今は身動きが取れない。空は必死に気を高め防御に徹した。

「う、ググウウー！」何とかこらえる

「ほう、堪えたか。だが、その状態では、何もできまい。これとどめだ 断罪剣」

「ク、ふたご座^{ジエミ}」エヴァから距離をとる

「離れたところで、現状は変わらんぞ。それに私はまだ余力を残している。最上級の魔法を取り込めば瞬殺だ」

「ハアハア、確かにきついがオレにも奥の手は残っているんだぜ。」

「ほうならば見せてみよ。」

「ああ。これを戦闘で使うのはおまえが初めてだ。誇っていいぞ。空が構える

「今ここに我願おう。すべての精霊の王今ここに召喚されたし。星座を統べる召喚者八雲空の名の下に」

「神聖龍!!!」空の言葉に反応し陣が描かれていく。そしてそこから、龍を模した精霊の塊のようなものが出てくる。

「な、何だそれは！！？そんな生物見たことないぞ」エヴァが驚きのあまり聞いてしまう

「こいつは、生き物じゃない。大気中にいる精霊達が固まってできた姿だ。唯一オレの陣で言葉で作るものだ。強いぞ。気をつけるよ。」

「フン、そんなもの リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、永遠の氷河。全ての命ある者に等しき死を。其は安らぎ也。術式固定、掌握」

「行け！」エヴァに向かって放つ。それを魔法で取りこんだエヴァが真っ向から受ける。激しい激突の後わずかにエヴァの力が勝る。

「これで、どうだ！！」エヴァが神聖龍を投げ返す。それが、オレに向かって来た。だが、

「術式吸収」投げ返された神聖龍をそのまま、自分の力として取り込む。

「これが、今のオレに出せる全力だ。」

「そいつは、遠距離攻撃ではなく、お前の力を高めるものだったのか。」

「ああ。言っておくが今のオレは強いぜ。死ぬなよ！？」

「フン、不死の私にそれを言うのか！来い。返り討ちにしてくれるわ。」その言葉を最後に爆音が鳴り響く、エヴァはただ殴られ続けるだけだった。空が消えたのを最後に後はどこに行ったかさえもわからない。ただ、気づいたら殴られている。

「ゲホツ」殴っていた方のそのから血が流れる。そこをエヴァは見逃さない

「術式解放。おわらせるかい。」全力で魔法を放つ。

「ウおおおおお！！」空がそれを迎え撃つ。拮抗したのは一瞬。エヴァの魔法はかき消された。

「これで終……」空が急に倒れる。最後に見たのは满身創痕のエヴァが叫んでいるところだった。

第24話 ネギの運命は・・・

エヴァとの戦いの最中に気絶した空は絶賛筋肉痛。

体内に精霊を取り込むのはいいが、制限時間は1分チョイとかなり短くしかも体中にかなりの負荷がかかるため使用後は起き上がれないほどの筋肉痛に見舞われる。

そんな現状なので木乃香達が介護をしてくれているんだが

「そゝ君、あゝん」木乃香がスプーンでよそってくれたものを口に近付けてくるが

「・・・・・・・・」無言のアピール

「ほれ、恥ずかしがらなくても良いんよ。あゝん」

「・・・・・・・・」

「そゝ君たら意外と恥ずかしがり屋なんやね。」木乃香は笑顔で食べさせようとするが気づいてくれない

「ねえ、木乃香。たぶん、口が開けないんじゃないかな？茶々丸さんが言うには全身筋肉痛で立つこともままならないって」円がオレのアピールに気づいてくれた。

実際の所木乃香にご飯を食べさせてもらったところで恥ずかしくなんてない。ただ、食べたくても食べれないのだ。

「そおなん？そつやたら早く言ってくればよかったのに。うち一人でこんなん恥ずかしいわ」顔に手を当てて恥ずかしがっている木乃香はかわいらしいのだが、いかんせん今はそんな事はどうでもいい。早く回復しないと何日もの間絶食なんて事になりかねない。死んでしまう

「それでしたら、こちらをどうぞ。」茶々丸が気を利かして液体状のものを用意してくれた。呼吸はできているので吸うことぐらいならできる。

「ありがとうな茶々丸さん。ほな、そゝ君飲んでや」そう言って看病される日々が三日ほど続いた。実際はもつとかかるのだが、木乃香が魔法で回復させればいいんじゃないか・・・との亜子の言葉でようやく気づいたのが三日目だった。

- - - - -

体もある程度治ったので別荘を出る。エヴァは先に出ていたようで不機嫌そうにソファーにふんぞり返っていた。

「遅かったようだな」

「いやゝ木乃香が治癒魔法を使うのをすっかり忘れててさ。気づいたら三日経ってた。」

「バカ者め……それで、最後に見せたあれは何だ？」

「何だと言われても。精霊の集合体？としか言いようないんだけど……」

「それは良い。問題はなぜおまえがあれ程の上級精霊を集める事が出来るかを聞いているんだ」

「んゝゝ……契約したから？確か精霊王って言ってたっけ？」

「……」言葉が出ないほど驚いているエヴァ

「アリアドネーで陣の強化のためにいろいろやっていたんだけど、召喚系がちょっと完成してなかったからなんか強いと呼ぼうと思って適当にやったら精霊の親玉らしきものが出てきて、意思疎通できたらから契約してって言ったらあつさりと契約してくれた。ただ、人間の身に精霊王を下ろすのは無理だから上級精霊を呼んだだけ」

「そんな簡単に済ませられるかあああああああ！！！」エヴァが叫ぶ

「ええ〜でも事実だし。それに、オレはまだ制御ができないからエヴァクラスになると持ちこたえられた時点でオレの負けは決定なんだよね〜」

「た、確かに。不完全なものではあったが・・・それでも・・・」
エヴァがぶつぶつ言いだしたのでとりあえず放置。

「それで、木乃香達は参考になったかい？」当初の目的を聞いてみるが

「速すぎてようわからん」木乃香を含め全員が頷く

「だよね〜。でも、木乃香はこれくらいのレベルの戦闘があるかもしれないからがんばらないとね」

「うち頑張る」決意を新たに木乃香はやる気を見せている。良い傾向だ。逆にやる気をなくされたらどうしようかと思った

「亜子達も直接最強クラスに襲われる事はないだろうけど、あの厄災坊主の近くにいたら巻き込まれる可能性があるから、逃げる手段は早々に身につけないとね。いくらオレの作った魔力媒体があっても不意を突かれて即終わり。なんてことにも成りかねないから気をつける事」

「う、うん」なんかみんな不安そうだが

「まあ、これからがんばって行こうって事だ。」

「は、はい」

そんな感じでエヴァ戦の後の検討会を終え、エヴァが思考に没頭している中茶々丸に挨拶をして帰った。

- - - - -

翌日

なぜか顔が晴れ晴れしているネギを見る。どうやら、何かあったようだ。雪広と何かを決意した目で学校に向かっている。

今日は登校したのだから授業をちゃんとするだろうと思い空も職員室に向かった。

「そう思ってた時期もありました、はい。」

「先生いきなり何を言ってるの？」裕奈が話しかけてくる

「おお明石か、学校にきて早々姿をくらました担任についてどう思

う?」

「にやははは」苦笑して答える裕奈

そう、あるうことにネギはホーミルムをサボりいきなりエヴァの家に向かった。雪広を引き連れて。エヴァは花粉症と風邪で休んでいる。封印も解けたのでそんなことにはならないと思ったが長年悩まされてきたものに習慣がついてしまったらしい。茶々丸の話ではすぐに治るとのことだが・・・吸血鬼か本当に?

それを聞いたネギは誰にも連絡することなくエヴァのもとに向かった。何か手紙を携えていたようだ。新田先生もあきれにあきれたが学園長は家庭訪問じやの一点張りで問題ないを貫いた。

これ以上ネギに振り回されるのは嫌なのでホーミルムを終えらるとすぐにエヴァの家に向かった。茶々丸から入室の許可を得ているので勝手に入る。一階にはだれもいなく二階へ上がろうとすると何か呪文の詠唱のようなものが聞こえた。どうやら夢見の魔法を使っているらしい。

ネギに気づかれないうに接近し後ろから手刀をくらわし気絶させる。エヴァの回復をして事情を話すと烈火のごとく怒りだした。安らかに寝ているこの餓鬼を殺さんと言わんばかりの荒れようだ。

「どけ空！そのガキは氷漬けにしないと気が収まらん」

「オレはそれでもいいんだけど。それをするとなとが面倒だぞ。此処はオレに任せておけ」黒い笑みを浮かべて答えるとエヴァが

「な、何をする気だ？」若干引きながら尋ねてくる

「人様の夢を覗くやつにはお仕置きをしないと。きっちりオレが働かされた分を返してやるぜ」

「おい、お前そつちが目的だろ！！」

「細かい事を気にすると大きな大人になれないぞ」

「私は大人だ！！」

「寝言は寝て言え少女。それじゃーとびっきりのやつを逝きますか・
・・」

「なんか字がおかしくないか？それと少女じゃない！！」

「そんな事はどうでもいい。ホイっとな」術式を描いて発動させネギにくらわせる

「一体何をしたんだ？」

「夢の改竄」

「????」

「なんでも、この餓鬼は昔悪魔の大群に襲われたらしい。んでそこに英雄が登場しこの餓鬼を助けたようだぜ。その時にこの杖をもらったらしく英雄生存説が本格的になったって話」

「それで？」エヴァはナギが生きているかもしれないと言う事は知っているので驚かない

「それで、この餓鬼は自分を救ってくれた英雄様を目標に今に至るらしい。いやゝ泣けてくるね。自分を救ってくれた親父にあこがれその背中を目指すなんて。石化された村人たちを気にも留めずに。こいつを守るために戦ったやつらもいるだろうに」

「確かにな。この坊やは石化解呪なんて目指してないだろうし、攻撃魔法だけを学んだんだろう」

「そうだ。そんなに強くあこがれた親父様の夢を改竄してやろうと思っただけだ。」

「ククク、なかなかあくどいじゃないか。」

「お代官様ほどでは・・・こいつの憧れた親父様がダメ人間だったって夢を見せているからな。子供を作ったくせに働かずNEET。拳句の果てには子供を捨てて嫁と逃亡。酒と薬に溺れて廃人になつて行くスペクタクルストーリーだ。なかなかだろ」

「後半以外は間違っていないしな。ついでに大規模破壊をして絶賛逃亡中と付け加えてくれ」

「了解。パチン」追加の夢をネギに見せる。ネギが苦しんでいるようだ。うだが気にしない。

「それじゃーこいつは職員寮にでも放り込んでおくから。オレは学校に戻る。お前もしっかり寝とけよ。」

「ああ。それにしても、この挑戦状はどうする気なんだ。やるのか？」

「やるんじゃないの？何か秘策があるみたいだし。今日は気合が入っていたからな。そう言う純粋な少年の心を砕いてやるのも大人の役目だぞ」

「再生しないかもしれないがな」

「それはそれで面白い。ガラスのハートを持ってやっていけるほど甘くはないさ。オレのストレス分も兼ねて叩きのめしてやってくれ。むしろひと思いに……」

「私は女子供は殺さんさ。」

「お優しいことで。じゃーな。」そういつてネギを担いで学校へ向かうのだった。

- - - - -

授業も終わって放課後一般教師だけで職員会議を行った。議題はネギについてとそれを擁護する先生について

「これ以上ネギ先生が仕事をサボるようなら教育員会に訴えようと思う。学園長はいくら言っても取り合わないし、なぜかネギ先生を擁護する先生がたくさんいる。これはどう考えてもおかしい。被害が我々までならまだ我慢できるが、生徒に及ぶとなると考えなければならぬと思う。」

新田先生を中心にネギをやめさせた方がいいという意見で満場一致していた。だがそこには大きな問題があり学園長が認めないのだ。だから、教育委員会に訴えるしかないという結論に達したわけだが・

「おそらく学園長が妨害するでしょうね」オレがそう言つと皆がため息をつく

「学園長がその気なら我々も決断しなければならない。この学園を去るという決断を。正直此处はおかしすぎる。」

「確かにそうですね。どうせなら、ネギ先生の問題行動をマスコミにでもリークすればいいんじゃないですか？たとえしなくても学園長へのけん制にはなるでしょう。」

「私もそれを考えたのだが・・・生徒達に被害が及ぶのは避けたい。ただこのままネギ先生が教師を続けるとなるとそうせざる負えなくなる現状がなんとも・・・」

一般教師人は誰一人としてネギを擁護するものはいなく、どうやって解雇できるかを話し合っていた。

「とりあえずオレが副担任としてネギ先生に問題行動があつた事を学園長に伝え、こちらの要求を訴えてきます。」

「わかった。よろしく頼む。私が行くといつの間にか追い返されているから・・・全く何でだろう？」

おそらく学園長が新田先生に魔法を使っているのだろう。あの爺！

「任せてください。この際ビシッとやってやりますんで」そう言つて職員室を出て学園長室に向かうのだった。

- - - - -

「爺話がある。」低いトーンで話したす。

「な、なんじゃ？」オレの雰囲気気押されつつも聞き返してくる

「そろそろ我慢の限界だ。あのクソガキを解雇しろ。ちなみにこれはオレだけではなく一般の教師全員の意見だ。拒否するとなると・・」

「どうなるんじゃ？」まだ余裕がある顔をする爺

「教育委員会に訴えるそうだ。だが、お前が邪魔をするだろうからマスコミにリークするという話もある。これが認められない場合は全員が退職願を出すそうだ。」

「ふお！？ま、待ってくれ！！マスコミはまずい」慌てて止めに入る爺

「言つとくがオレも報告するぞ」

「誰にじゃ？」

「アリアドネーと帝国。一応連合にもな。」

「なにをじゃ？」

「アリアドネーと帝国にはお前が魔法を使って人心を操っていると
いう犯罪を。連合には無駄だろうがネギの修行失敗とオコジヨ刑の
要求」

「ま、待つんじゃ！！わしはそんなことしておらんぞ！それにネギ
君はまだ修行に失敗したわけではない。」

「黙れ爺。お前が新田先生に魔法をかけている事はわかってるん
だ。証拠が欲しいなら出してやる。新田先生にかかった魔力残滓を
追えばお前に行きつくぞ。知つての通り人を操るのは重罪だ。余生
をオコジヨとして過ごすんだな」

「そ、それは、新田先生の事を考えて・・・」

「死にたいのか？どこに考えている要素がある。都合が悪くなったから使ったんだろ。」

「・・・・・・・・」

「そういうわけだ。あのガキの事は早く何とかしろよ。修業成功とか言って送り出せば元老院のアホどもはすぐにでも呼びよせるだろう。良かったな。英雄の誕生だ。操り人形だな。」

「一学期が終わるまで待つてくれ。そうすればネギ君を本国に戻そう。わしもその時に罪を償う。」

「・・・・・・・・ここら辺が落とし所か。新田先生も生徒に迷惑がかかる事は避けていたし。ただお前は契約違反のしすぎだから魔力の永久封印だ。文句は言わせない。それと詠春さんにも報告しとくが関東と関西が友好を結ぶことはないと思え。」

「わかった。それは嬪殿と話し合おう。それと一つお願いじゃが・
」

「なんだ？」

「今度の大停電の時ネギ君とエヴァの戦いを邪魔しないで欲しい。」

「前にも言ったがこちらに被害がなければかわるつもりはない。どうせ何かを細工してネギを勝たせて箔をつけようとしてるんだろ。うがあまりなめた真似をしてエヴァを怒らせるなよ。とりあえず殺しはしないから、下手に横やりを入れるとキレて殺しちゃうぞ」

「わかっておるわい」その顔はわかってない顔だ。まあネギが死ぬ分には問題ないので良いのだが

とりあえず釘は刺したのでこれで良しとする。大停電でネギが死ぬ事を切に願う事する

第25話 ネギVSエヴァ……その前に

学園長との話し合った結果を新田先生に伝えたと少し苦い顔をしたが、それ以上は無理とわかり納得してくれた。他の先生も同様である。

「後はこの残された期間をどうやってやるかが問題ですね。修学旅行に学園祭とメインの行事がありますし。」

「誰かが指導役としてついておけば問題ないでしょう。私は当然として……八雲先生ですかなやっぱり。」

「オレ非常勤で若輩者なんですけど……」

「いやいや。八雲先生は十分やっていきますよ。それに副担任じゃないか、頑張りなさい。私はできる限り協力はするから。」

「……了解です」

これからも仕事が増える事が確定し鬱気味になりながら帰宅するのだった。

数日経つて今日は大停電の日。オレと木乃香達はエヴァの家にきて
いる。極力被害がないように此処に集合したのだ。ちなみにエヴァ
と茶々丸は学生寮の方でネギを待っている。どうやらネギがそこを
指定したらしい。頭大丈夫なんだろうか？戦闘の被害とか考えてな
いんだらうな

そんな事を考えながら自分の懐に有る手紙を取り出す。

「そ、君、それ何の手紙なん？」

「桜咲からの熱烈なラブレター」

「ええええええええええ!!」木乃香達が騒ぎ出す

「ホレ見てみる。情緒感たっぷりなのやっただぞ。お兄さんもビックリだ」

そう言われて木乃香達がその手紙を読んでもみると

果たし状。今晚学生寮の裏手に有る森にこられたし。そこで貴様を倒して見せる。お嬢様は絶対に渡さない。これ以上お前のそばには居させない。私が勝てばお嬢様は頂いて行く

その手紙を読んで絶句する木乃香。そんな木乃香に一つアドバイス

「木乃香イギリスでは同性婚は認められてるから式を挙げる時は呼んでくれ。最前列で祝ってやる。」

「そ、そこは空さんが勝ってオレが守る的な発言をするところじゃないかな」美砂が放心状態の木乃香の代わりに答える

「オレとしては恋愛は本人同士の自由だと思うんだ。倫理的問題があつたとしても他人が口出ししちゃダメだろ」

「それはそうなんだけどね……」

「はあ！そ、そ、君、ど、どうしよう？うち返事した方がええんかな？どうすれば、せっちゃん傷つかないと思う？」

「なんだ木乃香、断るのか？折角告白してくれたのに。お前の事をずっつと見守ってくれているやつだぞ。それこそ前が動けば付きまとうくらいに」

「それってストーカーなんじゃ……」円が引き気味に言う

「こらくぎみー。そう言う事を言うんじゃない。これも愛の形だ。桜咲は人よりもちよつとだけ表現の仕方が下手なんだ。わかってやれ。チアガール」

「そ、そうだね。これも一つの愛だね。任せて木乃香、チア部としてこの恋応援してあげるから!!」

「ち、ちょっと待ってえゝな。うちに同性の趣味はないで。そゝ君何とかしてくれへんか?」

「うゝゝん。人の恋を邪魔するようなことはしたくないんだが、木乃香がそう言うからには仕方がない。桜咲にはご遠慮願おう。要は勝てばいいだけだし。」

「あんまりひどいことせんでなゝ」

「一応頑張るが、あいつは最近弛んでいるからな。前シメてやったのに・・・ちよつと教育してくるか」

「言葉だけ聞くとヤンキーみたい」

「コラ桜子! 誰がヤンキーだ。オレは教師として教え子を危ない道に行かせないようにしようとな・・・」

「さつきと言ってる事違いますやん。空さん愛の形云々はどいつたん?」

「そこを流してくる優しさが欲しかったよ亜子」がつくりとうなだれる

「それで今から行くんですか？」円が聞いてくる

「ああ。場所指定と時間指定がないから遅れて行こうかなと思ったが女性を待たせるわけにはいかなからな。とりあえず行ってくる。すぐに終わると思うからエヴァ戦でも観戦してな。ホイ」水晶玉を出して皆が見えるところに置く。

「気いつけてな。」

「おう。あ、そうだ木乃香ちよつと・・・」木乃香にある事を話し、刹那の気配がするところに向かった。

- - - - -

森到着

ここら辺にいるはずなんだけど・・・なぜか人数が多い気がするんだけど・・・あそこか

刹那が待っているところに跳んで接近する。なぜか、忍者と乱射魔がいた。

「あれゝデートのお誘いは一人だけだったはずなんだけど？二人はなぜいるのかな？」

「刹那から頼まれてね。仕事ですよ」マナが苦笑しながら答える

「拙者は空先生と手合わせしたくて。ニンニン」楓は勝負がしたいらしい

「木乃香は私が貰うとか言っておきながら、協力者がいるのか。がっかりだ。木乃香への思いがその程度なんて。好きなら自分の力で取るもんだろ！ヘタレ」

「な、何を言っている！？私はお前を倒してお嬢様を取り戻すだけだー！」焦りながら答える刹那

「え！？だってこれ見るよ」手紙を楓とマナに見せると

「刹那、これはお前が悪い。これはどう見ても木乃香への告白だ。しかも略奪愛だな。」とあきれたように言うマナ。楓はニンニンと頷くばかりだ。

「そんなつもりはない。私はこんな怪しいやつにお嬢様といさせるのが我慢できないだけだ！」顔を真っ赤にして弁明する刹那

「あれゝ俺とおまえって昔会わなかったけ？どつかで？」

「し、知らんぞ。勘違いじゃないのか？」

「んゝ会った気がするんだけど・・・まあ気のせいだろ。」

「それじゃー勝負を始めるぞ。こちらは3人でやる。負けを認めるか、戦闘不能になった方が負けだ。行くぞ！はああああ」まだ了承も言っていないのに襲いかかる刹那。それを見てあきれながらも戦闘モードに入るマナ。なぜか楽しそうな楓。

「せっかちなな。慌てると危険だぞ」そう言いながらも瞬動一気にマナに接近し後ろに回り込む。だがマナはそれに反応し迎撃してくるが

「残像だ」マナが発砲した方には空がおらずその事に気づいたマナだったが後ろから金属状のロープで捕縛され戦闘不能

「ホイまず一人。さすがに反応が速いな。その目は魔眼か？だが、今回はその反応の速さが命取りだったな。」

「いやゝさすがに速いね。もう少しやれると思ったんだけど・・・完敗だ」軽い感じで言うマナ

「まあお前が本気を出してないのはわかっていたからな。半妖だろお前さん。オレも魔眼もちだが、明らかに魔力の流れが違うからな。全力でやればタカミチくらいは何とかなるだろ？」

「せめて、ハーフと言って欲しいね。それに高畑先生を圧倒した人に言われると全力を出しても変わらないさ。」

「確かに」戦闘中なのに和やかに話す。楓と刹那が攻撃するタイミングを窺っているのだが隙が見当たらない

「此处にいと、龍宮が危ないからな・・・」そう言うと瞬動で移動し楓に接近。掌底を入れようとするが刹那が挟撃し防がれる。楓は後退しながらもクナイを飛ばし攻撃してくる。

それを回避していると刹那が

「斬岩剣!!」

「おおっと、危ない」

「クツ、ならば神鳴流奥義斬空閃!!」気を剣速に乗せて飛ばしてくるが

「そんな大振りしたら誰でも避けれる。バカ？」と軽く挑発すると

「このおお!!」面白いくらいに引つ掛かりやたら目つたら刀を振ってくる。未熟者め・・・

「刹那落ち着け！それでは無駄に体力を削るだけでござる。」

「おお、良い判断だ。戦場で味方が足を引っ張ることほど面倒なことはない。大変だな足手まといがいると。もっと言ってやると良いぞ、邪魔だって」さらに挑発を続ける

「クツ、も、もう許さん！！神鳴流奥義雷光剣！！」電気をまといながら突っ込んでくるが

「この未熟者が！！！」合わせたカウンターを腹に叩き込む

「刹那！！」ぶっ飛んで行った刹那を気にしながらもこちらへの警戒は怠らない楓

「さすがにお前相手で素手はきついからな。・・・これでよし」ブレスレッドを棒に変える

「先生も人が悪いでござろう。あれだけ挑発して」

「いや、前にシメてやったのもう忘れているから思い出させてやろうかと・・・」

「ヤンキーのようでござるな」

「コラ、先生と呼びなさい。あれは教育的指導です」

「ニンニン。それでは拙者も本気で行くでござるよ」

「来な。返り討ちにしてやんぜ」

「ニン！」そう言うつと楓が分身し接近してくる

「おおすごいな。だが甘え」分身した楓をことごとくブツ飛ばすが、楓はそれを囨に空の背後を取った

「（貰った！！）」と思い空に攻撃しようとした瞬間腹部に強烈な衝撃が襲う

「だから甘えつて言っただろ。わざと後ろをとらせてやったんだよ」空は前を向いたまま棒を後ろに突出し背後にいた楓にくらわせた。

「ゴホ、む、さすがに強いでござる」

「お前もな。だが実戦不足だ。相手の動きをよく見るべきだな。続けるか？」

「いや降参するでござる。いやゝ上には上がいるもんでござるなゝ。」

「ちなみにオレより強いやつはいるぞ。たぶん、オレも最強クラスだろうが、その中では割と普通な方だ。」

「最強なのに普通でござるか？難しいでござる」

「まあ、精進しろってことだ。・・・おおっとやっと戻って来たか」そこにはところどころ傷ついている刹那がいた

「クッ、楓までもやられてしまったか。だが私は負けない!!」

「今のお前じゃオレには勝てないぞ。全力を出してみる。いや、本当の姿を見せてみる」

「き、貴様！どうしてその事を!？」

「龍宮の事だつてわかったんだ、お前の事がわからない道理はない」

「あんな姿を見せろと言うのか！私は醜い半妖なのに・・・」

「お前が自分の事をどう思っているかなんて知らないけど、お前の発言は世界中にいる半妖に対する侮辱だ。遠回しに龍宮を侮辱しているんだよ」

「そ、そんなつもりはない！ただ、私は禁忌だから・・・」

「禁忌だからどうした？禁忌だから木乃香のそばには居られないと？禁忌だから醜いと？」

「そ、そうだ・・・」

「嘘だな。お前は自分の事を化け物だと言いながらも内心ではそうは思っていない。口に出して言った方が楽だもんな。お前が恐れているのはそんな自分を木乃香が恐れることたる？」

「き、貴様に何がわかる！！」

「前も言ったがオレはお前じゃないんだ。判るわけないし、興味もない。ただ許せないのは木乃香を言い訳の理由にしている事だ」

「そんなことはない。私はお嬢様を影からお守りしている！！」

「なぜ、影から守る必要がある。護衛は近くにいた方がやり易い。護衛対象から離れるなんて意味がない」

「それは、私とお嬢様では身分が・・・」

「それも嘘だな。護衛に身分など関係ないからな。重要なのは対象を守るかどうかだ。お前が木乃香から離れる理由は嫌われるのが怖いからだろ。なんだかんだ言いながら結局は自分が傷つくのが嫌なだけだ。そんなに嫌ならとっと失せろ」

「……………」核心を突かれ泣きそうになる刹那

「ハァ。そんなで泣くなよ。それとおまえは一つ木乃香を勘違いしている」

「???」

「あいつは半妖程度で友達を嫌いになるような器の小さいやつじゃない。木乃香をなめるなよ」

「!？」刹那が驚いているところに・・

「もうっ、そっ君あんまりせつちゃんをいじめんでや。せつちゃんは優しい子なんやから。」

「お、お嬢様？」あまりの事にビクリする刹那

「あらっもう出てきちゃったの？もう少しいじりたかったのに……」

「そゝ君後でお仕置きやゝ」ものすゝく良い笑顔で言ってくる木乃香

「すみません」即座に土下座

「お、おお、お嬢様。一体いつから？」

「うゝん最初から？そゝ君がお前も来いって言うから隠れてみてた。ごめんなせつちゃん。そゝ君にはうちがきつゝく折檻しとくからなゝ」

「こ、木乃香さん！？」

「ん？なんや？」木乃香の顔を見て

「なんでもありません」すぐにあきらめる

「さ、最初からって、それじゃー先程の会話も・・・」刹那の顔が青くなつていく。自分の正体を知られてしまったから

「うん聞いた。」

「そ、そうですか・・・」落ち込む刹那。嫌われると思ったのだろう
「それがどうかしたん？」

「え？」

「せつちゃんが半分妖怪の血があるは聞いたで。それで、それがどうしたん？」

「で、でも、私は醜い半妖で・・・」

「せつちゃん！！」

「は、はい。」

「そんな事は関係あらへん。うちは昔桜咲刹那って子と友達になったや。それは今でも変わらへん。せつちゃんはそうやないん？うちがお嬢様だったから友達になってくれたん？そやったらうち悲しい」
悲しそうな顔を見せる木乃香

「違います。うちがこのちゃんと友達になりたかったから・・・」

「なら、それでええやん。友達になるのに特別な資格なんていらないんや。お互いが友達と思っていればそれでええ。それ以外は些細なことや」

「う、うつつ」木乃香の言葉に泣きだす刹那。それを見て優しく抱く木乃香

「この光景を見ると、同性婚がありかと思えてしまわないか？ マナ君」先程拘束解除したマナに話しかける

「確かにね。刹那の晴れ姿が見たれそうだ」そう言っただけだよ。ハハハ」汗が止まらない

「何か失礼な事を考えてなかったかい？」そう言っただけだよ。ハハハ」汗が止まらない

「ま、まさか。ほほえましいなと思ったただけだよ。ハハハ」汗が止まらない

「ま、そう言う事にしておいたあげよう。」そう言っただけだよ。ハハハ」汗が止まらない

そんな感じで刹那との戦闘を終えるのだった。楓が若干空気が変わったのでエヴァの家でお茶でも出してあげよう。

エヴァの家に到着

とりあえずやる事は楓にお茶を出す事。あ、茶柱が立ってる良い事あるなきつと

「な、なぜ拙者にだけ？」自分にだけお茶を出された事に戸惑う楓

「・・・強く生きろよ」ポンと肩を叩いてソファーに座る空。

「な、なんでもござるか？」意味がわからないというように叫ぶが誰も取り合ってはくれず、シヨボーンと落ち込む楓をよそに刹那に話始める

「とりあえずどこから話すか？うーん・・・木乃香が魔法を知っているという辺りか？」

「えー！？」

「いやいやさっきの状況考えればわかるだろう。そんなに驚くなよ」

「ごめんなーせつちゃん。今まで言われへんで。なるべく知られないようにしてお父様に言われてたからな」申し訳なさそうに言う木乃香

「お、お嬢様！？いつからですか？」

「うーんと麻帆良に来る前やから・・・せつちゃんが修業でどこかの道場に行ってしまった頃かな」

「そんな前から……。では、なぜその男はその事を知っているんですか？」

「え？せつちゃん覚えてないん？うちら昔そゝ君にあってるんやでゝ。うちが川でおぼれた時助けてくれた子がいたやん。あれがそゝ君や」

「あー！」思い出したかのような顔をする刹那。

「ついでに言々と神鳴流師範代をブツ飛ばしたのもオレ」

「！？つつまり、あのお方が、我ら神鳴流に大切なことを気づかせてくれたあのお方が貴方だと言うんですか！？」

「そう言う事。やっぱりあったことあるじゃねゝか」

「申し訳ございません。今まで多大なるご迷惑を！！どうぞ私の事は切ってもらって構いません」いきり地面に頭をつけて謝ってくる。しかも切れとな……。基本棒術なんで無理じゃね？

「まあそこまで迷惑にならなかったからいいけど。ちょゝと自信家な剣士の鼻っ柱をへし折るのも存外おもしろかったし。」

「うつうつうつ」顔を真っ赤にして恥じる刹那

「もうう、だからあんまりせつちゃんをいじめんといて!」

「すまんすまん。どうもこう言うやつはいじらないと・・・」

「そ〜くん？」木乃香の笑みが変わったので話を変える

「他に聞きたい事はあるか？なければお前に伝えておきたい事がある。関西と関東は関係を切ると言う運びになった。正式に決定したものではないが一応詠春さんも納得してくれている。ましてやあちら側に反対するようなやつはいないだろう。」

「・・・学園長ですか？」理解が早いのは助かる

「そうだ。あいつは色々やりすぎだ。そのうち罰せられるだろう。そこで、お前には木乃香の事を黙っておいて欲しい。木乃香が魔法を知っているとわかったらおそろく利用してくるだろう。任期が短いからと言って安心はできない。あんなやつでもギリギリ木乃香と血縁だしな無理を通してくるかもしれない」

「その点に関してはご安心を。お嬢様を守るのが私の役目。危険に

さらすようなまねはさせません。」

これで問題ないだろうと思い話を終わらす。木乃香は今まで話せなかった事を話すために刹那と話し込むようだ。戸惑っている刹那だがうれしそうだ。

そろそろエヴァ戦が終わっているかと思ってみてみると案の定終わっていた。しかも、ネギとあやかそれに何人かが揃って凍らされている。バカだなぁと思いつつもエヴァの帰宅を待つのだった。

第26話 戦いの後

エヴァ視点

ネギに指示されたところに向かう。まさか学生寮でドンパチするとは思わなかった。何を考えているのだろうか？

「茶々丸あいつは馬鹿なんだろうか？」

「この状況から判断しますとそう言わざる負えません」

従者である茶々丸までそう言う始末。ハアゝこんな奴と戦わないといけないのか。

とやる気を下げまくっているところに

「エヴァンジェリンさん。今日僕が勝ったら父さんのことを教えてもらいますよ。」

「はいはい。」すごく投げやりなエヴァ。

「んま！？なんですのその態度は！？ネギ先生がこれだけお願いしているのに」あやかが憤慨して言う

「バカか？お願いなどしてないではないか？ただ挑戦してきただけだ。そんなガキンちょにやる気など出るわけなからう」

「んもーネギ先生、私たちの愛の力を見せてあげましょう。」

「は、はい委員長さん。頑張りましょう！！では行きます。ラス・テル・マ・スキル・マギステル・風精召喚」

コントウベルナリア・グラディアリーリヲゲ・カヒアント
「剣を執る戦友・・・捕まえて」

「ワンパターンめ。レフレクショ-氷遁」無詠唱で全て防ぐそれを見たネギはあやかを連れて逃走を図る

「ふん、わかり安すぎだ。自分から攻撃を仕掛けて逃げるなんて何かあると言っておるようなものじゃないか。あえて乗ってやるが・・・」

ネギ達の後を追う茶々丸とエヴァ。どうやら橋の方に向かっていくようだ。あそこなら被害が出ないからな。案外考えていた事に驚きながらも後を追う

ネギは逃げながらも時たま攻撃してくる。魔法銃のようなものを使っているようだ。茶々丸によるとアンティークのコレクターらしい。実戦でコレクションを使ってくるとは・・・舐められている感じがしたので

「魔法の射矢」

ネギの銃に向けて放つ。慌てて回避しようとするネギだがあやかがいるため回避行動がうまく取れず銃を手放してしまう。それを見たエヴァはその銃を破壊。ネギが泣き叫びながら何か言っているが無

視。

そうこうしているうちに橋に到着。茶々丸が見たところ橋の先の方に捕縛魔法の陣があるらしい。

「わざと捕まったふりをするのも面白いな。」ネギは挑発しながら陣の方へ誘い込む。顔がにやけている。わかりやすい。

「それで、坊や。此処まで来てどうする気だ。まさか、また逃げるわけではあるまい？」そう言いながらに近づくと陣が発動した

「やったー！！引っかかりましたねエヴァンジェリンさん。これでぼくの勝ちですよ。約束です。父さんの事を教えてください。」

「なぜ？」

「え？だってもう動けないじゃないですか？」

「そうです。素直に負けを認めなさいな」

「ハッハハハ、この程度の捕縛陣でどうにかなると思っていいのか？随分となめられたものだな。封印状態のところでさえなんとでもなるぞ。ましてや・・・」そう言って歩き出す。そしていとも簡単に捕縛陣を引きちぎる。文字通り力ずくで。

「そ、そんな！？」

「最強をなめた罪高くつくぞ。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック「マスター！！」！？」呪文を詠唱しようとした時に茶々丸の声が聞こえる。声の方を見ると魔法先生と魔法生徒が茶々丸を囲んで攻撃を仕掛けようとしている。

「き、貴様ら！！」激昂し茶々丸を助けようとするが・・・

「！？」何かが抜けて行くような感覚があった。

「ハッハハハ、どうだ闇の福音。本国から取り寄せたドラゴン封印用の結界の威力は！！いくら吸血鬼といえどすぐには解けないぞ。今だネギ先生。闇の福音にトドメを」ガングロがそう騒いでいる。どうやら学園長のせいらしい。

最終的にネギがエヴァを討った事実さえこのればいいと考えたようだ

「ごめんなさい。エヴァンジェリンさん。でも僕は偉大な魔法使い（マギステルマギ）になりたいから！！」そう言って呪文を詠唱する。

「悪の魔法使いの従者はこちらで討たせてもらおう。行くぞ！！」そう言つて茶々丸攻撃しようとするその他。だが、それが、エヴァの逆鱗に触れたようだ。

「貴様ら、死ぬ覚悟はできているんだろうな？」

「何を強がっている？ネギ先生さあ早く。」

「は、はい。ラス・テル・マ・スキル・マギステル・・来れ 雷精風の精！！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐」

『雷の暴風！！』放たれた魔法は魔法はエヴァに直撃する。

「ハハハ、どうだ！！これで英雄の誕生だ！！さあとは従者を始末するだけだ」一人ガングロが歓喜するが・・

「これでお終いか？」無傷のエヴァがそこにいた。

「う、嘘！？」自分の最高法の魔法を喰らって無傷でいるエヴァに驚愕している。

「さつきから聞いていれば調子に乗りおって！！英雄の誕生？フン、笑わすなよマヌケ。こんなまがい物の英雄なんぞ一発で死ぬぞ。坊やお前には失望した。少なくともナギはこんなくだらない事で英雄と呼ばれるようになったわけじゃない。作られた英雄などただに人形だ。」

「僕は・・・」

「ふざけた事をぬかすでないぞ。どちらにせよ、決闘を申し込んで他者にそれも自分の従者でもないやつに協力してもらうなんて、虫唾が走る。だが、正解だろう。お前ごときじゃ絶対に私には勝てな

いからな。その点は評価してやらんでもない。が、私の従者に手を出そうとしたのは頂けないな。勝負中なら文句は言わんがまさか、不意打ちとはな。よっぽど悪役らしい。」

「僕は悪役なんかじゃありません!！」

「では、なぜ茶々丸まで攻撃しようとした？ 実際私には罪があるから構わんが、茶々丸は私の従者というだけで何一つ罪を犯していない。」

「え!？」

「ネギ先生騙されてはいけません。闇の福音といえることがもう立派な罪なのです!！」 ガングロが叫ぶ

「ほう、犯罪者の従者は犯罪者か？」

「その通りですわ」 ウルスラのバカ女が肯定してくる。いたのか・

「その考えで行くと雪広あやかも立派な犯罪者だな。あとお前の後ろにいる従者達も」

「え!？」

「当然だろ？ その坊やはこれまでいくつ罪を犯した？ 裏のものなら魔法の秘匿を無視した行動。さらに行くと言った相手の意思を確認せず

記憶の消去を行う始末。一番の重罪は惚れ薬による精神操作だ。表では職務放棄のくせに給料をもらう始末。公衆の面前で女子の服を脱がすと言うセクハラ。そのバカどもは言うまでもあるまい。空との一件だ。ここには犯罪者しかいないではないか。偉大な魔法使い（マギステルマギ）になろうなど片腹痛いわ。」

「……」自分が犯罪者であると言う自覚がなかったネギはひどい落ち込みようだ。あやかも犯罪者と口走っている

「そつえばお前には殺人未遂もあつたな」

「え!？」

「ああ、封印されているのだつたな。よし解除してやろう」

「や、やめろ!!」ガングロが叫ぶが気にせず解除

「え? そつえば僕、春日さんを……でも春日さんは無事だし……あれ?」戸惑うネギ

「ああ、そいつの事ならお前が殺しかけた後私が治療しておいた（嘘）女は殺さない主義だからな。どうだった? 自分の生徒を殺しかけた感想は?」

「え？でも、あれはエヴァンジェリンさんが春日さんと盾に・・・
そうだよ、だから僕は悪くない。悪いのは全部エヴァンジェリンさんなんだ。」

「そこまで、腐っていたか。雪広あやか、そんな坊やを見てどう思う？自分の生徒を殺そうとした事を人のせいにするなんて最低だとは思わないか？」

「で、でも、ネギ先生がそんなことをするなんて・・・」

「事実だ。なんなら春日にでも聞いてみれば良いだろ。」

「・・・」戸惑うあやか

「騙されなくてください！あれはエヴァンジェリンさんが悪いんです。悪い魔法使いの言う事は信じなくてください」

「つまり攻撃したことは認めると。墓穴を掘っているじゃないか、坊や」

「う、うるさい！！皆さん此処は一斉にかかりましょう。まずは茶々丸さんを倒してしまえばエヴァンジェリンさんは呪文が唱えられないはずです！！委員長さん行きますよ。契約執行、90秒間！！
雪広あやか」

「ええ？」戸惑いながらも体が動いてしまっあやか。

「茶々丸。少し派手に行く。空から貰った転移符で脱出しろ」

「了解ですマスター」そう言って転移する茶々丸

「今だ！！詠唱をさせるな！」そう言って突っ込んでくるアホども

「バカめ！！」上空へ転移する。そして詠唱開始

「ど、どこへ消えた？」当たりを探すが見つからない

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い、我に従え、
氷の女王。来れ、とこしえのやみ、永遠の氷河。全ての命ある者に
等しき死を「上だ！！」。其は安らぎ也」気付いたがもう遅い。

「終わらせるかい」

その言葉お最後に当たりが白銀の世界に変わった。ネギ+あやか+
その他のきれいな氷のオブジェが完成した。このまま碎いても良か
ったが女子供は殺さないため止めておいた。ちなみにネギから逃げ
ようとしたオコジョも完璧に凍った。

無駄な時間を過ごしたと自分の家に戻るのだった。

「お？おかえり。ずいぶんと機嫌が悪そうだな？」

「フン、当たり前だ。とんだ無駄足だった。・・・！？というかそいらはなんだなぜここにいる？」刹那たちを指して言う

「いやゝ桜咲から熱烈なラブレターをもらって勇んで行ったらなんと？！木乃香さんを奪うって言うじゃあゝりませんか。オレとしては二人の恋愛を応援してあげたかったが、倫理的問題があつて・・・非生産的だし。だから教師として正しい道に導こうとしたら今度は木乃香さんが・・・さすがにここまできたらオレも止めるわけにはいかない。イギリスで拳式を上げる予定を今二人で立てているところ。後の二人はおまけ。」

エヴァに丁寧に説明すると スパアァン ハリセンで叩かれる。

「そゝ君なんやのその説明！！ホントの事一つも言っていないやんか」
木乃香に怒られる

「いやゝドラマチックに説明した方が面白いと思って」

「嘘を教えたらアカンやん！！」

「スマンスマン。実はエヴァ、本当は・・・めんどいわ。木乃香よろしく」

「めんどいで済ませるな！！ちゃんと説明しろ。」

「ええ〜。しょうがないな。調子に乗った桜咲一味をブチ倒したら木乃香の魔法バレちゃった。」

「説明になつとらんわ！」

そつ言う事で説明を割愛して・・・

「そつ言うことが。刹那の正体がバレたか。案外普通にしてるじゃないか。刹那」

「はい。お嬢様のおかげです。」

「もうせつちゃん、お嬢様って呼ばんといて」

「は、はい。このちゃん。」顔を赤らめながらもうれしそうに言う
刹那

「な？この光景を見るとオレが話した話もあながち嘘じゃないだろ

「？」

「確かにな。フツ若いな」

「おばちゃん」

「誰がおばちゃんだ！」

「ごめん間違えた。おばちゃんじゃなくおばあちゃんだった。」

「き、貴様」

「はいはいキティ静かになさい。皆の前ですよ」

「それを言うな！！」

やはりエヴァを弄るのは面白い。これはある意味才能ではなからうか？生まれ持つての弄られの才……いらねえ……。いや待て！？600年も生きているんだ。もしかして身に付けた物なのか？辛い世の中を生き抜くためにあえて弄られ役になると……。不憫な

「ど、どうした！？いきなり憐れむような顔をして」

「いや、なんでもない。……頑張れよ応援してるぞ」

「な、なんなのだ！？いきなり？」

「気にするな」

「気になるわ！！」

ひとしきりエヴァで遊んだ後ネギ戦の話聞く。

ネギは結構ダメらしい。それは知っているんだけど。かなり悪い方に毒されているようだ。あれじゃー魔法世界に行ったら速攻死ぬか、騙されて奴隷になるのがおちだろうと。

ちなみに雪広あやかと仮契約しているようだがおそらく具体的な事は何も聞かされておらず雪広の方も今日の事で若干疑念を持ったようだ。おそらくすぐ愛想を尽かされるだろう。エロオコジヨの仕込らしいが戦場に來たのでとりあえず凍らしておいた。あいつのはすぐに溶けるようにしたので助けが遅くても大丈夫だろう。他は知らん、だそうだ

「思った以上に使えないな。修学旅行にでもなったら死ぬんじゃないのか？」

「だろうな。爺はまたあの坊やに何かさせるだろう。だが関西側はもう友好もクソもない。徹底的につぶしにかかるだろうな。」

「実際そうだったらオレもあっちにつくと思うし・・・」

「ますます勝ち目がないな。どれ私もお前に味方してやろう。」

「うわあゝますます無理ゲーじゃん。行き先を京都から変えた方が
良いんじゃないか？」

「おそらく爺は変えんだろう。近衛詠春だから大丈夫とでも考えて
いるんじゃないのか？」

「詠春さん昔と違うんだけどね」

「それでも爺は樂觀視しているだろう。婿殿なら大丈夫と」

「ていうか、婿殿って完璧に下に見てるよね。関西の長なのに・・・」

「そんなしょうもない話をしてこれからの事を考えた。修学旅行・・・
鬱だ。きつと問題を起こすんだろうな・・・」

そんな事を考え気分が重くなる空だった。

第27話 誕生日会と・・・（前書き）

独自の設定がありますのでご了承ください

第27話 誕生日会と・・・

明後日から修学旅行ということで木乃香達に誘われて買い物に付き合う事になった。完全に荷物持ちだけど。木乃香が刹那をいじめた事をまだ怒っているらしく荷物持ちをしてくれたら許してくれると言うので了承した

修学旅行は残念ながら京都に決まってしまった。関西側がさんざん魔法先生の参加を断ったにもかかわらず（空は除く）、一般生徒の希望だと言うところを前面に押し出し無理やり決めた。ネギにそこまでの人望はない。

この事も関西側には報告している。関西は本気で関東を潰してもかまわないと思っている。むしろ潰したい。此処までなめられてはさすがに温厚な詠春も許すことはできず近衛門を近衛家から追放という運びになった。

決定的なのはオレが報告した学園長の犯罪の数々。

学園長も何とか関係を取り戻そうと特使としてネギを送る事で関係をはかるうとしているが、これもオレの報告により親友の息子というだけでは了承できないという評価が下った。おそらくネギが本山にたどり着くことはないだろう。

そんな心配をよそに木乃香達は買い物を楽しんでいる。ほとんどが制服で過ごすのでそこまで買い物は必要ないんじゃないかと思った

がそれは乙女の事情らしい。とりあえずオレは、その集団には入っていないのでアスナに渡す誕生日プレゼントの仕上げをする事にした。形はできているので後は文字を刻むだけ。

何かとトラブルに巻き込まれそうなアスナなのですぐに逃げれるようなものを用意する。後ネギ対策に武装解除限定で魔法を跳ね返すルーンも刻んでおく事にする。これで公衆の面前で脱がされるような事はなくなるだろう。アスナ不憫だよな。

木乃香達も買い物が終わったのでアスナの誕生日プレゼントを探すようだ。おい桜咲木刀はどうかと思うぞ？

その後誕生日会用の買い物も済ましアスナを呼ぶ事にする。本当は明日渡せばいいのだが修学旅行前日ということもあり、今日渡す事にする。木乃香曰くアスナは部屋で何か考え事をしていたらしい。

オレが女子寮に行くのは何かと問題があるのでオレの家にアスナを呼ぶ運びとなった。一応雪広にも声をかけたが精神的にきてるのか寝込んでいるらしい。これ以上ネギにかかわらない事を祈るばかりだ。

パーティーの準備をしてアスナを待つ。最初が肝心だ。いかに驚かせるかでその誕生日の良し悪しが決まると言っている(空理論)。派手に驚かせてやる!!

と気合を入れて準備していたら木乃香に見つかってしまいあえなく没収される。ああ、オレ作のスーパークラッカーが……。破裂音で鼓膜を破る事必至だ。

刹那はこういうパーティーが初めてなのかおろおろしながらも準備を手伝っている。亜子達がそれを微笑ましそうに眺めている。

そんなこなをしながら準備が終えた所にアスナが到着。普通に迎えた。

アスナは最初戸惑っていたがこちらの意図を理解したらしく素直に喜んでくれている。準備した甲斐があったものだ。

その後は木乃香の作った食事とケーキでアスナをお祝いしバンドメンバーのアカペラ合唱を楽しんだ。亜子が意外にもちゃんと歌った。顔を赤らめてはいたが……

んでお待ちかねのプレゼント。

木乃香は目覚まし時計。刹那は面識もそこまではないので無難にアクセサリー。亜子はなぜかサッカーのユニホーム。アスナにサッカーでもやらせたいのだろうか？とんでもない事になるだろうが……

チア部はちょっとしたダンスと三人で買ったオルゴール。オレが修学旅行用の買い物を奢った事でゆとりができて買ったらしい。

各々からのプレゼントをもらってちよつと涙ぐんでるアスナ。ここで真打ち登場

「そゝ君はなにもあげへんの？」

「何を言いますか木乃香さん。今まではむしろ前菜。メインはオレの渡すプレゼント。アスナも泣いて喜ぶ事必至の代物だ」

「なになに??」桜子が興味深々で覗いてくる

「ジャジャーン!! 見よこれだ!!」

「なゝんだ普通のペンダントじゃん。」

「何を言います桜子さん。オレがそんな普通のペンダントを作るわけじゃないじゃないですか。この効果を知ったらアスナは泣いて喜びます。」

「一体……」アスナも興味を持ったようだ

「実はなにかとトラブルに巻き込まれがちなアスナさんのために逃走用の術式を入れてみました。」

「私達と同じじゃん。」

「ところがどっこい。美砂さんそれだけではないんだよ。なんと・
」

「なんと？」

「なんと・・・武装解除の魔法を跳ね返すルーンも刻まれているんです。つまり・・・」

「つまり？」

「脱げません！！！」「どうだと言わんばかりの顔

「先生！！」アスナが叫んで

ガシ

がっちりと握手をする

「あ、ありがとうございます。これでやっと・・・」

「みなまで言うな。お前の気持ちは此処にいる奴らはよくわかっている。だがそんな苦勞とは今日でおさらばだ！！」

「うつつ」号泣のアスナ。余程人前で脱がされるのが嫌だったらし

い。年頃の女の子なら当たり前と言えば当たり前なんだが……

「確かにあれはね……」美砂が思い出したように言う

「高畑先生がいる前で脱がされたこともあったしね」桜子も同意

「というかあれも魔法だったなんてね。破廉恥だわ」円が怒ったように言う

「なんでネギ君捕まらへんのやる？子供だから警察はないにしても、あんなだけ魔法を暴発させたら裏の人たちが黙ってないんとちゃうん？」亜子の疑問に刹那が答える

「いえ、むしろネギ先生だからこそです。英雄の息子という……」

「嫌やわ。そんなんであんなの許されてたらこっちはたまったもんやないわ」木乃香も嫌そうに言う

「まあ、それも今学期までだけだな。」

「どうして？」

「たび重なる問題行動の結果今学期終了をもって本国に送り帰される。名目は修行終了らしい」

「修業って犯罪の？」美砂が呆れたように言う

「その可能性は否定できないが一応は魔法学校の課題らしい。日本で教師をやるんだとさ」

「成功？あれで良いならむしろ失敗がどんなものか気になるわ。あれよりひどくできるのみんなの？」円も呆れる

「そうまでしても英雄候補様に汚点をつけたくないらしい。残念ながらオレが広めているから魔法世界でも評価はダメダメなんだけどね」

実は定期的にテオドラとセラスと情報を交換している。オレの話したネギ像は意外と納得しているらしく。ナギとは違うダメさ加減じやなとはテオドラの談。セラスに関してはノーコメント。サインをもらった英雄の息子の実態に現実が受け入れられないらしい。

「実際情報が規制されてるのなんて連合の所くらいじゃないか？帝国は面白いように広まったらしぞ（ラカンのせい）」

「そんなんでいいですか？次世代の英雄って？うちもったかつこいもん想像しとったわ」

「亜子残念ながらそんなでいいんだよ。英雄なんて爺さんたちの道具にすぎないんだから」

「ああ。元老院っていうやつだね。うちのお父様も愚痴っていたわ。」

「それにネギの本国入りはもっと早まるかもしれないぞ」

「何でなん？」

「修学旅行が京都だからさ。問題を起こさずにいられると思うか？もしかしたらその場で強制送還もありえるぞ。」

「確かに」

「詠春さんもネギの京都入りは反対したんだが、爺が無理を押し通したらしい。そのせいであいつは近衛家から追放されたけどな。良かったな木乃香、爺と縁が切れて」

「ホンマやわ。おじいちゃん、見合いとか面倒事とかしか起こさないやもん。自業自得や」笑顔がまぶしい

「ついでに言うとなあ爺も今学期で終了。今まで犯した罪を償わせる。最低でもオコジヨ刑は確実だ。」

「変な頭のおコジョなんて可愛くないわ」木乃香さんの毒舌。相当爺が嫌いらしい。

「まあそう言う事だ。それで修学旅行に関してなんだが……」

「あゝ」

「ん？アスナどうした？あ、あれか木乃香の事なら大丈夫だ。心配するな」

「そうじゃなくて……私の記憶を元に戻してくれませんか？」

「……理由を聞こう」いきなり真剣な顔になる空。

「この前の大停電の日、ネギと委員長は戦ってましたよね？」

「ああ」

「その後委員長の元気がないんでちょっと聞いてみたんですけど、何でもないって言って答えてくれなかったんです。それで、ネギに聞いても同じで……。それで、エロガモに聞いたらエヴァちゃん

との戦いの話を話してくれて、ネギが負け たって・・・」

「事実だ。エヴァを怒らして氷漬けにされた。」

「ネギの事は良いんです。カモの話だと自業自得みたいですし。なんかカモは美談みた く話してましたけど・・・。問題は委員長の方なんです。あまり深く知らずにネギにかかわったみたいで、前の戦闘でちよつと・・・。」

「恐怖を感じるのは当然だろう。なんせ今まで普通の学生をしていたんだから」

「そうなんですけど・・・なんかネギの事がわからなくなっている感じで、それなのにネギを守らなきゃって感じになっているんです。ネギに何かあると妙に反応するし」

「それは、あいつがシヨタコンだからじゃないのか？」

「・・・それもあるんでしょうけど、あの反応はちよつとおかしいです。なんか強制的にネギを守らされているような・・・この前だってネギが失踪した時委員長も追って行ったって言うてたじゃないですか？」

「ああ、でも雪広なら当然じゃないのか？」

「それは違うえ。委員長は確かに小さい子供は好きだけど、ちゃんと分別をわきまえとる。責任感もあるし、クラスのみんなを放り出して追いかけるなんて今までは絶対にせえへんかった。」木乃香が否定する

「そんな感じには見えないんだがな・・・」

普段のあやかを見て激しく疑問に思う。責任感があるのは認めるがいかんせんそれを全て台無しにするネギへのあくなき愛。長年の付き合いの木乃香やアスナが言うのならそうなんだろうが・・・

「やっぱり魔法で何かされているんでしょうか？」アスナが心配そうに聞いてくる

「うーん本人を見る限りではそんな事はないと思うんだが、あいつら仮契約しているみたいだしな、なにかあるかもしれん」

「どういうこと？」木乃香が聞いてくる

「仮契約とは魔法使いの従者を作るためにするもんだが、木乃香、おまえ好きでもないやつに従者にされてうれしいか？」

「うれしい。そんなされたら最悪や！」

「そうなんだ。だから、仮契約の陣とはそもそもお互いがある程度の好意を持ってないとあまり効果を発揮しない。ただし例外がある」

「例外？」

「意識操作だ。相手のほんの少しの感情を利用して自分に好意を向けさせる。いわば呪いのようなものだ。通常そんな事する必要がないが強力な従者を手に入れるために大戦期にはよく行われていたらしい。オレも詠春さんから聞いたんだが、陣に細工を施して契約するとそうなるようだ。契約した本人は無意識のまま契約主を守ろうとするらしい。」

「そんなことって・・・」言葉を失う木乃香とアスナ

「だが、これは昔の事だし今はそんなことはできないはずだ。昔の陣だしごく一部でしか使われなかったって話だ。連合側が帝国との戦況をひっくり返すために剣闘士などを無理やり戦場に出していた時の話だ。知っているやつらなんてこの麻帆良には・・・いたわ。」

「もしかしておじいちゃん？」

「ああ。タカミチも知っているだろうけどあいつは意味ないし使えない。消去法で行くと爺しかない。おそらくあのイタチもどきに適当に言って教えたんだろう」

「……それじゃあ委員長は……」アスナの声が震えている

「操られている可能性が高い。それもあやかのネギへの思いを利用して気づかないような最悪の形で。仮にこちらがそれを指摘しても仮契約は本人達の意思でしてるのでなんとでもいえるだろう。そんなことはないと言われていまえばこちらは何もできない。」

「そんな……！」

「仮契約を解除すれば解けると思うがうーん……まあ、本契約でないのが幸いだな」

「どうしてですか？」

「解除ができないからだ。本契約は仮契約と違い相手は一人。その

分強力な力が手にはいるわけだが、デメリットとして契約の解除ができないどころかが死ぬまでは。その点あのクラス構成をみるように従者候補を集めたようだから何人とても仮契約はするんだろう。だから今なら雪広を手放すかもしれん。」

「え!？」

「言い方が悪いが雪広はそこまで強力というわけではない。財政界に強いつながりがあるのは魅力的だが・・・ていうかおそらくそれが理由で雪広は選ばれたんだろう。雪広よりも戦闘面で強い奴などいくらでもいるしな。話がそれたな。それで、今回の戦闘で雪広はおそらくネギに疑念を持った。この事は学園側からしてみれば好ましくない。だから、雪広との契約を解除して記憶を消す可能性がある。まあ雪広の次に従者にされるのはおまえか木乃香当たりだと思うがな。」

「それは、私も考えました。なんで学園側は私と木乃香にネギを押しつけようとしたのかと・・・木乃香はまだ解りますが私は・・・」

「だから記憶を取り戻したいのか？」

「はい。私がなくした過去の中に答えがあると思うんです。確かに封印されたからには余程の事だったと思う。でもこのままネギの近くにいたら間違いなく魔法の世界に入っていく。何も知らないよりも知っていて対処したほうがずっといい!!--」

「アスナおまえ……」

「そんな深くものを考えられたんやね!!」木乃香がオレのセリフを代弁してくれた

「ちょっと木乃香それどういう意味!!私だってちゃんと考えてるわよ!!」

「……アスナ見栄は張らん方がええ」

「うつ」普段から考えていない事を自覚してるのか木乃香の返しに言葉がつまる。

「ま、それなら別に大丈夫だろ。ただ、オレも記憶解除はしたくないから失敗するかもしれん。これ以上アスナがアホになっても困るしエヴァの家に行こう」

「アホって……まあいいです。それじゃー行きましょう。」

そういつてエヴァの家を目指した。ちなみに誕生会の食事はもっていないのでみんなで全部食べた。木乃香の料理はやはりうまかった。

第28話 修学旅行？（前書き）

独自の設定があります。ご容赦ください

第28話 修学旅行？

エヴァの家に着いた後事情を話しアスナの封印解除に協力してもらう。なんか興味が出たらしくかなり積極的だ。

解除は恙無く行われアスナの体にも問題はない。試しにアスナに聞いてみる

「どんな感じだ？記憶を取り戻すなんて体験は普通じゃできないかな」

「・・・・・・」反応のないアスナ

「ん！？どうした？失敗はしてないはずだが・・・・」エヴァも気になったのかアスナの反応を見る

「アスナ・・・・」木乃香も心配そうだ

「・・・・だ、大丈夫。少し混乱しただけ。私ってお姫様だったんだ・・・・」

「「「はあ！？」」」アスナ以外の全員がそう反応する。いきなりそんな事を言われてもビックリするだろう。周りの反応に苦笑し

ながらアスナが説明する。自分には魔法無効化の力がある事。お姫様である事。紅き翼と行動を共にしていた事。薬のせいで実年齢と見た目があってない事など、自分の記憶を探るように言うアスナ。

「まあ、驚いたけど。なるほど、爺が木乃香と同じ部屋にするわけだ。チッ、詠春さんも言っと思ってくれればよかったのに……」

「そやね。アスナがお姫様なんやなんてあんま信じられへんしな」

「木乃香は気にならないの？私見た目と違うんだよ？さらに元老院に狙われてる可能性が高いし……」

「アスナはアスナやん。それは変わらへん。うちの親友や。」満面の笑みで言う木乃香

「……ありがとう、木乃香」少し泣きそうなアスナ

「でも、やっぱり違和感があるな。どこか。落ち着きがある。あの元氣なアスナがこうなるとは……意外だ」

「……私も驚いている。記憶を取り戻しても今までの記憶が残っているけど、なぜかこうしているのが普通に思えるの。元氣だった自分が信じられないくらい……」

「まあ、問題があるわけではないから良いんだけど・・・これからどうするか？まさか問題児が増えるとは・・・予想通りではあったけど」

「問題児って誰なん？」木乃香が首をかしげて聞いてくる

「第一に頭が残念な発想のお子ちゃま魔法使い。第二今はなき国のお姫様。最後に魔力バカ」

「むゝ最後のつてうちのことやん！！」怒ったように木乃香が叩きながら言う

「事実だろ。ハアゝ修学旅行行きたくねゝ。休んでも良いかな？」

「ダメや。お父様もお話したいって言ってたやんか。」

「せめて教師を辞めてから行きたい。あのアホガキが問題を起こすのは目に見えているから余計に。いっそのこと今のうちに始末・・・」

「やめておけ。元老院のアホどもが難癖つけて関西に攻め込むぞ。それが発展して戦争ということにも成かねない。おまえが引き金を

引くのか？そう遠くないうちに起こりそうではあるが・・・私は全力で暴れられるからかまわんが、お前には借りもあるからな」エヴァの発言に少し考える。

ネギを殺す？学園側が攻めてくる？エヴァと共に殲滅？連合が参戦？
BAD END

嫌過ぎる。仮に帝国の助けがあつたとしても戦争になるのは間違いない。めんどくさいことこの上ないのであのガキにはどこか関係のないところで死んでもらいたいものである。

「アスナをどうするかが問題だな」

「逃げたな」人が話をそらしたのに突っ込む幼女

「どうしようか」

「とりあえず現状維持で行くしかないだろう。記憶を解除した事は内緒にしておいて。タカミチ辺りが気づくかもしれないがアスナが演技してれば問題あるまい。というより空お前がそう言う幻術をみせる術を使えば良いだろ」

「それもそうか。アスナさっき渡したペンダント貸して。認識阻害の陣を付け加えるから」

「どうぞ」

認識阻害の陣はすぐにできるんで付け加えていく。これで問題なし。あのラカンが町で歩いてても気づかれない代物だ。問題ないだろう

「これで大丈夫。此処にいる奴ら以外は今まで通りのアスナに見えるはずだ。」

「ありがとうございます。」

その後は修学旅行中はネギに近づかないということで意見を合わせ解散という運びになった。なるべく問題が起らないようにしたいが無理だろうな・・・

- - - - -

修学旅行当日

いつものメンバーで駅に向かう。なぜかネギが一番乗りしていたようだ、どうしてだろうか？気になってエヴァと話してみると京都には紅き翼の隠れ家があるらしい。おそらく爺あたりが教えたんだろう。

だが、ネギがその場にたどり着く事はあるのだろうか？京都に有ると言う事は詠春さんが管理しているのだろう。ラカンに聞いたがネ

ギの父親はかなりだしらないらしい。そうすると所有権はないだろう。詠春さん名義で管理してるはず。そうなると現在関東との折り合いが悪い中でその一端を担うネギが果たしてその場にたどり着けるだろうか？よしんばたどり着けても所有権は詠春さんに有る筈だから、詠春さんが認めない限り入る事もできない。今の状況では認めないだろう

そんな事を考えていると生徒が全員到着したらしく点呼を取っている。こちらとも思考を切り替えて教師に専念する事にした

班分け

1班 桜子 円 美砂 亜子 たつみ

2班 クーフェイ 超 葉加瀬 楓 春日 さつき

3班 あやか 長谷川 朝倉 村上 那波

4班 まきえ 裕奈 あきら 双子

5班 アスナ 木乃香 刹那 エヴァ 茶々丸

6班 のどか ハルナ 夕映 ザジ

点呼が終了全員が新幹線に乗り込む。一応詠春さんと話して関西側

の干渉は極力抑えてもらっている。ただ強硬派の何人かが何か企んでいるらしい。原作通りである

さすがにカエル騒ぎは面倒なのであらかじめ符を破壊しておく。途中実行犯らし気やつに有ったが転移符で逃げたようだ。今の内に潰したかったがオレがいなくなると新田先生に迷惑がかかるので止めておく

車内では何事もなく京都に着いた。此处からが正念場である

- - - - -

千草視点

「一体なんなんやあいつは！？うちの仕掛けた術式を簡単に見破りおったわ。あんながあっちにおるなんて予想外や。」

「千草さん今度は僕に行かしてもらえないかい？ちよつとその人を見てみたい。」

「なんや新入り。気になるんか？でもやめといた方が良いで。あいつかなりできる。あと少し転移符の発動が遅れてたらつかまっちゃうわ。」

「へーなんや面白そうな方がおりますな。うちは刹那先輩と切り合えたらそれで良かったですけど、なんやうちも興味でてきましたわ。フェイトはんうちも一緒にして宜しでっしゃるか？」

「今回は遠慮してもらえないか月詠さん。戦いに行くわけじゃないんだ。君が来ると否応なしに戦闘になっってしまうから・・・」

「ぶーいけずやわ。でもそうおっしゃるんでしたら仕方ありません。今回はやめておきます。でも次は・・・」

「その時はよろしく頼むよ。それじゃーそう言うわけで少し行っきます。少し見たら帰るつもりなので心配なさらず」

「新入りの心配なんてしてへんわ。さっさと行ってき。」

「では」そう言って転移するフェイト

.....

清水寺

「此処が清水か、よおおおーし誰か飛べ」

「おやめなさいー!」あやかが注意する。どうやらあやかはネギと

の契約を切られたらしい。エヴァの話だと記憶の改竄も行いネギのパートナーだったことも覚えてはいないようだ。

「なら拙者が」楓が飛ぼうとするが片足をつかんで地面とキスさせる

「な、何するでござるか!」

「バカな事をするバカを止めただけだが、文句はあるか? ちなみに今オレはすごく機嫌が良い。そんな優しい先生からの提案だ。これ以上問題を起こそうと言うなら3日ほどホテルで過ごす羽目になるが、それで良いなら反論してみる」

ものすごい笑顔で楓に言う。問題を起こすと面倒なので事前に止める。基本薬味が起こさないかに気を配っているためどうしても機嫌が悪くなる

「な、何でもないのでござる。よく考えてみると拙者もはしやぎすぎだったでござる。空先生すまないでござる。」若干空の怒気に押されながら謝る楓。空を怒らすことが得策ではない事は理解できたようだ

「先生は素直なやつは好きだぞ。……次はないぞ」笑顔のまま声のトーンを下げる

「承知」汗をダラダラ流しながら答える楓。

「他のやつにも言つとくぞ。修学旅行だからと言って羽目はずすなよ。限度をわきまえろ。ふざけた事をしたやつはホテルで漢字の書き取りだ」

「えゝええええ」何人かが反発してくるが

「別に楽しむなどは言っていない。ただ人様に迷惑をかけたり問題を起こすなど言っている。それさえ守ればそこまで言わない。特に朝倉盗撮は犯罪だからするなよ。それと変な企画を立てて暴走するのも禁止だ。賢いお前ならわかつてくれると思うがもし、そんなことになったら……」

「その後がすごく気になるんだけど聞かない方が良いかな？とりあえず私だってそれくらいの分別はつくよ。」若干焦りながらも答える

「ならいい。……それとこの下には音羽の滝があるから恋愛成就とかあるから行つてくるといいぞ。彼氏持ちはあまりいないだろ？」

その言葉に怒りながらも滝を目指す。まき絵なんかががぶ飲みしているのだが周りのやつがドン引きしていた。ちなみにあらかじめセツトされていた酒樽は取りのぞいておいた。しょっぱなから酔いつぶれるのはかわいそうだろう。

- - - - -
とりあえず寺周りなどを満喫して満足顔の3・A一行。一番うれしそうだったのはエヴァだった。十数年行けなかった京都なら仕方ないだろう。あまりにも不憫で八橋を食べさせてやった。なんだ？みたいな顔をしていたが気にせず食べなただけ言っておいた。

ちなみに今回問題がそこまで起きなかったのはネギがないからである。今は新田先生と行動を共にし身動きが取れない状況だ。なぜそんな事になっているのかというと

回想

「八雲先生。お願いがあるんですが？」

「なんですか？こう見えても忙しいんですけど」

「実はですね。京都に僕のお父さんの別荘があるらしいですよ。だからこれから行ってみたいと思うですがその間3・Aのことよろしくお願いできますか？」断られることなんてないだろうと言う顔

「は？」

「ですから・・・」

「話は聞いています。だからそれでなぜ今行く必要があるんですか？」

「父さんの手がかりがあるなら早く知りたいじゃないですか」嬉しそうに言う

「お父さんは行方不明か何かで？それはお気の毒ですが、今貴方は何をしにここにいるんですか？」

「え？それは学校の先生です」

「なら教師の仕事をしてください。何をバカな事を言っているんですか？失踪した父親を探すなら警察にでも行ってください。今の貴方は一応ですが教師です。勝手な事をしたら生徒に示しがつきませんで探したいなら休日にも来て探してください。」

「なんですか！！お父さんの手がかりがあるかもしれないんですよ」怒ったように言うネギ

「ハア……で？」

「へ！？」思つてもみない質問が帰つてきて間抜けな返答をするネギ

「酷い言い方ですけどそれが今関係ありますか？貴方一人の都合に生徒を巻き込むつもりですか？なかなか素敵な考えをお持ちで。それにこう言つてはあれなんですけど、なぜ父親を探そうとするんです？」

「だつて父さんは僕の憧れだから……」

「結局は捨てられたんでしょ。まあ今日日子供を殺す親もいるくらいですからそれよりはましなんだろうけど、子供を育てるのが面倒になつて捨てた親をなぜ探すんですか？見つけてもまた捨てられますよ」

「父さんを悪く言わないでください！！父さんは英雄なんです！！」

「今時英雄なんていませんよ。昔じゃないんです。それとも戦争で戦果でもあげましたか？」

「父さんは立派な魔……いえ、昔に有つた戦争で解決に導いたんで

す」

「それはないでしょう。第二次世界大戦なんて相当昔ですよ。貴方のお父さんはいくつですか？随分とお歳をとっているようで、それよりもお母さんは？」

「え！？お母さんの事は知らないんです。それと第二次世界大戦ではなくて魔・・・でもなくて、そう民族紛争みたいなものです」

「へー民族紛争ですか。ネギ先生はイギリスの出身では？そんな戦争がありましたけ？まあ世界大戦後ですからない事もないと思いますが・・・まあ、英雄と呼ばれるからには多くの敵を倒しましたか？」

「はい！！聞いた話によるとすごかったそうです」

「それはすごいですね。きっとたくさんの人を殺したんでしょう」

「へ！？」

「当然でしょう。戦争ですよ、喧嘩ではないんです。英雄と言われるくらいだからそれはすごい人を殺したんでしょうね。銃とか大砲とか得意だったのかな？」

「父さんは人を殺したりなんてしてません!!」

「戦争で英雄になるには人を殺さないといけない。昔の人はうまい事を言ったもんです。一人殺せば犯罪者、百人殺せば英雄。まさにぴったりですね。でそんな人を探して貴方も英雄になりたいんですか？人を殺したいと？」

「そんなことはしません!!父さんだってそんなことしません!!」

「そう思うのは勝手ですがだからと言ってあなたの自由行動が許されるわけではありません。とりあえず問題がありそうなので新田先生に報告します。指示を仰いでください」

そう言つて去ろうとする空。ネギは空をにらみつけている。去り際にネギに言っておく

「それとあまり日本で英雄とかの話はしない方が良いでしょう。日本も戦争で被害を出しそして受けた国です。戦争下では英雄と呼ばれていた人も戦争後ではただの大量殺戮者。平和なご時世に英雄なんて必要ないんですよ。実際英雄と呼ばれて戦争を進めた人は戦後A級戦犯として処刑されています。むしろ英雄が必要ない世界を作ってもらいたいもんです」

「・・・・・・・・」今まで描いていた英雄像が崩れ始め戸惑っているネギを放置して新田先生の所に向かうのだった。

回想終了

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

そんな感じでネギはずっと新田先生といたため何もできなかった。修学旅行中ずっとそうしててもらいたいものである。

ホテル嵐山に向けて移動している時に切に思うのだった。

第29話 修学旅行？

ホテル嵐山に到着して夕食前の自由時間となった。とりあえず、ここでこれからの事を作戦会議しておくためにいつものメンバーが集合という運びとなった。話しておきたい事もあるし……

「先生きたよ」桜子達が部屋に入って来た。

「きて早々悪いんだがこれからの事を話し合っておこう。今日のあちら側の干渉に気づいたか？」

皆に聞いてみたが気づいたのはエヴァとこのせつくらいだった。バンドメンバー達は逃げる事に特化したためこういう干渉に気づかなかったようだ。

「何がしたかったんだろうな？事前に空が潰していたようだが、子供のいたずらと大して変わらん」エヴァが若干あきれたように言う。

「まあ、あれだろいつでも攻撃できますよみたいなアピールがしたかったんじゃないかな？一般人に被害出したら意味ないんだけど……」

「お父様はなんて？」

「うーんとりあえず主犯は強硬派のやつらしい。実行犯に関しては今わかつているのは天ヶ崎 千草とそいつに雇われた神鳴流剣士と魔法使い後は犬神小太郎とか言う子供くらいか。」

「神鳴流もいるのですか」刹那が驚いたように言う

「ああ。ずいぶん昔に破門されたらしいが実力は相当あるらしい。そしてなりよりも戦闘狂らしい。めんどくさいのでこいつに関しては桜咲に一任することにする……がんばれ」

「な!？」

「おまえも似たようなもんだから大丈夫。二人で仲良く戦ってくれ。」

「私は戦闘狂ではありません!!」必死に否定しようとする刹那だが、空からの視線が痛い。昔問答無用で切りかかった事を考えれば否定できないものだ

「それに、なんか同性愛者っぽいし、その点でもおまえと同じだ。もしかしたら、ここからめくるめくラブロマンスが始まるかもしれない。そう言う意味でも頑張れ」

「同性愛者でもありません!!」

「……いや、それは否定できないから!!」 バンドメンバーからの突っ込みを入れられ落ち込む刹那。とりあえず放っておいて

「戦闘狂は戦闘狂に任せることは決まったんだが、あとは・・・陰陽師と戦闘員のガキだがこっちは薬味に任せようと思う。そもそも原因はあいつに有るわけだからわざわざ手を出す必要もないんだが、一般人に被害が出そうだからあいつらが戦闘しそうになったら人払いの結界とか張って極力被害を出さないようにする。一応これくらいだが質問があるやつはいるか?」

「残りの魔法使いはどうする?」 エヴァが聞いてくる

「ああ、それはたぶん大丈夫。さっき会って話をしてきた。」

「何!?!」

「ええ〜っと清水のところで妨害工作を解除してた時なんだけど・・・」
「そう言って話したす

- - - - -
回想

「これで良いか？全く何でこんなめんどくさい事を・・・」相手側の仕掛けたいはずらを解除しながら嘆く。仕掛ける方も仕掛ける方だがそれを解除している自分がひどく空しく思えるのだった。

「そこんとこどうだろうか？実行者としての意見が聞きたいんだけど・・・」後ろを見ずに話しかける

「いつから気づいてたんだい？」

「結構前。ずいぶんと熱い視線をくれたからな。オレそっちの趣味はないんだけど・・・」

「何を言っているんだい？・・・これでも隠密行動には自信があったんだけどね、気づかれるとは思ってなかったよ」

「独特な感じだからな。あんた。違和感がバリバリだった。それで何か用か？できれば荒事はしたくないんだけど・・・」

「こちらも争う気はない。依頼者の話を聞いて少し興味が出たから

見に来ただけだよ」抑揚のない感じでしゃべるフェイト

「だからオレそっちの趣味はないんだけど。半径10メートル以内に入らないでくれる？身の危険を感じる」

「君はさっきから何を言っているんだい？まあいいけど。話があるんだけどいいかい？」

「なんだ？見てのとおり忙しんだけど、お宅らのせいで」

「話というのは今回の件で手を出さないでもらいたい。」

「スルーですか。……それは無理な相談じゃない？狙われているのが誰だかわかってる？うちのお姫様が狙われてるんじゃ、その話は聞けないな」

「それなら大丈夫だ。こちらにも代案がある。そちらのお嬢様には手を出さない事を約束しよう。」

「一般人に被害が出そうなんだけど、そんな奴の言う事を信じると
思つか？」

「それに関しては依頼人と話をつけるから安心してくれ。時間がか
かるかもしれないから、明後日くらいに行動を起こそうと思うけど
それで良いかい？」

「こちらに迷惑がかからず、一般人に被害が出ないなら言う事はな
い。ただ、オレも関西の長にはそれなりの付き合いがあるからな、
やりすぎとなると黙ってはいられない。どうせお前らの目的は鬼
神の復活だろ？昔同じような事があったからな。木乃香の魔力を狙
うなんて現状それくらいしか意味ないからな」

「……ノーコメントと言う事にさせてもらおう。……先程も
言ったが魔力に関しては代案があるので問題ない。それに関西事構
えるのは分が悪い。マジックマスターと呼ばれる気もいるし真祖の
吸血鬼もそちら側のようだし……どうしたんだい？」

空の様子がおかしので不思議に思ったフェイトが尋ねる

「……なぜ知っている？」

「ああその事かい？僕はこれでも魔法世界には詳しくてね、アリアドネーのマジックマスターと呼ばれるくらいだから調べたんだ。」

「違う！なんでその恥ずかし名前を知っている！あまりにも恥ずかしすぎてセラスさんに広めないように言っておいたのに！！」

「え？アリアドネーでは有名人だったよ。なんでも魔法が使えなくなった人の治療をしたとかで、その患者の人もインタビューに答えて雑誌にも載っていたし。さすがに名前とか顔まではバラしてなかったけど……」

「……悪夢だ。マスターなんて名前サウザンドマスターくらいしかつけない残念な名前なのに……これじゃー痛い子じゃないか……」その落ち込みようは無表情なフェイトでさえ申し訳なさそうにするくらいのもだった。

「……とりあえずその名前で呼ばないようにするよ」

「すまない」

- - - - -

「とこんな感じだ。だから木乃香が狙われる事はないだろう。あいつは人の気持ちを察せられる良いやつだったからな」

「「「.....」」」全員無言で見つめてくる

「どうした？木乃香が無事とわかって感動したか？これもオレの交渉のたまものだ。ほめていいぞ」

「「「どこが安全なんだ！！」」」皆の声が重なる

「先生、グダグダしてただけじゃん。相手の事も何もわかってないし。そもそも信用できる人だったの？」美砂が聞いてくる

「なにおゝ相手の事を気遣えるやつに悪いやつはいないってよく言うだろ。だから大丈夫だ」

「そんなわけあるか！！というより代案の情報ぐらい探っとけばバカ

者」エヴァにまで否定される

「そうですよ。仮にお嬢様が狙われなかったとしても本山が襲われる事はほぼ確定的じゃないですか！どうしてそこで捕まえなかったんですか！？」刹那も怒鳴る

「ああそれは無理だな、うん」

「ど、どうしてですか？？先生ほどの人なら・・・」

「うゝん全力でやってなんとかギリだな。捕まえるとなると殺してからとかじゃないと無理だろう。それにあれはおそらく人ではないし・・・」

「私と同類か？」エヴァが興味があるように聞いてくる

「うゝん違うな。人工的な感じではなかった。造られたことは確かだがエヴァのように術式で作りがえられたものではないだろうな。どっちにしろ昼間から街の中で戦闘なんてできないしな。清水がなくなるぞ」

「そうでしたか。すみません」刹那が申し訳なさそうに謝る。

「気にするな。間違ってはいないからな。．．．で、これからの事だが明後日にネギが親書をもって本山に向かう。おそらく親書など意味はもうないが、あいつらはそこを狙うだろう。そして中身を改竄して関東にイチヤモンをつけて攻め込む気だ。関東を潰す事は反対しないが潰した後を考えると面倒だ。」

「確かにそうだな。私と空がいるこちらにいる現状ではあちらに勝ち目はない。最高戦力の爺はもう使えん。次点でタカミチだが木乃香と刹那でどうとでもなる時点で大したことはない。此処の戦力を見れば若干あちらが上かも知れんが、大将がやられては終わりだから、こちらが負けることはないだろう。だが、その後の魔法世界の介入がめんどくさいな」

「そう。だから、こちらにはなるべく関東と事を起こさず、関東の弱みを握る必要がある。元老院も諦めるしかないようなものを。今のところはあの薬味の問題行動だが、どれほどのものになるか．．．」

「隠蔽するだろうな、確実に」エヴァが自信たっぷりに言う。実際そうだろうが

「だから、今回京都で問題が薬味によっておこされるのは確実なの

でこちらの口実としては関東の暴走を防いだということにできればいいのだが、詠春さん次第かな。オレとしては問題行動を帝国とアリアドネーに報告して元老院のこちらへの干渉させないように牽制したいのだが・・・」

「そこら辺が妥当だろう。元老院も帝国とアリアドネー相手に無茶はしないだろうからな。」

「そうだと良いんだが・・・後はアスナの事がバレるのは避けたい。バレたら戦争をしても元老院は攻めてくるからな。」

「なんだと？この前はそこまで気にしていなかったじゃないか」疑問に思ったエヴァが尋ねる

「オレもそう思っていたんだけど、アスナは大戦中に魔力無効化の能力を無理やり使わされていたらしい。薬で意思まで奪って。その後紅き翼が戦争のどさくさん紛れて助け出したらしいが、元老院はずっとその行方を捜しているらしい。」

「やけに詳しいじゃないか」

「ラカンに昨日聞いた。捕まったらかなりやばいらしいから頑張れとだけ言っていやがったが・・・」

「あいつらしいな。それでどうするんだ？」

「木乃香と刹那と行動を一緒にしてるしなにより班ではエヴァがいるから・・・」

「私に丸投げか？」

「現状それしかないんだよね。だからよろしく。一応木乃香達もそれなりに戦えるし、大丈夫でしょ。」

「確かに本物が襲ってこない限り大丈夫だが、いるんだろあっちに最強クラスが」

「それは大丈夫。あの感じはこちらに何かしてまで依頼人との約束を守るうとはしてなかった感じだし。だから、先手を打ってこちらに不干渉の交渉をしてきたわけだしさ。いくら最強クラスとは言え、エヴァとオレがいたらまず負けないしな。だから、エヴァはアスナの魔力無効化が使われないようにしてもらいたい。すぐにではなくてもいずればれる。」

「・・・まあ良からう。お前の頼み事だし退屈しなくて済みそうだから、お子茶ま達は守ってやろう。それでお前はどうするんだ？」

「副担任の仕事兼薬味の監視。問題を起こすたびに証拠を押さえる。」

「・・・がんばれよ」

「そのやさしさは逆に辛い。どうせなら胃薬かストレス解消の魔法でもかけてくれ」

「そんなものはない。・・・おい茶々丸胃薬だけは空に渡しておけ」

「了解ですマスター。」普通に常備していた茶々丸にビックリしながらもありがたく頂戴する

明日からが憂鬱だ。

「うちら完全に空気やったな。」

「木乃香それは言わないお約束」アスナと木乃香は意外と余裕があった。

- - - - -

翌日

修学旅行二日目

3・Aの連中は班行動で各地を回っている。なぜか教師であるのに一緒になって遊んでいるやつがいるがとりあえずは気にしない。新田先生にこっ酷く説教されたくらしく勝手に抜け出そうとはしていない。

担任がアホなのでこちらはクラスの連中をちゃんと見て回っているところどころで遊んでいるネギを見て殺意が芽生えるが此処は我慢。

そんな感じで何事もなく二日目が終わった。……はずだっ

た。

なぜか、エロオコジヨが描いた魔法陣らしきものがホテルの周りに有る。やっぱり楽には終わらせてはくれない薬味だった。

第30話 修学旅行？

まず状況を整理しよう。

今日は何事もなく一日が終わるはずだった……そう、だった。

今ホテルのまわりに仮契約の陣が描かれている。あやかに用いた洗脳のやつではないがこれはかなりの問題である。とりあえず詠春さんに報告しておこう

陣を消すことはできるのだがめんどくさいのでやらない。というかこれで仮契約が行われたら大問題にできるので黙って見逃す事にする。ネギが強引にキスをするようならさすがに止めるが、自ら行く場合は黙認。

「なあ木乃香、関西ってどれだけ舐められていると思う？」

「うーん、舐められているというより気にしてないんじゃない？じいちゃんの事やお父様に話せばどうとでもなると思っているんですよ。」

「あーあ、でも爺は近衛家から追放させられた身だし、そんなことできないはずなんだけど……」

「たぶん、忘れてたとか、ボケたとか言ってごまかす気ちゃうん？」

「ありえる。．．．だけどそんな事させないけどね」事前に爺の陰謀を阻止する。先に知らせとけばそんな言い訳は通じないので、

「瀬流彦先生、ホテルのまわりにあるやつなんですけど、どういう事が説明してもらえますか？」瀬流彦を捕まえて状況を伝える。これで言い訳はできない

「え．．．つと、なにかの勘違いじゃないのかい？」汗をダラダラ流しながらシラを切ろうとする瀬流彦

「へえーそう言う対応をとりますか？それじゃーこちらもそれ相応の対応をとらないとなりませんね」。魔法は秘匿するもの。こんな大々的に法を破るなんてなかなか．．．。今から犯人をぶちのめしてきますんでいいですね。五体満足でいられる保証はないですけど、先生の様子だと知らないようなので外部犯の可能性が高いです。最近ストレスもたまっているんでついでに憂さ晴らしでも．．．」

「そ、そうだった。これはイベントだよ。思いだした。ネギ君が修

学旅行の思い出にイベントをしようと言ってたっけ。はは、忘れてたよ」汗が止まらない瀬流彦

「へえ、仮契約がイベントですか。なかなか面白い事を考えてますね、あの無能。これで、契約したらどうする気なんでしょうね？」
瀬流彦をにらみながら言う。

「さすがにネギ君も、契約まではしないんじゃないかな？」

「では、契約した場合はこちらに任せてもらってもかまわないですよね瀬流彦先生。」

「…………え」と僕の一存じゃー決められないな。」

「なら、学園長に連絡してください。これで学園長が知らなかったということは不可能になるますんで。さあ早く。」

「…………うん。ちょっと待ってね…………」瀬流彦が学園長に連絡を取る、返ってきた結果は責任は自分がとると言うことらしいが

「学園長に伝えてください。もうあなたは責任のとれる立場ではな

いんですよ。バカなんじゃないですか？と学園長がふざけた返事をしてきたら、こちらで対処しますんでよろしくお願いします。」

瀬流彦がこちらの伝言を伝えると、学園長からの返事は裏に関係しているものの契約に関しては干渉しないで欲しいということ。

「具体的に指摘してください。後で文句言われて嫌なので。」電話越しに爺に言う

「龍宮君と長瀬君それと木乃香と刹那君あとアスナちゃんくらいかの？」

「ちなみに木乃香は裏の関係者でもなければ、あんたのものでもない。木乃香にあのガキが近づいて来たら抹殺します。他のやつらについては個人に任せますが、万が一意識操作を使ったり、契約だと知らせずに行った場合でもぶちのめしますんで。本人達の同意であるなら文句は言いません。あ、一般人は別ですよ。」

「わかった。しかし、アスナちゃんの事は驚かないようじゃの。」

「木乃香と同じ部屋にしているだけで何かあるとは思っていたし、高畑先生が保護者になっている時点で魔法関係者なのは予想がつく」

本当の事は言わずにそれっぽい事を言つてごまかす。アスナの封印を解除している事に何か言われても・・・あれ困らない？そもそもアスナの意思で解除を求めたんだから問題ないんじゃない？・・・でも一応めんどくさい事にならないようにそう言っておく

「なるほどのゝあいわかった。その条件でよろしく頼む。」

「わかりました。ああそれとこれ以上舐めた真似をするとまじで関東を潰しますんで、幸いエヴァはこちら側についてくれるので貴方達に勝ち目はありませんけど・・・ゆめゆめ忘れないでください。もうあなたには何の権力もないと言う事を、近衛を追放された学園長殿」

かなりドスの利いた声で爺に告げる

「わ、わかった。」爺も焦っているのだろう。声がこもっている。

とりあえず爺との会話も終えて瀬流彦に携帯を返す。そのあとイラついた気持ちを静めるため風呂に入る事にする。ちなみに教員部屋には風呂がついているのでわざわざおお風呂に行ったりはしない。ネギと鉢合わせでもしたらますます機嫌が悪くなるから。

- - - - -

オレが風呂から出ると、木乃香達が部屋にやって来た。人数分の身代わりを置いてきたらしいが、一応教員部屋なので遠慮してもらいたいんだが……一人部屋だから良いけど

「それで、どうした？」

「朝倉が変な企画を立てて仮契約を促そうとしているので逃げていたんだよ。」木乃香が状況を説明してくれている。

「ほお、その企画ってのは？」

「ネギ君にキスした人には豪華賞品がもらえるっていうやつ。」桜子が内容を教えてくれる。

「でも、参加者あまりいなかったよね？委員長でさえ参加してなかったし……」美砂が答えるが

「まあ当然だろうな。雪広は記憶を消されたとはいえ体に記憶は残っている。おそらく体が本能的に拒否したんだだろうな。でも、そうすると誰が参加しているんだ？」

「うちの班からは誰も参加してないよ（ネギ君の方には）後はまき絵とか古菲とかじゃないかな。長瀬さんとか双子なんかも参加してたけど・・・」円が指で数えながら教えてくれる

「それで、お前達はこちらに逃げてきたと。」

「うんん違っよ。私達も参加者。ただし空先生にだけどね」桜子が笑顔で告げてくる

「・・・はあ。お前らも乙女だろう。そんなゲーム感覚でキスするようなもんじゃないぞ。これお母さん桜子をちゃんと面倒見なさい！」

「だ・れ・が、お母さんか！！私はこんなでかい子を子供に持った覚えはありません。変なこと言わないでください！！」円が怒ったように言う

「ええ、お母さん、私を捨てるの？」桜子が空気を読んで乗ってくるが

「桜子も乗るんじゃないの。円をからかうのはやめなさい」美砂が注意してくる

「はあゝい」桜子も了承した。

「全く冗談はほどほどにしておけよ。」

「誰のせいですか！誰の」

「私は冗談じゃないよ」

「うちもや」桜子と亜子が真剣な表情をして言うてくる

「・・・悪いがお前らに答えてやることはできないぞ。」

「なんででしょうか？」空の言葉にショックを受けたようだか亜子が聞いてくる

「何って言ったらいいのか・・・うまい言葉が見つからんが、オレは人に親愛っていうのを抱けない。」

「え！？」木乃香を除く全員が反応する

「別に人が嫌いなわけじゃない。お前らの事は好きだし、気に入っ

ている。でも、それ以上となるとよくわからないと言うほかない。」

「なんですか？」円の疑問に

「木乃香は知っていると思うが、オレは小さい頃に親に捨てられている。自分ではその事に対して割り切っていると思っているんだが、どうも頭で考えるのと心で思うのは別らしい。どうやら、人を好きになる事は出来ても愛することはできないようだ。」

「で、でも人を好きになれるんですね？それだったら・・・」

「まあ理屈ではそうなんだが・・・そもそもlikeとloveの違いって何だと思う？なんか哲学ぽくってあれだけど・・・」

「うーん、ようわからんなーその人の事が好きで一緒にいたいって思える事が愛なんちゃうん？」木乃香が答える

「まあそんな感じだろ大体。オレも似たようなもんだが、オレはその人と一緒にいて離れたくないと思えるような事が愛だと思っている・・・でも、オレにはそう言う思いがない。酷い方だと思うが、木乃香がオレの前から離れると言ったとしても悲しくは思うだろうが引き留めることはないだろう。それは他のやつに対しても同様だ。おそらく、離れると言ったらそのまま送りだすだろうな。」

「そゝ君はうちの事どうでもいいと思ってるん？」木乃香が悲しそうな顔で聞いてくる。というより泣いている

「いやそれはない。大切だと思っている。けど、繋ぎとめておこうとはどうしても体が思えないんだ。おそらく、捨てられた時のトラウマなのだろう。信じてたものに捨てられる事は想像以上に辛いかな。だから、本能的に捨てられるという状況になったら、関係を断ち切ったと言う風にしたいくなるのだろう。だから、自分からは求めないし、求められることもしない。」

「うちらは空さんと一緒にいたいと思います！！それだけではダメなんですか？」亜子も泣きながら言うてくる

「ダメなわけじゃない。でも無意識のうちに壁を作ってしまったていることは事実だ。こればかりはどうしようもない。本気でその人がいて欲しいと思えば思うほど遠ざけてしまうのだろうな、捨てられたくないから。自分のことながら情けない事ではあるけど」

「だったら私ずっと一緒にいる。引き留めてもらえるくらいまでずっと一緒にいるんだから！！」桜子が決意したように宣言する

「うちもや!」木乃香と亜子の声が重なる

「なかなか物好きだな。お前なら相手に困ることはないだろう?」

「それでも、空さんの方がいいんです!」亜子が叫ぶかのように言う

「答えてやれるかわからんぞ。御覧の通りオレは臆病だ」

「それでも構わへん。うちはそゝ君の事が好きなんや!」木乃香も強く言う

「ハアゝ困ったお姫様達だ……うれしくはあるけど」

その言葉を聞いて木乃香達は Paar っと笑顔になった。空も此処まで思われて辺に言うつもり話ないようだ。

「……それで、皆は仮契約するの?」今まで黙っていたアスナが口を開く

「うちはもうしてるからやらんよ。」木乃香の爆弾発言

「え!？」空を除く全員が木乃香を見る

「ほれ」カードを木乃香が出す。そこには直衣のようなものを着た幼い木乃香が写っていた。

「木乃香あれは事故だ。」

「そゝ君は乙女のファーストキスを事故で済ませるんやね。うち悲しいわ」泣くそぶりをする木乃香

「その泣き真似は昔見た。事情だつて説明しただろ。」

「でもファーストキスはファーストキスや!」

「うつそれを言われた何も言えないが・・・」

「あのゝお嬢様説明してもらえないでしょうか?」刹那が話に入る

「うちな、昔攫われた事があってん。そんでお父様やそゝ君が助けに来てくれたらしいんやけどうちな強力な呪いで操つられてしもうてな、そゝ君が機転を利かして仮契約でその呪いを解除してくれたんよ。うちは意識がなかったからキスされた事は覚えてへのやけど・
・・」

「そういうことですか。」

「それじゃーさーもう一回しといたほうが良いんじゃない？ファーストキスが記憶にないのは嫌でしょ」美砂がおかしなことを言いだす

「ちょっとま」確かにそうやな」ってくれはしないよね・・・」木乃香の言葉を聞いた途端刹那とアスナがごめんなさいと言いつつも空を捕らえる。そして木乃香に便乗して桜子と亜子も迫ってくる

「わ、わかったから落ち着け。オレも男だ覚悟を決めよう。だが此処ではダメだ。この契約の陣ではどんな影響が出るかわからないからオレが書き直す。」そういつて部屋に結界を張ってネギの契約時の干渉をなくし新たに陣を描く。

「これで良いだろ。さあどんどこい！！」キスをするような掛け声ではないが空がしゃがんで構える

「じゃあーうちから」木乃香がそう言っで唇を近付ける。触れた時の感触は柔らかかった。

「次は私」桜子も同じように口づけをする。木乃香とは違つ柔らかさがあつた。

「最後はうちが」亜子もそう言っでキスをする。少し目を開けると亜子と見つめあつてしまったのでかなり恥ずかしい。

三人との仮契約が終わつてカードが飛び出てくる。木乃香とはもう仮契約してるので今度は木乃香が主で契約した。だから空のカードである。

そして三人のカードが出てきたのを見て他の連中が自分も欲しいと言つてきた。さすがに空もそんな理由でキスはできないので木乃香にすべて任した。円達も女の子同士ならノーカウントということで納得したらしい。

とりあえず空は恥ずかしくなつたのでやつあたりに向かおうとする。主に淫獣と薬味に……

- - - - -

- - -

ホテルを徘徊して歩いてる生徒を問答無用で気絶させ部屋に送って行く。途中似非中国人と忍びがいたが有無を言わさず気絶させた。今の空にそんな余裕はない

しばらく生徒狩りをしていると薬味を発見。まき絵とキスする寸前だったので瞬動で近づきまき絵を気絶させてからネギを殴り飛ばす。あらかじめ結界は張ってあるので監視カメラには映らない

「な、何するんですか！！八雲先生！」

「お前こそ何をする気だった？ホテルのまわりに仮契約の陣まで書いて、一般人まで巻き込む気か？」

「な、何でその事を・・・や、八雲先生も魔法使いだっただんですか！？」今更ながらに自分の失態に気づく。今までネギには自分の正体を隠してきたのに、恥ずかしさのあまり冷静な判断ができなかった。

「そんな事はどうでもいい。お前は一般人まで巻き込んでどうする気だ？雪広の時で懲りただろう」

「委員長さんは仕方ありません。僕の従者にはふさわしくなかったんです。戦いの中で多くの事を疑うなんてそんな従者入りません」

「・・・・・・・・」

「その点まき絵さんなら僕の事を信じてくるようですしきっと戦力になります」

「お前の中で従者はただの戦力か？」

「そんなの当たり前じゃないですか！英雄になるには強い味方がいるんです。僕も父さんのように強い味方が欲しいですから。だから邪魔しないでください。これから、楓さんや古菲さんとも契約しに行くので」

「遺言はそれで終いか？」

「え？」

「魔法とは秘匿されるもの。なのにこんな大々的にやりやがって、

しかも一般人まで巻き込んで。お前ここがどこだかわかっているのか？」

「え、京都ですよ」

「そうだ。つまり関西呪術協会の総本山がある。そんななかで好き勝手しやがって覚悟はできているんだろっな？」

「え！？でも学園長は好きにやれって」ネギがそんな事は知らないというような顔をして言ってくる

「無知とはな。日本に来る時その組織くらい調べておくもんだろ？それになぜ関東の爺が関西での行動に許可が出せる。もう少しそのない頭を使って考えろ。」

「僕は無知ではありません！！魔法学校だっって首席で卒業しました！！！」

「あくまで魔法だけだろ。おそらくその首席というのも英雄の息子だからいろいろ色をつけてもらっているんだろ。おそらく次席のやつの方が総合的にお前より上だろう。魔法はお前の方がすごいのかもれないがそれ以外は全然ダメだ。碌に魔力制御もできずに人の服を脱がすやつが主席になれるわけがないだろう？仮になれたとしたらその学校はもはや学校ではない。こんな世間知らずでなお

かつ犯罪者のやつを卒業させるなんてありえないからな。よかったな。父親が英雄で。英雄の息子」

事実を突き付けられて絶句するネギ。ただ、なぜかいいように解釈したらしい

「でも、僕は此処にいる。皆に認めてもらって此処にいるんだ！！僕のやる事が正しいんだ。だから間違っているのは八雲先生の方だ。」「そう言っ杖を出し魔法を発動しようとするが

「哀れというより惨めだな。」「その言葉を最後にネギの体が宙に浮かぶ。もともとタカミチと比べても数段劣るネギが空に勝てるはずがない。杖を持ったまま空中に力チ上げられ後はひたすらフルボッコ。ネギが意識を失うまで続いた。慌てて入って来た瀬流彦にネギを投げつけもう一人の元凶の方に行く。

- - - - -

「なんか映像も映らなくなっちゃったしそろそろとんずらするか。ぶんやの姐さんを利用させてもらったが契約カードはできなかったしな。」「そう言っ逃げようとする淫獣

「お前に言うべきことは何もない。死ね！！」此処に肉の塊が完成する。犯罪者カモミールがこの世からいなくなった瞬間だった。遺体は学園長室に送りつけてやった。

第31話 修学旅行？

淫獣がいなくなつて次の日、氣絶していたネギには淫獣は本国に帰つたと伝えられたらしい。ネギはその事についていろいろ聞いたそうだったが、瀬流彦が早々に打ち切つたようだ。

今日は班別行動の日。朝食からネギを誘いに来る生徒が少数いる。今だネギのお子様人気は高いようだ。昨日ことを伝えたらどうなるだろうか？そういう衝動にかられつつも、此処は抑える。

そんな事を考えていると木乃香達がこちらに来た。

「そゝ君は今日はどうするん？」

「とりあえず、班の監視とあのガキの監視かな？おそらく今日あたりにあちら側から何かしらの接触があると思うんだ。だから、こちらである程度把握しておいて対処しようと思う。お前たちも今日はエヴァから離れるなよ。戦闘になったらエヴァの指示に従え、それで逃げると言われたら一目散に逃げろ。エヴァの足手まといにはなるな。」

「わかつたえゝ」

「じゃあー敵がこないうちは修学旅行楽しめよ。」

- - - - -
ホテルを出て班別行動を開始する2-A。ネギがどの班で行くかでもめたらしいが瀬流彦が割って入り学園長から頼まれている事があるから一緒に行動ができないということを伝えるとしぶしぶながらも引き下がった。瀬流彦としては一般人に迷惑がかからないようにしたんだろうが、ネギは若干不満げだった。というか淫獣なしで仮契約できるのか？それに戦闘中に仮契約などできると思っているのだろうか？・・・おそらく、自分が襲われるはずがないと思っているんだろうな。関東からの特使として扱われると思っているのだろう。ありえないけど・・・

こちらとしては相手が木乃香を狙わないと言っているのである程度までは傍観する事にする。一般人に被害出そうものなら介入せざる負えないがネギに被害が行くだけなら傍観する。むしろ参加してしまうかもしれない。日ごろのストレス解消に・・・

今日はどれだけ苦勞するのだろうかと思いつながら監視を続けるのだった。

- - - - -

ネギ視点

「今日は関西の総本山に親書を渡せば極秘任務の達成だ。学園長

が言うにはこれはかなり重要な任務らしいからこれを達成できればすごい事になるって言うてたし頑張ろう。それに父さんの隠れ家の事もあるし今日は忙しくなるぞ。」とのん気な事を考えながら本山を目指す。地図自体は学園長に渡されているので迷うことはない。

ある程度歩いて鳥居の所を歩いているとある事に気づく

「此処の鳥居随分と長いな。地図ではこんなに長くないのになんかおかしような気がするけど大丈夫かな」と警戒する事さえしない自分が特使であると言う事が大半を占めているため襲われると言う事が頭の中にないのであろう。近くで監視している空からすればあまりに無防備すぎて逆に罠でもあつてるのかと思うほどである。実際はそんなことないので敵襲されたら終わりである。そこに

ドッカン！！と何か大きな蜘蛛のようなものに乗った少年が現れた

- - - - -

空視点

「あれは誘いか？どんだけ無防備なんだ。やろうと思えばすでに100回はやれる。敵さんのガキンちゃんのほつもさつきから迷ってるからな。確かにあれは逆にに攻めづらい。・・・あ、行った。ま

あ正解なんだけど、わざわざ姿を現さなくても・・西洋がどうか
いうう前にかたずければ良いのに。あいつはプロとしては失格だな」

「だ、誰だ！」空から降ってきた少年に向かって叫ぶネギ

「こんなんが西洋の魔法使いか。がっかりや。隙だらけで、攻撃し
てくださいと言っているようなもんやし、まあオレはそんなせこい
真似はせーへんけど。ありえんわ」

「君は一体何者だ！僕に何か用なのか！？」

「用があるのは事実なんやけど、どうも千草姉ちゃんの言う事は信
じられへんわ。だから、オレが試させてもらうわ！」そう言って小
太郎がネギに襲いかかる

「うわぁ！！いきなり何をするんだ！！クソ！こうなったら、ラス・
テル・マ・スキル・マギステル・・「遅いわ！」うわあああ！？」
呪文詠唱中に攻撃されてなすすもなく吹っ飛ばされるネギ。この
ような状況でのん気に呪文を唱えるなんてバカとしか言いようがな
い。せめて魔法の矢とかで牽制するなりして足を止めずに詠唱する
くらいすべきである。

「ああ、でもあいつは無詠唱での魔法の発動がまだできないのか。

前衛もないしサンドバック状態じゃないか。あ！あれはおそらく6番と5番が逝ったな。肋骨は肺に刺さるから気をつけなきゃいけないのに、あんなにモロにくらうなんて・・・」傍観して見ていたがひどい有様だった。小太郎に殴られ、蹴られ、最終的には投げられる。やりたい放題である

「ゴツフ」血を吐き出してなんとか立とうとするネギ

「ありえへん。弱すぎや、こんなんでは計画は本当に大丈夫なんやろうか？でも・・・」ぶつぶつ言いながらネギから目を話す小太郎。そこにネギから攻撃が放たれる。

「魔法の矢！」一本しか出てないが無防備の小太郎を捕らえるのは簡単で小太郎の肩に突き刺さる。

「クッ！まだ意識があつたんかい。油断したわ、だけどこれで終いや！」そう言つて小太郎がとどめを刺そうとするが、

「待つて」無機質な声が響く

「なんや新入り！邪魔すんなや」それに対して激昂する小太郎。どうやら肩をやられた事が頭に來ているようだ

「それはできない。このままでは彼が死んでしまっからね。千草さんはとらえるようにといった筈だよ。殺してしまつては意味がない。彼はこちらにとっては重要人物だからね。此処でとらえておかないと・・・」

「ちつしゃーないわ。でもそいつ大したことなかったで、やり放題だった。ホントに大丈夫なんか？」

「彼の實力自体は問題ないからね。重要なのは彼そのもの、とりあえず治療をするから僕は帰るよ。暇ならそこで傍観している見学者と遊んでもらえばいい」フエイトがこちらの方を見ながら小太郎に言う

「な！？誰かいたんかい！結界を張つておいたから大丈夫かとおもつたけど・・・」小太郎がフエイトが見てる視線の先を探しだす。こちらとしてはトンスラしようかと思つたが一応ネギを何に使うのが氣になつたので聞く事にする。担任が攫われるとなると後で面倒なので。

「良く気づいたな。ちゃんと隠れてたんだけど・・・」

「この結界は特殊でね、使用者には空間内にいる人がわかるようになってるんだ。」

「その犬っころは気づいてないようだが」

「……彼は……戦闘専門だから」

「無理してフォローする必要はないぞ。素直にバカだからと言ってやれ」

「なんやと!!オレはこんなちまちましたものは好かんや。男なら拳で語らんかい!!」小太郎が意味のわからない事を言っている

「人選はちゃんとした方が良いぞ。さすがに何も言えん」

「……ノーコメント」フェイトも何も言えないようだ。一応空気を換えようと話を変える

「ちなみにそのガキはどうする気だ?そんなやつでもうちのクラスの担任でな誘拐されるとちよつと面倒な事になるんだが……主にオレが」

「用事がすんだらすぐに返すよ。」

「人質にでも使う気か？確かに関東のやつらには良い手かも知れんが、おまえら少数だろ？あんまり意味はないぞ」

「それに関しては黙秘させてもらおう。じゃー僕はこれで行くよ。小太郎君はどうするんだい？」

「あの兄ちゃんに一発入れる！」

「ああゝめんどくさいから連れて帰ってくれないか？」

「すぐに終わるなら良いけど僕はこれでも忙しいからね、長くは待てないよ」

「おい新入り！それじゃーまるでオレが負けるようやんか！オレがこんなけつたいな兄ちゃんに負けるかいな」

「じゃーやってみると良い。おそらく数秒と持たないから」

「言ったな。見てろ、てりやあああ！！」大声をあげて突っ込んでくる小太郎

「めんどくさいやつだな。少し寝てろ！」カウンターで沈める。小太郎はそれでも立ち上がって獣化までしようとするが、

「おい、ハーフか？さすがに獣化されるのは面倒だ。ヨイシヨ！」
クビに手刀をいれて気絶させる

「さすがだね。」

「ほめられてもうれしくないし。そもそも止めるよ、こついうめんどくさい事があるから頼んだのに、何戦わせてんだよ！」不満を漏らす空

「こちらとしてもそちらの戦力は知っておく必要があるからね。でもやっぱり僕も全力でやらないといけないかな？」

「という事はここで何かをしでかす気だな。関東だけなら構わないが一般人に被害が出るのは見過ごせないぞ」

「それは大丈夫さ。一般人には被害は出さないつもりだ。君たちは大変になるかもしれないけどね」

「それじゃーその坊主を取り返した方が良いかな？あまりやりた

くないけど・・・」そう言って戦闘態勢に入る。いくらフェイトでも二人を担いだ状態では勝負にならない

「今回はやめておくよ。それに時間も稼げた。」そう言ってフェイトの周りが光出す

「この結界は破壊するのは札をはがせば簡単なんだけど脱出するには面倒だね。君がいなければ破壊したんだけどそんな暇を与えてくれなかったから普通に逃げるのに時間がかかったんだ。それじゃー失礼するよ」そう言ってフェイト達が消える。失敗したと思いながらもとりあえず札をはがし本山に向かい詠春さんに報告する事にする。

- - - - -

本山

「お久しぶりです。詠春さん」

フェイトと戦った後（実際は戦ってはいないが）とりあえず報告をしようと思い本山に向かった。屋敷内に入ろうとしたところで巫女さんに迎えられた。詠春さんは巫女さん趣味なんだろうか？とかこの屋敷にこんなに巫女さんが必要なのか疑問に思った。前に来た時はそうでもなかったが随分と増えたようだ。

「久しぶりですね空君。連絡は受けていましたが直に会うのは半年ぶりくらいですかね？」

「そうですね。大体それくらいです。それで一応報告を。先程強硬派の一派がネギを襲撃。その後ネギを連れて逃走しました。相手側と少し話したんですが何かを起こすようです。ネギに関しては用がすんだら返すそうです。」

「相手の力量はどのくらいですか？君がいてやすやす攫われたとなると・・・」

「まあ助ける気がなかったというのがありますがかなり強いと思います。あちらで一度エヴァと向こうの世界でラカンと戦いましたがそれクラスですね。全力をかけて倒せるかどうかの相手でした。刺し違える気なら勝てるでしょうが、あれはどこか人工的な感じがしましたので無理はしませんでした。」

「・・・・その子の特徴を教えてくださいませんか？何でも良いので」

「ええつと白髪の少年ですね。学生服のようなものを着てます。しかし見た目と実年齢は合わないでしょう、やけに達観してましたし感情もあるかわからない感じでした。・・・ある程度察することはできるようですが・・・」こちらの異名を言った後の落ち込みようを見て気遣ってくれた事を思い出しながら言う

「最後の事は深くは聞きませんが。・・・もしかしたらその少年は私たちの敵かもしれません」

「というと紅き翼の？」

「はい。名前までしれませんが大戦中戦った敵です。最終決戦でナギが倒したはずなのですが・・・」

「まあ、人工的な感じがしんましたしまた作られたかもしくは別の似た人かですか？」

「おそらく前者でしょう。三番目とか言っていたような気がするのですが、何人かいるか死ぬたびに生まれてくるのでしょうか。そうなると厄介な事になりますね・・・敵がネギ君を何に使うのか、人質に使うにしても此処は関西ですし。此処で何かを起こすなら人質という

線は消えますが・・・」

「その点は大丈夫でしょう。何かあったとしてもエヴァがこちらについてくれますし、オレとエヴァと詠春さんがいれば大抵の事は何とかなるでしょう。あちらの最強クラスにはエヴァとオレが当たれば済む事ですし、後はどうとでも何ます。」

「そうなのでしょうが・・・」

「まあネギに何かあると関東ひいては連合が難癖つける可能性がありますますが、そこは友人に協力をしてもらいましょう。さいわいお偉いさんとは知り合いでしょうオレ達。ああ詠春さんも十分お偉いさんですけど・・・」

「テオドラ皇女とセラス君ですか？」

「ええ。帝国とアリアドネーから牽制してもらえば早々連合は動きませんし、関東だけならこちらだけで事足りますし・・・」

「私も元老院の方に呼び掛けてみます。知り合いがいるので・・・もっとも受けてくれるかわかりませんが・・・」

「元老院ですか？大丈夫なんですか、面倒な事にならないと良いですが」

「彼は他の元老院とは違いますから。」

「それならこれも使ってください。一応ネギが学園で起こした問題と此処で起こした問題の証拠ですね。ほとんどが証言と映像になってしまいましたが言い逃れできないようにしてありますので。同じものを帝国とアリアドネーに送っていますし」

「私も最初に聞いた時は驚きましたが…やはりということなのでしょう。彼らはネギ君を甘やかしすぎた。ナギもこのような結果は望んでなかったでしょう。」

「洗脳に近い形ですけどね。自分のする事が無条件で許されると言う状況ならこうなるのもわかりますが、まああいつの場合は自分に非がある事を認められないと言う元来の性格のせいでもあるんですけど・・・」

「そこら辺はナギと似てますね。周りがいましたから暴走まではいきませんでしたけど、ネギ君は周りに恵まれなかったんですね・・・」

「そうですね。自分から切ったと言つのもありますが、あいつはもうダメですね。これからの未来は祀り上げられて死ぬだけです・・・とりあえずこれからどうしますか？」

「エヴァを呼びましょう。木乃香達も一緒だと思いますがエヴァがいてくれた方が心強い。代わりの式神はこちらで用意します。」

「ああそれはオレがやっとうきました。木乃香達の方とオレとネギ、いなくなると問題が発生しますからね。」

「ハハハ、さすがですね。では木乃香達が来るまでしばらく休んでください。部屋は用意しますんで。」

「ありがとうございます。実を言うと寝てないんですよ。お言葉に甘えさせてもらいます」

そう言つて詠春に頭を下げて部屋を出て行く。部屋を出たところで巫女さんが部屋まで案内してくれた。木乃香達が来るまで体調を万全にしようと眠りにつくのだった。

[illegible]

「ん？・・・木乃香か？やつと来た来たみたいだな」

「もゝそゝ君お寝坊さんやね。みんなもう結構前に来とるよ。お父様が食事の準備ができたから起こしてきてって言われたからうちが起こしに来たんや。」

「それはありがとうな。睡眠もとつたし食事をとればバッチシだな。これで大抵の事には対処できる」

「とりあえず行こうか？皆まっとなるで」そう言つて引つ張つて行く木乃香と一緒に食事に向かうのだった。

[illegible]

大広間に到着。そこにはエヴァを始めバンドメンバー、アスナ、剎那、茶々丸（茶々ゼロ付き）がいた

「詠春さん、状況に変化はありましたか？」

「今のところはありません。探らせてはいるのですが天ヶ崎一味は一向につかめません。」

「フン、近衛詠春、長がそんなんでは関西の程度が知れるぞ。爺を追いつめた事は評価してやるが貴様がその程度なら関西の未来も暗いな」エヴァが辛辣な事を言う

「いやはや、あい変わらず手厳しいですねエヴァンジェリン。でもそうなくても空君に任せれば問題ないでしょう」

「いやいや、何を言ってるんですか詠春差さん。それ完全に嫁げつて言ってますよね？嫌ですよそんなめんどくさい事。貰うのなら木乃香をもらいます。」

「それはプロポーズの言葉としてとらえてもよろしいですか？」

「仮定の話です。関西の長を継ぐくらいなら木乃香を攫って隠居しますって言うだけです。実際そうなるとは限りません。まだオレと木乃香はどのような関係ではないのですから……」

「まだとは……いつかはそうなるんですね？」

「だからifの話です。っていうか何でこんな話になっているんですか、さつさと食事を始めましょう」

「そうですね。折角のご飯が冷めてしまいますから……木乃香どうしましたか？」ずくと黙っていた木乃香の様子を不思議に思い詠春が話しかける

「あんな、うちが関西の長の娘だからそ〜君はダメなん？」

「現状ではそうだな。木乃香と結婚すると言う事はオレが後継者になる可能性が非常に高い。実際詠春さんも木乃香のお母さんと結婚して関西の長になっているわけだし……」

「お父様、うち関西を出ます！！」

「お嬢様！！」刹那が叫ぶが

「別に関西を出る必要はありませんよ木乃香。先程は冗談で言いましたが木乃香と結婚しても空君が後継者になる可能性はほとんどありません。」

「なんでなん？」木乃香が聞く

「お義父さん・・・今は追放されていますが、そのせいで近衛の影響力はかなり低くなっているのです。代々近衛家が関西の長を務めてきましたが限界なのでは？という意見が増え、実際は私ももともとは青山の血筋、だからきちんと選んで決めようと言う事になりました。強硬派のやつらは色々と苦心して自分が長になろうとしています。私も時間があつたので後ろ黒い事があるものは候補に挙がる事さえないようにしてあります。だから関西が今の関東のように私利私欲に使われることはないでしょう。それに空君は確かに優秀ではありませんが、関西ではあまり知られていません。だからたとえ木乃香の婿となったとしても長を継ぐと言う事にはならないと思います。」

「そおなんか。そゝ君これならうちと結婚できるな！！」父の発言を聞いて嬉しそうに空に言う

「ああ、オレがお前ん惚れたらな。とりあえずはもつと大人になって出直してこい。今のままだと妹の感じが抜けないぞ」

「もゝまだうち14やもん。大人になるには時間がかかるんや！」

「だから、その時まで頑張りな。もしかしたらその間に好きな男が出来るかもしれんし、オレもできるかもしれない。」

「必ずうちが振り向かせたる！！」

「「負けないよ、木乃香！」」木乃香の宣言に亜子と桜子が入ってくる。その後3人で話し合っている

「空君も大変ですね。随分と御モテになるみたいで・・・」

「なぜでしょうね？・・・でも嬉しい限りです」

「フフ、空君も変わりましたね。君は昔から一歩引いてた感じがありましたけど・・・」

「・・・まああいつらのおかげですかね」

「貴方が学園に行ったのは良かったのかもしれないね。親目線なのですが木乃香は妻に似て良い御嫁さんになると思いますよ」

「自慢ですか？親バカですね。・・・そんなこと言われなくても知ってますよ」空も苦笑しながら言う

「フフ、孫の顔が早く見れそうですね」

「歳より臭いですよ」

「もう年ですよ」

「いえいえ、まだお若いですよ。それに頑張ってもらわないと今日は忙しくなりそうですから・・・」

「私などもう足手まといでしょうけど・・・」

「なに言ってるんですか。期待してますよ」

「そもそもそう言う事が起きなければ・・・」「長！！大変です。天ヶ崎一味が行動を起こしました」・・・ということはないようです」

502

「やっぱりスクナの所に向かってますか？」入って来た人に尋ねる

「いえ、大江山です」

「！！？」詠春と空が反応する

「スクナじゃなくてそっちか。クソあそこは確かに拠点として使われていたと言う話がある。確かに召喚するには都合のいい場所だろ

う。……素直にスクナにしとけてんだ！こっちにはエヴァと詠春さんにオレがいるんだたとえ完全開放されたとしてもなんとでもなったのに……」

「おい空！貴様らだけで納得するな。その大江山には何がいるんだ？」

「いるわけじゃない。伝承があるんだ。昔京都を荒らしまくった鬼の」空の言葉に詠春が続く

「そう、そしてその鬼は日本三大妖怪にも数えられる鬼の中の鬼。スクナよりも霊格は上です。本国評価でおそらくS Aランク。ラカンやナギそれに貴方と同ランクに有るものです」

「ま、まさか……」エヴァも見当がついたらしい

「そう酒呑童子だ」
しゅんどうこ

「おまえが学園で戦ったやつの上に上のやつか……フフフ」

エヴァが急に笑い出す

「頭でもおかしくなっただか？」

「違うわ！久々に全力でやれそうだからな」

「オレともやっただろう？」

「まあそうだが、お前は途中で倒れてしまったからな、不完全燃焼というやつだ。」

「じゃあそっちはエヴァとオレで行こう。あつちには最強クラスがもう一人いるからな。そちらの足止めをお願いしますか詠春さん」

「ええ。足止めなら何とか。ですが私だけでは心もとないので木乃香と刹那君サポートをよろしくお願いします。」

「はいな」「お任せを。それなら長これを」

刹那が夕風を詠春に渡す。

「刹那君は？」

「私にはこれがありますから」そう言って仮契約のカードを見せる。そこには羽根の生えた刹那が剣を握っている姿が写っていた。

「君も吹っ切れたようですね。空君から聞いてはいましたがちゃんと正体を明かせたんですね」

「はい。」

「結構。それじゃーお願いします。無理はしないでください相手は別格です。空君やエヴァンジェリンと同レベルと考えてください。」

「あとは戦闘狂とガキか・・・」

「それなら龍宮と楓に連絡をします。龍宮は依頼にすればなんともなりますし楓はおそらく断らないでしょう」

「それで頼む。亜子達は此処に残ってくれと言いたいがいかんせん此処が安全かもわからない。先に逃げといて構わないぞ」

「うちらは離れて見てます。うちは回復魔法はできるし、桜子達は援護なら攻撃魔法もできます。それにアスナもいるし一緒にいた方がいいと思うので。それにいざとなったら空さんから貰ったこれで逃げれますし。だから心配しないでください」指輪を見せながら言う亜子。他のやつらも頷いている

「ハハ、随分と肝っ玉のかい事で。伊達にエヴァの訓練を受けてないわけだ。だけども・・・」そう最初は空が教えていたのだが途中からエヴァが興味を持ちだして亜子達も教え出した（亜子達曰く地獄の始まり）

「そいつらは良いチームだからな。アスナをうまく使えば逃げる事もたやすい。それに自分の事は自分で守れる程度にはした。心配するな」

「・・・アスナもそれでいいか？」

「うん。皆といれば大丈夫だし。私の能力は便利。それに木乃香に貰ったこれもあるし」カードを見せる

「それなら上々。なら鬼退治に行きますか！！さすがにきび団子はないけど心ず良い仲間はたくさんいるからな」

「そゝ君が桃太郎？」

「それはエヴァだな。オレは犬辺りのポジションが良い」

「主人公ではないんですね」亜子と言う

「バカたれ。オレがそんなめんどくさい事するわけないだろ。そう言うのは目立つのが好きな幼女に任せておけばいい」

「おい、聞こえているぞ！」

「さあー気合入れて行くぞ！」

「無視するな!!」

そんなやり取りをしながら決戦地を目指す。

第31話 修学旅行？（後書き）

少しオリジナル展開になりましたがご了承ください。次回で修学旅行編が終わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4313u/>

生き方なんて人それぞれ

2011年9月25日05時06分発行